

長崎県文化財調査報告書167集

玖 島 城 跡



長崎県教育委員会
2002



玖島城跡全景



金属製品



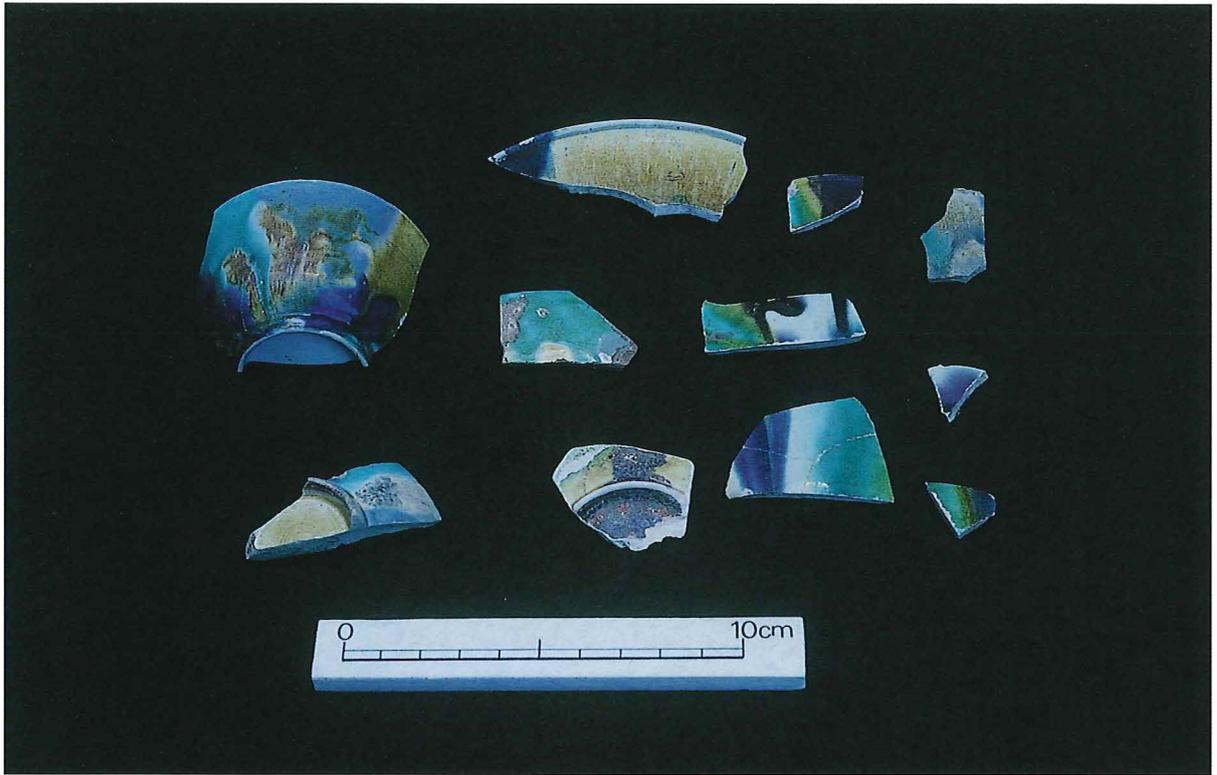
マヨリカ陶器



華南三彩



繪唐津



長 与 三 彩



長 与 三 彩



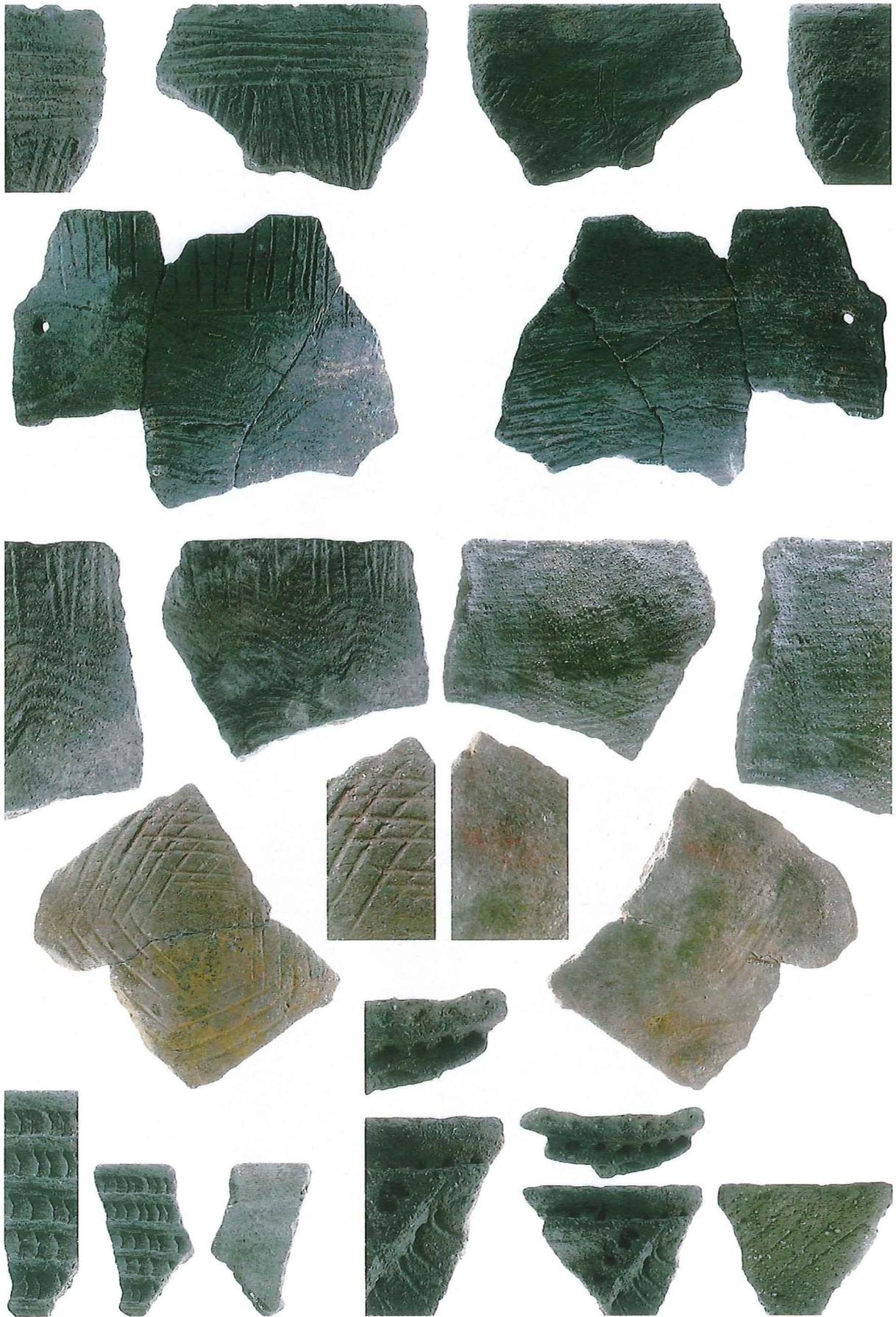
SB1・2



石 垣



繩文土器①

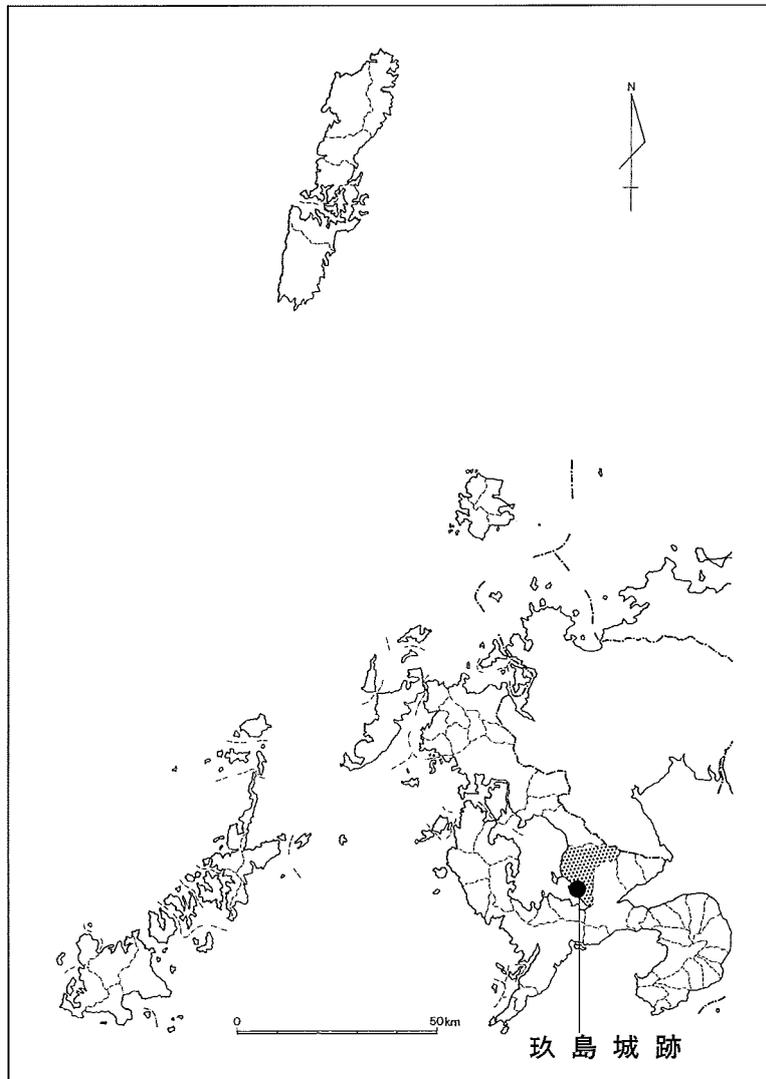


繩文土器②



縄文土器③—第Ⅱ群土器（上）・第Ⅲ群土器（下）

玖島城跡



発刊にあたって

本書は、一般国道34号大村拡幅事業計画に伴う^{くしまじょうあと}玖島城跡の発掘調査報告書です。

玖島城は、日本最初のキリシタン大名として知られる大村^{すみただ}純忠の子、^{よしあき}喜前によって慶長四年（1599）に築城されたと伝えられています。築城当時は、秀吉の死による朝鮮半島からの撤兵、関ヶ原の戦い前夜と、まさに風雲を急を告げる時代でありました。

調査地点は、玖島城の外側にあたり、絵図や文献から城主の居館や役所などがあった場所にあたります。調査の結果、築城の頃の建物跡や石垣が確認されるとともに、中国や李氏朝鮮産の瓦や焼物、当時交易を開始したばかりのオランダの焼物など、国際色豊かな当地の先進性をうかがわせる遺物が出土しました。

また、江戸時代後期の建物跡からは、幻の焼き物とも称される「長与三彩」が出土し、大きな注目を集めました。これらの資料は、近世大村藩の貴重な考古資料としてばかりでなく、美術工芸資料としても貴重な資料であります。

最後に、御協力いただいた関係者の皆様にお礼を申し上げるとともに、今回の発掘調査成果が学術資料ならびに歴史教材として活用され、文化財保護の一助となることを祈念して発刊のあいさつといたします。

平成14年 3月31日

長崎県教育委員会教育長

木 村 道 夫

例 言

1. 本書は、一般国道34号大村拡幅計画に伴う玖島城跡の発掘調査報告書である。
2. 事業主体は国土交通省九州地方整備局長崎工事事務所で、調査は長崎県教育委員会が主体となって実施した。調査期間・面積・調査担当は以下のとおりである。
 - ・平成11年度（1,800㎡）平成11年7月1日～平成12年3月3日
長崎県教育庁文化課（現学芸文化課）埋蔵文化財班
文化財保護主事 山口 浩司
同 川口 洋平
 - ・平成12年度（2,500㎡）平成12年7月17日～平成13年3月9日
文化財保護主事 福田 一志 文化財調査員 佐藤（旧姓齊藤）いづみ
同 大浦 雅宏（現梅ヶ崎中学校） 高瀬（旧姓高原）愛
同 川口 洋平 中村 幸（現長与町教育委員会）
東 貴之
奥（旧姓松崎）由紀子
3. 出土遺物についての自然科学分析は、以下のとおり委託した。
 - ・平成11年度 瓦の胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）
柱材の同定（株式会社古環境研究所）
 - ・平成12年度 放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所）
花粉・珪藻分析（株式会社古環境研究所）
貝類の同定（パリノ・サーヴェイ株式会社）
4. 調査に際しては、以下の業務を下記のとおり委託した。
 - ・排土処理ほか（株式会社鈴木建設）
 - ・航空写真撮影（埋蔵文化財サポートシステム株式会社） ・池石垣実測（有限会社I M設計）※巻頭カラーにおける縄文土器①・②は渡邊康行氏（株式会社埋蔵文化財サポートシステム）に撮影をしていただいた。心よりお礼を申し上げます。
5. 本報告書の執筆にあたっては以下の方々から指導・助言をいただいた。
大橋康二・北野隆亮・坂井隆・櫻庭美咲・下川達彌・鈴木祐子・續伸一郎・西田宏子
古門雅高・松尾信裕・水ノ江和同・渡邊康行
6. 本書の構成と執筆は以下のとおりである。
I章 遺跡環境 II章 調査経緯（川口）
III章 調査 1. 近世（川口・東・井立・上原） 2. その他の時代（福田・川口・東・竹中）
IV章 自然科学分析
V章 まとめ（川口） ※各執筆者名は文末に記した
7. 本書の編集は川口による。

I 遺跡環境と調査経緯

1. 遺跡環境

大村市は大村湾の東側にあり、長崎県のほぼ中央に位置している。玖島城は大村平野の南端に位置し、浅瀬で陸地に近接する島を利用した平山城で、海城の性格を持っている。調査地は主郭部ではなく、対岸の濠外東側から南側の区域に相当する。玖島城は慶長四年（1599）に大村喜前によって築城され、以後幕末まで大村藩の本拠地であった。玖島城に関する文献としては『大村家記』、『郷村記』、『見聞集』などの諸記録がある。『郷村記』によれば、慶長三年冬、朝鮮出兵から帰った喜前によって、戦時の教訓を踏まえて築城が検討され、翌四年冬にそれまでの居城であった三城から移った由来が記される。さらに慶長十九年（1614）には純頼によって改築され、角堀ができ大手口が現在の位置に変更されたことが記されている。



第1図 遺跡位置図 (S=1/5,000)

2. 調査経緯

調査は、一般国道34号大村拡幅計画に伴って遺跡に係る区域について実施したものである。平成9年度に大村公園付近について予備調査を行い、調査が必要と判断された1,800㎡の区域について平成11年7月1日～平成12年3月3日まで全面調査を実施した。また、平成11年に全面調査と並行して公園南側の旧宅地と旧市民体育館跡地について予備調査を実施し、2,500㎡について平成12年7月17日～平成13年3月9日まで全面調査を実施した。調査総面積は4,300㎡である。



第2図 調査区域図 (S=1/2,500)

Ⅱ 調 査

1. 調査方法

調査は、工事予定区域に東西A～B、南北1～31のグリッドを設定して行った。グリッドは東西が工事幅15mを2等分する形で7.5m、南北は各10mの大きさである。17区については、現道路であり、隣接グリッドの調査結果により扱いを判断した結果、本調査範囲から除外した。なお、調査の便宜上南北1～7区をⅠ区（公園北側）、8～17区をⅡ区（公園南側）、18～23区をⅢ区（旧宅地）、25～31区をⅣ区（旧体育館）と大別した。

掘り下げは表土を機械により除去し、以下を人力で行った。遺物包含層および遺構については精査を行った。

2. 土層

(1) Ⅰ区の基本土層

第Ⅰ層はアスファルト、第Ⅱ層は砂利層（第Ⅰ層の基礎）、第Ⅲ層は茶褐色土層で近代の埋土、第Ⅳ層は灰褐色土層で近代の攪乱層、第Ⅴ層は赤褐色土層で近世の遺物包含層であり、18世紀代の遺物を含んでいる。第Ⅵ層は暗茶褐色土層で炭化物を多く含む。全面ではないが、3区から7区においては焼土も含まれ火災層と考えられる。江戸初期の遺物包含層である。第Ⅶ層は黄褐色風化礫層で、築城時の整地層と考えられる。

(2) Ⅱ・Ⅲ区の基本土層

第Ⅰ層はコンクリート、第Ⅱ層は近代の攪乱層でコンクリートやレンガの基礎を含む。第Ⅲ層はA・bに分けられ、Ⅲaは茶褐色土層で江戸後期の遺物包含層である。Ⅲbは黄褐色粘質土層で江戸後期の整地層である。第Ⅳ層は黄茶褐色土層で江戸初期から中期の遺物包含層。第Ⅴ層は黄褐色風化礫層で江戸初期（慶長十四年か）の整地層である。第Ⅵ層はa・bに分けられる。Ⅵaは暗茶褐色土層で江戸初期の遺物包含層、Ⅵbは黄褐色風化礫層で築城時の整地層と考えられる。第Ⅶ層はやや赤味を帯びた茶褐色粘質土層で築城以前の水性堆積と考えられる。土錘が出土している。

(3) Ⅳ区の基本土層

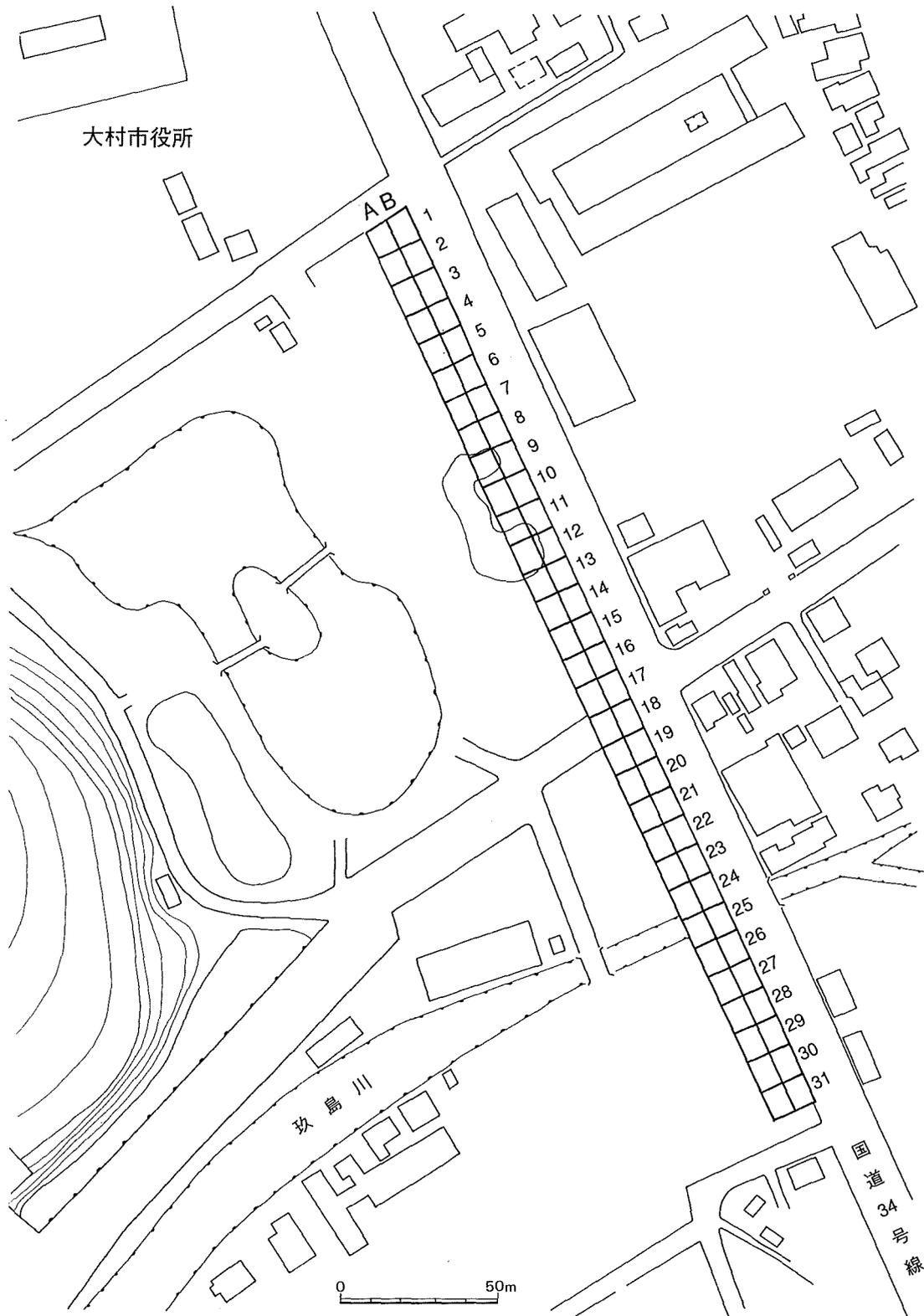
第Ⅰ層はコンクリート、第Ⅱ層は基礎の砂利層、第Ⅲ層は茶褐色土層で近代の埋土である。第Ⅳ層は茶褐色土層で近世の遺物包含層であり、一部に炭化物を含む。第Ⅴ層は青灰色の粘質土あるいは場所により砂層である。

3. 遺構・遺物

(1) Ⅰ区の遺構

・SB1-4～6区で確認された五軒×三軒の建物遺構である。掘立柱であるが柱基礎に平たい石や礎板を用い、礎石建物との折衷的な技法を用いている。

・SB2-SB1と重複して検出された三軒×三軒の建物遺構である。掘立に礎石、礎板を併用しており、柱穴内に面取りした柱根がのこる。主軸はSB1とほぼ同じ方向で、切り合いと柱痕にほぞ穴があるものがあることから転用が考えられ、小規模な火災などによる立て替えが推測される。材は分析によりアカガシとの結果を得た。なお付近から朝鮮系瓦が出土しており、関連が推測される。



第3図 グリッド配置図

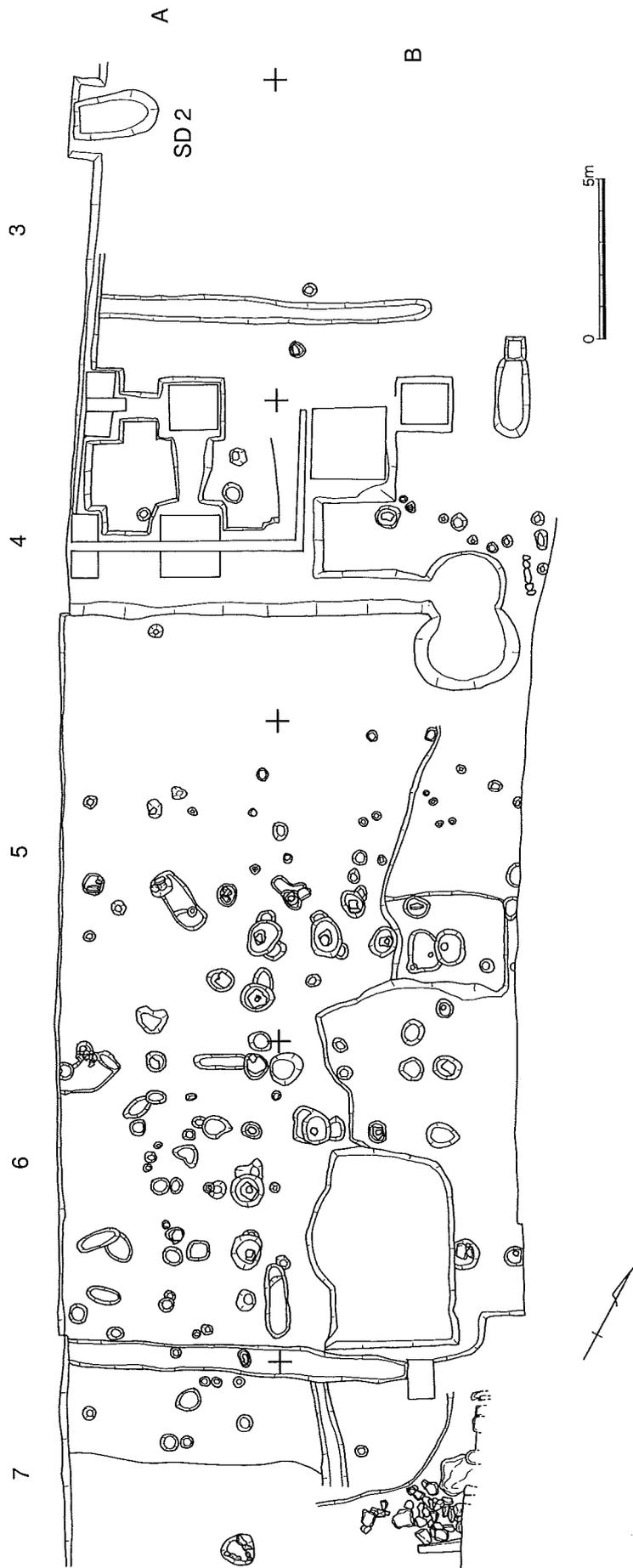
・SD 2 (第7図) —第7層上面に掘り込まれた溝状遺構で、幅1.2m、深さ0.5mで東西方向に走る。第6層によって埋められているが下部には粘質土の堆積がみられ、水がたまっていた可能性もある。遺物は灯明皿として使われた土師皿がまとまって出土している。また、胎土目積みの唐津やペンシルドロウイング⁽¹⁾の景德鎮系青花などもあり、17世紀初頭頃の遺物と考えられる。文献による築城の年代が慶長四年(1599)であることから、築城頃の遺構で短期間のうちに埋没したことが窺える。

・ピット—SB 1・2の周囲に複数検出されているが、配列が不明なものである。SB 1・2に関連している可能性が高い。掘立と礎石、礎板を併用しており、柱根がのこるものもある。

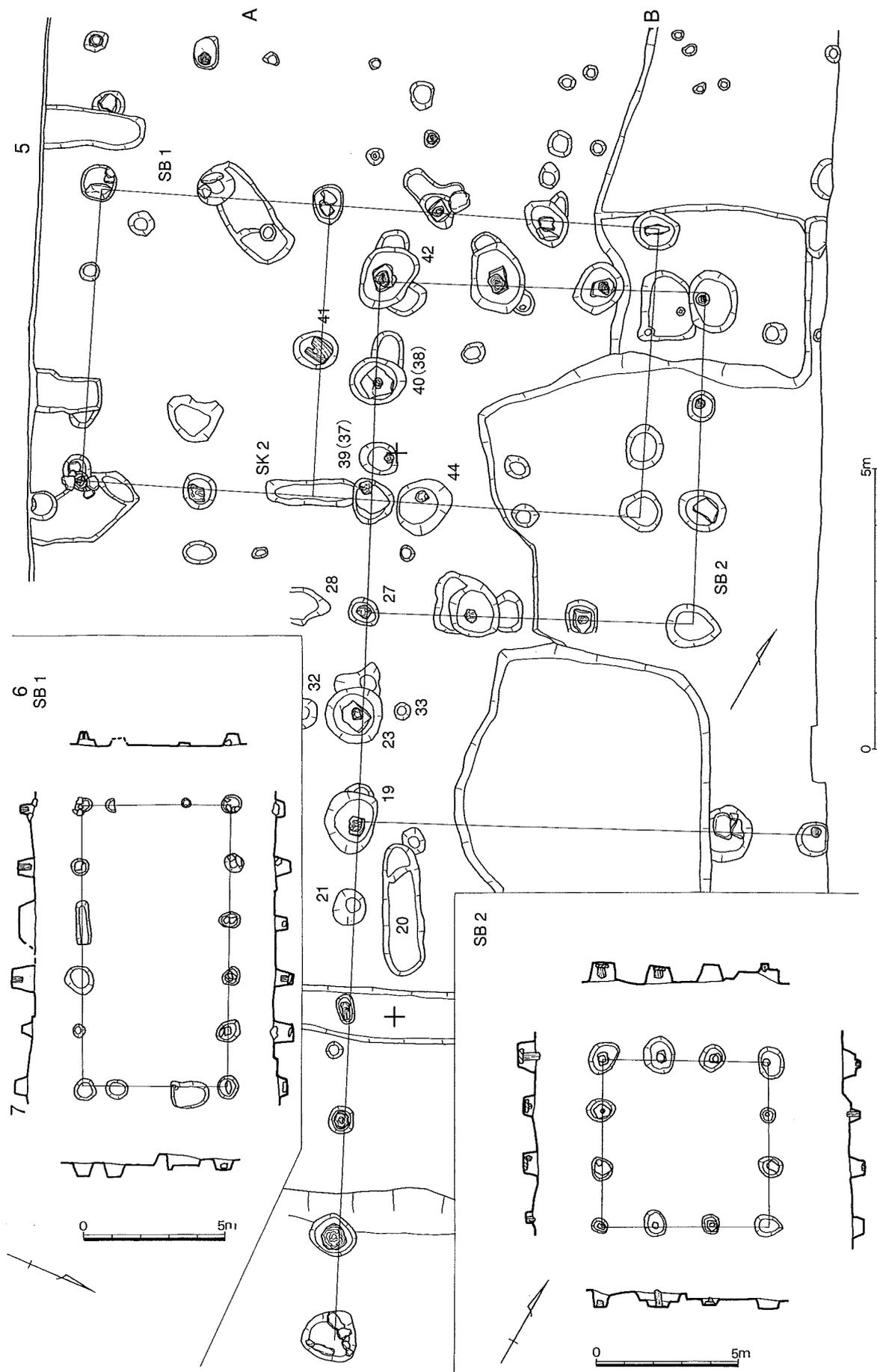
・I区の基本土層(第8図)

I区的基本的な土層は、第1層がアスファルト、第2層は基礎の砂利層、第3層が茶褐色の埋土、第4層が灰褐色の客土、第5層が赤褐色土で近世後期の遺物包含層、第6層が炭化物を含む暗茶褐色土で近世初頭の遺物包含層、第7層が黄褐色の風化礫による整地層、第8層が暗青灰色の粘質土層となっている。もともと付近は海岸線であり、築城にあたって埋め立て整地をしたと考えられる。第7層が、その際の整地層と考えられる。したがって、第7層を掘り込んだ遺構は築城時のものである可能性が高い。第6層は、築城後の生活堆積及び小規模火災による堆積層と考えられる。出土遺物は、ほぼ1610年代までに限られており、築城から間もない時期の堆積であると推測される。第5層は、その後近世を通じての堆積層であると考えられる。

(1) 森毅1995「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通—大阪の資料を中心に—」『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会による。



第4図 3～7区 遺構配置図 (S=1/200)



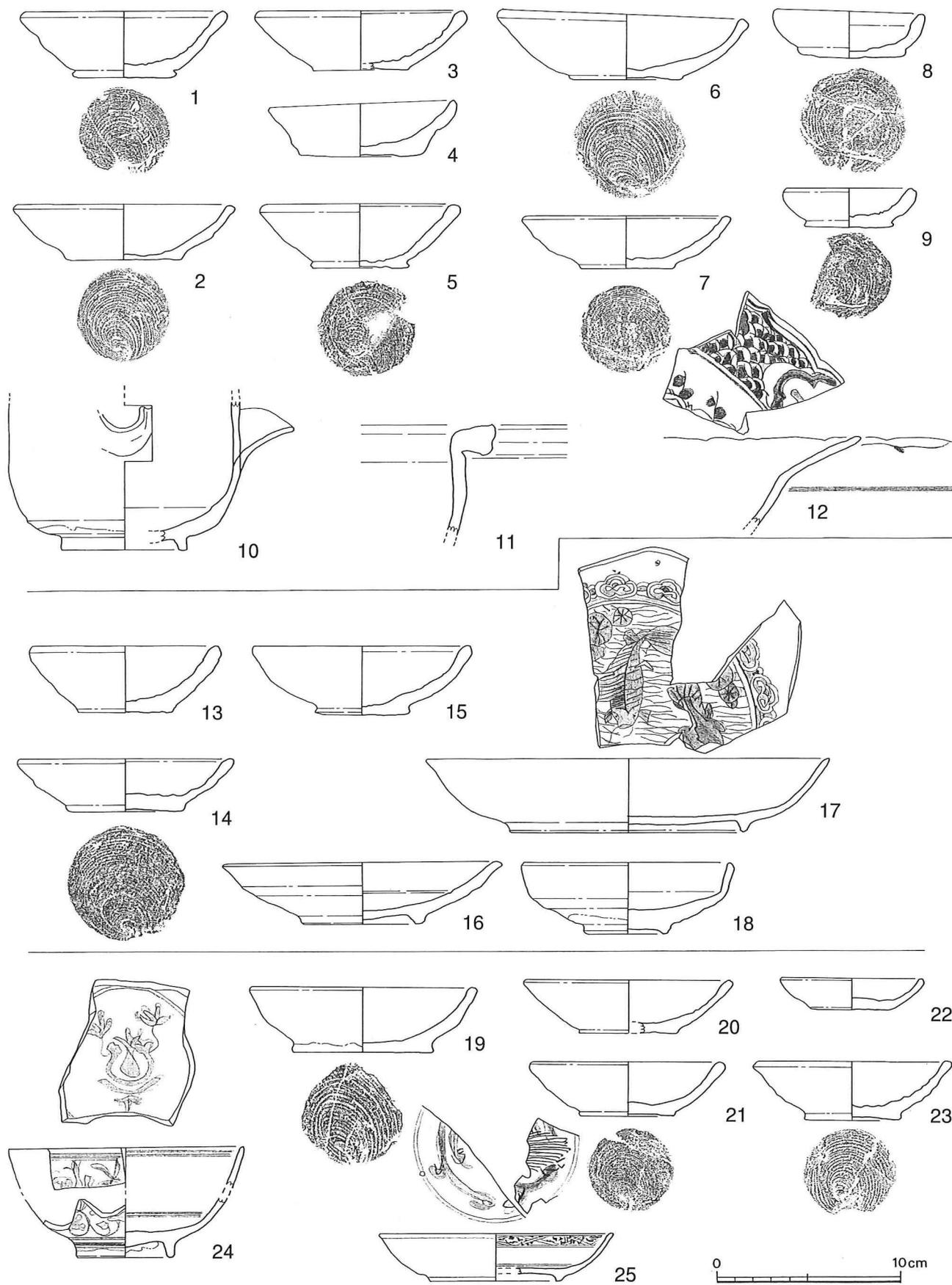
第5図 SB 1・2 実測図 (S=1/100)



写真1 SB1・2



写真2 柱穴検出状況



第6図 SB1・2, 各遺構出土遺物 (S=1/3)

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
1	土師質皿	A-5 pit29		10.6	5.4	3.6	内底：渦巻状，外底部：右回転糸切り，口縁部～内面体部中位スス付着（5箇所），焼成良好，色調：10YR8/3		
2	土師質皿	A-5 pit32		11.6	6.0	3.0	外：底部右回転糸切り，内面から外面にかけてスス付着，内外面丁寧なヘラ削り，焼成やや良好，色調：10YR8/2		
3	土師質皿	A-5 pit29		11.2	2.5	3.2	外：回転ナデ，底部：糸切り，口縁スス付着，焼成良好，色調：10YR8/2		
4	土師質皿	A-5 pit31		9.8	6.5	2.9	底部：右回転糸切り，焼成やや不良，色調：10YR8/2		
5	土師質皿	A-5 pit32		10.0	5.4	3.5	外底部：右回転糸切り，底部：一部欠損，外内面：口縁～底部スス付着，焼成良好，色調：10YR8/2		
6	土師質皿	A-5 pit30		13.3	5.6	3.5	外底部：右回転糸切り，口縁スス付着，焼成やや良好，色調：10YR8/3		
7	土師質皿	A-5 pit32		10.6	5.0	2.9	外：ナデ調整（不定），底部：右回転糸切り，口縁スス付着（1箇所），3/1程度欠損，焼成不良，色調：2.5Y8/2		
8	土師質皿	A-5 pit31		8.0	5.7	2.6	外：ヨコナデ調整，底部：右回転糸切り，焼成良好，色調：2.5Y8/3		
9	土師質皿	A-5 pit31		6.7	4.8	2.1	底部：右回転糸切り，焼成良好，色調：10YR8/2		
10	施釉陶器片口	A-5 pit32			6.6		灰釉，底部露胎	唐津	
11	施釉陶器鉢片	A-5 pit32					灰釉，口縁部上面露胎	唐津	
12	青花皿片	A-5 pit32					口縁輪花，外：圈線，内：魚子文の地文の中に窓	小野皿F群粗製	
13	土師質皿	A-5 pit40		10.0	5.0	3.5	外：水挽き回転ナデ調整（不定），底部：右回転糸切り，口縁～底部スス付着，焼成良好，色調：7.5YR8/1完形		
14	土師質皿	A-6 pit44		11.6	6.2	2.4	外：ナデ調整（不定方向），底部：右回転糸切り，内：軽くナデ調整，内底面渦巻状，焼成良好，色調：7.5YR8/2		
15	土師質皿	A-6 pit36		11.6	5.2	3.7	外：丁寧なヨコナデ調整，底部：右回転糸切り，内面体部：ヘラ削り調整，焼成やや不良，色調：10YR8/3		
16	施釉陶器皿	B-5 pit28		15.0	6.2	3.3	外：高台置付跡，高台内：中央わずかに凹陥状削り残し，体部：段状の削り込み，全釉：透明釉は青灰色・貫入が多く入る		
17	青花皿	A-5 pit42 B-5	IV	21.6	12.8	3.9	外：置付露胎，砂付着，内：如意頭文と2本の圈線内の見込に水中の草と魚（鯉），直口口縁		
18	施釉陶器皿	A-6 pit27		11.0	4.2	3.8	灰釉，外：高台露胎，高台内：削り残し・器肉厚い，内：段になる，直口口縁	唐津	
19	土師質皿	A-6 SK2		12.0	7.2	3.6	底部：右回転糸切り，焼成不良，色調：（外面体部）10YR7/4		
20	土師質小皿	A-6 SK2		10.8	5.2	2.9	外：丁寧なヨコナデ，底部：糸切り（回転方向不明）内：ヘラ削りで丁寧ならせん状に調整，焼成良好，色調：10YR8/4		
21	土師質皿	A-6 SK2		10.2	4.9	2.9	内：口縁部下～見込部分ヘラ削りによるならせん状調整痕，底部：右回転糸切り，焼成不良，色調：10YR8/1		
22	土師質小皿	A-6 SK2		7.6	4.2	1.7	底部：糸切り（回転方向不明），焼成良好，色調：7.5YR7/6		
23	土師質皿	A-6 SK2		10.4	5.2	3.2	底部：右回転糸切り，焼成良好，色調：10YR8/3		
24	青花碗	A-6 SK1			5.0		外：高台内無釉，体部花唐草，内：見込草花	森碗F2群	
25	青花皿	A-6 pit24		12.6	7.0	2.6	底部：置付露胎，砂付着，高台内カンナ目，内：四方罽，見込み2本の圈線雨龍文	小野皿E群	

第1表 SB1・2出土遺物

(2) I区出土の遺物

・SB1, 2出土遺物（第6図）

1～18は，建物遺構SB1, 2を構成する柱穴から出土した遺物である。ともに国産の土師器，唐津と中国産の青花が出土している。遺物の年代的には唐津が大橋康二編年（1993）のI期に相当するが築城が慶長四年であることから全体的には17世紀初頭頃のものと考えられる。遺構検出状況からSB2が後のものである可能性が高いが，遺物からみる限りはほとんど時期差はないと判断される。短期間の間に建て替えられたのであろうか。

・各地区出土遺物（第6図）

19～25はA-6区の遺構出土の遺物である。国産土師器と中国青花でSB1, 2と同様の組成である。青花には25のような粗製の磁器質の森穀分類（1995）F2や景德鎮系で小野正敏分類（1982）皿E群がみられる。年代的にはSB1, 2とほぼ同じと考えられる。



写真3 SB1出土遺物

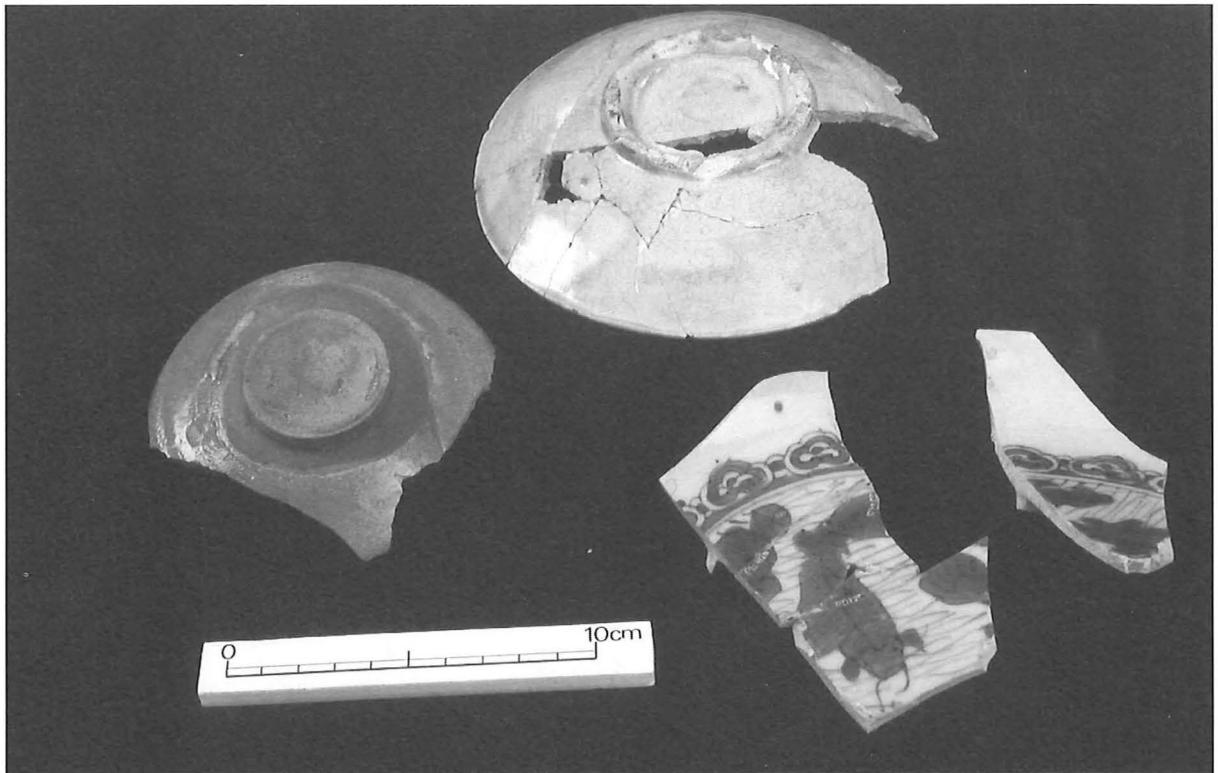


写真4 SB2出土遺物

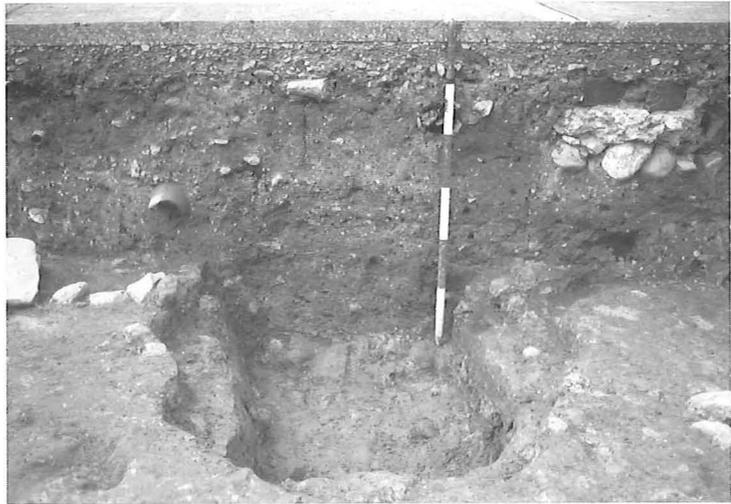
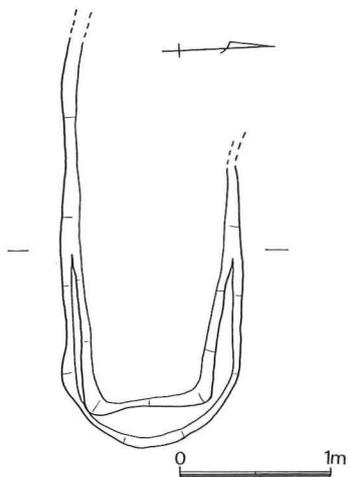
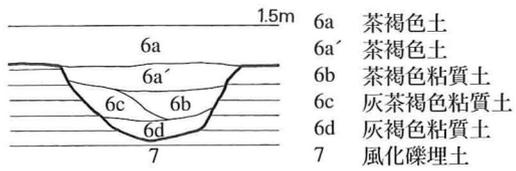


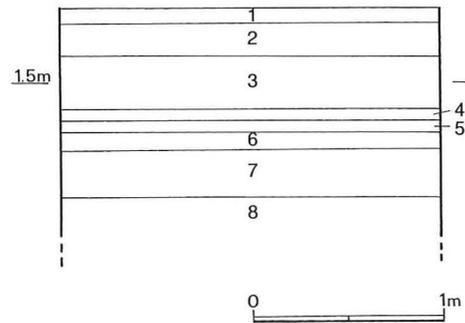
写真5 SD2 検出状況



第7図 SD2 実測図 (S=1/50)

基本層序

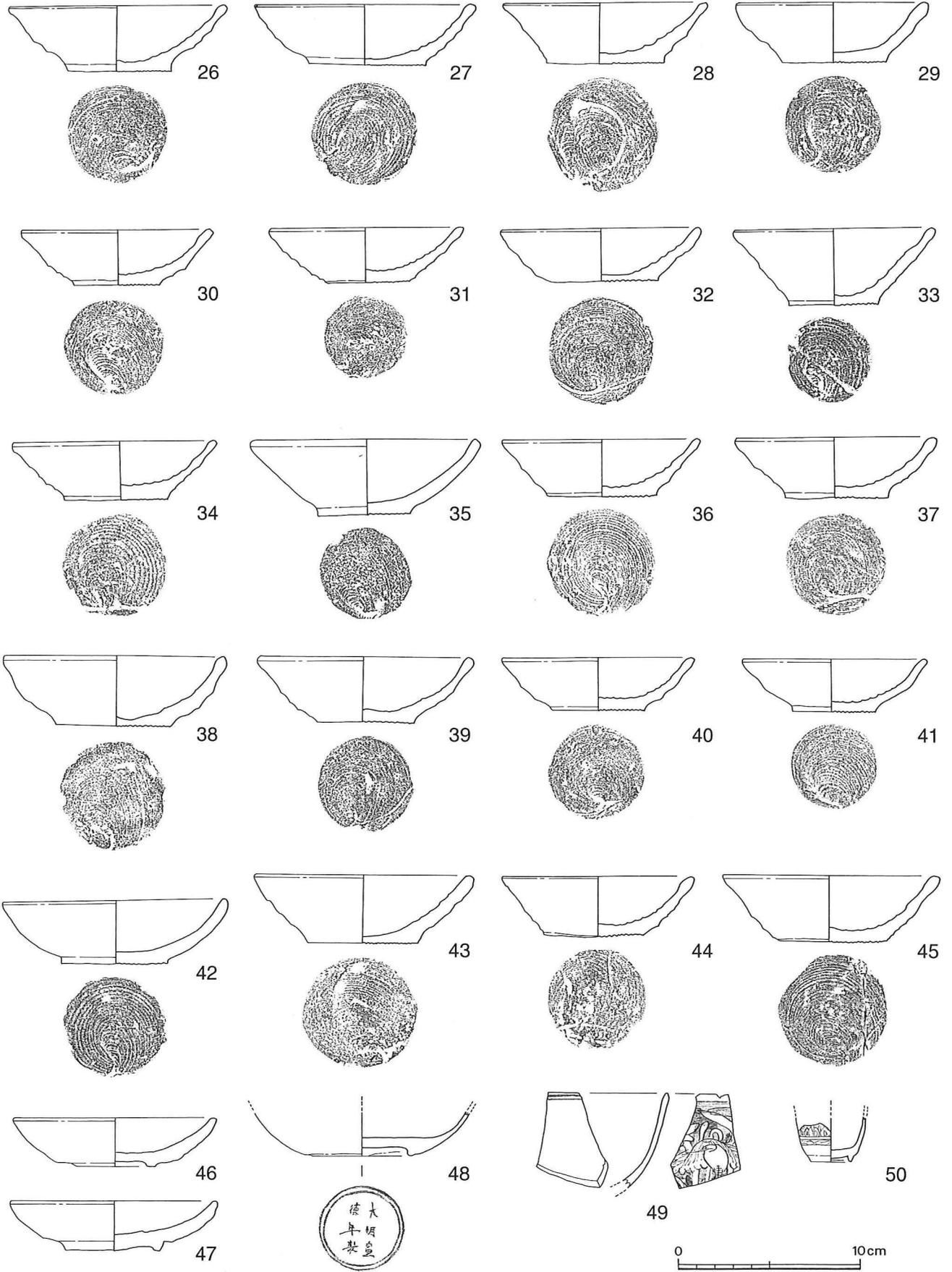
- 第1層 アスファルト・コンクリート
- 第2層 砂利層 (第1層の基礎)
- 第3層 茶褐色土層 (埋土)
- 第4層 灰褐色土層 (客土・攪乱層)
- 第5層 赤褐色土層 (18世紀代の遺物を含む)
- 第6層 暗茶褐色土層 (炭化物を含む火災層で、慶長期の遺物包含層)
- 第7層 黄褐色基盤層 (風化礫による整地層で、築城時の生活面)
- 第8層 暗青灰色粘質土層



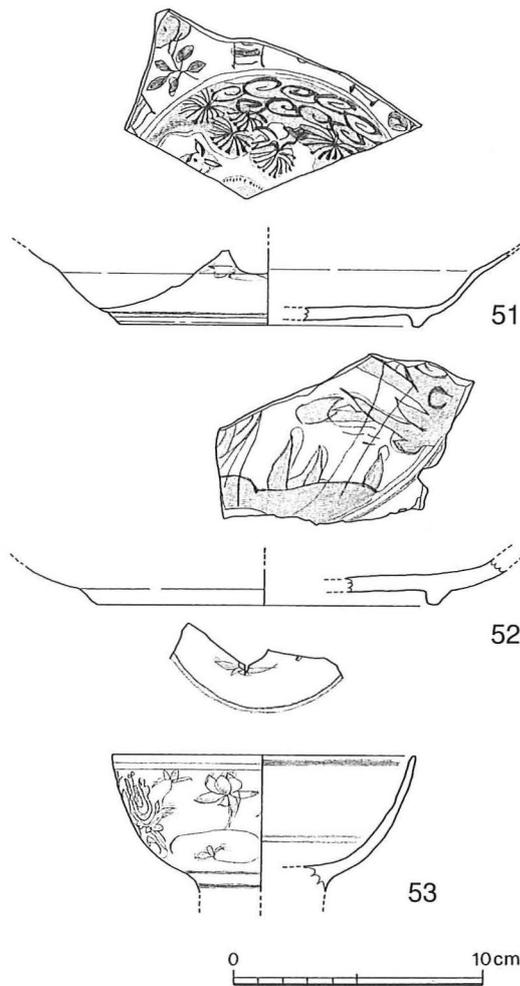
第8図 I区 基本土層図



写真6 I区 土層断面



第9圖 SD2出土遺物



第10図 S D 2 出土遺物

・ S D 2 出土遺物 (第 9・10 図)

26～53は、S D 2 の埋土から出土した遺物である。

国産の土師質土器、唐津と中国産の青花からなる。圧倒的に多いのは土師質土器で、そのほとんどに口縁部に煤の付着がみられ灯明皿として使用されていたことがわかる。唐津は胎土目積みのもので大橋編年 (1993) の I 期に相当する。青花は碁笥底の森分類 (1995) 皿 H 2, 同分類碗 F 2, 小野分類 (1982) 皿 F 群のほか漳州窯系の皿がある。

灯明皿が多い点については様々な推測が成り立つが、隣接する S B 1, 2 などで使用されたものが廃棄されたと考えるのが適当であろう。

遺構の埋没時期は、遺物の年代から17世紀初頭頃であると考えられる。肥前磁器 (初期伊万里) はみられないことから、下限は1610年代頃と推測される。

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
26	土師質皿	A-3 SD2 P-46		11.9	5.6	3.6	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，口縁スス付着，焼成甘い，色調：7.5YR8/2		
27	土師質皿	A-3 SD2 P-35		12.0	6.4	3.2	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，焼成ふつう，色調：7.5YR8/2		
28	土師質皿	A-3 SD2 P-26		11.2	6.4	3.3	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，口縁スス付着，焼成甘い，色調：7.5YR8/3		
29	土師質皿	A-3 SD2 P-2		10.5	5.7	3.2	外：回転ヨコナデ，底部：糸切り，焼成ふつう，色調：10YR8/3		
30	土師質皿	A-3 SD2 P-29		10.5	4.7	3.1	外：回転ヨコナデ，底部：糸切り，焼成甘い，色調：2.5Y8/2		
31	土師質皿	A-3 SD2 P-58		10.7	4.6	3.1	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，口縁スス付着，焼成甘い，色調：7.5YR8/3		
32	土師質皿	A-3 SD2 P-28		10.9	5.8	2.9	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，焼成ふつう，色調：10YR8/2		
33	土師質皿	A-3 SD2 P-60		11.0	4.9	4.3	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，焼成甘い，色調：10YR8/2		
34	土師質皿	A-3 SD2 P-17		11.2	5.6	3.2	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，口縁スス付着，焼成甘い，色調：7.5YR8/2		
35	土師質皿	A-3 SD2 P-45		12.4	5.1	4.1	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，口縁スス付着，焼成甘い，色調：7.5YR7/4		
36	土師質皿	A-3 SD2 P-53		10.8	6.0	3.1	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，口縁スス付着，焼成甘い，色調：2.5Y8/2，反転復元		
37	土師質皿	A-3 SD2 P-47		11.1	5.7	3.3	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，口縁スス付着，焼成甘い，色調：10YR8/2		
38	土師質皿						外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，口縁スス付着，焼成甘い，色調：7.5YR8/2		
39	土師質皿	A-3 SD2 P-38		11.7	5.3	3.5	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，焼成良好，色調：7.5YR8/3		
40	土師質皿	A-3 SD2 P-5		10.6	5.0	2.9	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，口縁スス付着，焼成甘い，色調：10YR8/3，反転復元		
41	土師質皿	A-3 SD2 P-48		10.1	4.5	2.9	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，焼成甘い，色調：10YR8/3		
42	土師質皿	A-3 SD2 P-49		12.2	5.8	3.5	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，焼成良好，色調：2.5Y4/1		
43	土師質皿						外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，口縁スス付着，焼成甘い，色調：7.5YR8/2		
44	土師質皿	A-3 Pit35	VI	10.6	5.4	3.3	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，口縁スス付着，焼成甘い，色調：10YR8/2		
45	土師質皿	A-3 SD2 P-42		11.9	6.0	3.6	外：回転ヨコナデ，底部：右回転糸切り，内：ヘラケズリ，口縁スス付着，焼成甘い，色調：10YR8/2		
46	施釉陶器皿	A-2 SD2 P-30		10.9	4.3	2.2	灰釉，外：高台露胎，内：胎土目，反転復元	唐津	
47	施釉陶器皿	A-3 SD2 P-50		11.2	5.1	2.7	灰釉，外：底部露胎，内：胎土目 (4箇所)	唐津	
48	青花皿	A-3 SD2 P-36			5.3		底部：畳付部は露胎，高台内：「大明宣徳年製」の銘		
49	青花碗片	A-3 SD2 P-16					外：鳥・草花文，内：口縁直下圏線 2 本	森晩日類	
50	青花小杯	A-3 SD2 P-7			2.2		底部：高台露胎，カンナ目が残る，内：透明釉を薄めに施釉		
51	青花皿	A-3 SD2 P-12			11.8		底部：高台露胎，体部内面：芙蓉手，見込み 2 本の圏線内には樹下鹿文，呉須の発色はやや鮮明	小野皿 F 群	
52	青花皿片	A-3 SD2 P-8			13.6		底部：高台露胎，内：見込み：二重圏線の中に草文		
		A-3 SD2 P-51 A-3							
53	青花碗	P-45	VI	12.0			外：草花文，底部：高台露胎，体部下半部器壁が薄い，内：口縁直下圏線，見込二重圏線の中に草文，透明釉が厚く施釉され小さな気孔がある	森晩 F 類	

第 2 表 S D 2 出土遺物

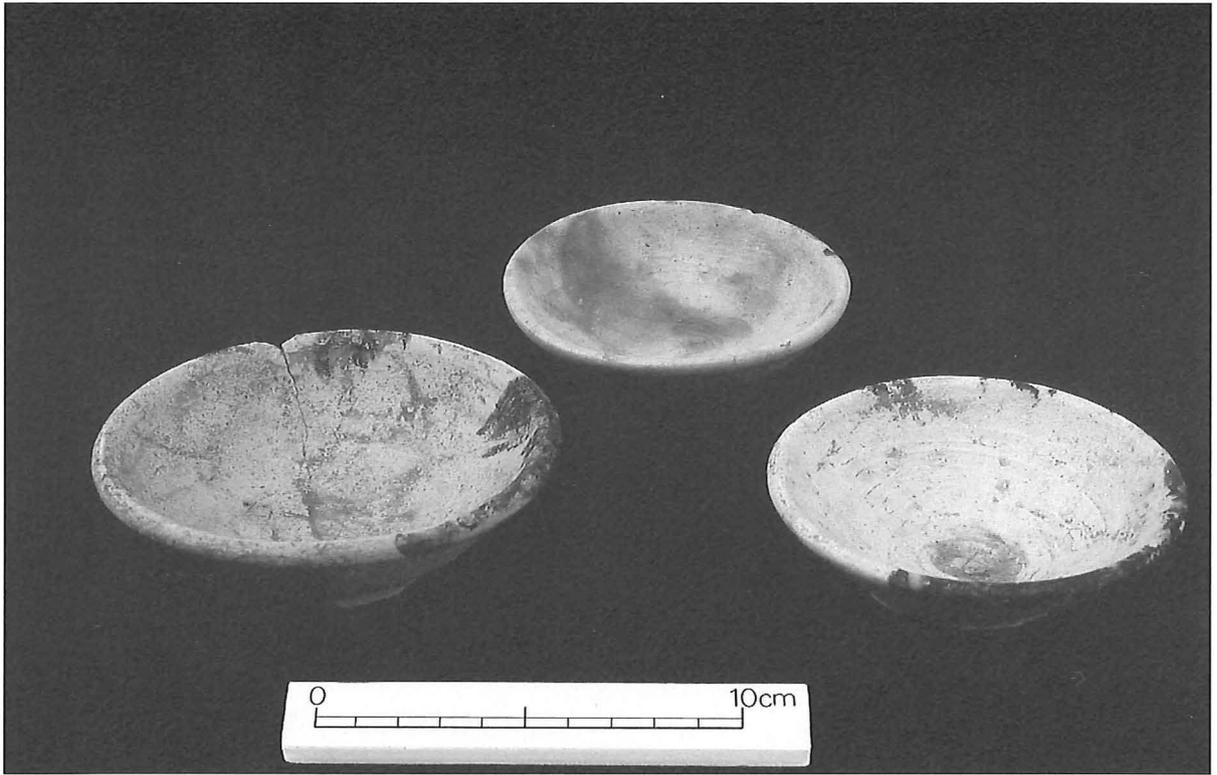


写真7 SD 2 出土遺物 (土師皿)

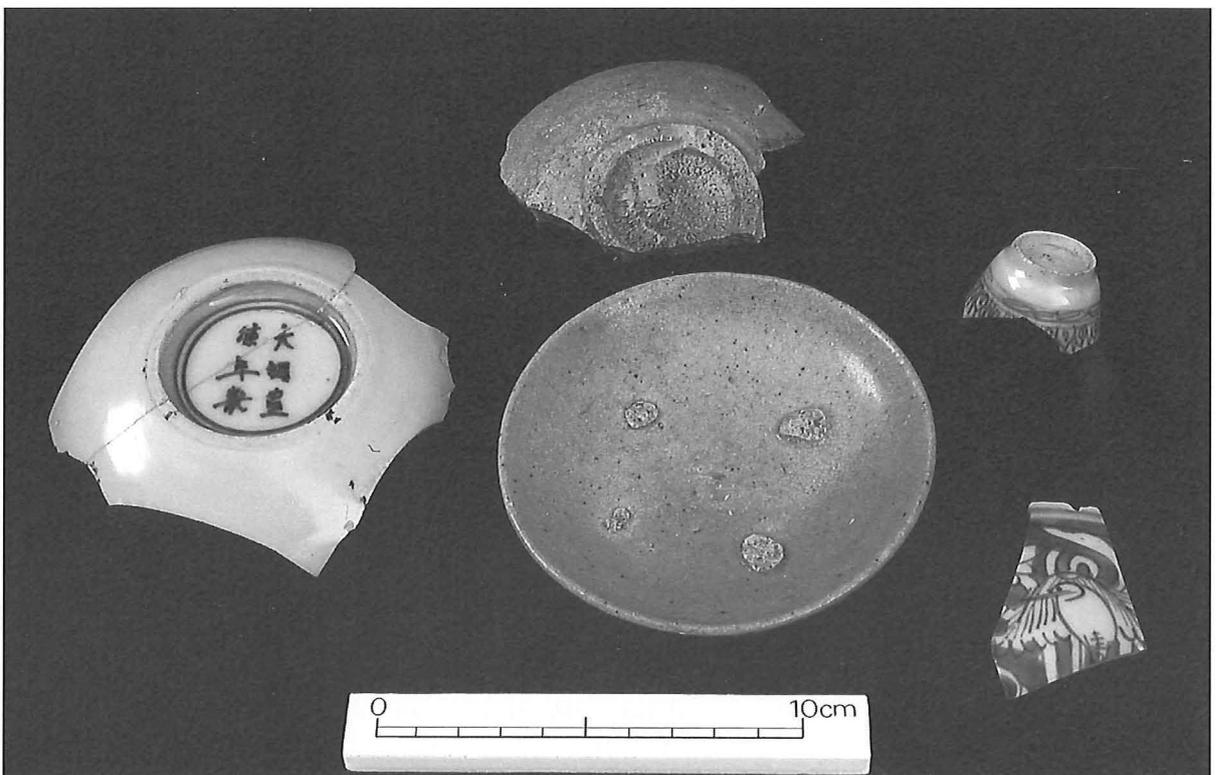
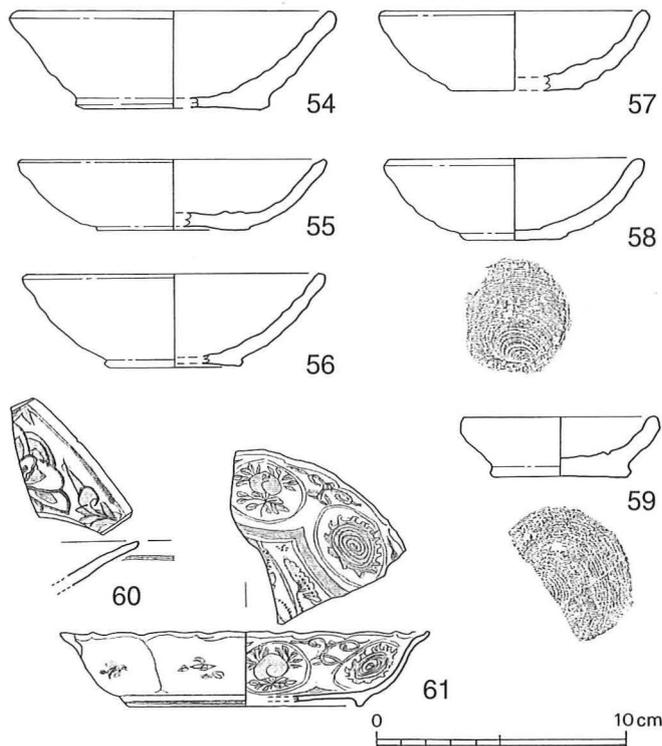


写真8 SD 2 出土遺物 (陶磁器)



第11図 SD 4 出土遺物 (S=1/3)

・SD 4 出土遺物 (第11図)

54~61はSD 4の埋土から出土した遺物である。国産の土師皿と中国の青花からなる。土師皿には煤の付着がみられ、灯明皿として用いられていたことがわかる。

青花は漳州窯系の皿(60)と景德鎮系の型押し稜花鉢(61)がある。

遺物の埋没年代は、17世紀初頭頃と考えられる。肥前磁器がみられないことから、下限は1610年代頃であろう。SB 1, 2やSD 2とほぼ同時期であると考えられる。



写真9 SD 4 出土遺物

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
54	土師質皿	B-6 SD4	VI	12.2	7.6	3.8	外：ヨコナデ調整，焼成不良，色調：10YR8/1		
55	土師質皿	B-6 SD4	VI	12.2	5.8	2.8	外：へら削りのあとヨコナデ調整，内：らせん状のへら削り痕，焼成良好，色調：10YR8/2		
56	土師質皿	B-6 SD4	VI	11.6	5.0	3.7	外：ヨコナデを数回行う調整，内：へら削りのあと軽いナデ調整，焼成良好，色調：10YR8/2		
57	土師質皿	B-6 SD4	VI	10.4	4.8	3.1	焼成良好，色調：10YR8/2		
58	土師質皿	B-6 SD4	VI	10.0	3.6	3.3	底部：右回転糸切り，焼成良好，色調：10YR8/2		
59	土師質皿	B-6 SD4	VI	7.6	5.2	2.3	底部：右回転糸切り，焼成良好，色調：7.5YR8/2		
60	青花皿片	B-6 SD4	VI				外：圏線，内：草花文		
61	青花鉢	B-6 SD4	VI	14.6	9.2	2.9	外：高台部二重彫像，宝文，底縁：高台内側付露筋，内：体部：型打ち文様・四彩状巻・唐草文・嬰髯(佛)見込み・透孔状蒸器，草	森皿G2類	

第3表 SD 4 出土遺物

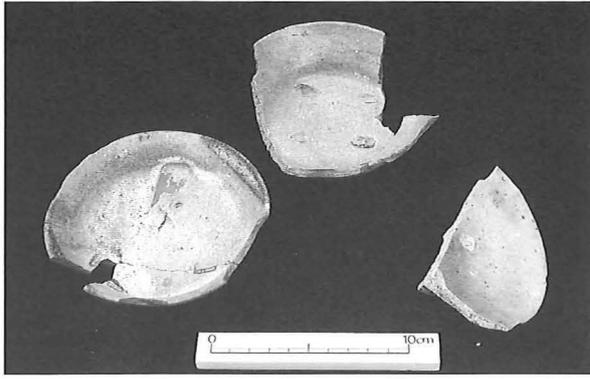


写真10 127・129・128



写真11 同裏

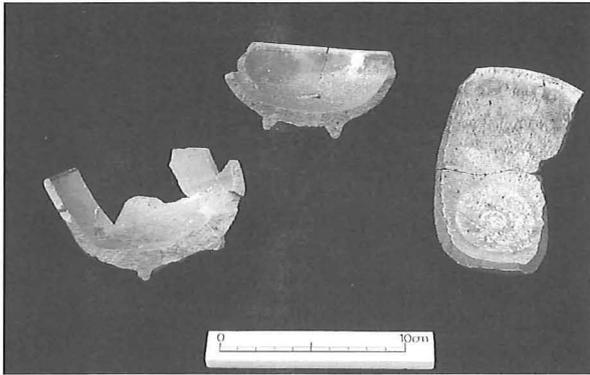


写真12 112・114・116

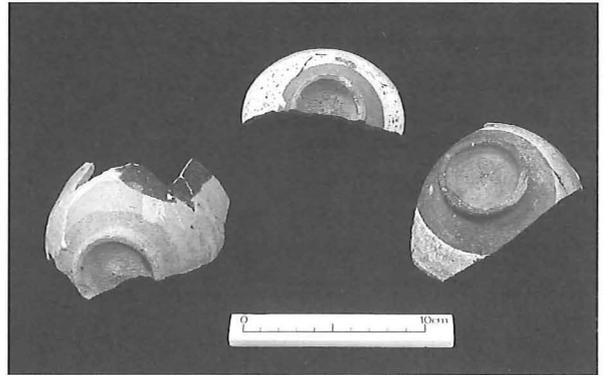


写真13 同裏



写真14 121・124・123



写真15 同裏

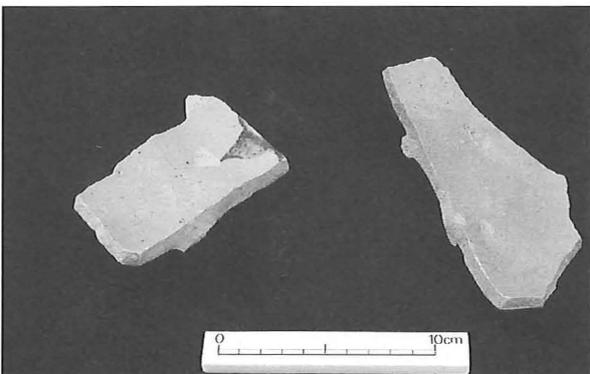


写真16 132・131



写真17 同裏

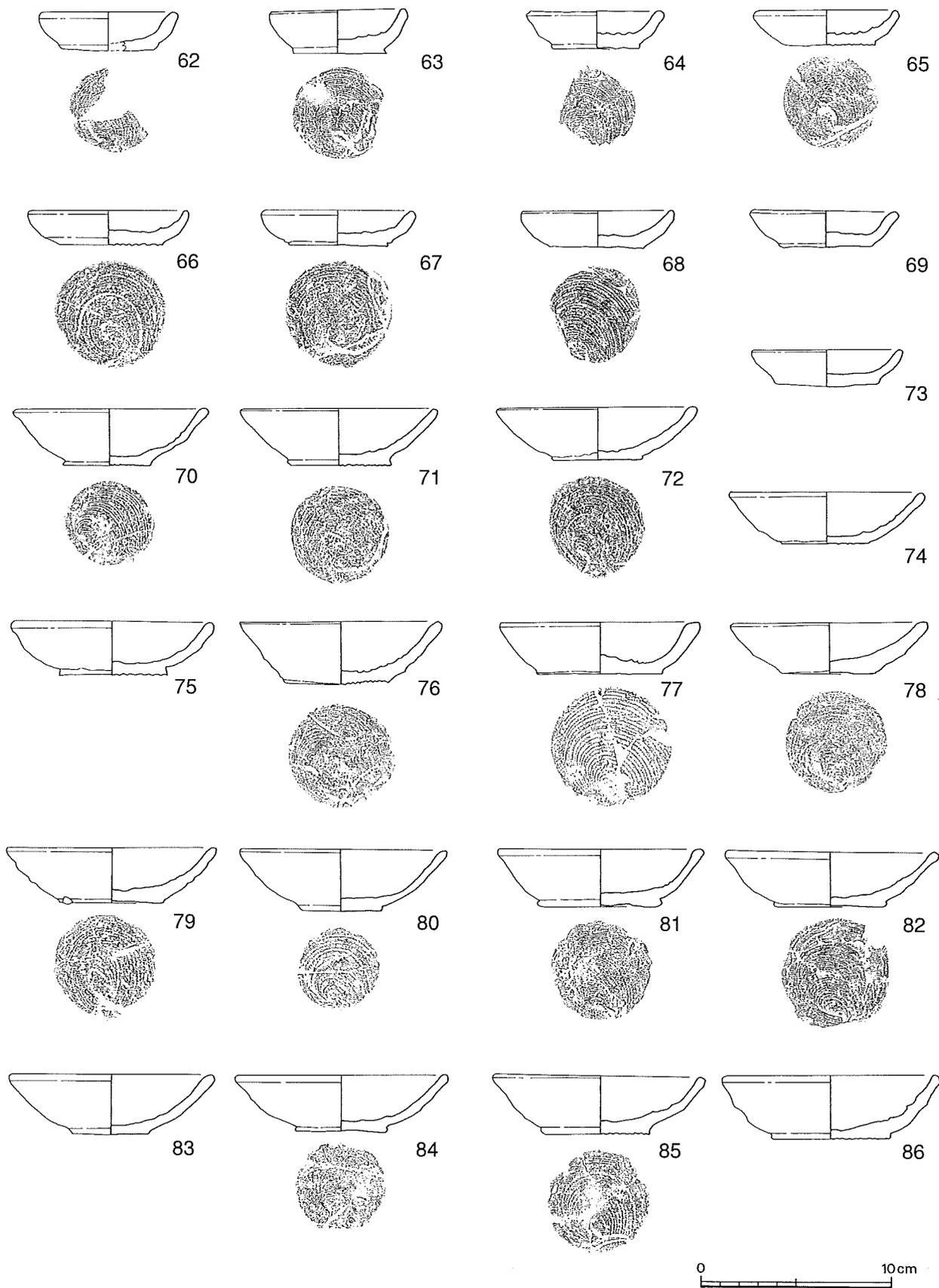
・Ⅵ層出土遺物（第12～18区）

62～146は、3～6区の第Ⅵ層出土の遺物である。国産では土師質土器、肥前陶磁、瀬戸、備前が、中国産では青花、色絵、華南三彩、また李朝の白磁などがある。土師皿は器形としては杯であるが、煤の付着があり灯明皿として使用されていたと考えられる。肥前陶磁は唐津が主体で鉄絵を描くものもあるが胎土目積みが主体で、砂目積みのもと磁器（初期伊万里）も少数含まれる。青花は、小野分類C群（148）など古期の資料も含まれるが、芙蓉手様式の鉢（146）など17世紀初頭のものが主体を占める。

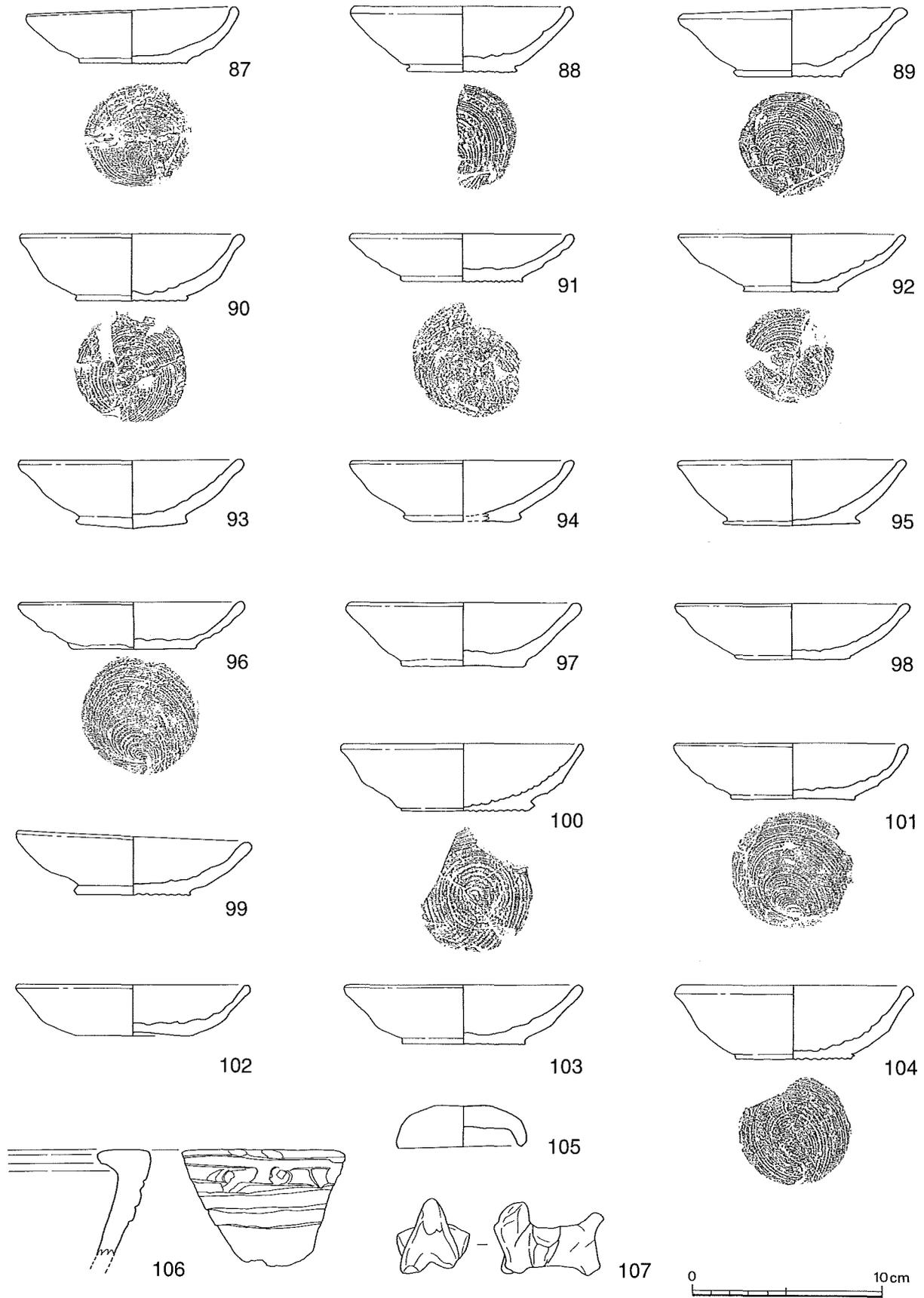
第Ⅵ層の遺物の時期を全体的にみると、SB121、2やSD2などと同時期の遺物が含まれている。炭化物が含まれており、堆積の原因はSB1、2の建て替えなどによるものであろう。

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
62	土師質皿	B-5	Ⅵ	6.7	4.7	2.0	外：水挽き静止ナデ調整（不定方向）、底部：回転糸切り、見込み部分成形痕、焼成良好、色調：10YR8/3		
63	土師質皿	B-6	Ⅵ	7.2	4.7	2.4	右：2.4		
64	土師質皿	A-5	Ⅵ	6.8	4.4	2.0	外：ヨコナデ調整、底部右回転糸切り		
65	土師質皿	B-6 Pit3	Ⅵ	7.6	5.0	1.8	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、板状圧痕、内：ヘラ削り、色調：7.5YR8/3		
66	土師質皿	B-5 Pit42	Ⅵ	8.4	5.3	1.8	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、色調：7.5YR8/4		
67	土師質皿	B-5	Ⅵ	7.8	5.1	1.8	外：底縁回転糸切り、見込み：指頭押痕（2箇所）、口縁スス付着、焼成やや良好、色調：7.5YR7/6		
68	土師質皿	A-5	Ⅵ	8.0	4.9	2.0	右：2.0		
						1.9	左：1.9		
						1.85	右：1.85		
69	土師質皿	B-6 Pit41	Ⅵ	7.8	4.8	2.0	左：2.0		
70	土師質皿	A-4 Pit47		10.3	4.4	3.0			
71	土師質皿	B-5 Pit2	Ⅵ	10.2	5.4	3.0	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、口縁部スス付着、色調：7.5YR8/1、反転復元		
72	土師質皿	B-5	Ⅵ	10.4	4.6	2.0	外：水挽きによる回転ナデ調整（一定）、内：ヘラ削り、底部：右回転糸切り、焼成やや良好、色調：10YR8/3		
73	土師質小皿	B-4	Ⅵ	7.6	5.4	1.9	内外面とも摩滅が乏しい、底部：右回転糸切り、焼成不良、色調：7.5YR8/3		
74	土師質皿	B-6 Pit23	Ⅵ	10.4	4.6	2.7	外：回転ヨコナデ、底部：糸切り、内：ヘラ削り、色調：10YR8/3		
75	土師質皿	A-3 Pit5	Ⅵ	10.0	5.2	2.8	外：回転ヨコナデ、内：ヘラ削り、底部：糸切り		
76	土師質皿	A-5	Ⅵ	10.3	5.3	3.3	外：回転ヨコナデ、底部右回転糸切り、内：ナデ調整、焼成不良、色調：7.5YR8/4		
77	土師質皿	B-5	Ⅵ				底部：右回転糸切り、内部：ナデ調整（不定）、内底面：溝巻状痕（右回転）、口縁スス付着、焼成良好、色調：10YR8/2		
78	土師質皿	B-5	Ⅵ	10.0	4.8	2.7	口縁スス付着、焼成良好、色調：10YR8/3		
79	土師質皿	B-5	Ⅵ	10.6	5.4	2.9	外：斜、回転ナデ（一定方向）、底部：右回転糸切り、一部がれて体部押し上げ、口縁スス付着、焼成良好、色調：7.5YR8/3		
80	土師質皿	A-4	Ⅵ	10.6	4.2	3.2	外：ヘラ削りのあとナデ調整、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、焼成やや不良、色調：10YR8/3		
81	土師質皿	B-5	Ⅵ	10.3	5.6	2.9	内外面：ナデ調整、外：底部右回転糸切り、焼成不良、色調：7.5YR8/1		
82	土師質皿	B-6 Pit40	Ⅵ	10.6	5.9	2.9	外：ヘラ削り、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、口縁部スス付着、焼成やや良好、色調：7.5YR8/3		
83	土師質皿	A-4	Ⅵ	10.6	4.0	3.1	内外面：丁寧なナデ調整、底部：右回転糸切り、焼成良好、色調：10YR8/2		
84	土師質皿	B-4	Ⅵ	11.0	4.6	3.0	外：体部：ヘラ削りのあとナデ調整、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、口縁部スス付着、焼成やや不良、色調：10YR8/2		
85	土師質皿	B-5 Pit32		11.1	5.6	3.0	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、焼成不良、色調：7.5YR8/2		
86	土師質皿	B-5 Pit29	Ⅵ	11.2	6.2	3.4	外：回転ヨコナデ、底部：糸切り、内：ヘラ削り、焼成良好、色調：10YR8/3、反転復元		
87	土師質皿	B-5	Ⅵ	10.6	6.4	3.0	外：回転ナデ調整、底部：回転糸切り、口縁スス付着、焼成やや不良、色調：10YR8/2		
88	土師杯	B-5 Pit13	Ⅵ	11.6	5.6	3.4	外：回転ヨコナデ、底部：糸切り、内：ヘラ削り、焼成不良、色調：7.5YR8/2、反転復元	二次焼成を受ける	
89	土師杯	B-5 Pit14	Ⅵ	12.0	5.6	3.5	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、板状圧痕、内：ヘラ削り、焼成不良、色調：7.5YR8/1		
90	土師杯	A-5	Ⅵ	11.8	5.6	3.6	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、焼成不良、色調：10YR8/1、反転復元		
91	土師杯	A-5 Pit24	Ⅵ	11.4	6.2	2.6	外：回転ヨコナデ、底部：糸切り、内：ヘラ削り、色調：2.5YR7/6、反転復元		
92	土師杯	B-5 Pit33	Ⅵ	11.8	5.0	3.1	外：回転ヨコナデ、底部：糸切り、内：ヘラ削り、焼成良好、色調：7.5YR8/3、反転復元		
93	土師質皿	B-5	Ⅵ	11.6	5.6	3.6	底部：右回転糸切り、焼成不良、色調：7.5YR8/1		
94	土師質皿	A-5 Pit38	Ⅵ	11.4	6.0	3.2	外：丁寧なナデ調整、底部：糸切りからナデ、内：ヘラ削りからナデ、口縁部スス付着、焼成やや良好、色調：10YR8/2		
95	土師質皿	A-3	Ⅵ	11.8	7.2	3.4	外：水挽き回転ナデ、底部：糸切り（摩滅き）、内：口縁一体部下回転ナデ、焼成良好、色調：7.5YR8/3		
96	土師質皿	B-3	Ⅵ	11.6	6.4	2.5	外：ヘラ削りのあとナデ調整、底部：右回転糸切り、内底面：らせん状のヘラ削り痕、焼成良好、色調：7.5YR7/6		
97	土師質皿	A-3	Ⅵ	11.8	6.4	3.4	外：回転ナデ（一定方向）、口縁部：やや強めに静止ヨコナデ、焼成やや不良、色調：10YR8/2		
98	土師質皿	A-4	Ⅵ	12.2	5.8	3.0	外：ナデ調整（不定方向）、底部：右回転糸切り、内底面：溝巻状痕、口縁部スス付着（1箇所）、焼成やや良好、色調：10YR8/3		
99	土師杯	B-5 Pit33	Ⅵ	12.2	6.1	3.1	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、口縁部スス付着、色調：7.5YR8/3		
100	土師杯	A-4 Pit47		12.6	6.4	3.5	外：回転ヨコナデ、ヘラ削り、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、色調：7.5YR8/1、反転復元（上半分）		
101	土師質皿	A-4	Ⅵ	12.0	6.4	2.9	外：ヘラ削り、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、口縁部スス付着、焼成良好、色調：7.5YR8/3		
102	土師質皿	A-3	Ⅵ	12.1	5.8	2.7	外：ヨコナデ、底部：回転糸切り、内：ヘラ削り、焼成不良、色調：7.5YR8/2		
103	土師杯	B-5 Pit33	Ⅵ	12.4	6.4	3.2	外：回転ヨコナデ、底部：糸切り、内：ヘラ削り、色調：10YR8/2、反転復元		
104	土師杯	B-6 Pit39	Ⅵ	12.4	5.9	3.9	外：回転ヨコナデ、底部：右回転糸切り、内：ヘラ削り、色調：10YR8/3、反転復元		
105	土師質焼壇壺蓋	B-5 Pit28	Ⅵ	6.4	2.4	5.1	色調：7.5YR8/2		
106	瓦貫火鉢	A-3 Pit20	Ⅵ				口縁部が内側へ折れる		
107	土人形（馬？）	A-5 Pit37	Ⅵ	2.6			手塗り		

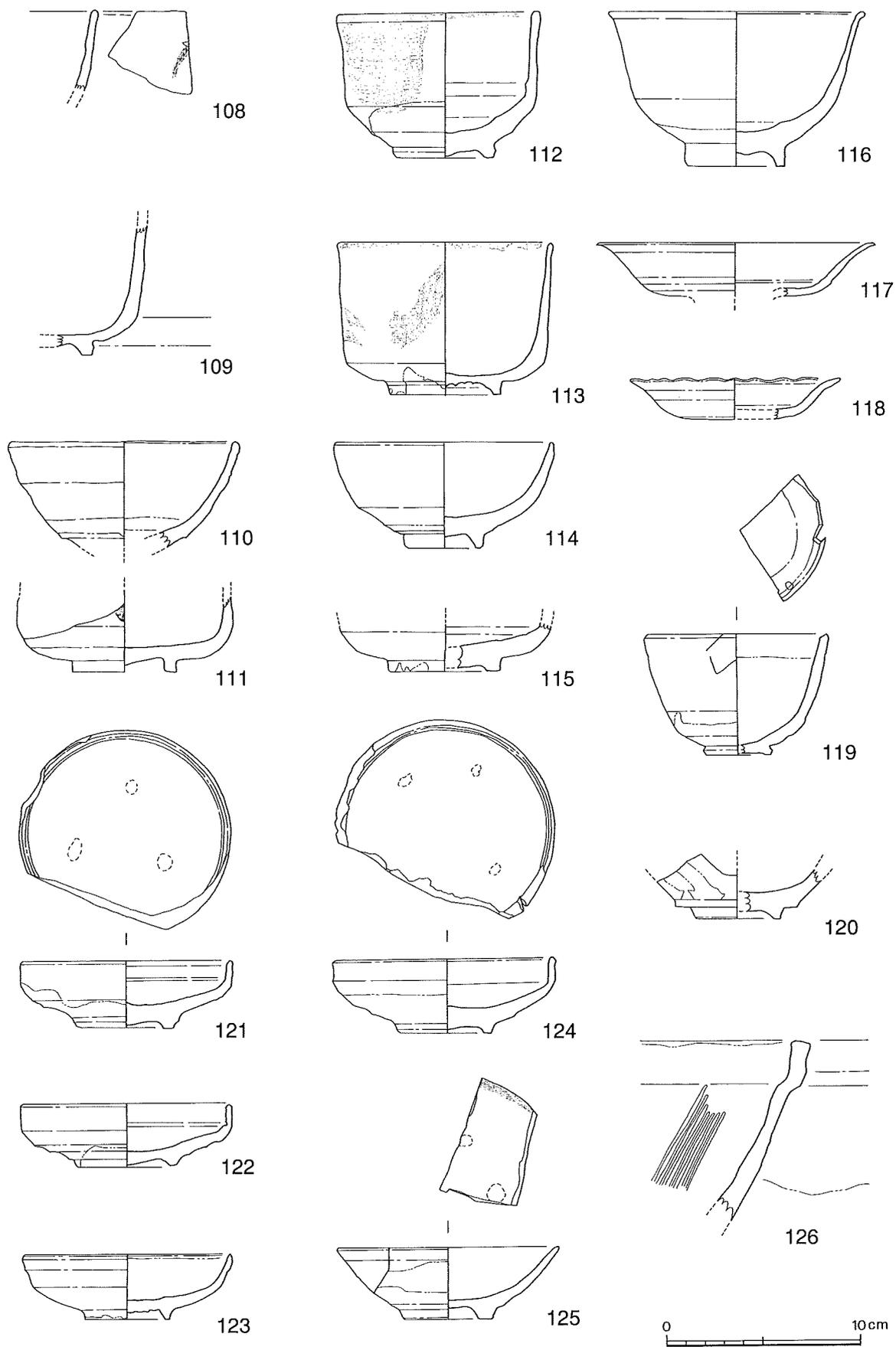
第4表 Ⅵ層出土遺物①



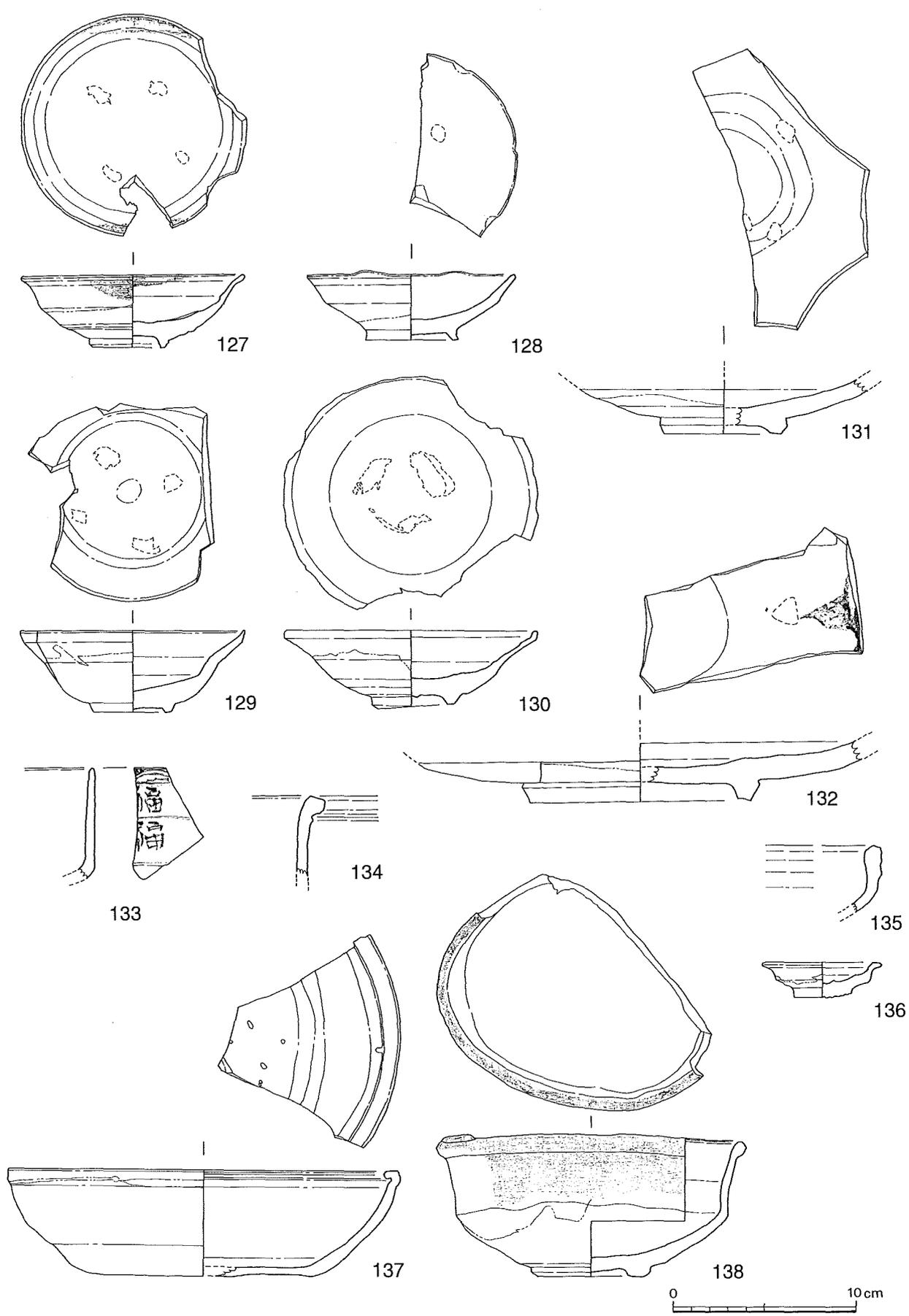
第12図 VI層出土遺物① (S=1/3)



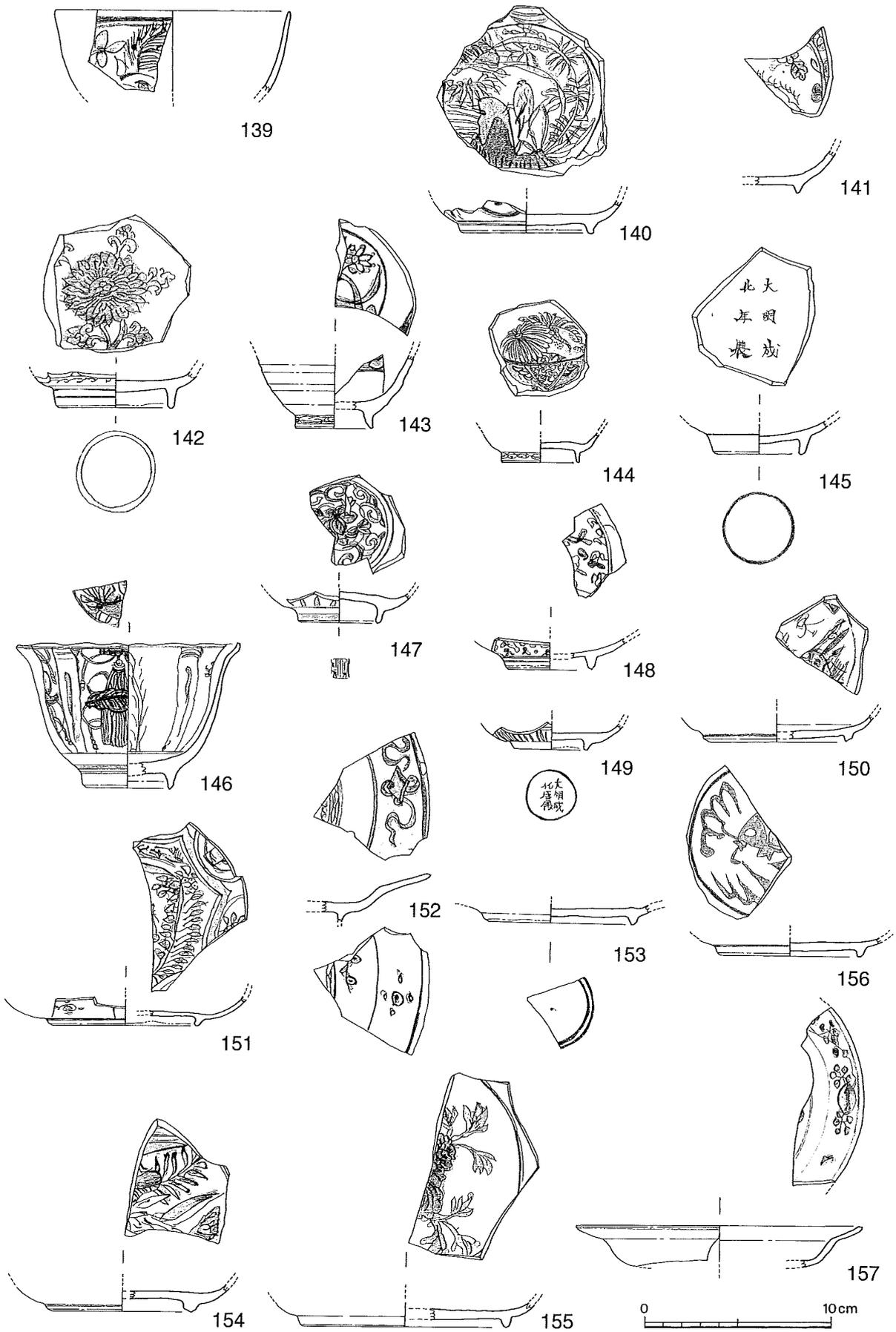
第13图 VI層出土遺物② (S=1/3)



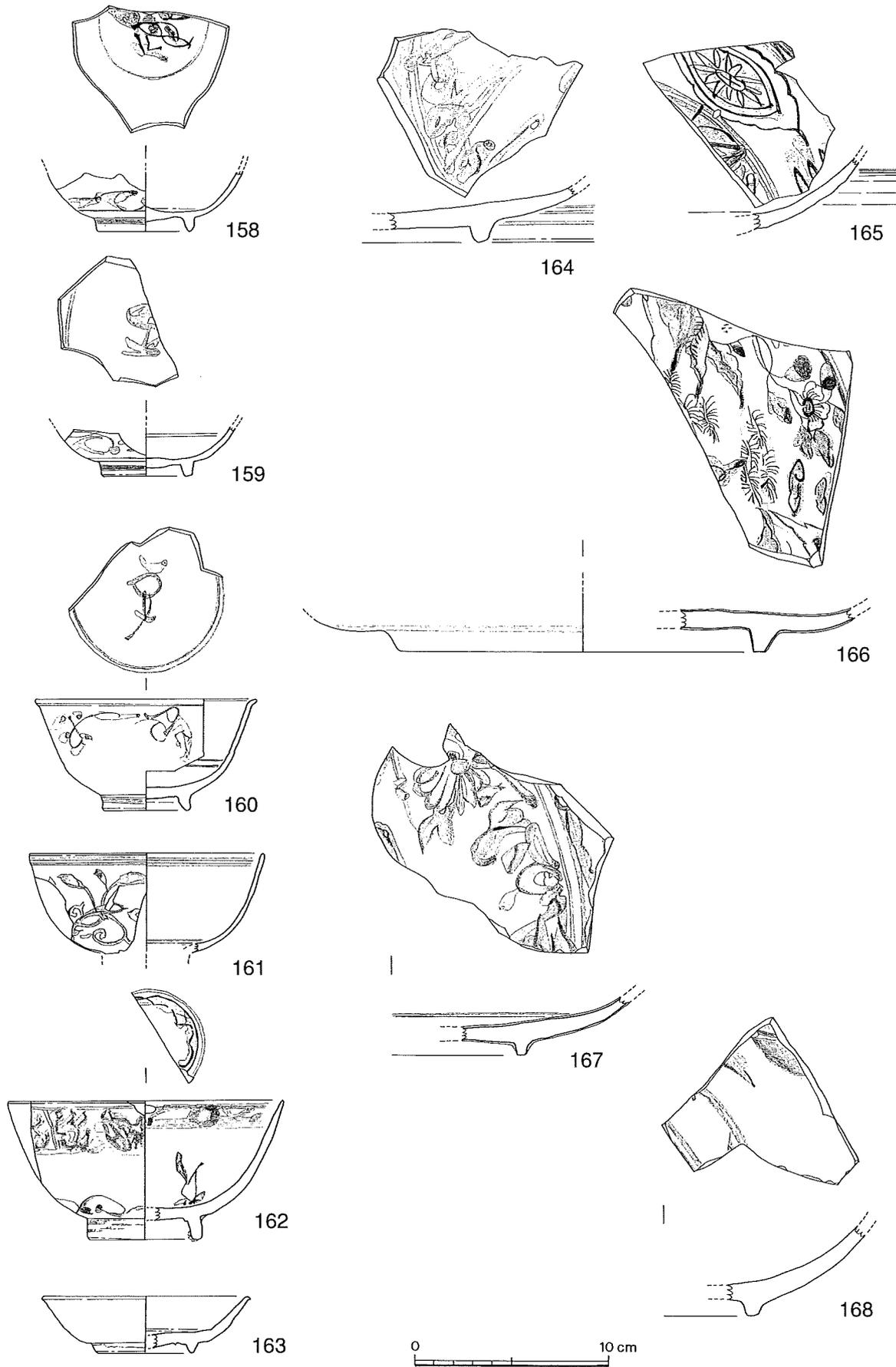
第14図 VI層出土遺物③ (S=1/3)



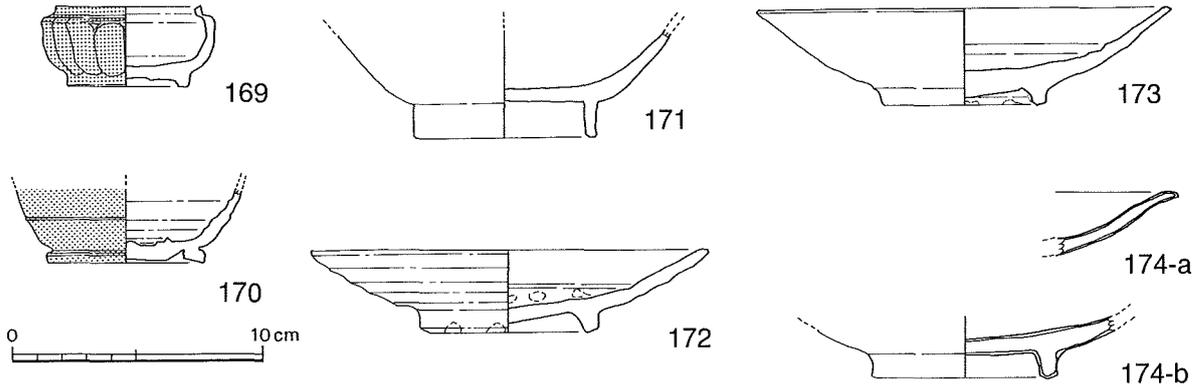
第15図 VI層出土遺物④ (S=1/3)



第16图 VI层出土遗物⑤ (S=1/3)



第17图 VI層出土遺物⑥ (S=1/3)



第18図 VI層出土遺物⑦ (S=1/3)

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
108	施釉陶器碗片	B-4	VI				灰釉, 外: 鉄絵	絵唐津	
109	施釉陶器碗	B-4	VI				灰釉, 外: 高台露胎	唐津	
110	施釉陶器碗	A-5	VI				灰釉, 外: 底部無釉	唐津	
111	施釉陶器碗	B-5	VI		5.4		灰釉, 外: 底部露胎, 鉄絵	絵唐津	
112	碗 (絵唐津)	B-5 Pit10	VI				鉄釉, 灰釉, 外: 底部露胎	絵唐津	
113	施釉陶器碗	B-5 Pit11	VI	10.2	5.7	8.0	灰釉, 外: 高台露胎, 鉄絵	絵唐津筒型碗	
114	施釉陶器碗	B-5 Pit4	VI	11.2	4.2	5.5	灰釉, 外: 底部露胎, 内: 胎土目, 反転復元	唐津	
115	施釉陶器碗	A-5	VI				灰釉, 外: 高台部無釉	唐津	
116	施釉陶器碗	B-5 Pit9	VI	13.2	5.0	8.0	灰釉, 外: 底部露胎, 反転復元	唐津	
117	施釉陶器皿	B-5	VI		14.4		灰釉	唐津	
118	施釉陶器皿	B-5	VI		10.8		灰釉, 口縁稜花	唐津	
119	施釉陶器碗	A-5	VI	9.2	3.4	6.4	鉄釉, 外: 底部露胎, 一部欠損	唐津	
120	施釉陶器碗底部	A-3 Pit22	VI		4.2		鉄釉, 外: 底部露胎	天目茶碗	
121	施釉陶器皿	A-5 Pit36	VI	10.8		3.5	灰釉, 内外: ヘラ削り, 外: 底部露胎, 貫入, 施釉	唐津	
122	施釉陶器皿	A-5 Pit36	VI	10.8	5.0	3.4	内外: 長石釉がかかる, 底部: 露胎, 焼成ぶつう, 貫入あり, 不純物あり	唐津	
123	施釉陶器皿	B-5	VI	10.4	4.4	3.4	灰釉, 外: 高台露胎, 一部釉剥離	唐津	
124	施釉陶器皿	A-5 Pit34	VI	11.5	6.5	3.8	灰釉, 外: 底部露胎, 内: 底面胎土目, 反転復元 (上半分)	唐津	
125	施釉陶器碗	A-5	VI	11.2	4.4	3.7	灰釉, 口縁部に鉄釉, 外: 底部露胎, 一部欠損	唐津	
126	施釉陶器鉢鉢	A-3	VI				鉄釉, 外: 底部露胎	唐津	
127	施釉陶器皿	A-3	VI	12.0	3.9	3.9	灰釉, 口縁部に鉄釉, 外: 底部露胎, 内: 底面胎土目 (4箇所)	唐津	
128	施釉陶器皿	A-5 Pit35	VI	11.2	5.0	3.6	灰釉, 外: 底部露胎, 内: 胎土目	唐津	
129	施釉陶器皿	A-3 Pit31	VI	12.0	4.2	4.4	灰釉, 外: 底部露胎, 内: 底面胎土目 (4箇所)	唐津	
130	施釉陶器皿	B-6 Pit1	VI	13.6	4.6	4.2	灰釉, 外: 底部露胎, 内: 底面砂目 (3箇所)	唐津	
131	施釉陶器皿底部	B-6 Pit6	VI		6.2		灰釉, 外: 底部露胎, 高台部胎土目, 内: 底面胎土目	唐津	
132	施釉陶器底部	B-5 Pit7	VI		12.0		灰釉, 外: 底部露胎, 内: 鉄絵	絵唐津	
133	染付碗	B-5	VI				外: 「福」字	肥前	
134	施釉陶器鉢片	B-5	VI				灰釉	唐津	
135	施釉陶器鉢片	A-3	VI				鉄釉		
136	施釉陶器小皿	B-6 Pit2	VI	6.4	3.1	1.9	外: 回転コナデ, 鉄釉, 底部: 糸切り	瀬戸美濃系大窯製品	
137	施釉陶器鉢	A-5	VI	20.7	11.6	5.8	鉄釉		
138	施釉陶器碗	A-3 SK6	VI	16.6	5.6	7.8	灰釉, 鉄釉, 外: 底部露胎	絵唐津	
139	青花碗片	A-3	VI				直口口縁, 外: 草花文	森碗H類	
140	青花碗	B-6	VI		7.2		見込み圏線内 (1本): 山水と鳥	森碗I類	
141	青花碗底部	A-5	VI		7.6		外: 高台露胎露胎, 高台内に砂付着, 内: 草花文		
142	青花碗片	A-4	VI		6.2		外: 圏線2本輪状, 底面: 露胎, 高台内: 圏線2本 (外底面), 内: 見込みに蓮花文	森碗I類 (底部)	
143	青花碗片	A-5	VI		4.0		外: 高台露胎に渦巻きの連続文, 内: 見込みに一重圏線, 草花文		
144	青花碗底部	B-5	VI		4.2		外: 高台露胎に渦巻きの連続文, 内: 見込みに花・果実		
145	青花碗底部	B-5	VI		4.6		外: 高台露胎露胎, 高台内圏線が1本, 内: 見込みに「大明成化年製」		
146	青花碗	B-7	VI	11.9	4.5	7.8	外: 側面型押し成形, 具須の発色鮮明, 宝文, 底部: 高台露胎, 内: 芙蓉手, 約1/4が欠存	森I2類	
147	呉彩碗底部片	B-5 Pit18 B-5 Pit19	VI		4.0		外: 圏線1本輪状 (側面), 圏線2本輪状 (底部), 具須に抽出, 底面: 露胎, 内: 見込みに圏線2本・草花文, 内底面砂目		
148	青花碗	B-5	VI		4.4		外: 高台露胎に二重圏線, 体部下圏線1本, 丸文, 内: 見込みに二重圏線・丸文	小野碗C群	
149	青花小杯	A-3	VI		3.8		外: 輪を磨って露胎と差弁文を表す, 底部: 露胎, 高台内: 「大明成化年製」銘 (青花)		
150	青花皿底部	B-4	VI		7.2		外: 圏線, 内: 見込みに圏線・草花		
151	青花皿	A-4	VI		7.8		外: 宝文, 器壁薄い, 底部: 露胎に砂付着, 露胎, 内: 芙蓉		
152	五彩皿片	B-5 Pit5	VI				外: 宝文, 皿のツバ部分: 2本の圏線内に具須で宝文, その外側を上絵付		
153	青花皿底部	B-6	VI		7.6		外: 高台露胎露胎, 高台内圏線が2本		
154	青花鉢底部	B-4	VI		7.6		外: 高台内露胎・カンナ目, 内: 草花		
155	青花皿底部	A-3 Pit7	VI				外: 高台露胎露胎, 内: 見込みに二重圏線内に草花		
156	五彩碗底部	B-4	VI		7.5		外: 圏線, 底面: 露胎, 高台内カンナ目, 内: 見込みに圏線 (具須)・花 (赤彩), 上絵の輪はほとんど剥落		
157	青花皿	A-5	VI	15.4			外: 口縁下に圏線1本, 内: ツバ部分に果樹文		
158	青花碗底部	A-5	VI		4.6		外: 唐草文, 底部: 露胎・砂付着, 内: 中央部肥厚, 削りによる後, 見込みに圏線内草花	森碗F1類	
159	青花碗底部	A-3 Pit6	VI				外: 高台露胎, 内: 中央部肥厚, 削りによる後, 見込みに圏線内草花	森碗F3類	
160	青花碗	A-3 Pit2	VI	11.2	4.3	5.6	外: 高台露胎に圏線 (1本), 内: 見込みに草花文, 内外面: やや粗い貫入, 露胎部分高台・内面に砂付着, 鉄釉	森碗H類	
161	青花碗	B-4	VI	12.0			外: 唐草文, 高台部欠損		
162	青花碗	B-5	VI	13.8	5.6	7.1	外: 高台露胎露胎, 口縁下に草花文, 体部下に唐草文帯, 高台部二重圏線, 内: 退化した草花	森碗J2類	
163	青花碗	B-21	VI	10.4	4.8	2.9	外: 高台露胎露胎, 内: 底面蛇ノ目軸剥き	森碗J2類	
164	青花皿底部片	B-4	VI				外: 高台露胎露胎, 内: 見込みに草文, 全体に貫入		
165	青花皿片	B-4	VI				体部下に: 砂付着, 内: 見込みに圏線 (2本), 見込み部分との境が段になる, 大きめの貫入		
166	青花大皿	B-5 Pit5	VI		18.4		外: 圏線2本輪状 (側面), 内: 見込みに圏線の中に花・鳥・雲, 別露胎・赤 (藍色)・黒 (藍色)・青 (藍色)・赤 (藍色)の附着, 鉄釉や砂付着		
167	青花皿	B-7	VI		16.6		外: 圏線3本輪状 (底部), 底面: 高台露胎に砂付着, 別露胎・一重圏線, 内: 見込みに草花文, 内外面: 貫入, 具須, 具須付着		
168	青花鉢	B-7	VI		14.0		外: 圏線2本輪状 (底部), 底面: 高台露胎露胎に砂付着, 内: 見込みに圏線2本・草花文, 内外面: 貫入・ビョウロ, 鉄釉, 具須付着		
169	緑釉合子	B-6 Pit3	VI	5.6	4.6	3.1	外: 型押し成形		
170	緑釉瓶	A-5	VI		6.1		外: 釉の剥落, 一部劣化, 底部: 露胎, 削り底, 緑釉が一部付着, 堅緻に焼成		
171	白磁碗	A-5 Pit26	VI			7.0	外: 高台露胎露胎, 内外器表面に細かい貫入	李朝	
172	白磁皿	B-4	VI	15.4	6.0	3.3	外: 5回のヘラ削り整形, 底面: 露胎・砂付着, 内: 11箇所の砂目痕 (内底面), 紫いヘラ削りによる段 (側面)	李朝	
173	施釉陶器皿	B-6 Pit4	VI	16.2	6.4	3.8	灰釉, 内: 底面に砂目, 反転復元	李朝	
174a	白磁皿	A-5	VI				内: 体部下に段, 内外器表面に貫入	李朝	
174b	白磁皿	A-3 Pit11	VI		6.6		外: 高台露胎露胎, 内外器表面に貫入	李朝	

第5表 VI層出土遺物②

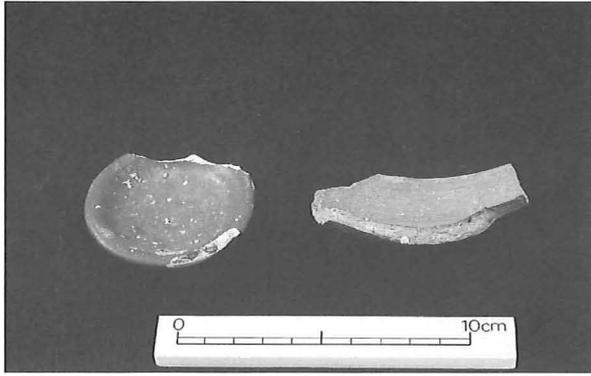


写真18 136・135



写真19 同裏

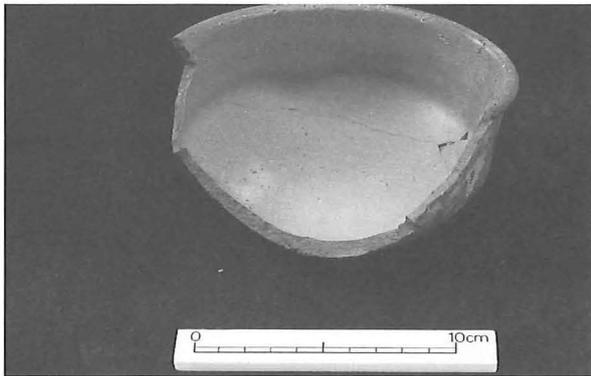


写真20 138



写真21 同裏

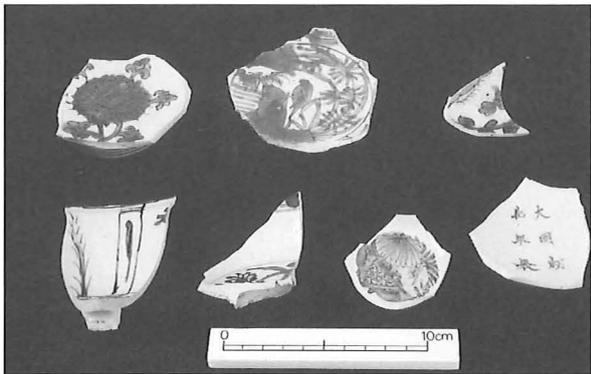


写真22 VI層出土青花(1)

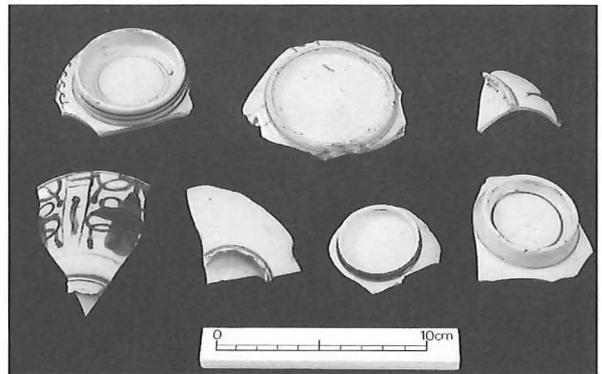


写真23 同裏

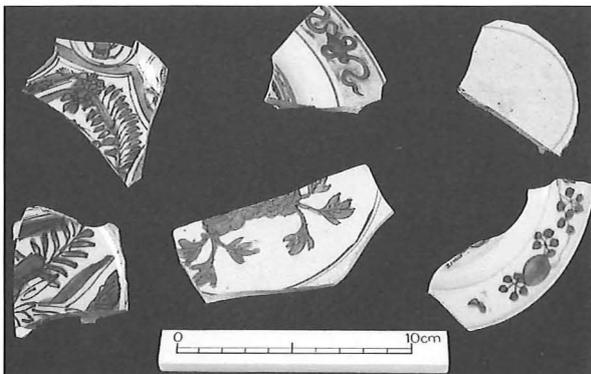


写真24 VI層出土青花(2)

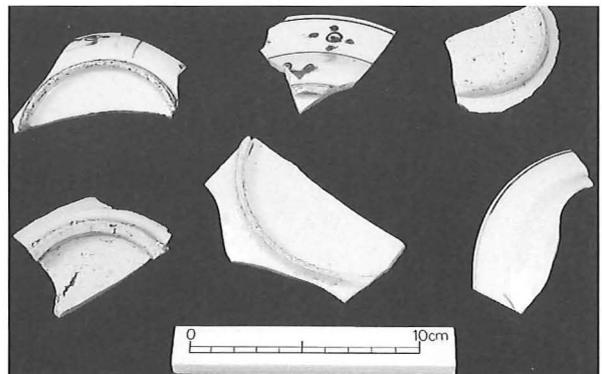


写真25 同裏

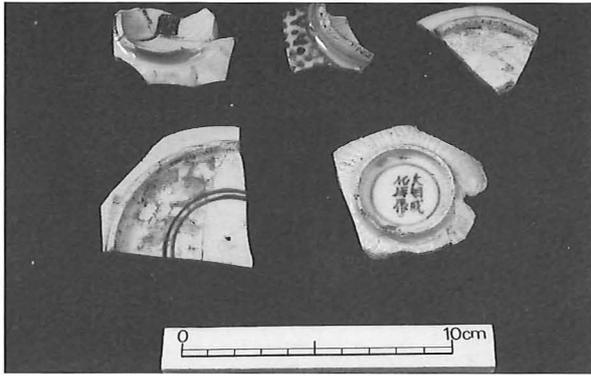


写真26 VI層出土青花(3)

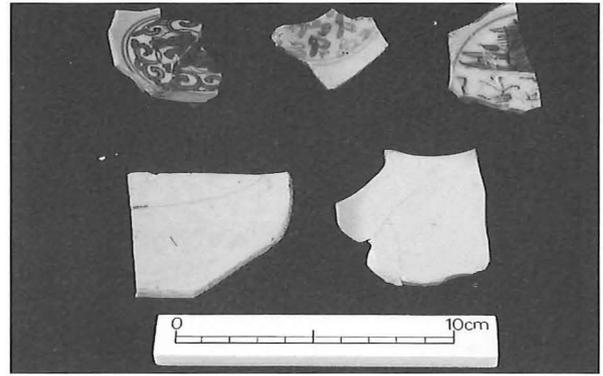


写真27 同裏

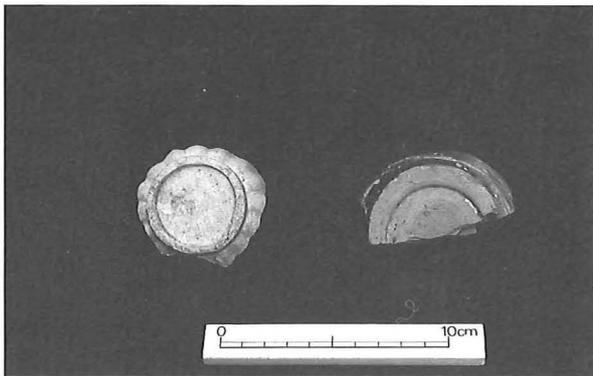


写真28 169・170



写真29 同裏

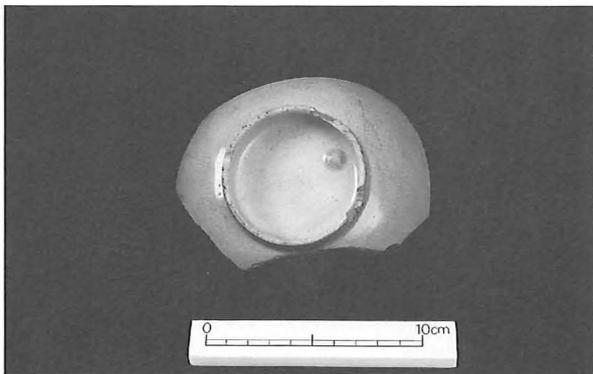


写真30 171

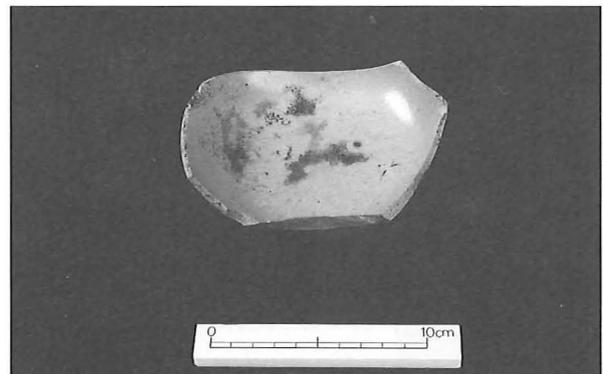


写真31 同裏



写真32 VI層出土李朝白磁



写真33 同裏



写真34 上面遺構 1

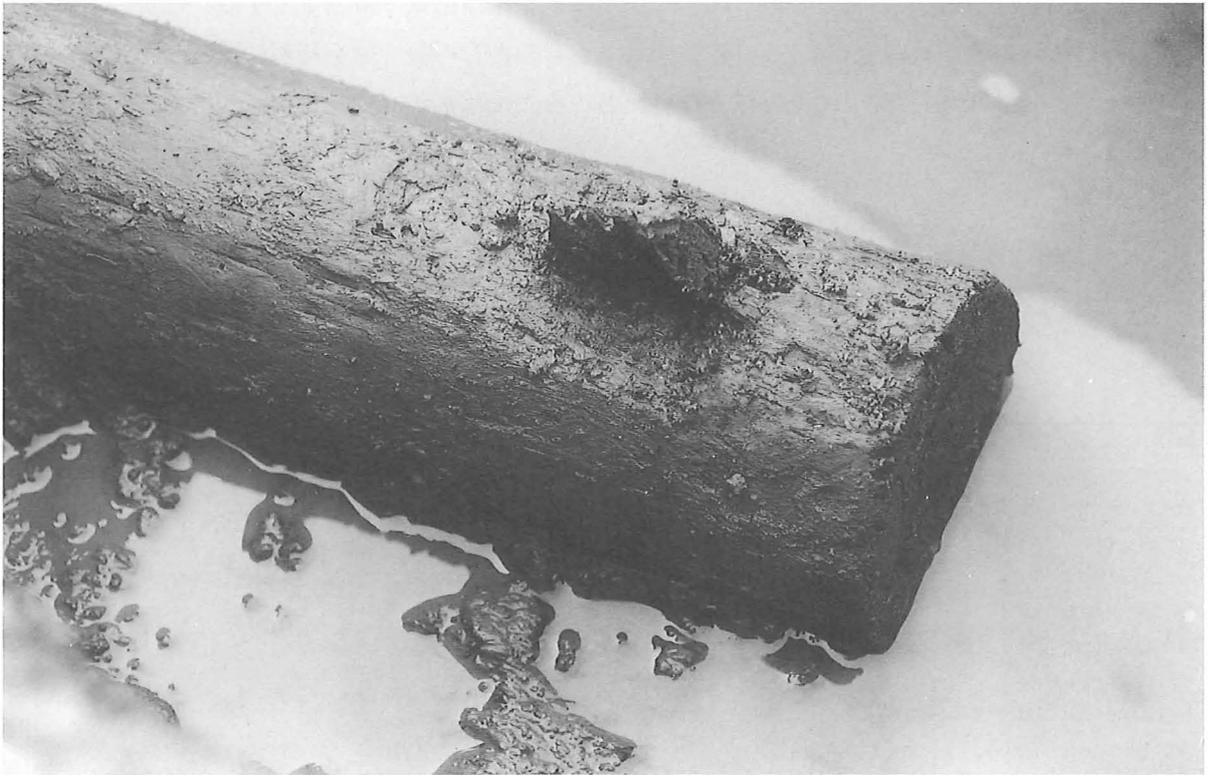


写真35 上面遺構 2

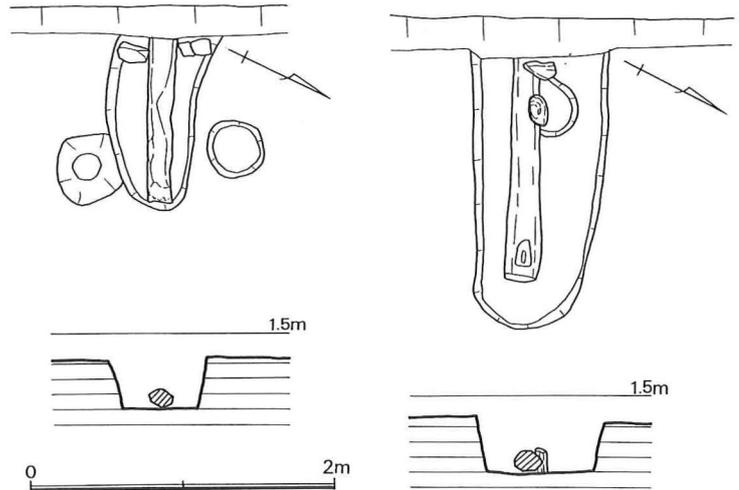
(3) I区上層の遺構と遺物

・上層の遺構 (第19図)

第19図は第Ⅳ層上面掘り込みの遺構である。第Ⅶ層上面の柱穴と違い、溝状の穴にほぞ穴を切った柱を横に寝かせている。第Ⅶ層上面の柱穴同様、沈下を防ぐためのものであろう。

・Ⅲ層出土の遺物 (第20図)

175~183は、3~7区の第Ⅲ層から出土した遺物である。第Ⅲ層は近代の攪乱層であるが、近世の遺物も混入している。ここでは、比較的古期の特徴のある資料を図化した。75は高台内に



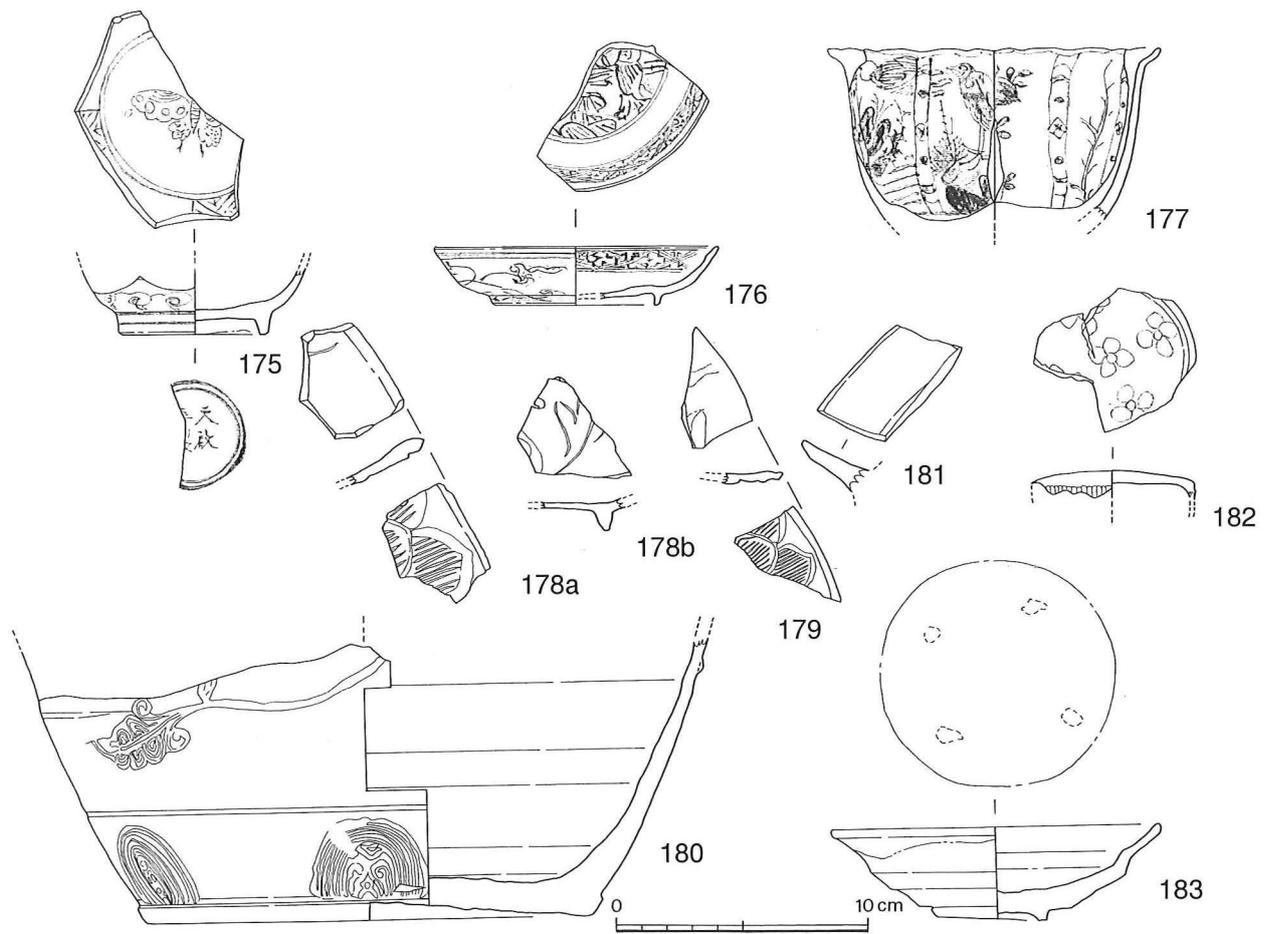
第19図 上面の遺構

「天啓年製」銘のある色絵碗あるいは鉢である。呉須で圏線を描き赤、黄、緑で外面に唐草、内面見込みにトンボを描く。176は小野分類 (1982) 皿E群, 177は型押し芙蓉手の鉢である。178 a・bと179は華南三彩の皿で、緑釉を基調として内面の一部に薄紫と黄色の釉がかかる。外面には型押しによる蓮弁、内面には線刻で文様が施される。180は、いわゆるトラデスカント壺⁽¹⁾で、上半を欠く。緑が基調で蓮弁と唐草は黄色である。胎土は黄茶褐色で軟質であり、内面にはやや厚く鉄がかけられている。181は赤茶褐色の錫釉をかけた鏝状の陶器で、胎土は軟質で橙色を呈する。近世のものであれば西洋のものである可能性がある。182は、華南三彩の香合の蓋で緑を基調に黒と白で花びら状の文様を描く。183は唐津の皿で胎土目積みの痕がのこる。大橋編年 (1992) のI期に相当するものである。

(1) アシュモレアン美術館所蔵の壺にちなむ同種の華南三彩壺で、貼り付けにより花と唐草を施す。また肩部には丸い把手がつく。

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
175	呉彩碗	B-5 Pit6	Ⅵ		5.6		外: 濃赤く草花の連枝文を土掛付。底縁: 黒掛露胎。高台内: わな目。2本の圏線内に「天啓年製」青花銘。内: 黒掛露胎(体部)、黒(見込み)		
176	青花皿	B-6	Ⅲ	11.0	6.2	2.3	外: 高台登付露胎, 体部花唐草, 内: 四方禪, 見込み二重圏線内に草花	小野皿E群	
177	青花碗	A-5	Ⅲ	13.0			外: 鳥・岩・草文, 呉須の発色やや鮮明, 体部下位~高台部欠損, 内: 芙蓉手, 端反	森12類	
178a	緑釉陶器皿片	B-6	Ⅲ				外: 型押し成形による蓮弁を貼り付け, 釉に光沢がある, 内: 線刻部分に紫釉	華南	
178b	緑釉陶器皿底部片	B-6	Ⅲ				内: 線刻による草文, 部分的に黄釉	華南	
179	緑釉陶器皿片	B-3	Ⅲ				外: 型押し成形による蓮弁, 内: 線刻による文様(草花か)	華南	
180	三彩貼花文壺底部	B-6	Ⅲ		17.4		底部: 露胎, 中央部不調整, 外周部回転削り痕, 中央に向かい反り返り, 腰部: 型抜き半円形蓮弁, 緑・黄釉, 体部中位: 型抜きと粘土紐で唐草文, 内: 鉄釉, 色調: 10YR8/4	華南	
181	陶器片	B-7	Ⅲ				釉色: 橙色	産地不明	
182	五彩合子蓋片	B-3	Ⅲ				外: 緑釉地に花文(釉剥離)	華南	
183	施釉陶器皿	B-6	Ⅲ	12.8	4.2	3.6	灰釉, 外: 底部露胎, 内: 底面胎土目(4箇所)	唐津	

第6表 Ⅲ層出土遺物



第20图 III層出土遺物 (S=1/3)

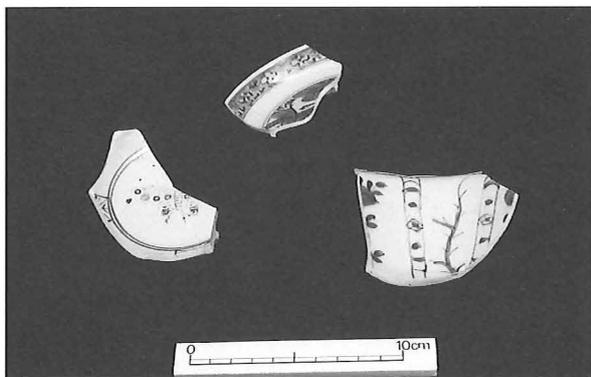


写真36 175・176・177

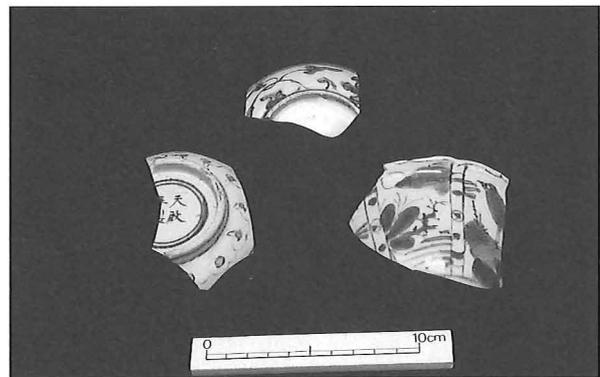


写真37 同裏

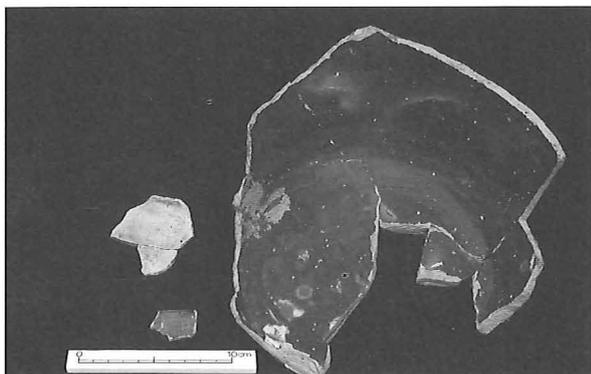


写真38 182・178・180



写真39 同裏

(4) II区の遺構

池

池は8～11区にまたがっており、旧来の庭園の一部と考えられていた。調査は池内の土の掘り下げと石垣の断面トレンチおよび実測を行った。

池内の土からは近世から近代の遺物が出土した。とくに11～12区にかけては木簡などの木製品が出土している。10～11区の島はもともと舌状に伸びた岩盤を利用したものと考えられ、南側は岩盤が深く傾斜しており、岩盤の上に堆積した砂層から縄文土器が多数出土し、貯蔵穴も確認されている。この南側の傾斜は13～15区においても続いており、14区で地表下3 mでも岩盤が確認できず、深く潜行していることが判明した。築城以前は付近に深い湾入があったことが推測される。

石垣は何か所かのトレンチ調査の結果、調査区のほとんどにおいて近代に積み直しが行われていることが判明した。とくに現国道の工事の際に道路に合わせて池の形を改変した様子が看取され、裏込めからビニールが出土することからも積み直しが確認された。それ以外の石垣についても裏込めから近代の遺物が出土しており公園化の際に積み直しがなされた可能性が高い。



写真40 池近景（南から）



第21图 池突测图 (S=1/200)

・石垣（第23図）

12～13区で確認されたL字形の石垣で、築城時の整地層に掘り込んでつくられている。上部は破却されており推定される高さは約1mで、3段ほど石を積んでいる。埋土の土層から、構築後の自然堆積の後に建築部材を含む水性堆積がみられることから、嵐などの事情で放置されたことがうかがえる。その後、黄褐色風化礫の整地層により完全に埋められている。この整地層より下から、胎土目の唐津が出土しており、築城から1610年代まで機能していたことがわかる。

・石塀（第25図）

16～17区に現存する石塀である。上部は近年の復元である。下部の石塀は通りに面した側は切り石積みであるが、裏は雑な積み石である。後世の積み直しの可能性もある。

（5）石垣内出土遺物（第24図）

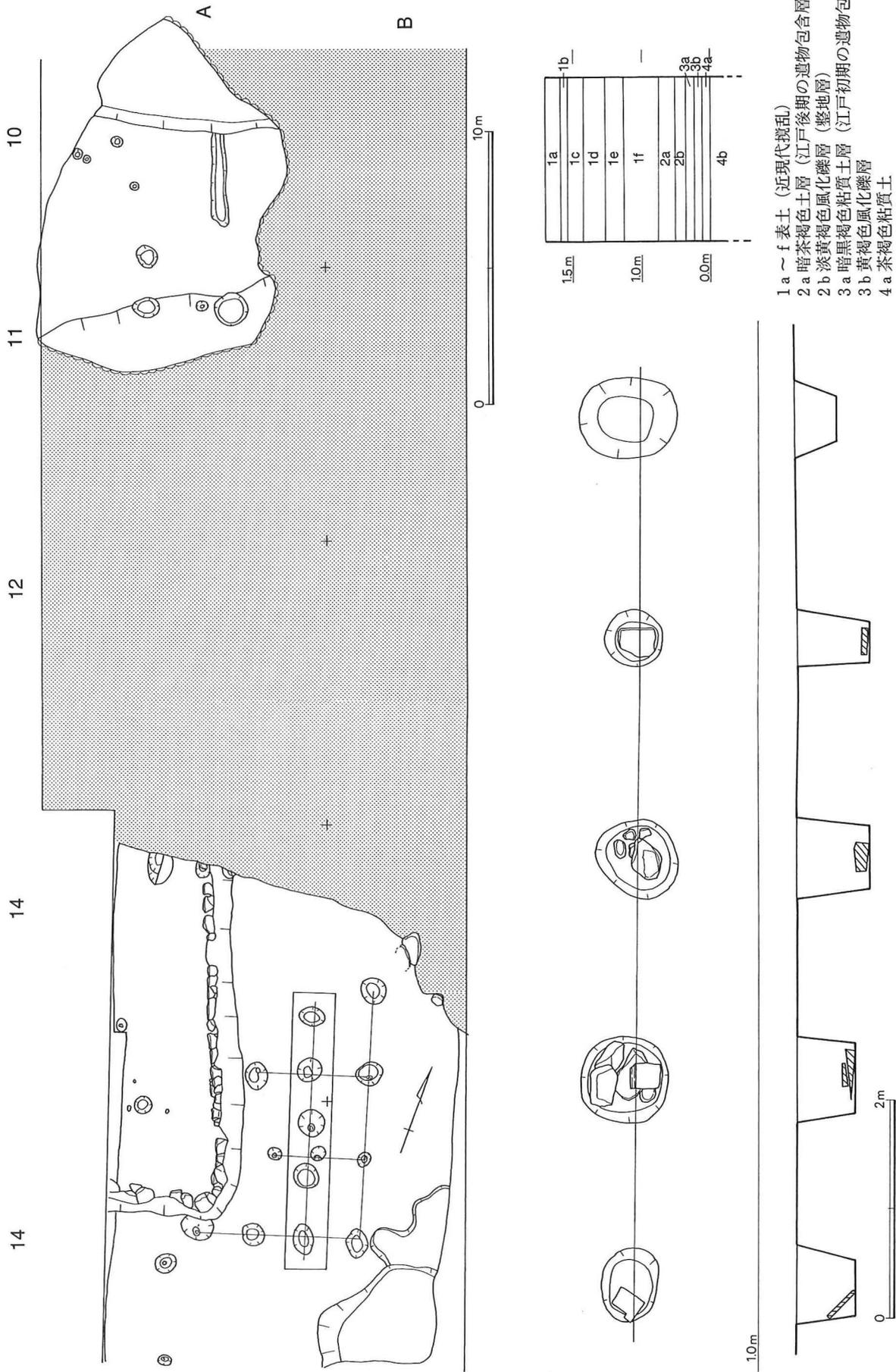
184～187および308は石垣内の下層から出土した遺物である。184・185は胎土目積みの絵唐津皿で葎の本窯の製品に類例がみられる。186は端反の鉢で高台が無釉となっている。187は漳州窯系の大皿で見込みに鳳凰のような鳥を描く。308は金属製のくびれのある輪状製品で取り付け具がつく。以



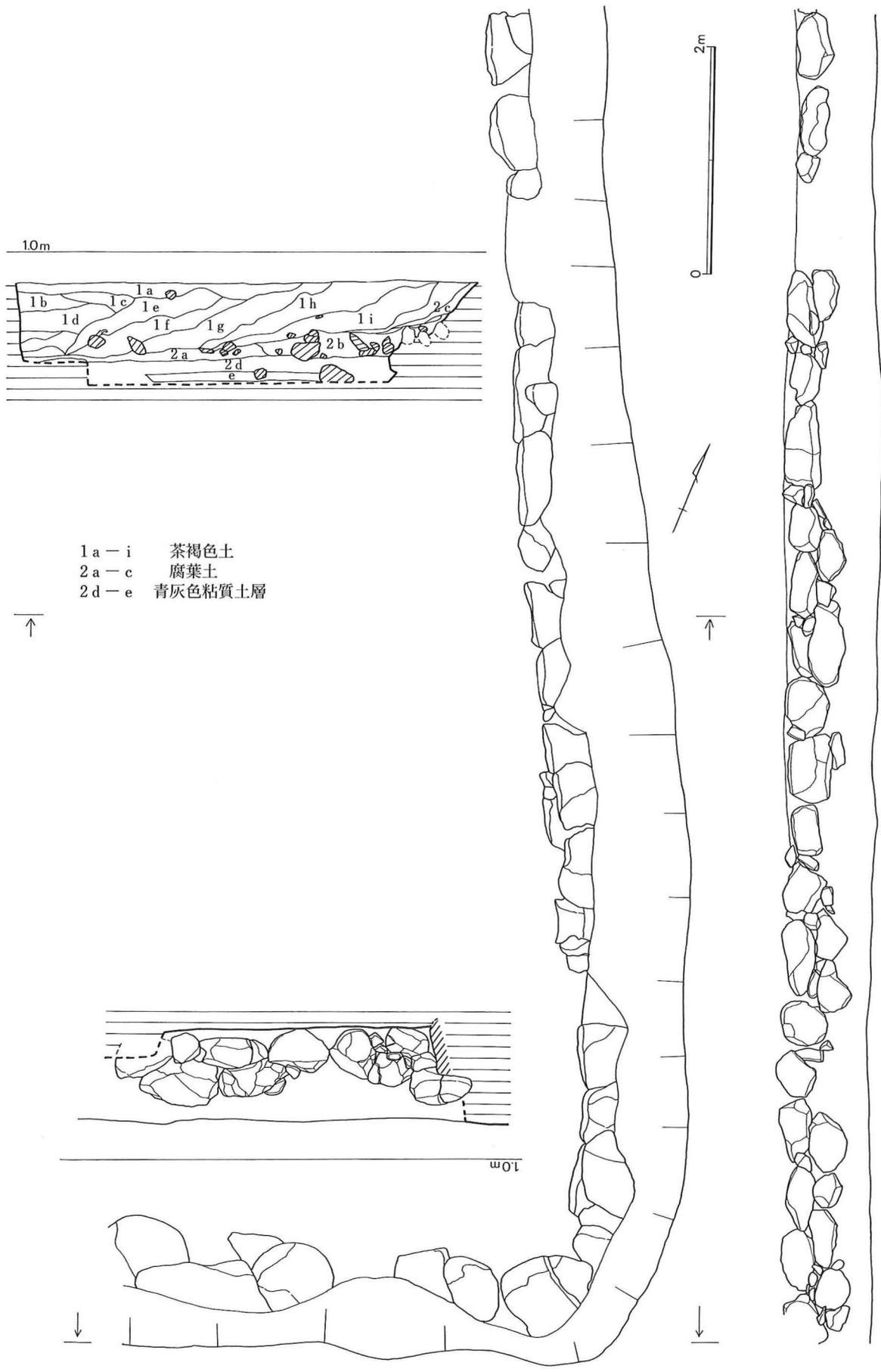
写真41 石垣内出土遺物

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
184	施釉陶器皿	13・14		11.3	4.2	3.0	灰釉，外：底部露胎，内：体部鉄絵，底面胎土目（4箇所）	絵唐津	
185	施釉陶器皿	A-13	落込下	11.4	3.9	3.0	灰釉，外：底部露胎，ヘラ削り痕，内：わずかにヘラ削り痕，底面胎土目（3箇所），焼成ぶつう，色調：白灰茶褐色	絵唐津	
186	施釉陶器鉢	A-14	埴こみ下		10.8		灰釉，外：底部露胎		
187	青花皿	A-13	埴こみ下	40.0	18.6	9.8	外：高台登付砂付着，草花文と圏線，内：体部果樹文，見込み二重圏線内鳳凰と草花	小野F群粗製	

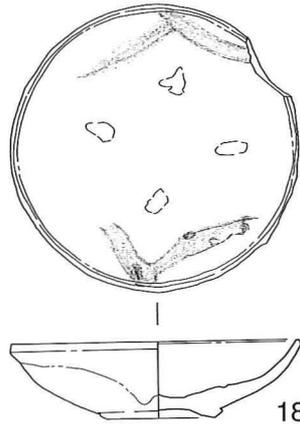
第7表 石垣出土遺物



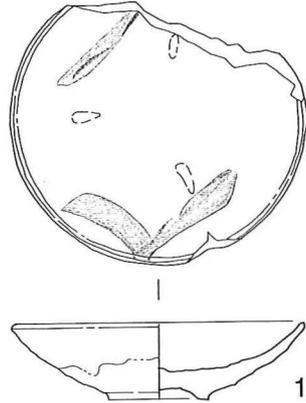
第22図 10~14区遺構・基本土層図



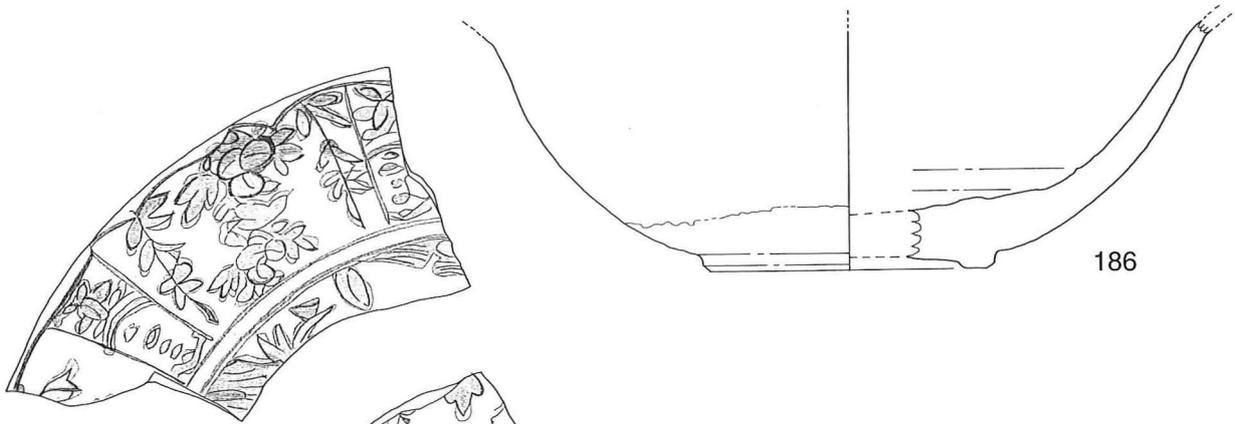
第23圖 石垣土層断面 (S=1/50)



184



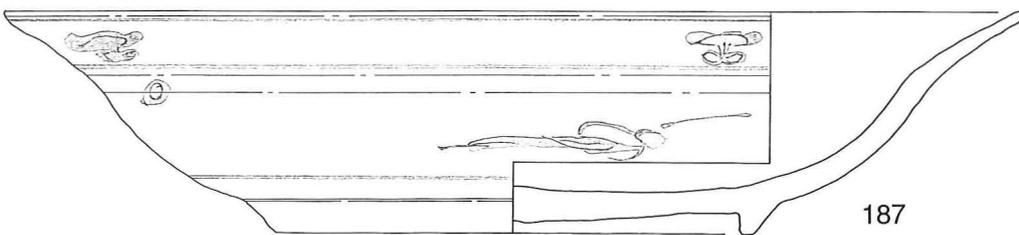
185



186

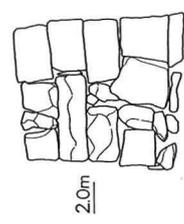
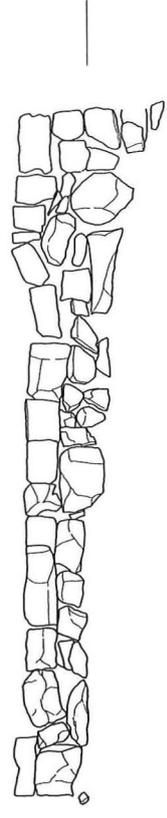
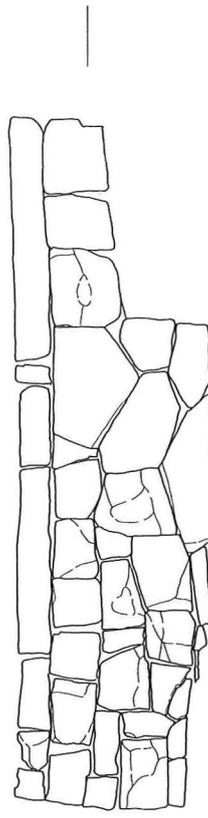
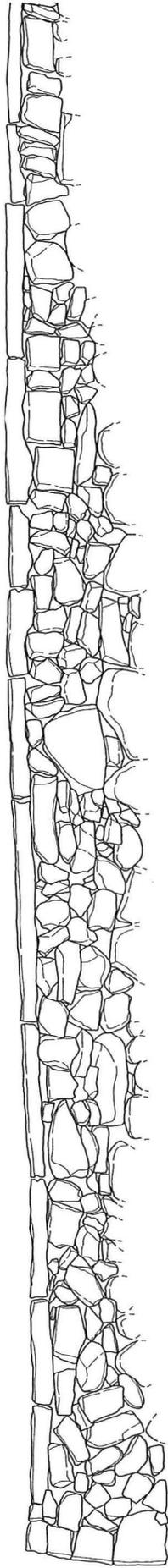
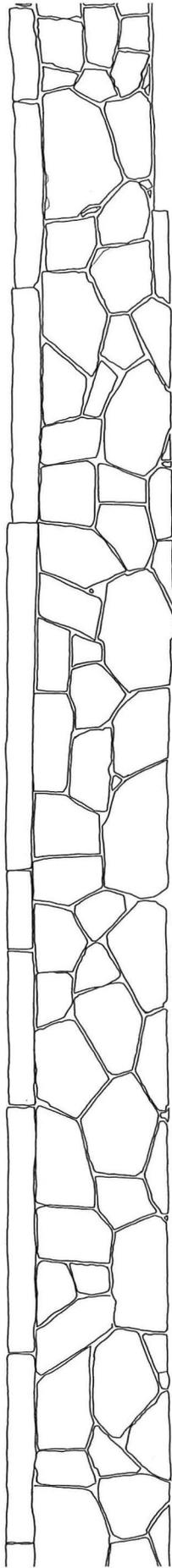


0 10 cm



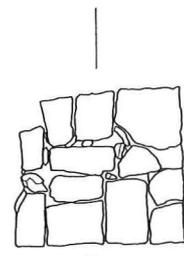
187

第24図 石垣内出土遺物 (S=1/3)



2.0m

2.0m



2.0m



第25图 16·17区 石堀 (S=1/50)



写真42 石垣前面土層断面



写真43 石堀

上の遺物は、大橋編年(1992)による唐津の年代から17世紀初頭ころと考えられる。石垣を埋めた年代が文献に記す慶長十九年(1614)とすれば、築城からの15年間の資料と考えられる。

(6) IV区の遺構・遺物

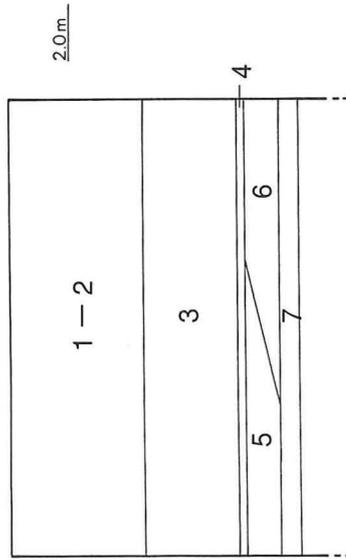
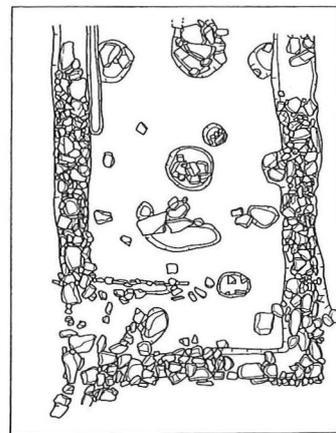
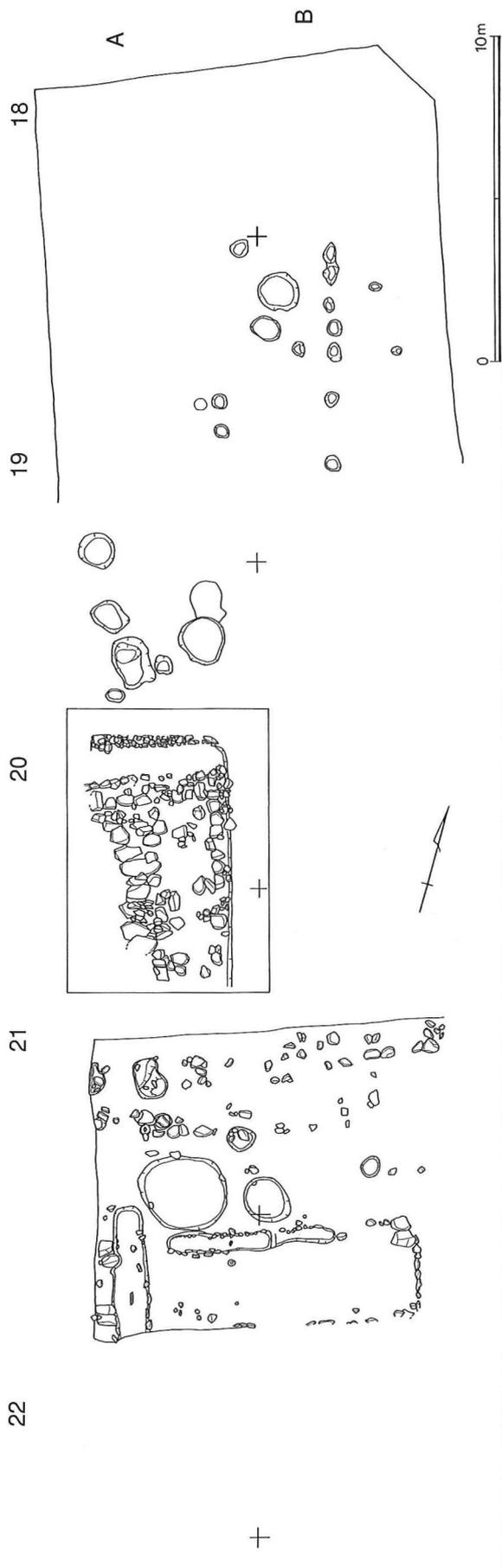
18～23区においては、江戸時代初期の遺物包含層および江戸時代後期の遺構が確認された。江戸時代初期の遺物はI～III区の遺構に対応するものである。江戸時代後期の遺構は、建物跡で石基礎と考えられる。

18～23区の遺物(第26図)

188～206は第VI層から出土した遺物である。188～195は華南三彩である。皿、盤、壺などがある。196は景德鎮系の小杯。197は志野碗の小片である。198はベトナムの長胴壺で、玖島城では珍しい東南アジア系の遺物である。199・205・206は唐津で大橋編年(1992)のI期に相当する。200～204は土師皿である。200・201は糸切り痕がのこる。202～204は底部をへらで丁寧なケズリ、見込み外周に沈線が巡る。底部が黒灰色を呈し、体部から口縁部は黄白色で胎土は精良である。諫早の沖城、島原の森岳城に類例がある。第VI層の遺物は他地区のVI層同様、唐津の年代などから17世紀初頭頃のものと考えられる。

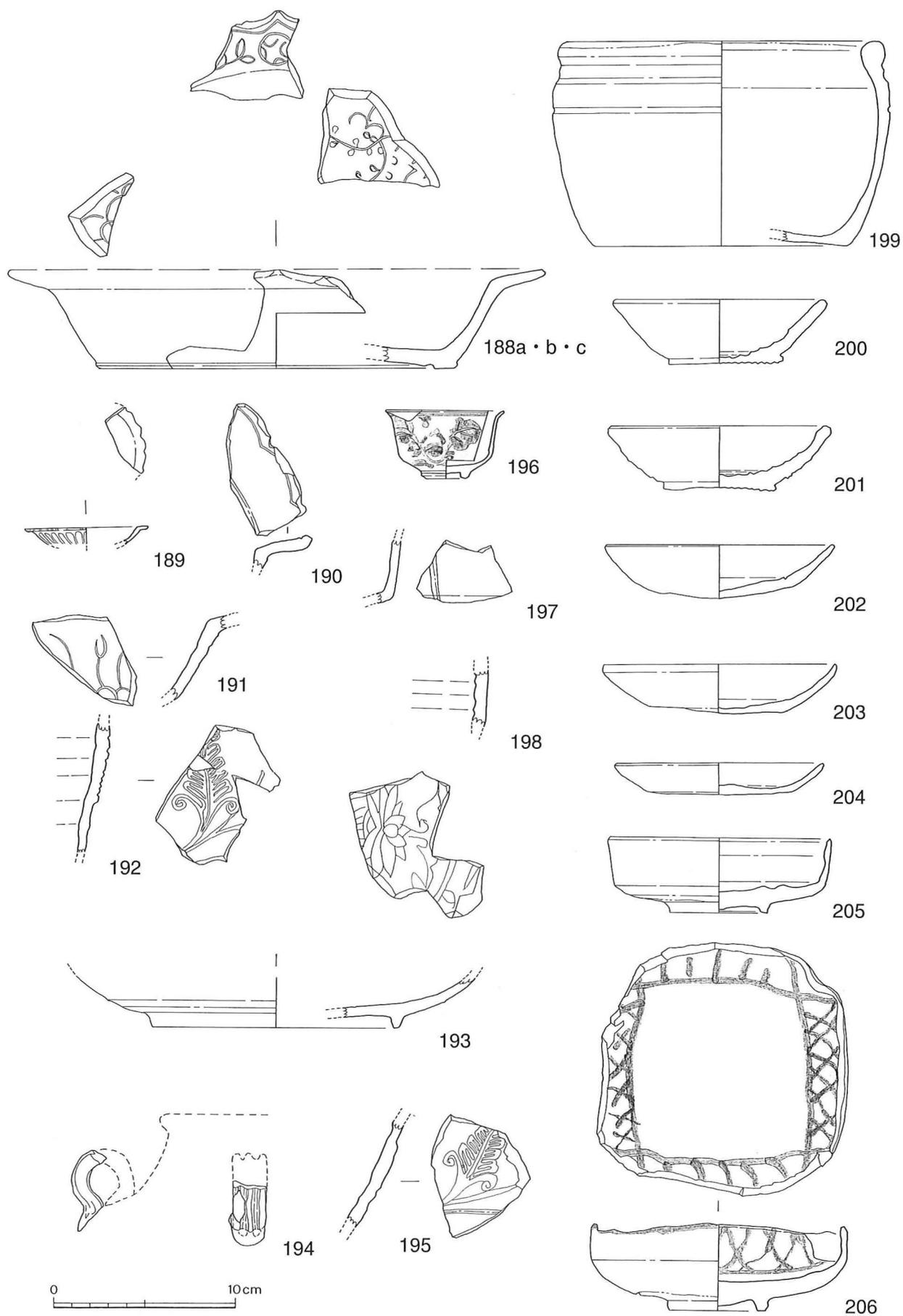


写真44 21区遺構検出状況



- 1~2 近代擾乱
- 3 暗赤褐色粘質土 (炭化物有り)
- 4 黄褐色混礫土 (江戸後期の整地層)
- 5 暗茶褐色土 (炭化物有り, 17C初頭の層)
- 6 暗黄褐色混礫土 (江戸初期の整地層)
- 7 暗灰色粘質土

第26図 18~23区 遺構配置図・基本土層図



第27图 18~23区 VI層出土遺物 (S=1/3)



写真45 206・199



写真46 188~195



写真47 202・203・204

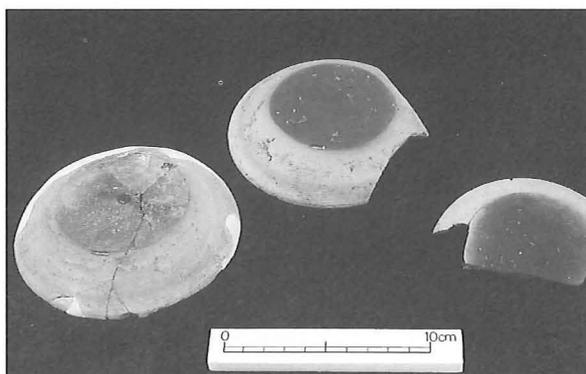


写真48 同 裏

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
188abc	華南三彩印花文盤	A-21	Ⅵ	28.4	19.0	5.3	外:無文, 緑釉, 口縁部に七宝, 見込みに水草を印花, 底部:緑釉, 高台置付:黄釉, 内外の器表面に細い貫入	華南	
189	菊花形小皿	A-21	Ⅲ	6.6			外:形押成形による菊文, 鮮明な半透明釉, 鋸状の口折口縁, 内外面:細かな貫入,		
190	三彩盤片	川北	Ⅵ				焼成やや不良, 胎土の色調:2.5Y8/3	華南	
191	三彩盤片	A・B-23	Ⅵ				内:印刻による水草, 胎土の色調:7.5YR6/6	華南	
192	三彩陶器壺片	B-20	Ⅲ				貼花部分	華南	
193	緑釉刻花皿	B-20	Ⅲ		13.6		外:緑釉が深く発色, 透明釉は光沢あり, 内:緑釉濃いめに発色, 内外面:細かな貫入, 2本の圓線内見込みに蓮花文様	華南	
194	三彩壺耳片	A-20	瓦だまり					華南	
195	三彩陶器壺片	A-20	瓦だまり				葉と唐草と貼り付けた部分が残りに, 緑・黄の二色釉, 壺の体部下位部分	華南	
196	青花小杯	A-21	Ⅲ	6.4	2.2	3.7	底部:露胎, 反転復元, 外:野菜文	華南	
197	施釉陶器片	川北	Ⅵ				内外:白濁釉		
198	陶器片	A-21	Ⅵ				内:成形痕	ベトナム	
199	施釉陶器鉢	川北	Ⅵ	16.8	13.6	11.1	口縁部露胎, 色調:5Y4/4(灰釉, 釉色), 5YR5/2(胎土)		
200	土師質皿	川北	Ⅵ	11.6	6.0	3.4	外:回転ヨコナデ, 底部:糸切り, 内:ヘラ削り, 反転復元(上半分)		
201	土師質皿	川北	Ⅵ	6.0	6.0	3.3	外:回転ヨコナデ, ヘラ削り, 底部:糸切り, 内:ヘラ削り, 反転復元		
202	土師質皿	川北	Ⅵ	12.4	7.3	2.9	外:回転ヨコナデ		
203	土師質皿	川北	Ⅵ	12.4	7.3	2.6	底縁:ヘラ削り露胎, 内外面露胎, 内外面露胎:丁寧なヨコナデ, 内:見込みに流線が一条, 焼成やや良好, 色調:10YR8/2.5S(外底縁・内面見込み)		
204	土師質皿	川北石列1		11.0	7.6	1.6	底縁:切り離し縁丁寧なナデ(不定), 内底縁:丁寧なナデ(不定), 見込みに目線ナデ, 焼成良好, 色調:10YR8/2(胴部), 7.5Y4/1(内外面露胎)		
205	施釉陶器皿	A・B-23 SK9		12.0	9.3	4.0	灰釉, 外:底部露胎	唐津	
206	施釉陶器皿	川北	Ⅵ	13.4	5.2	4.6	灰釉, 内:鉄絵, 反転復元(上半分)	絵唐津	

第8表 18~23区 Ⅵ層出土遺物

・20, 21区建物遺構

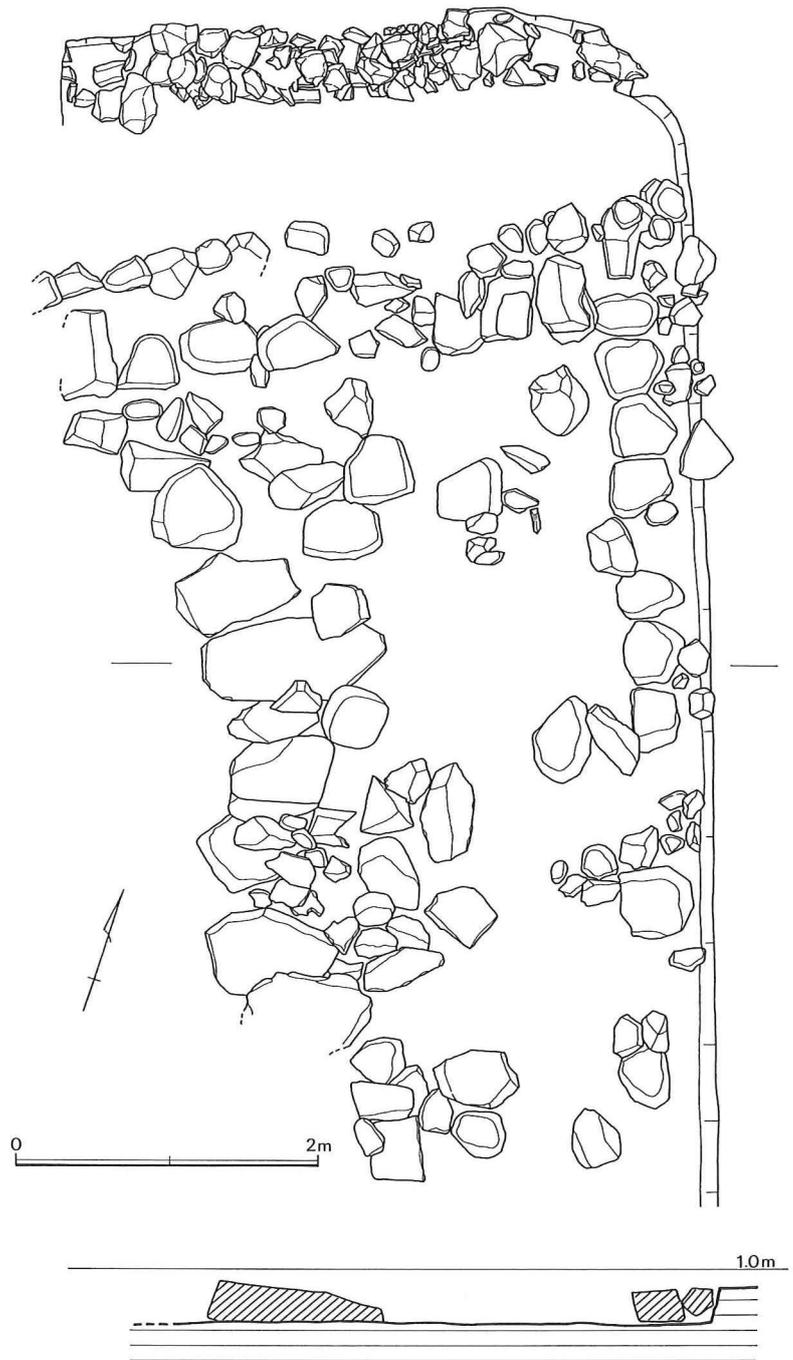
20区から21区にかけて建物の基礎と考えられる石組が確認された。拳大から50cm大の平たい石を使用しており、L字形に折れる。上部が削平されているので、何段程積まれていたのかは不明であるまた調査区外に逃げているので、全体のプランは不明である。断面から見ると溝状遺構の中に石を積む構造になっている。

遺構の年代であるが、この遺構を埋める出土遺物に長与三彩を含む広東碗がみられることから、大橋編年⁽¹⁾によるV期(1780年代~1860年代)に埋没したことが推測される。

この時期に想定される建物としては、普請役所などが考えられる⁽²⁾。また、それ以前には家臣の屋敷があったと推測される。もし、屋敷から役所への移行の際に取り壊しが行われたとすれば、この石基礎は屋敷時代のものと考えることができよう。

(1) 大橋康二1993『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社による。

(2) 大村市教育委員会編『玖島城跡』大村市文化財保護協会2000



第28図 20・21区 建物遺構実測図

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
207	染付碗	A-20	Ⅲ	9.6	3.8	5.2	外：体部一重網目文	肥前	
208	染付碗	A-20	瓦だまり	9.8	4.0	5.7	外：体部鋸歯状網目文，底部：畳付露胎，胎土：N8/	肥前	
209	染付碗	A-20	瓦だまり	9.6	3.7	5.2	外：体部二重網目文，高台部圏線	肥前	
210	染付碗	A-20	瓦だまり	10.1	4.3	5.2	外：体部雪輪草花文	肥前	
211	染付碗	A-20	瓦だまり	10.0	3.4	5.5	外：体部雪輪梅花文，圏線，底部：畳付露胎，砂溶着，胎土：7.5Y8/1	肥前	
212	染付碗	A-20	瓦だまり	10.2	4.0	5.3	外：体部雪輪草花文，高台部圏線	肥前	
213	染付碗	A-20	瓦だまり	9.5	4.0	5.2	体部：雪輪梅花文，回線，底部：畳付露胎，砂わずかに付着，胎土：N8/	肥前	
214	染付碗	A-20	瓦だまり	9.5	4.0	5.2	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花文，高台部圏線	肥前	
215	染付碗	A-20	瓦だまり	9.1	3.8	5.3	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花文，高台部圏線	肥前	
216	染付碗	A-20	瓦だまり	9.8	3.9	5.2	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花文，高台部圏線	肥前	
217	染付碗	A-20	瓦だまり	9.6	3.1	5.0	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花文，高台部圏線	肥前	
218	染付碗	A-20	瓦だまり	9.6	3.9	5.0	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花文，高台部圏線	肥前	
219	染付碗	A-20	瓦だまり	9.4	4.2	5.3	外：体部雪輪梅花文，圏線，底部：露胎，胎土：N8/	肥前	

第9表 20・21区 建物遺構出土遺物

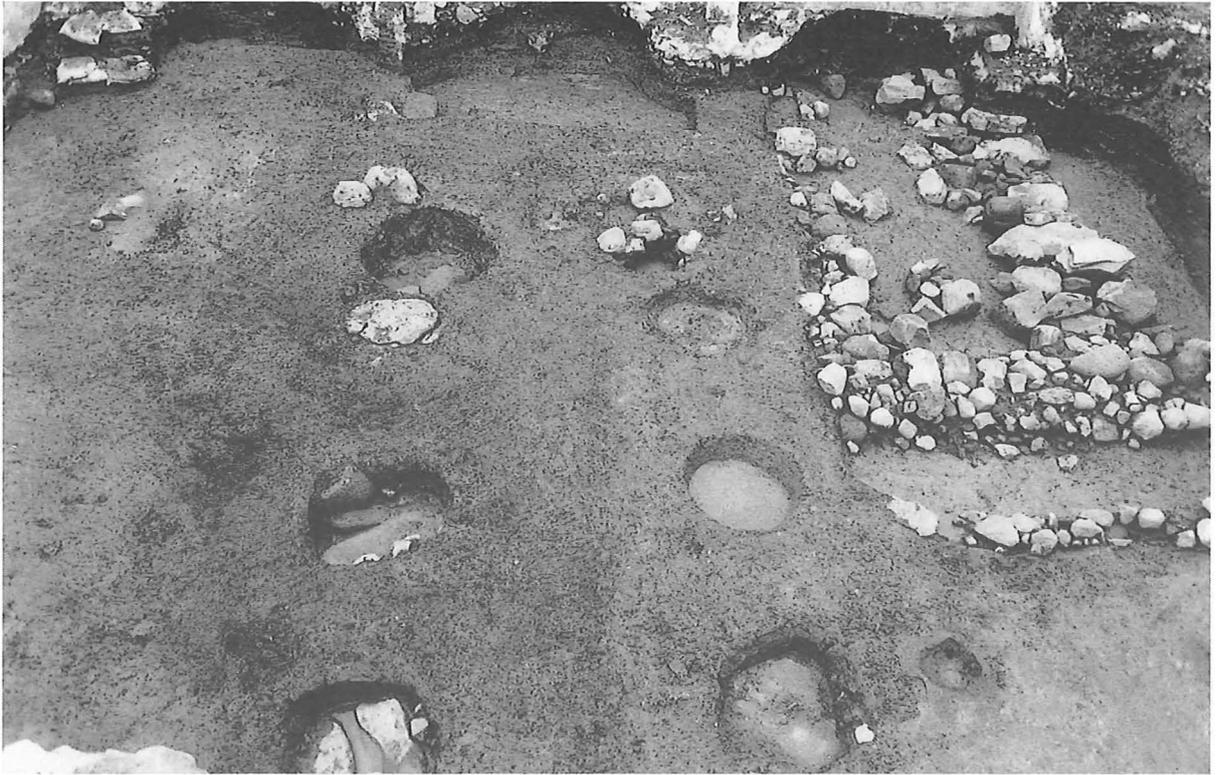
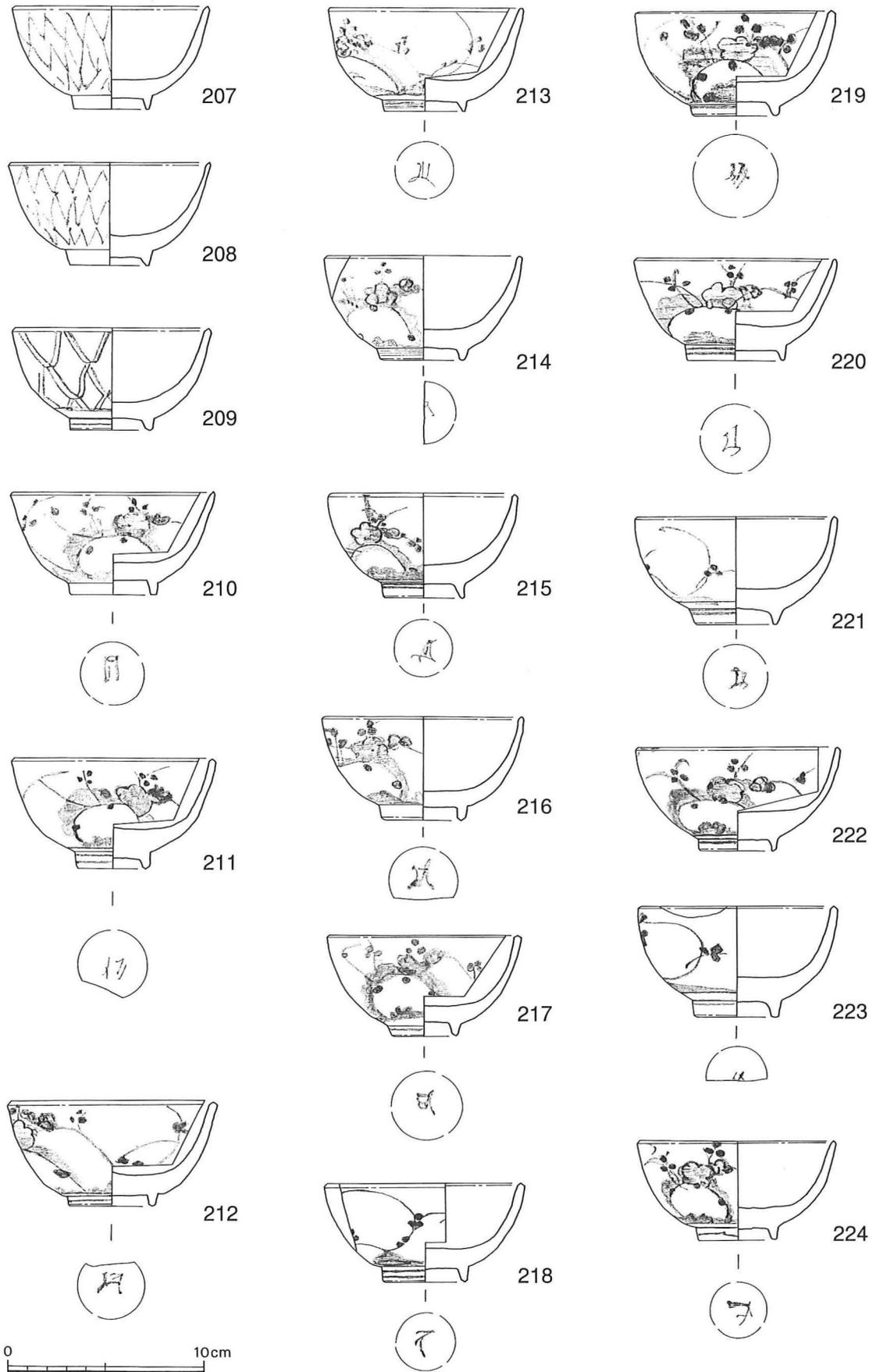


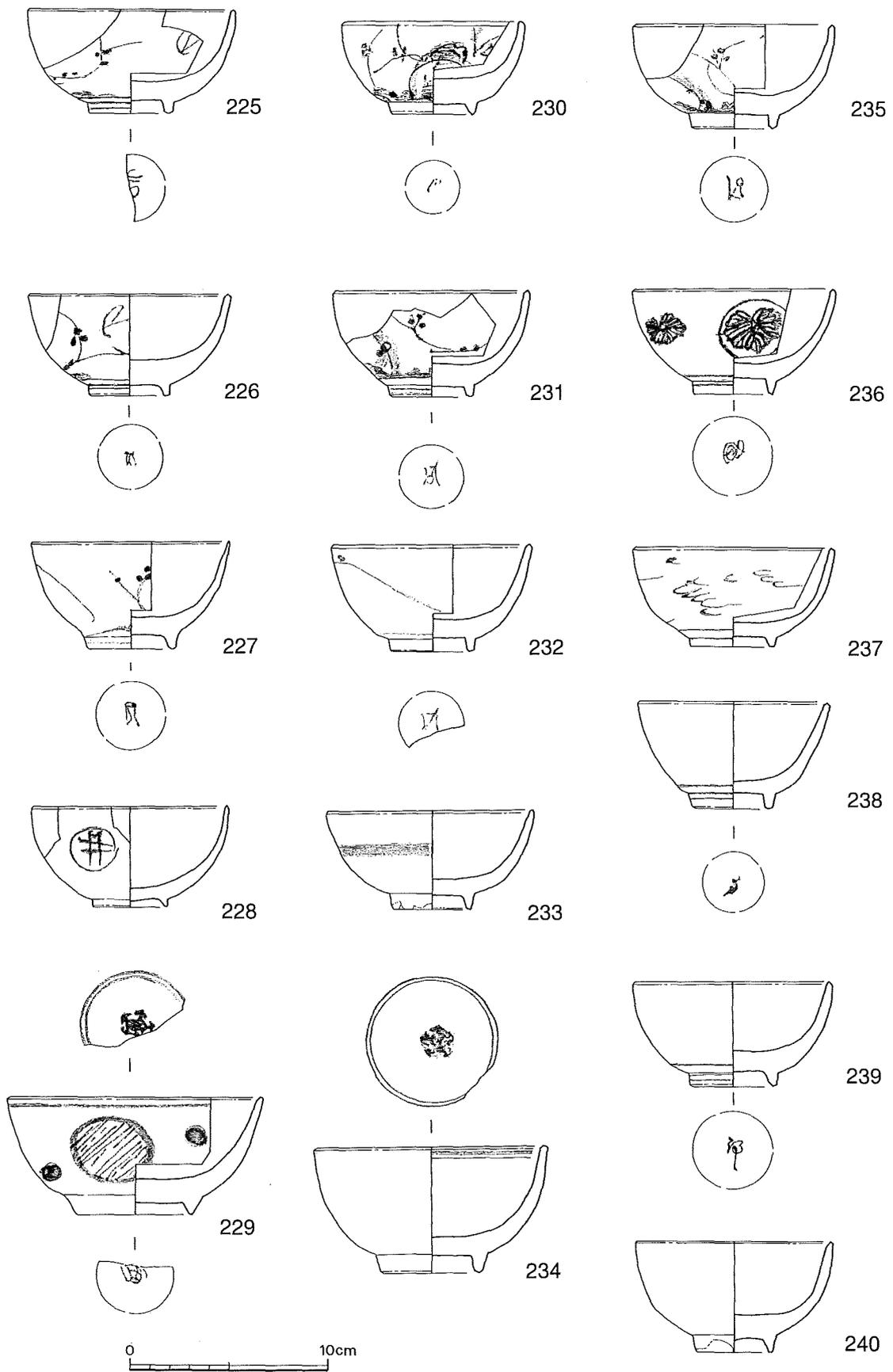
写真49 20・21区 遺構配置



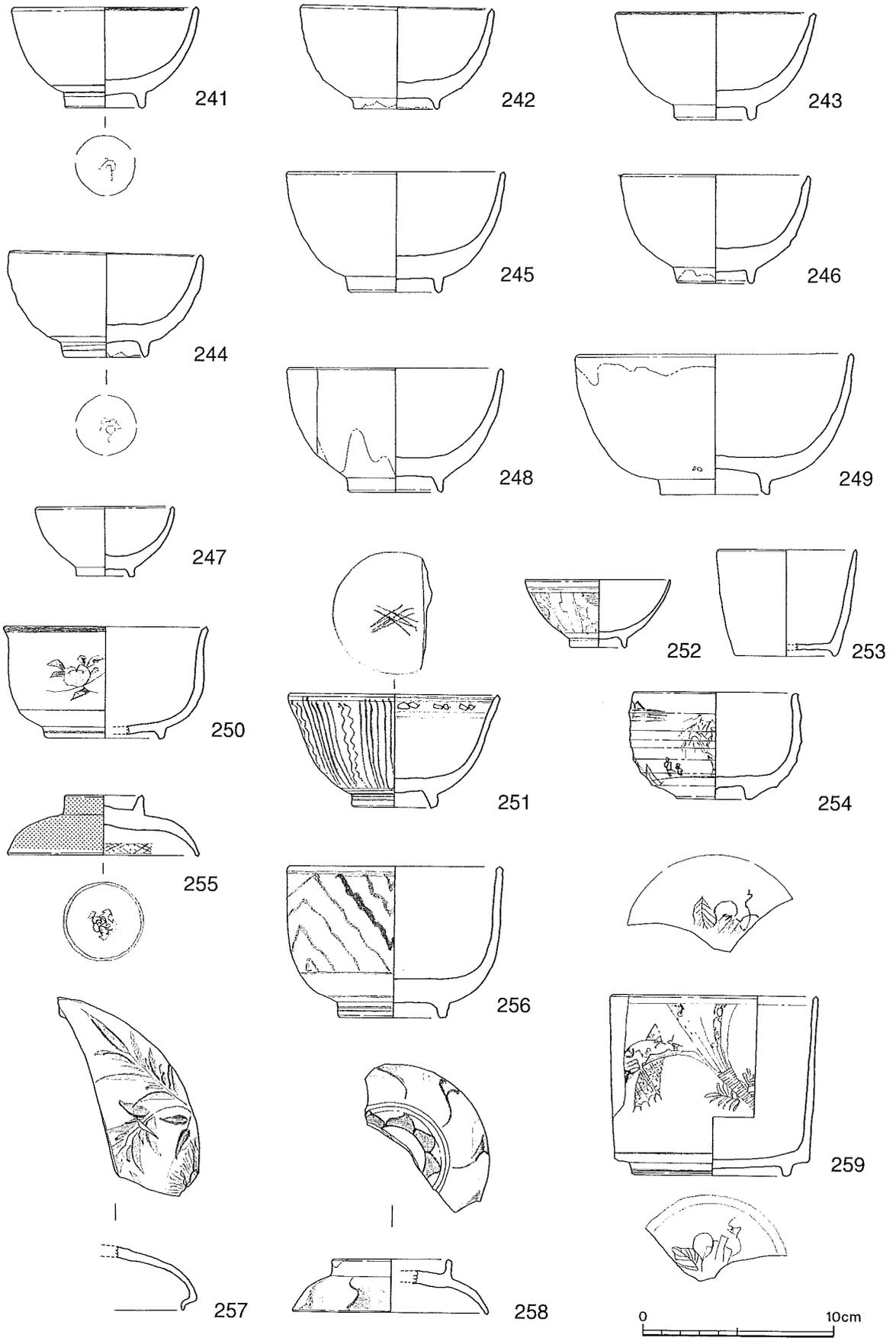
写真50 20・21区 建物遺構



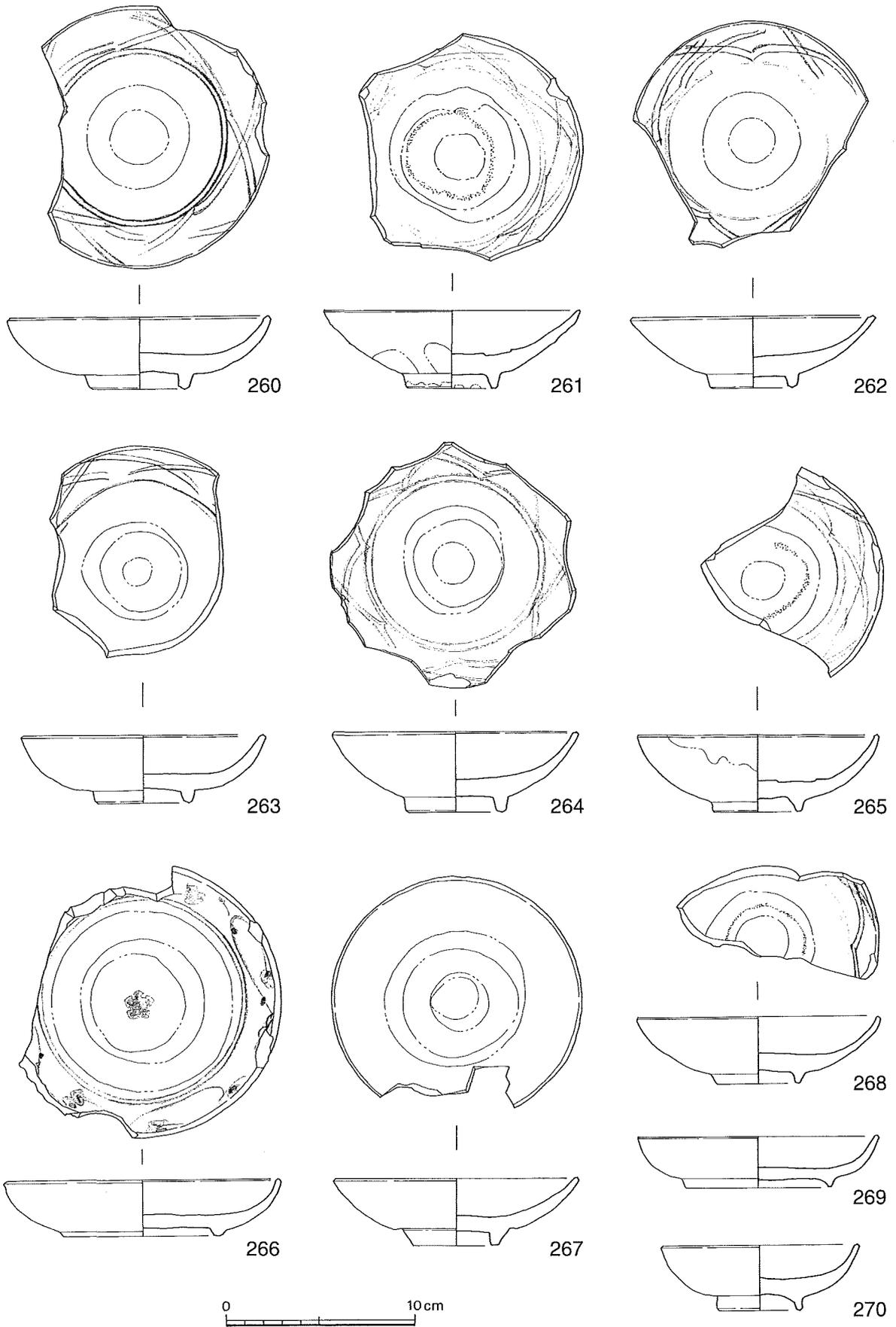
第29図 20・21区 建物遺構出土遺物① (S=1/3)



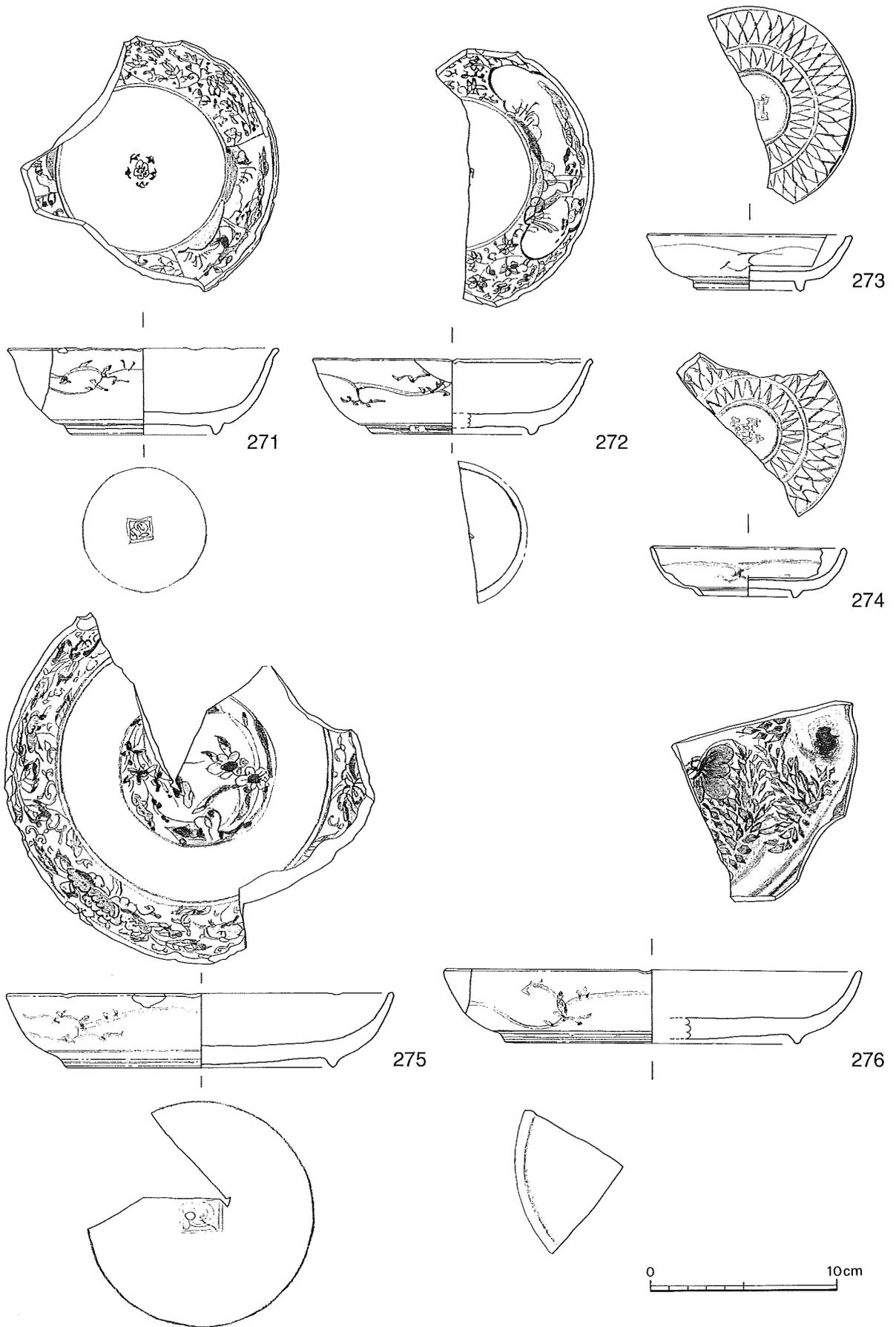
第30図 20・21区 建物遺構出土遺物② (S=1/3)



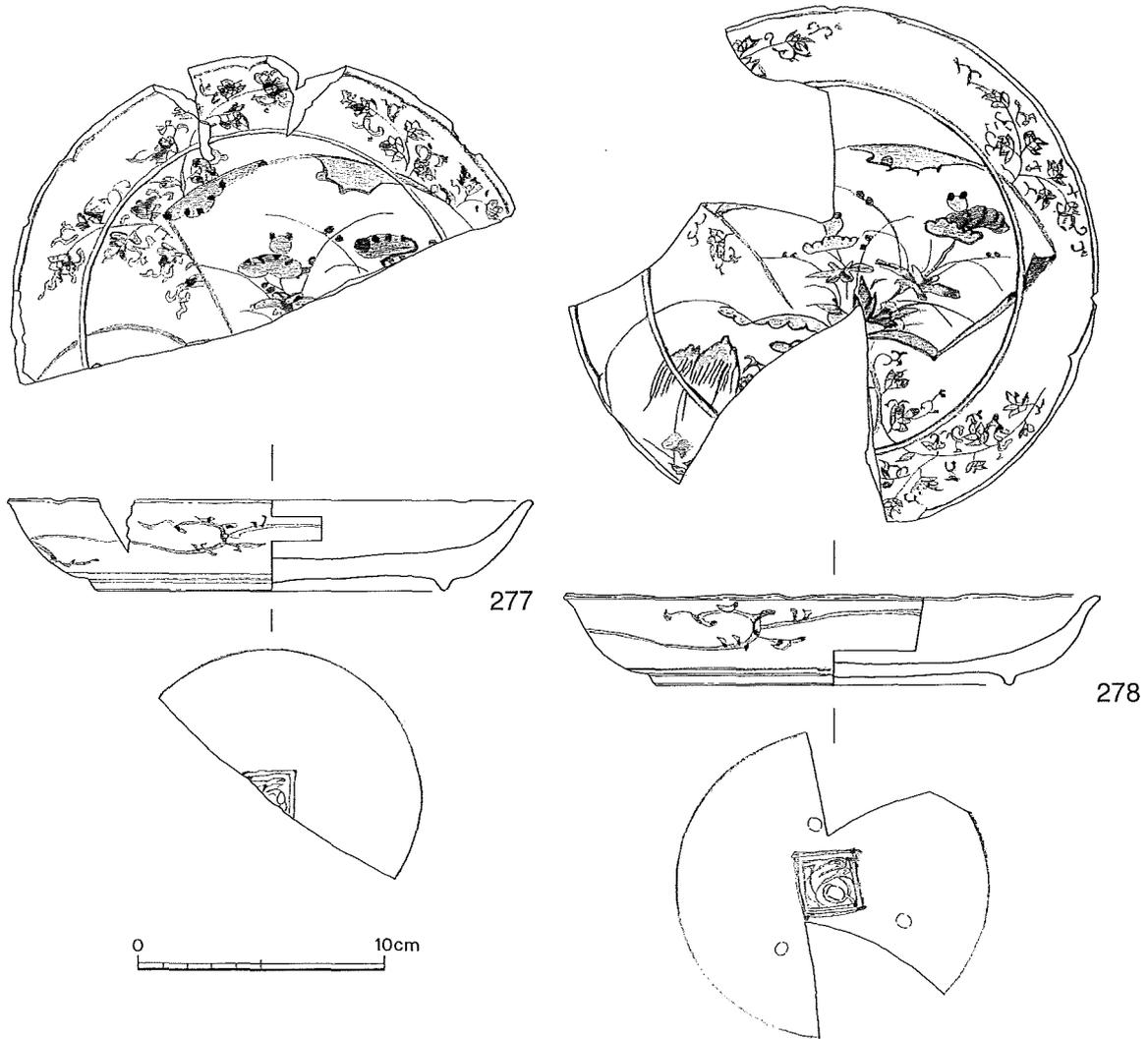
第31図 20・21区 建物遺構出土遺物③ (S=1/3)



第32図 20・21区 建物遺構出土遺物④ (S=1/3)



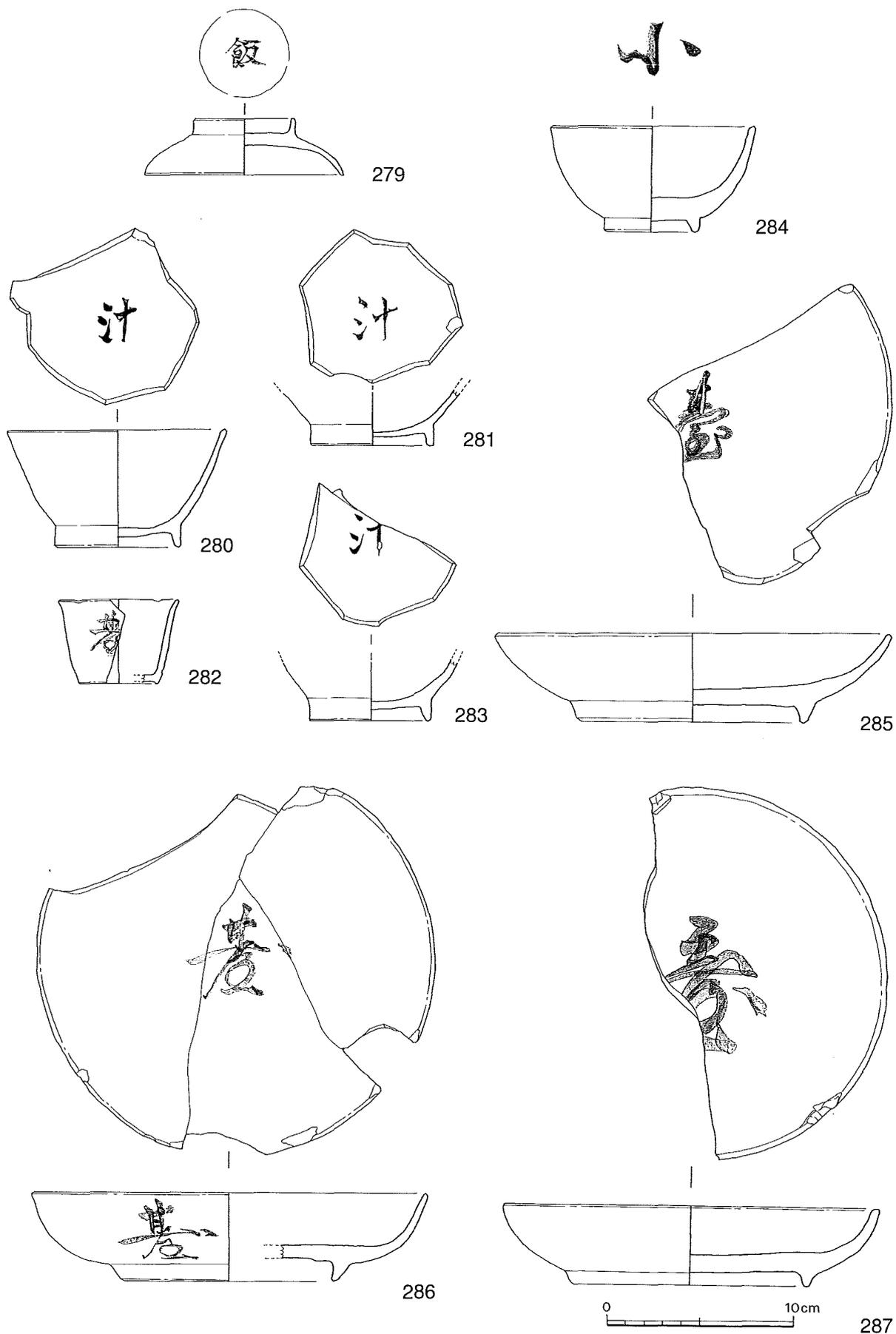
第33図 20・21区 建物遺構出土遺物⑤ (S=1/3)



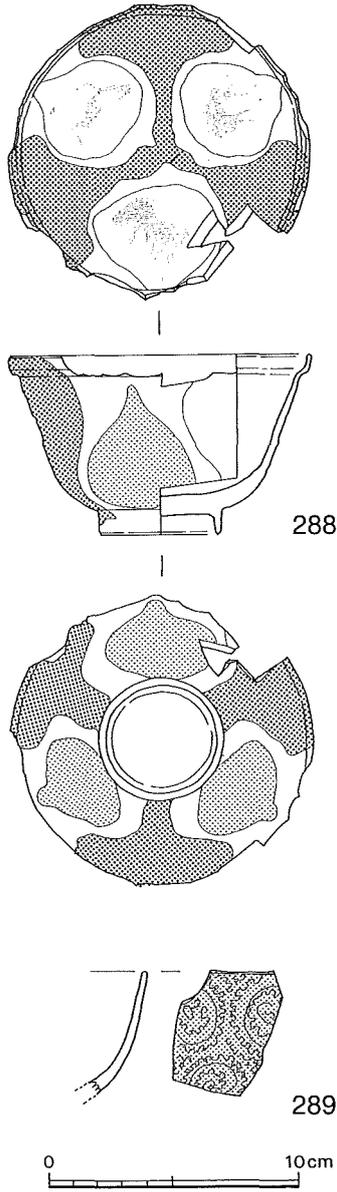
第34図 20・21区 建物遺構出土遺物⑥ (S=1/3)

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
220	染付碗	A-20	瓦だまり	9.8	4.8	5.1	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
221	染付碗	A-20	瓦だまり	9.8	4.0	5.4	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
222	染付碗	A-20	瓦だまり	9.9	3.7	5.2	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
223	染付碗	A-20	瓦だまり	9.7	5.6	3.9	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
224	染付碗	A-20	瓦だまり	9.6	3.2	5.0	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
225	染付碗	A-20	瓦だまり	10.0	3.9	5.2	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
226	染付碗	A-20	瓦だまり	9.8	3.7	5.1	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
227	染付碗	A-20	瓦だまり	9.7	4.0	5.3	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
228	染付碗	A-20	瓦だまり	9.5	3.5	5.0	外：高台畳付露胎，体部丸文の中に井桁文	肥前	
229	染付碗	A-20	瓦だまり	12.3	5.6	5.8	外：丸文，回線，底部：宝文（高台内），内：口縁部回線，見込み回線・コンニャク印判染付文，胎土：N8/	肥前	
230	染付碗	A-20	瓦だまり	8.5	3.9	4.6	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
231	染付碗	A-20	瓦だまり	9.4	3.8	5.3	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹，高台部圈線	肥前	
232	染付碗	A-20	瓦だまり	9.6	3.8	5.3	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹・圈線	肥前	
233	染付碗	A-20	瓦だまり	10.0	3.8	4.9	外：高台畳付露胎，体部帯線	肥前	
234	染付碗	A-20	瓦だまり	11.0	4.5	6.3	内：口縁部二重圈線，見込み圈線内にコンニャク印判染付文	肥前	
235	染付碗	A-20	瓦だまり	9.6	3.7	5.2	外：高台畳付露胎，体部雪輪草花纹	肥前	
236	染付碗	A-20	瓦だまり	9.8	3.9	5.3	外：体部コンニャク印判桐文，高台部圈線，高台内「渦福」	肥前	
237	染付碗	A-20	瓦だまり	9.6	4.2	4.9	体部：飛雲文，回線，底部：高台端部露胎，胎土：N8/，釉色：緑灰気味	肥前	
238	染付碗	A-20	瓦だまり	9.2	3.8	5.3	外：体部下・高台部圈線，内：口縁部圈線	肥前	
239	染付碗	A-20	瓦だまり	9.5	4.1	5.2	口縁，外：高台畳付露胎，砂付着，体部下・高台部圈線，高台内「渦福」	肥前	

第10表 20・21区 建物遺構出土遺物



第35図 20・21区 建物遺構出土文字遺物 (S=1/3)



第36図 20・21区 建物遺構
長与三彩 (S=1/3)

・20, 21区建物遺構出土遺物建物遺構を埋めた土からは、まとまった量の遺物が出土した。その概要をまとめてみたい。

碗は、粗製の丸碗が主体を占める。中では梅樹文碗が最も多い。ほかに一重網目文碗、二重網目文碗のほかコンニャク印判により施文するもの、呉須で文様を描かないものなどがある。一重網目文碗はは長与窯の製品である可能性がある。

また、筒形碗や半球形碗のほか広東碗もみられる。皿は、蛇ノ目剥ぎの粗製品が主体で二重網目文皿が最も多い。また上手のものとして唐草文の深皿や草花と扇を組み合わせた文様の皿などがある。

また、碗、皿を問わず若干の文字資料も出土している。字は「飯」「汁」などの供膳物を記したもの、「小」など何らかの意味を表すものなどがある。いずれも呉須で書かれ他に文様は描かれていない。

最後に共伴した三彩について触れておきたい。出土した三彩はいわゆる長与三彩で磁器質である。2個体出土し、ひとつはほぼ1個体分の碗である。この碗は口縁部が蓋受けになっており、蓋付き碗であることがわかる。釉薬は黄、緑、紺で発色は美しい。高台内にも黄色の釉薬がかかっている。形は長崎市立博物館蔵の奈良茶碗に似るが、文様は類例を知らない。もう1点は碗の破片で、外面に黄色釉が薄くかかる。よくみると蛸唐草が描かれており、文様の縁が墨弾きのように釉を弾いている。モチーフにしても文様にしても、これまで知られる長与三彩とは趣が異なる。実験的な未製品である可能性もある。年代的には、広東碗を含む時期で文献などの記述と矛盾しない。

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
240	白磁碗	A-20	瓦だまり	9.4	3.7	5.5	口鏤, 外:高台置付露胎, 高台内側に砂付着	肥前	
241	染付碗	A-20	瓦だまり	9.2	3.9	5.2	口鏤, 外:体部下・高台際圏線, 高台内「満福」	肥前	
242	白磁碗	A-20	瓦だまり	9.6	4.2	5.3	口鏤, 外:高台置付露胎, 高台砂付着	肥前	
243	白磁碗	A-20	瓦だまり	10.0	3.3	5.5	口鏤	肥前	
244	染付碗	A-20	瓦だまり	9.5	4.1	5.4	口鏤, 外:高台置付露胎, 高台砂付着, 外:体部下・高台部圏線	肥前	
245	白磁碗	A-20	瓦だまり	10.9	4.4	6.2	外:高台置付露胎	肥前	
246	白磁碗	A-20	瓦だまり	9.5	3.8	5.5	口鏤, 外:高台置付露胎, 高台内側に砂付着	肥前	
247	染付小碗	A-20	瓦だまり	7.0	3.0	3.6		肥前	
248	白磁碗	A-20	瓦だまり	10.8	4.6	6.4	外:高台置付露胎, 体部釉垂れ	肥前	
249	白磁碗	A-20	瓦だまり	14.0	5.6	7.2	外:口縁部下釉垂れ	肥前	
250	染付碗	A-20	瓦だまり	10.3	5.6	5.9	外:口縁圏線, 体部果樹文, 圏線, 高台部圏線	肥前	
251	染付碗	A-20	瓦だまり	10.5	3.8	5.8	外:高台置付露胎, 体部よけ構文, 高台部圏線, 内:口縁部下圏線による区画の中に丸文を繋げた幾何文様	肥前	
252	染付小杯	A-20	瓦だまり	7.4	2.7	3.5	薄手酒杯, 外:線描きによる文様	肥前	
253	白磁猪口	A-20	瓦だまり	7.0	5.0	5.5		肥前	
254	染付小杯	A-20	瓦だまり	8.2	3.8	5.5	外:高台置付露胎, 体部山水文	肥前	
255	青磁染付蓋	A-20	瓦だまり	9.7	3.9	3.1	内:四方禪, 中央部コンニャク印判染付文	肥前	
256	染付碗	A-20	瓦だまり	10.7	5.3	7.8	外:体部二重圏線の区画内に斜線文, 高台部圏線	肥前	
257	染付蓋	A-20	瓦だまり	15.6		3.6	外:草花文	肥前	
258	染付蓋	A-20	瓦だまり	9.8	5.8	2.8	外:捻子花文	肥前	
259	染付碗	A-20	瓦だまり	10.8	7.9	9.2	外:高台内室文, 内:見込みに室文, 一部欠損	肥前	

第11表 20・21区 建物遺構出土遺物

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
260	染付皿	A-20	瓦だまり	13.3	4.8	3.8	内：二重斜格子文，見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
261	染付皿	A-20	瓦だまり	13.0	4.1	4.6	外：底部無釉，高台置付に砂付着，内：二重斜格子文，見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
262	染付皿	A-20	瓦だまり	12.4	4.1	3.8	内：二重斜格子文，見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
263	染付皿	A-20	瓦だまり	12.4	4.6	3.5	内：二重斜格子文，見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
264	染付皿	A-20	瓦だまり	12.5	4.7	4.2	内：二重斜格子文，見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
265	染付皿	A-20	瓦だまり	12.2	4.0	4.0	外：底部無釉，高台置付に砂付着，内：二重斜格子文，見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
266	染付皿	A-20	瓦だまり	14.0	8.0	2.9	内：牡丹唐草文，見込み蛇ノ目釉剥ぎ，中央部コンニャク印判五弁花文	肥前	
267	染付皿	A-20	瓦だまり	12.4	4.4	3.5	内：見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
268	染付皿	A-20	瓦だまり	12.3	4.2	3.5	外：高台部露胎，内：二重斜格子文，見込み蛇ノ目釉ハギ	肥前	
269	白磁皿	A-20	瓦だまり	12.2	7.9	2.7	外：高台置付露胎	肥前	
270	白磁皿	A-20	瓦だまり	10.0	4.1	3.4	外：高台置付露胎	肥前	
271	染付深皿	A-20	瓦だまり	13.9	7.5	4.6	口縁花，外：唐草文，高台際露胎，高台内一重線内二重角枠内「満福」，内：唐草文，窓内松竹梅	肥前	
272	染付深皿	A-20	瓦だまり	14.4	8.2	3.4	口縁輪花，外：体部唐草文，底部：高台置付露胎，高台内一重線，無釉，内：唐草文，窓内松竹梅	肥前	
273	染付皿	A-20	瓦だまり	10.5	5.4	2.9	外：体部唐草文，高台部露胎，内：鋸歯状網目文，見込みコンニャク印判染付文	肥前	
274	染付皿	A-20	瓦だまり	10.0	5.0	2.6	外：体部唐草文，高台部露胎，内：鋸歯状網目文，見込みコンニャク印判染付文	肥前	
275	染付皿	A-20	瓦だまり	19.8	13.8	4.0	外：体部唐草文・一重線，高台部露胎，高台内一重線内二重角枠内「満福」	肥前	
276	染付皿	B-20	IVa	21.6	15.1	3.9	外：体部唐草文，高台部露胎，高台内一重線，内：草花文	肥前	
277	染付皿	A-20	瓦だまり	20.4	13.5	3.7	口縁輪花，外：体部唐草文，体部下・高台際露胎，内：唐草文，見込み草花	肥前	
278	染付皿	A-20	瓦だまり	20.3	13.9	3.6	口縁輪花，外：体部唐草文，高台部露胎，高台内一重線内二重角枠内「満福」，内：体部唐草文，見込み草花	肥前	
279	染付蓋	A-20	瓦だまり	10.3	5.2	3.0	外：つまみ端部露胎，つまみ内「飯」字	肥前，広東碗蓋	
280	染付碗	A-20	瓦だまり	11.3	6.3	6.2	内：見込み「汁」字	肥前，広東碗	
281	染付碗	A-20	瓦だまり		6.1		内：見込み「汁」字	肥前，広東碗	
282	染付小杯	A-20	瓦だまり				外：体部字文	肥前	
283	染付碗	A-20	瓦だまり		6.2		外：高台置付露胎，内：見込み「汁」字	肥前，広東碗	
284	染付碗	A-20	瓦だまり	10.5	4.6	5.6	内：見込み「小」字	肥前	
285	染付皿	A-20	瓦だまり	20.5	11.5	4.6	外：高台置付露胎，内：見込み字文	肥前	
286	染付皿	A-20	瓦だまり	20.5	10.9	4.7	外：高台置付露胎，内：見込み字文	肥前	
287	染付皿	A-20	瓦だまり	19.5	12.2	4.2	外：高台置付露胎，内：見込み字文	肥前	
288	三彩碗	A-20	瓦だまり	11.6	4.5	7.0	外：高台置付露胎，紫釉（如意頭文），黄・緑釉，内：透明釉・黄釉（如意頭文），黄・緑釉	長与三彩	
289	黄釉碗片	A-20	瓦だまり				外：線刻唐草文		

第12表 20・21区 建物遺構出土遺物

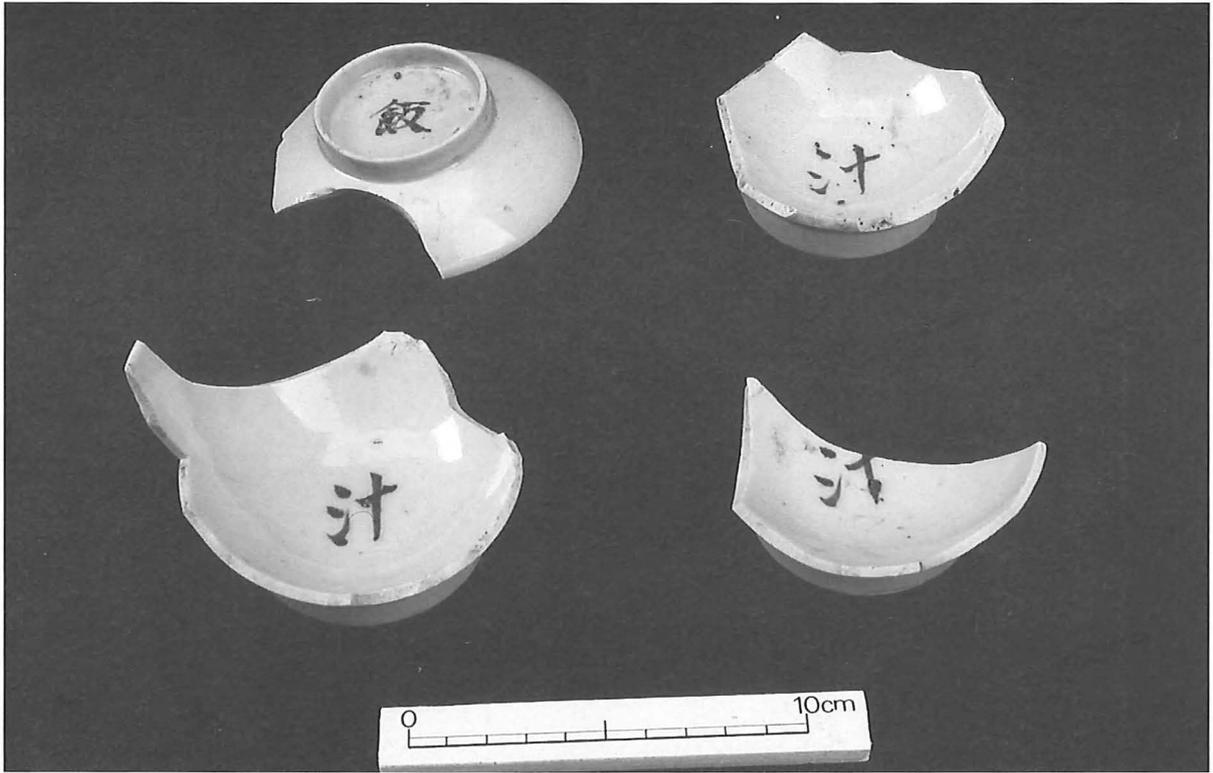


写真51 文字資料①

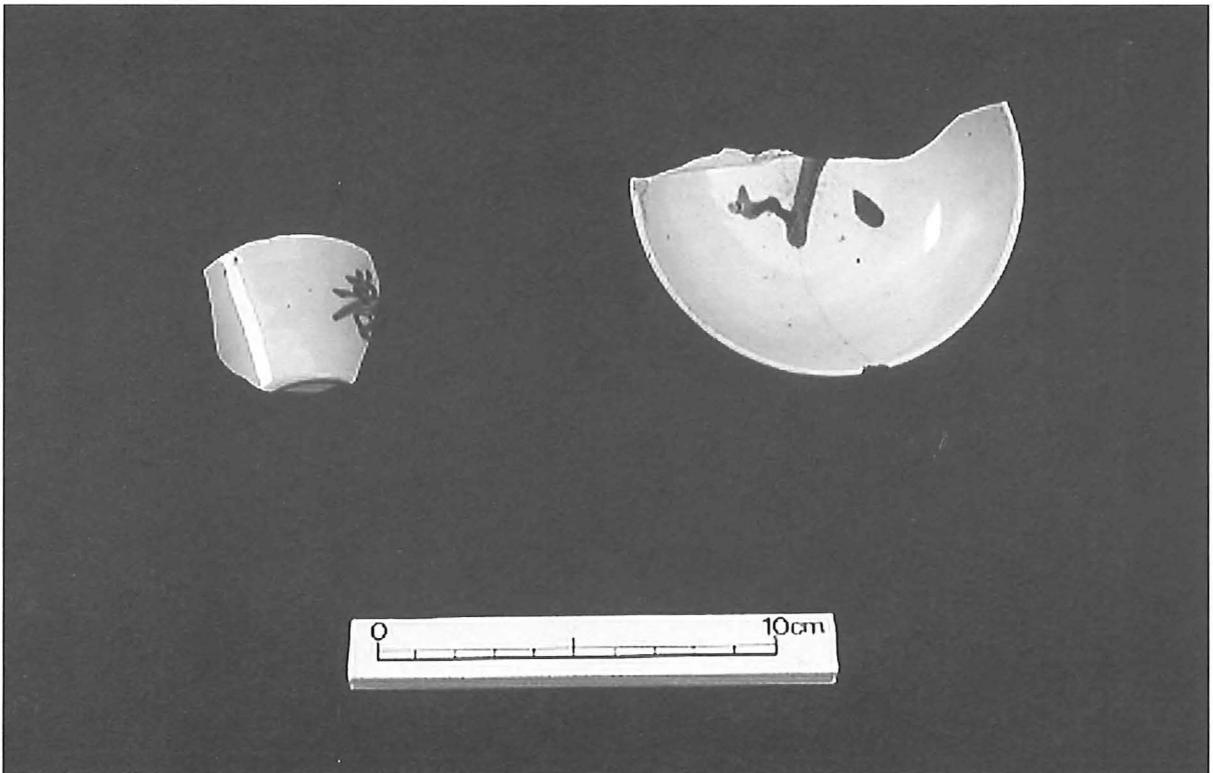


写真52 文字資料②

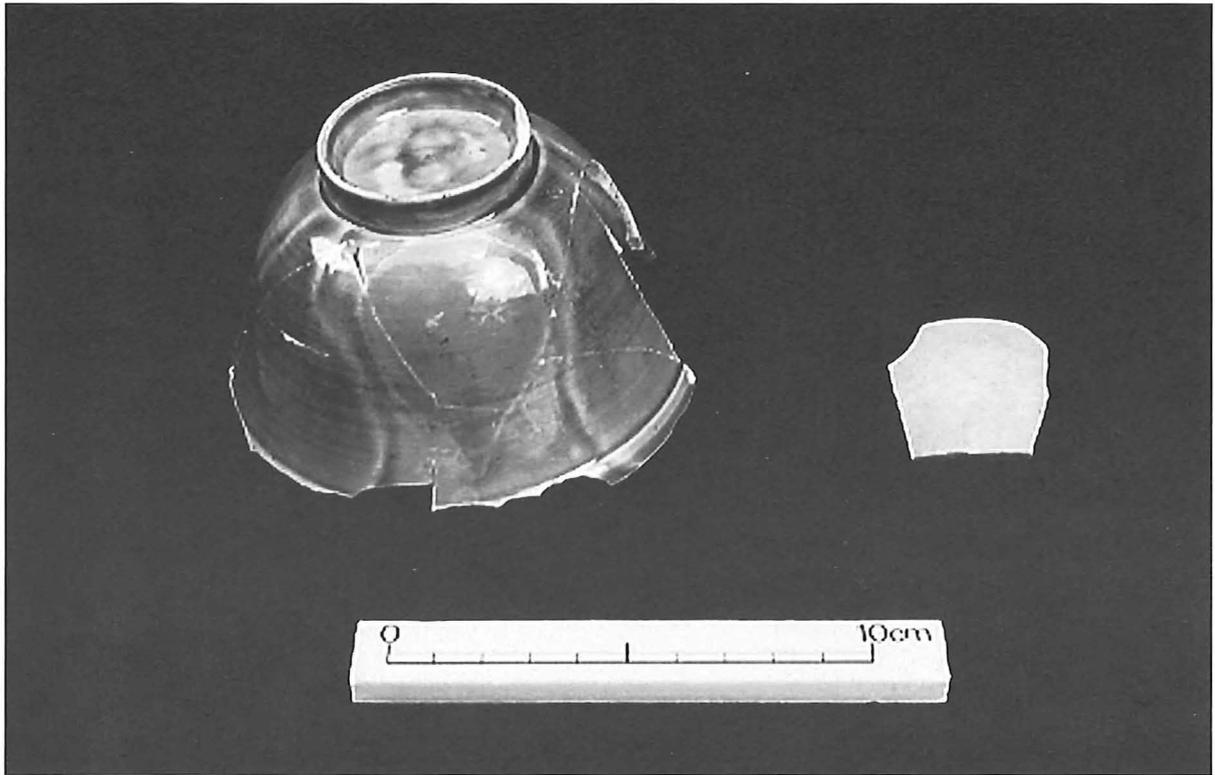


写真53 長与三彩①

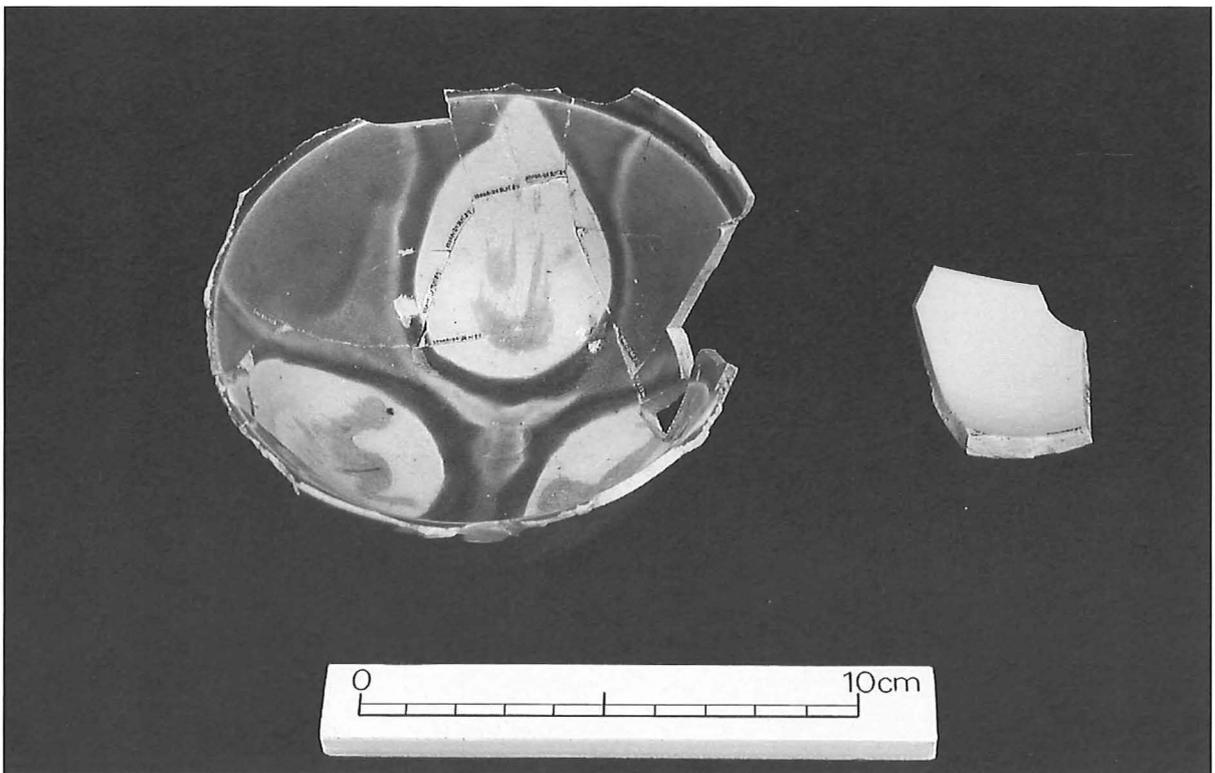
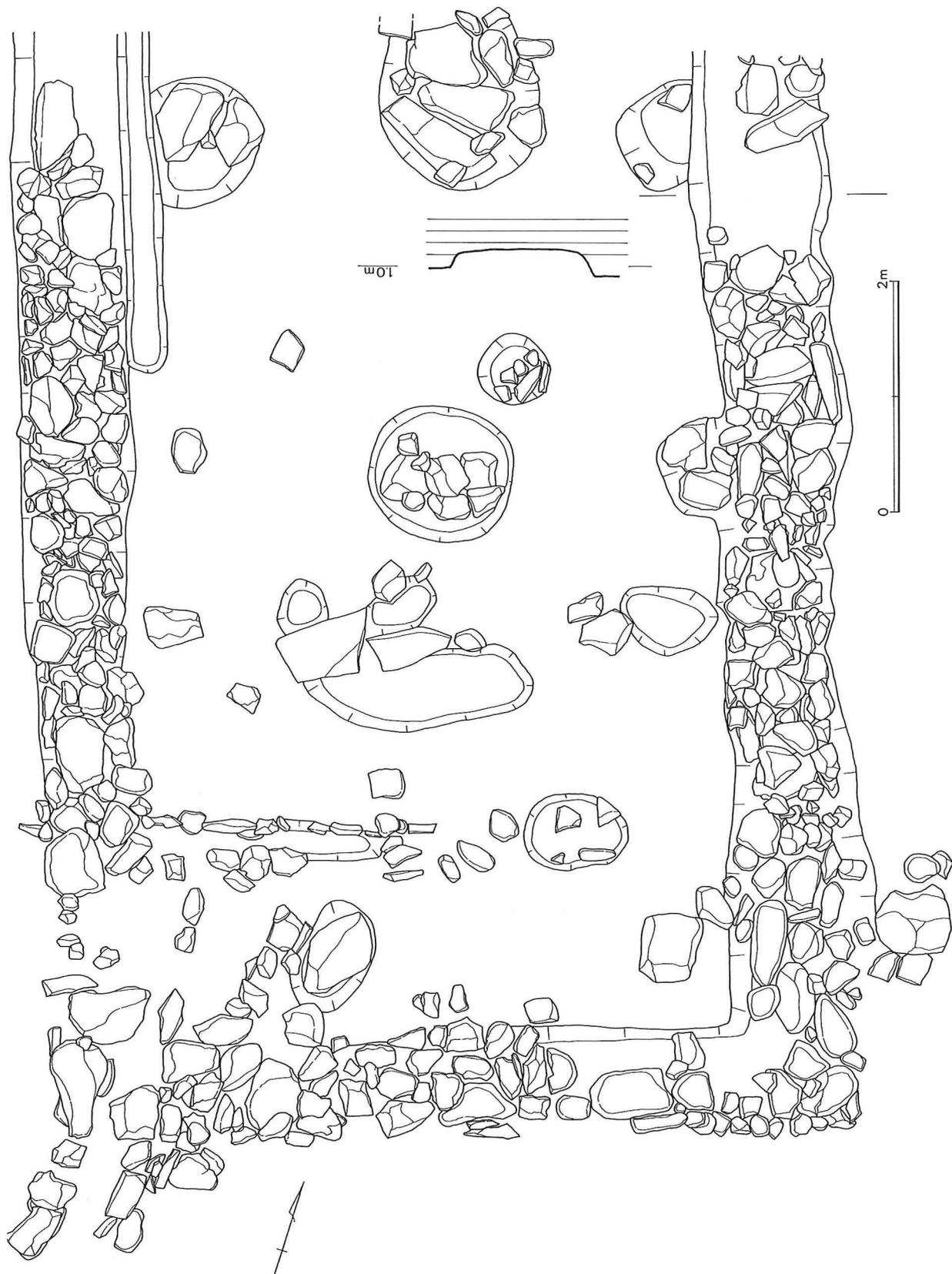


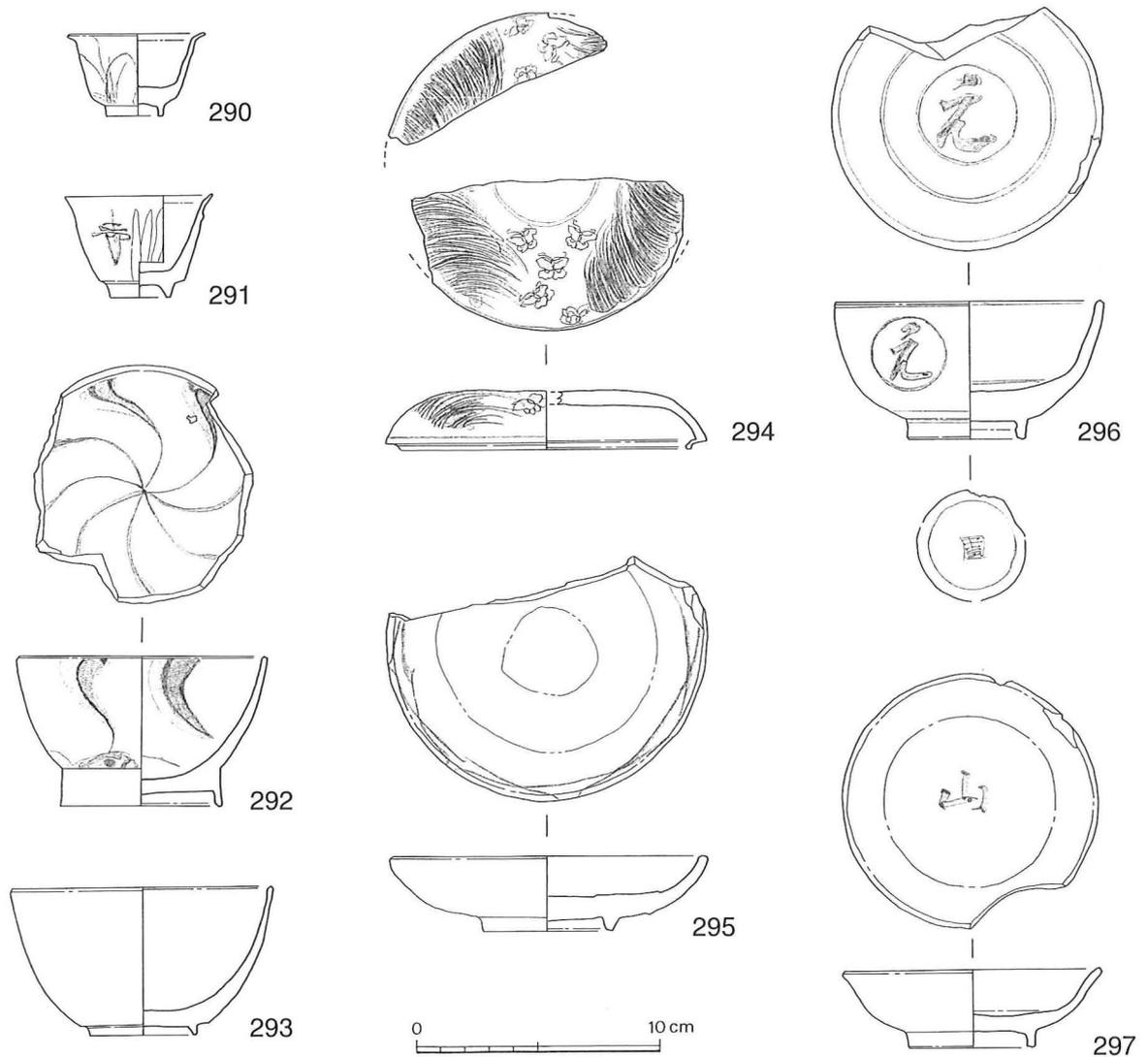
写真54 同裏



第37図 22~24区 建物遺構 (S=1/50)



写真55 23・24区 建物遺構



第38図 20~23区 出土遺物 (S=1/3)

・23, 24区建物遺構

溝状遺構の中に石を積んだ建物の基礎と考えられる遺構が検出された。20, 21区で検出された遺構と同じ構造をもつ。コの字形に検出されているが、北側については安全上の理由で確認できなかった。南側に玖島川へ注ぐ排水口があり、暗渠の役割も果たしていたことが推測される。

・20～24区出土遺物

各層で出土した遺物の中で図化できたものをあげた。最も古いもので17世紀中頃、新しいもので18世紀末から19世紀にかけてのものがある。

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
290	染付小杯	川北	IVa	5.4	2.3	3.3	口縁外反, 外:草文	肥前	
291	染付小杯	A・B-23	IV	6.0	2.5	4.1	外:高台露胎, 体部部分的に連弁状に削りだし, 「寿」字		
292	染付碗	A・B-20	III	10.1	6.4	6.1	内外:体部捻子花文	肥前, 広東碗	
293	施釉陶器碗	A・B-23 SK14		10.5	4.2	6.0	外:底部露胎		
294	染付蓋	川北	IV	11.6		2.4	外:草文に蝶		
295	染付皿	A・B-20	III	12.8	5.2	3.0	外:高台部畳付露胎, 内:斜格子文, 見込み蛇ノ目籾ハギ	肥前	
296	染付碗	A・B-23	IV	10.8	4.7	5.6	外:高台畳付露胎, 体部丸文の中に「元」字, 高台内一重角帯内に附れた字文, 内:見込み二重脚線内に丸文と「元」字	肥前	
297	染付皿	A・B-20	III	10.4	3.1	3.1	外:高台畳付露胎, 内:見込み「山」字	肥前	

第13表 20～23区 出土遺物

(7) IV区の遺構

この区域は玖島川の南側にあたり、もとの河口付近で砂の堆積がみられる。遺構は古代と近世のものが検出された。古代の遺構は柱穴と考えられ、砂層の上面から掘り込まれている。掘方から黒色土器が出土している（別項黒色土器参照）。

上面の遺構は、近世の土坑、溝状遺構、柱穴などがあるが、攪乱により明確な構成は不明である。比較的規模の大きいSK8・9・14などから埋土として炭化物や焼土が検出されており、火災整理土坑の可能性もある。



写真56 26～31区 遺構検出状況

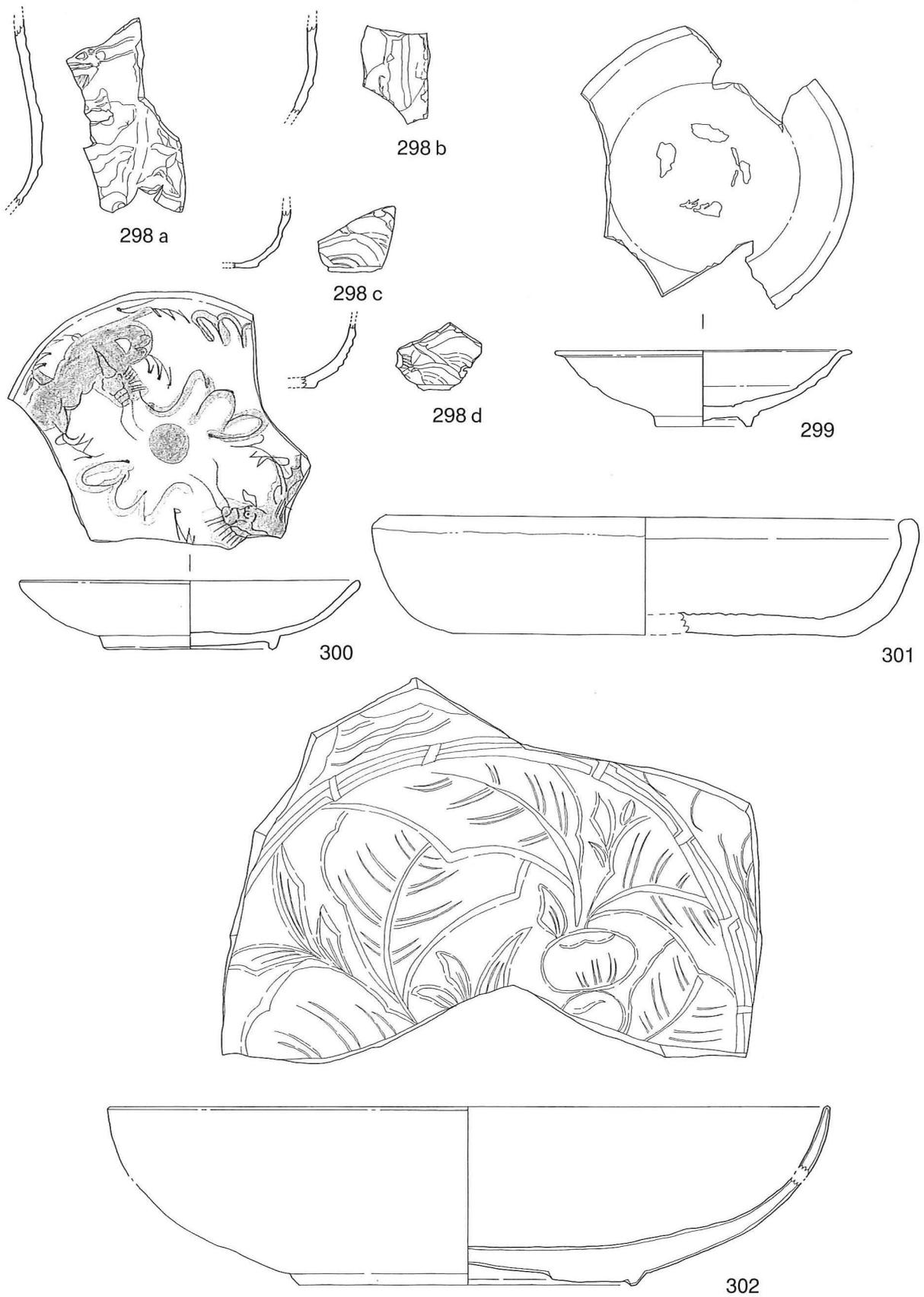
(8) IV区出土の遺物

代表的なものを図化した。298の緑釉陶器片は華南三彩の形づくりの袋ものである。内面に縦方向に粘土の接合痕がある。器形は不明であるが水注の可能性が高い。299は砂目積みの唐津折れ縁皿。300は 州窯系の青花皿。301は焼き締め鉢であるが、暗緑灰色の釉がかけられている。唐津系か。301は波佐見系の青磁盤で、線彫りで蕪などを描く。中野雄二の編年⁽¹⁾によるとIV期(1650年代～1680年代)に位置づけられよう。木場山窯の製品か。

(1)「波佐見」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会200

番号	種別	地区・遺構	層位	口径cm	底径cm	器高cm	形成・調整技法の特徴・文様	備考	図版
298a	緑釉陶器片	B-30	Ⅲ				外：龍と草花を貼り付け		
298b	緑釉陶器片	B-30	Ⅲ				外：波と草を貼り付け		
298c	緑釉陶器片	B-30	Ⅲ				外：波濤文の貼付		
298d	緑釉陶器片	B-30	Ⅲ				外：波濤文の貼付		
299	施釉陶器皿	A-30	Ⅲ	15.2	4.9	3.9	外：壘付露胎，内：胎土目（4箇所）	唐津	
300	青花皿	A・B-29	Ⅳ	17.2	8.6	3.5	外：高台壘付砂付着，高台内らせん状の削り出し痕，内：雲竜文		
301	施釉陶器鉢	A・B-26 Pit51		27.0	20.3	6.0	灰釉，口縁部内側へ肥厚，内：底面円心状に段	唐津	
302	青磁盤	A-28 SK8		36.6	17.2	9.2	内外面：青緑色ガラス質釉かかる，底部：鉄サビ，焼成良好，胎色：白灰色	波佐見系	
303	三彩小杯	B-4		7.0	3.7	4.3	外：高台壘付露胎，緑・黄・紫釉，高台内透明釉，内：透明釉	長与三彩	
304	三彩小杯底部	A・B-21	Ⅲ		3.2		外：高台壘付露胎，緑・黄・紫釉，高台内黄釉，内：緑・紫・黄釉	長与三彩	
305	三彩碗片	B-15	Ⅰ		19.3		端反口縁，外：口縁部下圍線（緑釉），紫・黄釉，内：透明釉	長与三彩	
306	三彩碗片	B-5	Ⅲ				直口口縁，陶胎に白化粧後，緑・黄・紫・透明釉	長与三彩	
307	三彩碗底部片	A・B-27	Ⅲ		4.8		外：高台壘付露胎，緑・黄・紫釉，高台内紫釉，内：黄釉	長与三彩	

第14表 25～31区 出土遺物



第40図 25~31区 出土遺物 (S=1/3)



写真57 298

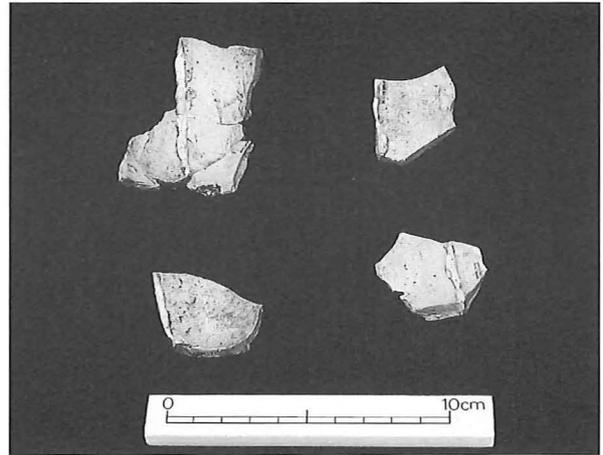


写真58 同 裏

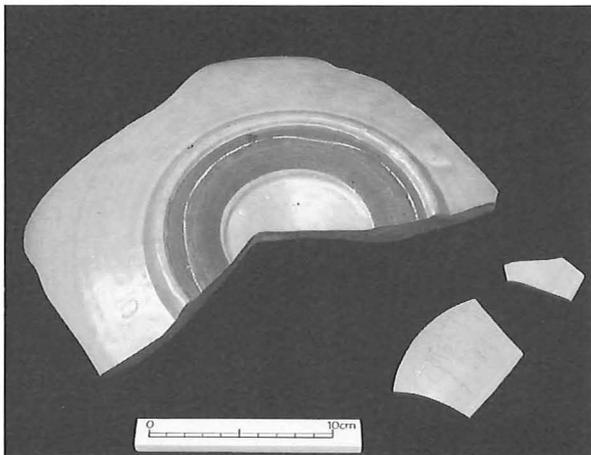


写真59 302

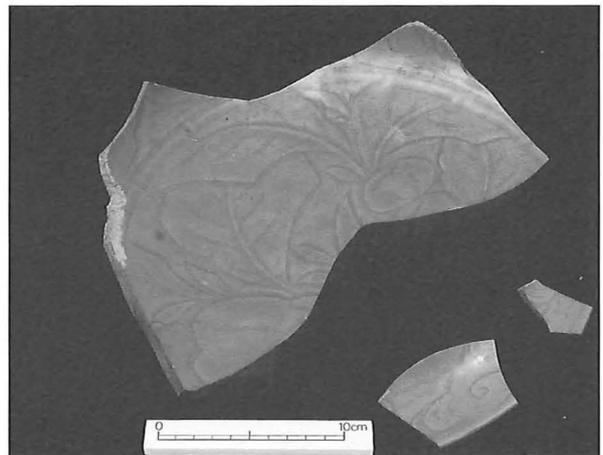


写真60 同 裏

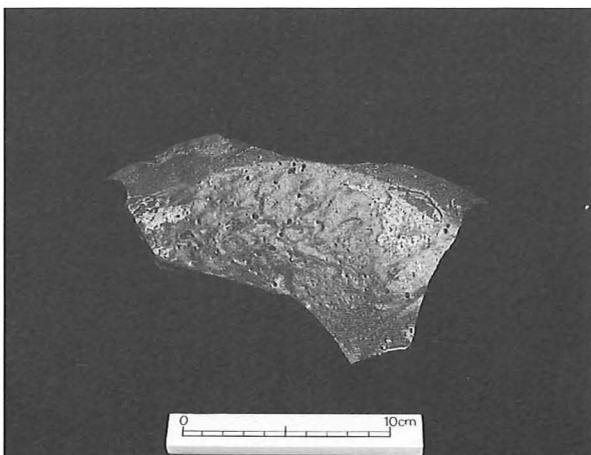


写真61 301

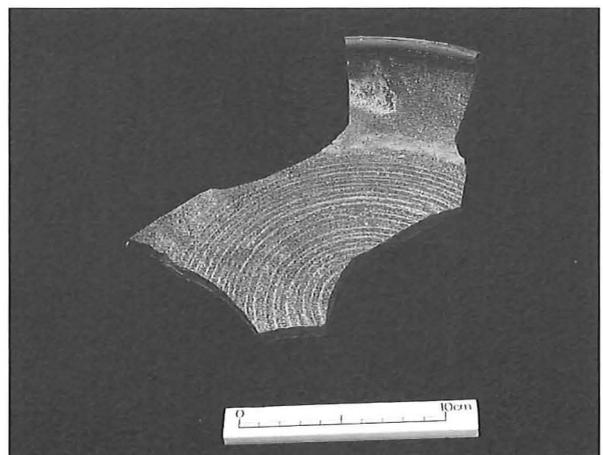
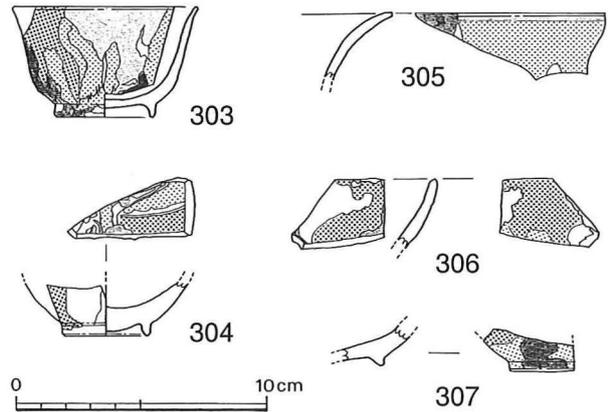


写真62 同 裏

(9) その他の遺物

303～307は各地区から出土した長与三彩である。306は胎土が土師質という点で他と異なる。長与三彩は調査区の全域で散発的に出土している。308は石垣内から出土した金具の一種で、竹節状のくびれをもつ。309はA-6区Ⅶ層から出土したマヨリカ陶器のアルバレロ形の水注片である。310～315は池内から出土した木製品で、313・314の木筒を除き漆がかけられている。



第41図 長与三彩

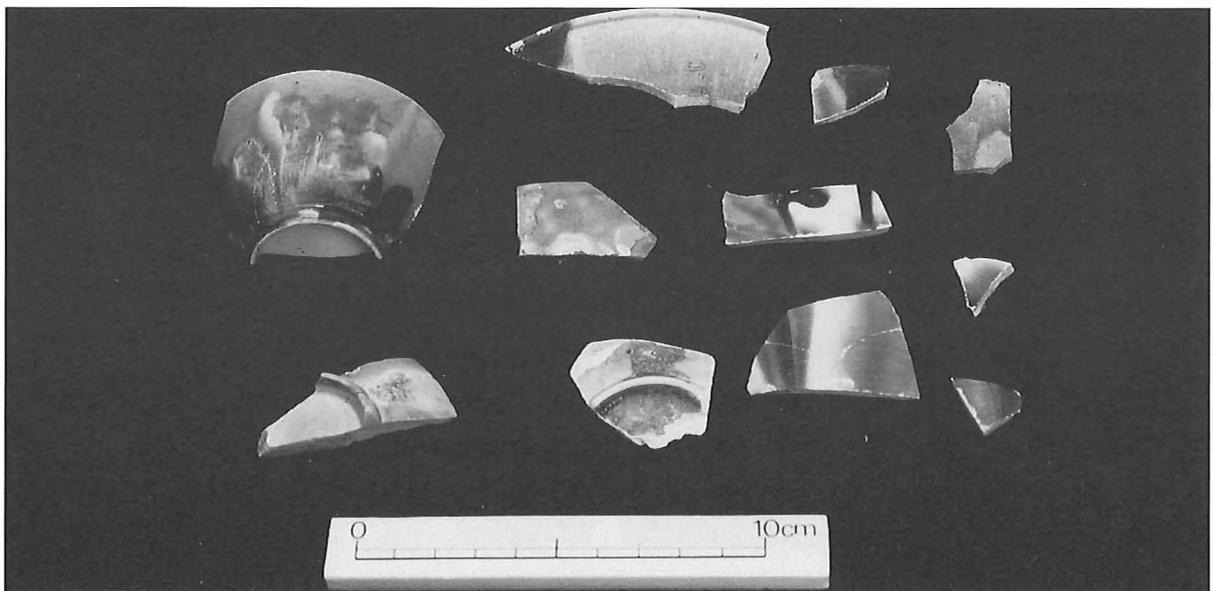


写真63 長与三彩 ②

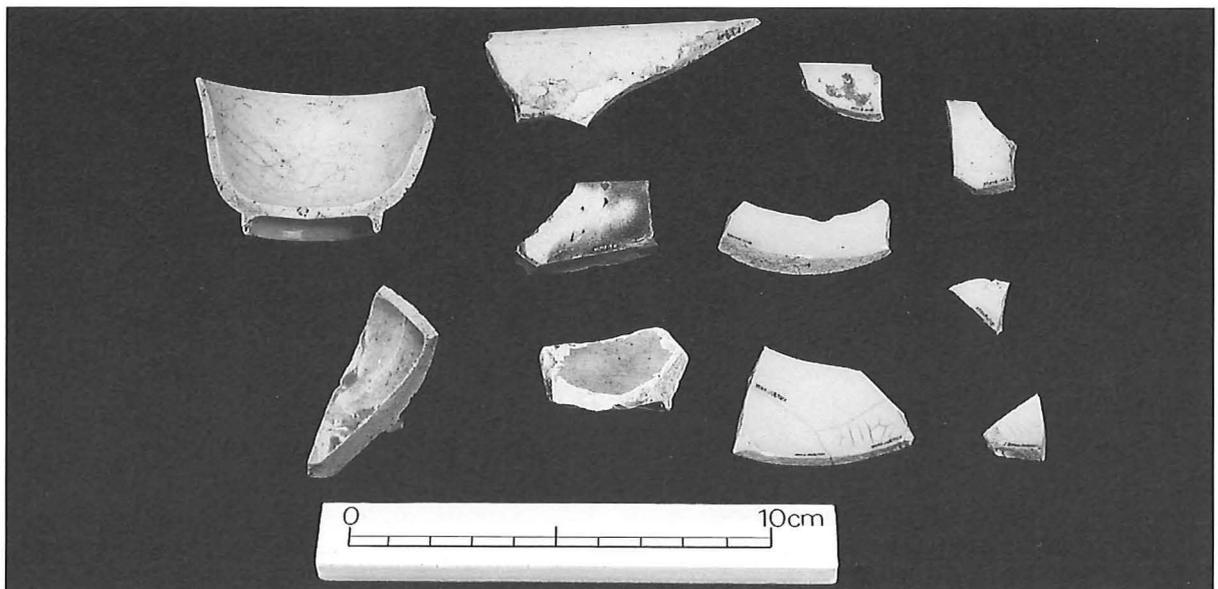
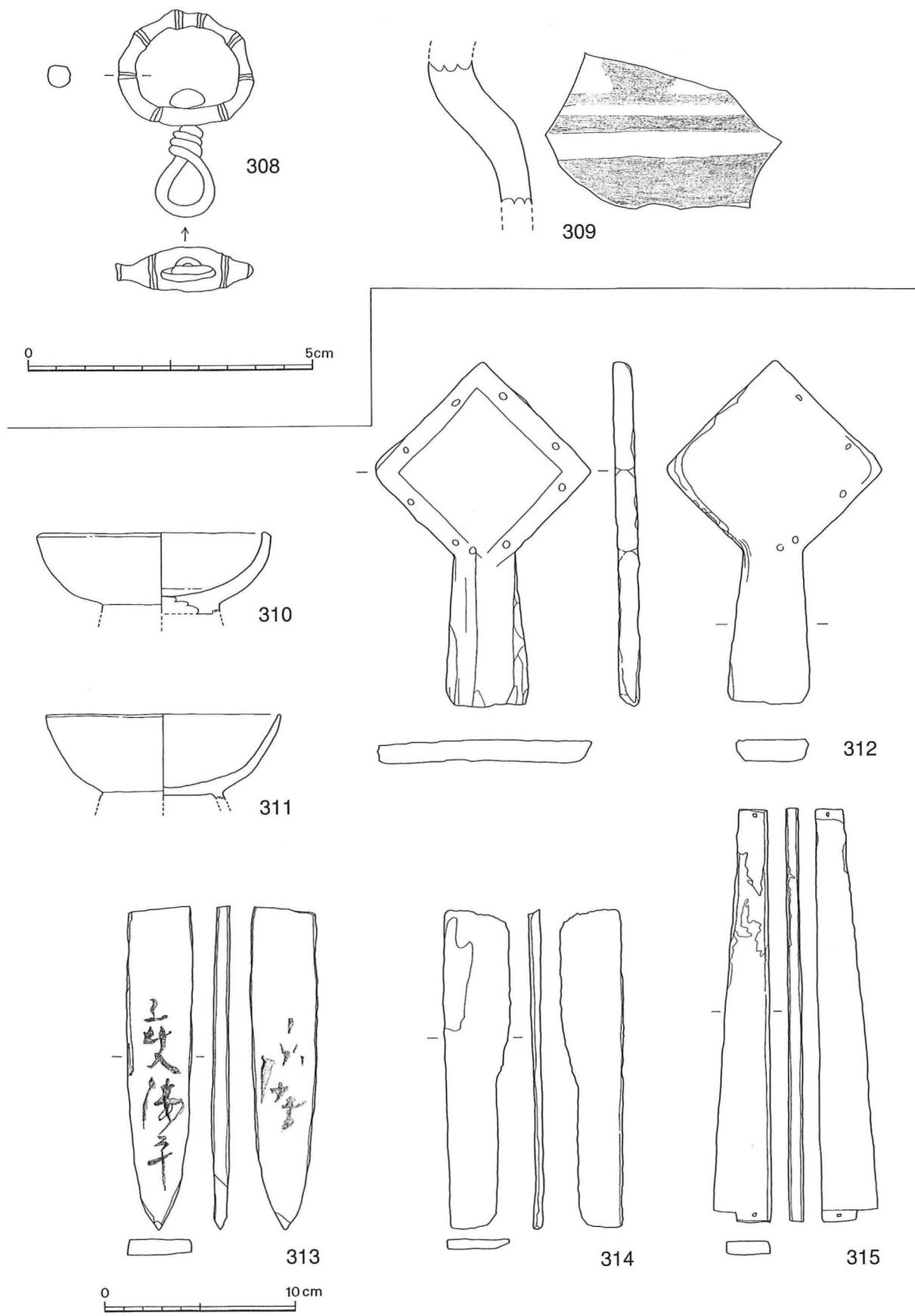


写真64 同 裏



第42図 その他の遺物



写真65 311・312



写真66 313・314・315

・朝鮮系瓦（第43図～第49図，第15表・第16表）

今回の調査で約70点確認された。そのうち状態が良好なものを65点図化した。器種は丸瓦および平瓦が確認されている。内訳は丸瓦15点，平瓦50点となる。

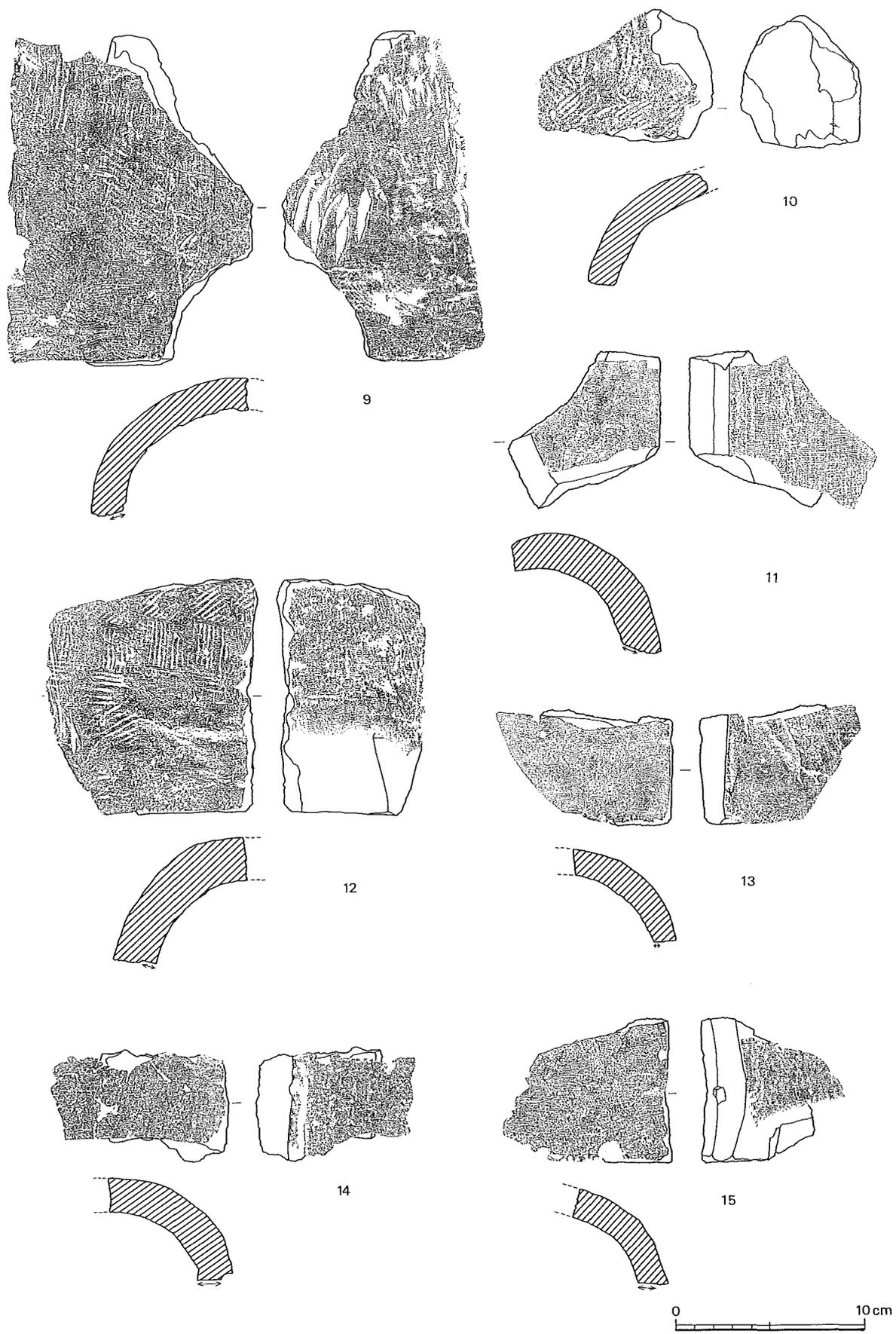
丸瓦（第43図・第44図・第15表）

完形は確認されておらず，すべて破片のみである。全体の形は不明であるが，玉縁部を有する丸瓦と思われる。基本的な調整は，凸面に叩きしめ+ナデ調整・凹面は布目圧痕+ナデ調整となる。

1の断面幅は約2.5cm。玉縁部が確認される。凹面は布目圧痕・模骨痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは斜走する直線文が確認される。分割断面の幅は約8mm。2の断面幅は約2.5cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約1cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は経9・緯8本となる。凸面の叩きは魚鱗文と思われる。分割断面の幅は約1cm。3の断面幅は約2.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は，経8・緯8本となる。凸面の叩きは魚鱗文と思われる。4の断面幅は約2.3cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約7mm。凹面には布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割断面の幅は約5mm。5の断面幅は約2cm。凹面は布目圧痕が確認されるが，ナデ調整が強いいため布目を消している。また条線も確認されるが工具等は不明。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。6の断面幅は約2cm。凹面は布目圧痕が確認される。ナデ調整のため布目の経緯数は不明。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割断面の幅は約7mm。7の断面幅は約2cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は，経9・緯8本となる。凸面の叩きは綾杉文と思われる。分割断面の幅は約5mm。8の断面幅は2.7cm。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整により不明。模骨痕が認められる。凸面の叩きは魚骨文が確認される。9の断面幅は約2.3cm。先端部の幅は約1.3cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は，経11・緯11本となる。また凹面はナデ調整以外に傷状の痕跡も確認される。工具等は不明。凸面の叩きは，長軸に並行と斜走する直線文が認められる。10の断面幅は約2cm。凹面は磨滅のため布目圧痕は確認されない。布目の経緯数も不明。凸面の叩きは直線文と思われるが詳細は不明。11の断面幅は約2.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は，経11・緯10本となる。凸面における叩きの文様は確認されない。分割断面の幅は約1cm。12の断面幅は約3cm。先端部の幅は約1cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は，経11・緯12本となる。凸面の叩きは長軸・短軸に並行，斜走する直線文が確認される。分割断面の幅は約1cm。13の断面幅は約2cm。先端部の幅は約6mm。凹面は布目圧痕が確認される。ナデ調整のため布目の経緯数は不明。凸面における叩きの文様は小破片のため不明。分割断面の幅は約5mm。14の断面幅は約2.5cm。凹面は布目圧痕が確認されるが，ナデ調整のため経緯数は不明。凸面における叩きの文様は不明。分割断面の幅は約1.5cmとなる。15の断面幅は約2cm。先端部の幅は1.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内における布目の経緯数は，経13・緯13本となる。凸面における叩きの文様は確認されない。



第43図 朝鮮系丸瓦実測図① (S=1/4)



第44図 朝鮮系丸瓦実測図② (S=1/4)

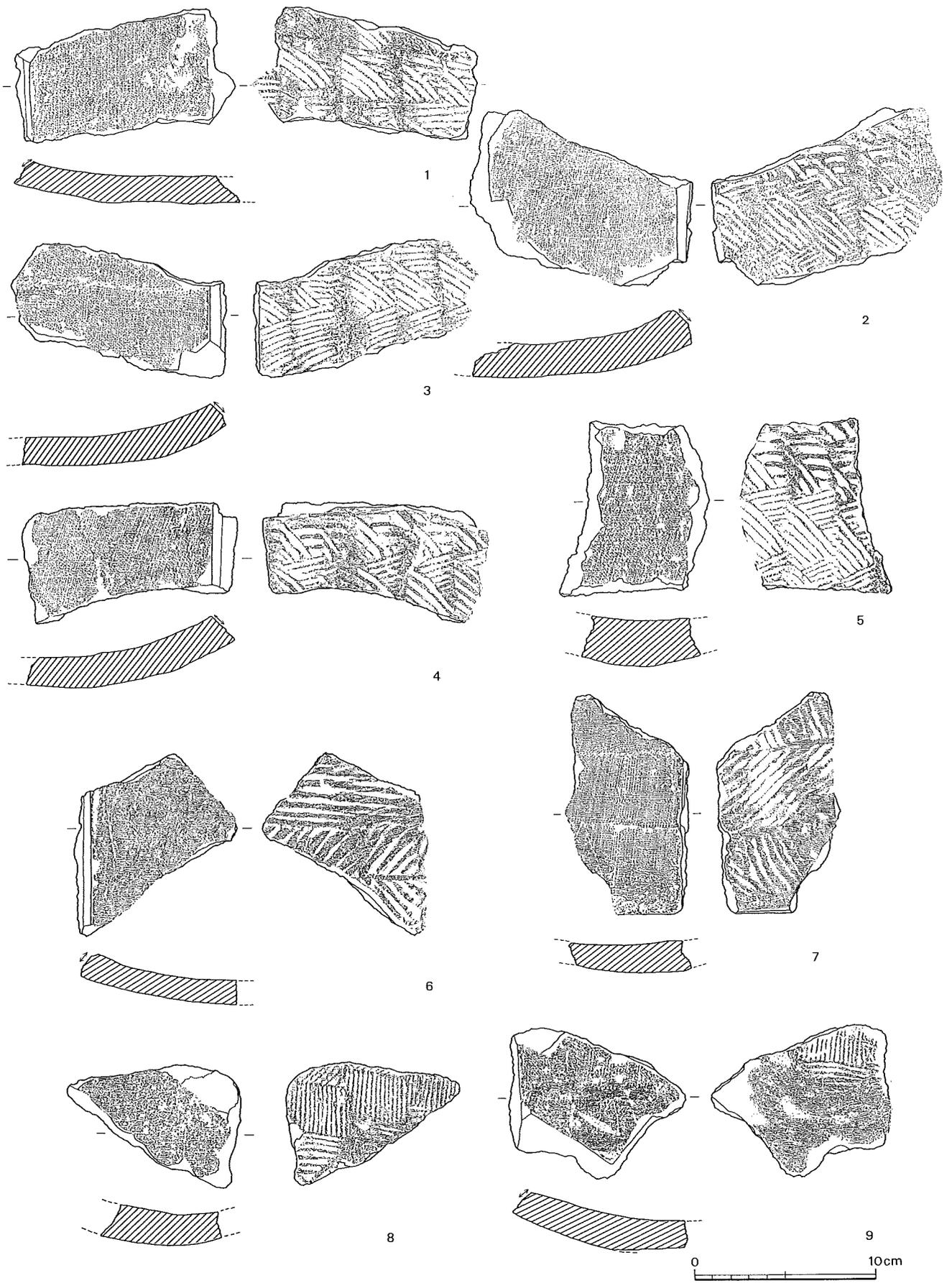
図版 番号	地点	層位	色 調		焼成	胎 土	調 整		技法	切断	備 考
			凹面	凸面			凹面	凸面			
43- 1	B-5	SK-3	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫(2mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	接合資料
43- 2	B-6	Ⅲ	青灰色	青灰色	堅緻	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
43- 3	TP.6	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	試掘資料
43- 4	12	I	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫(7mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	自然釉
43- 5	B-7	SX1	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
43- 6	12	I	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
43- 7	B-6	Ⅵ	青灰色	青灰色	良好	小礫(5mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
43- 8	B-8	池内	青灰色	青灰色	良好	小礫(5mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕			
44- 9	A-5	Pit 32	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	自然釉
44-10	10	Ⅱ	青黒色	青黒色	甘い	小礫(8mm前後)	不明	不明	不明		
44-11	15	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
44-12	B-5	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
44-13	TP.3	表採	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	試掘資料
44-14	A-5	表採	青灰色	青灰色	良好	小礫(8mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
44-15	B-5	Ⅵ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	

第15表 朝鮮系瓦観察表

平瓦

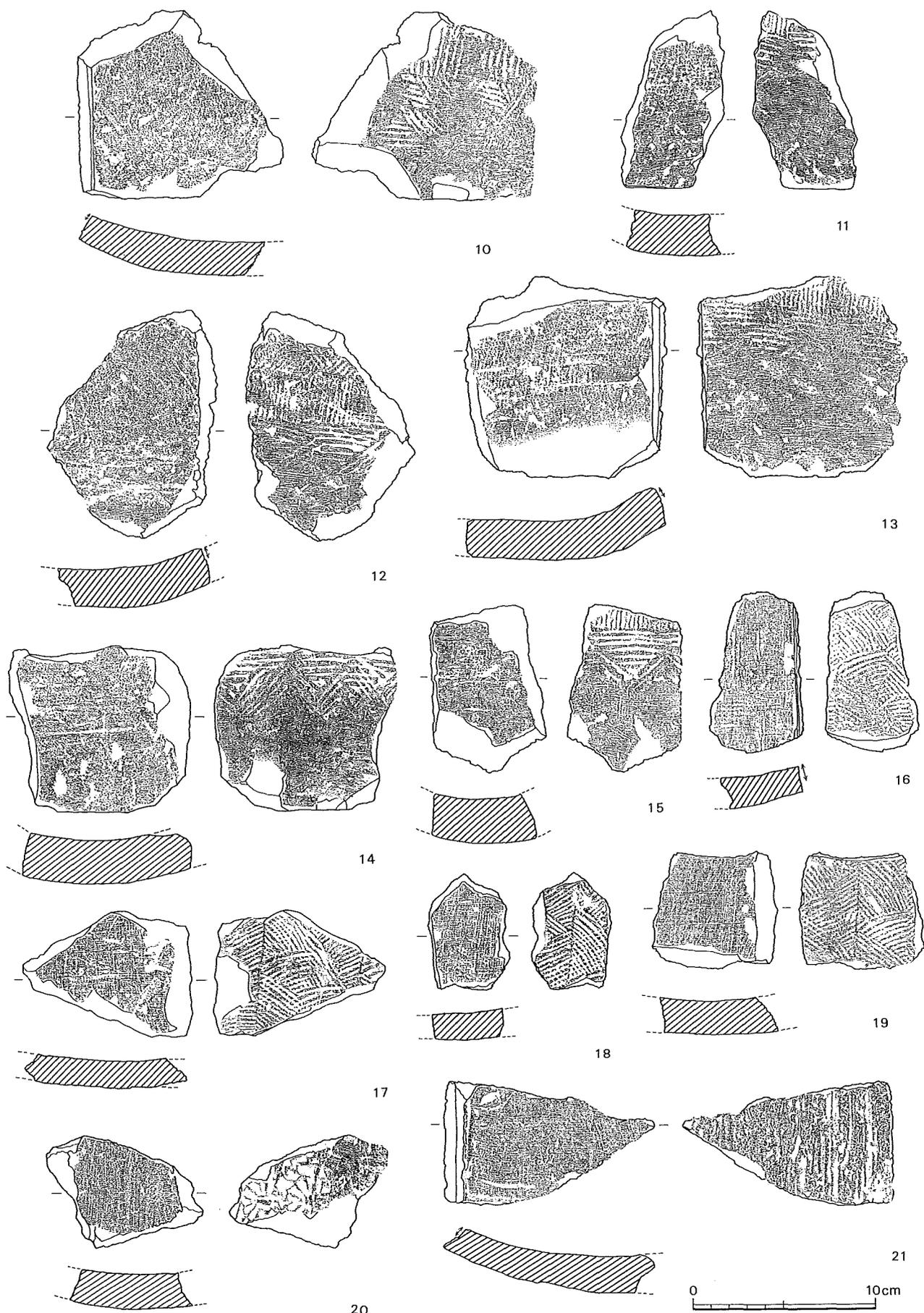
丸瓦同様完形は確認されていない。すべて断片的な平瓦である。基本的に凸面の叩きは叩きしめ・ナデ調整、凹面は布目圧痕が確認される。

1の断面幅は2cm前後。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経8・緯8本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割断面の幅は約5mm。2の断面幅は約2.7cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経11・緯11本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割断面の幅は約1cm。3の断面幅は約2.2cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経9・緯8本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割断面の幅は約1cmとなる。4は接合資料。断面幅は約2cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内における布目の経緯数は、経10・緯10本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割断面の幅は約1cm。5の断面幅は約3cm。凹面に布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は磨滅のため不明。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。6の断面幅は1.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは魚骨文と直線文が確認される。直線文は短軸に並行している。7の断面幅は1.5cm。凹面は布目圧痕が確認され、広端あるいは狭端部にナデ調整が認められる。凸面の叩きは魚骨文が確認される。分割断面の幅は約5mm。8の断面幅は約2cm。凹面は布目圧痕が確認されるが、ナデ調整のため布目の経緯数は不明である。凸面の叩きは直線文が確認される。長軸・短軸に並行、および斜走する直線文が認められる。9の断面幅は2.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。短軸に並行したナデが部分的に認められる。布目の経緯数はナデ・磨滅のため不明。凸面の叩きは長軸・短軸に並行する直線文が確認される。短軸並行の直線文は三角形になす。部位は広端あるいは狭端部に近いと思われる。分割断面の幅は約6mm。10の断面幅は2.3cm、広端・狭端部幅は1.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。ナデ調整のため布目の経緯数は不明。凸面の叩きは長軸・短軸に並行する直線文が確認される。斜走する直線文も確認される。部位は広端あるいは狭端部になる。分割断面の幅は約4mm。11の断面幅は約2.5cm。部位は広端あるいは狭端部となり、先端部の幅は約1.5cm。布目の経緯数は磨滅のため不明。凸面の叩きは、長軸・短軸に並行する直線文が部分的に確認される。

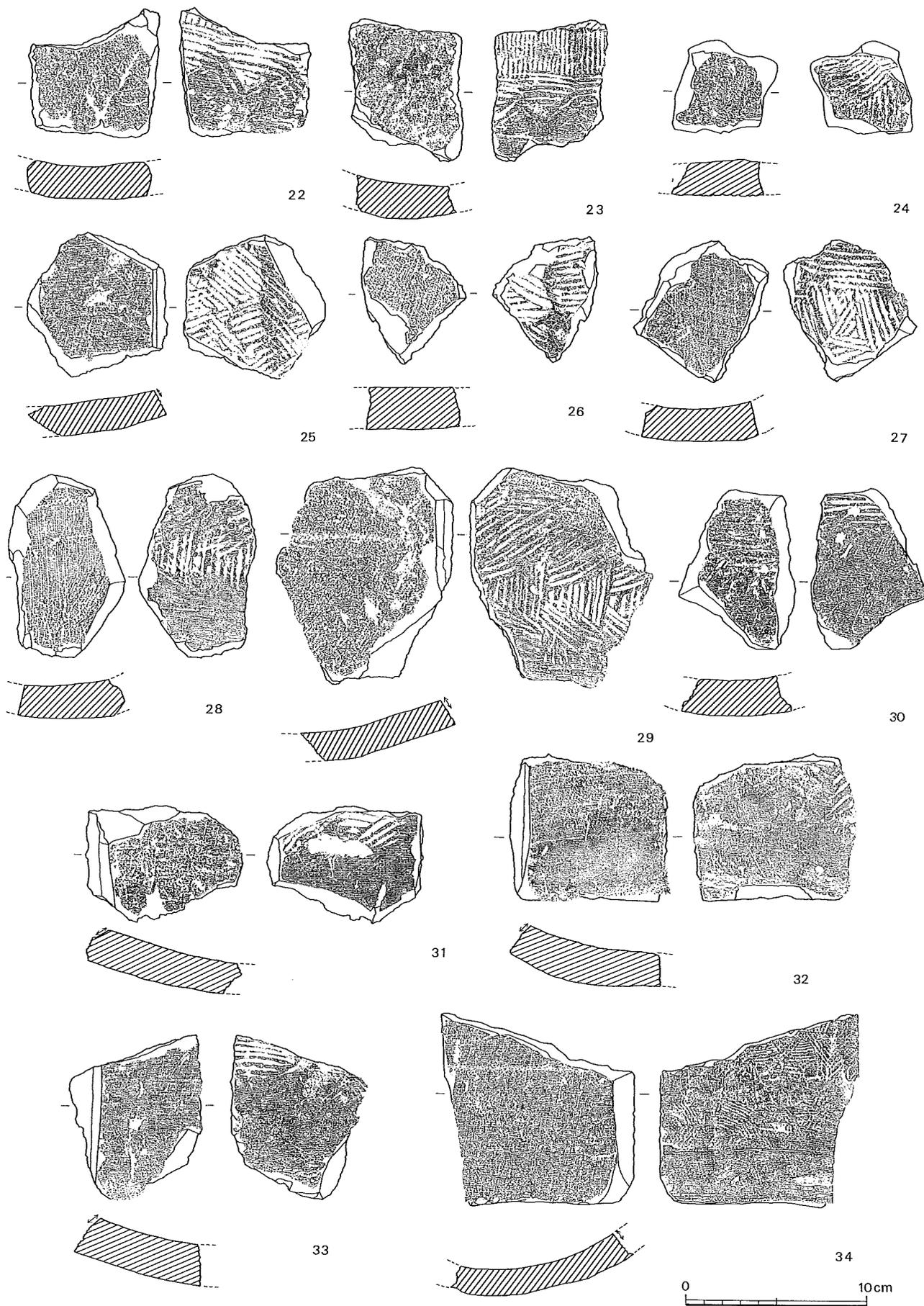


第45図 朝鮮系平瓦実測図① (S=1/4)

短軸に並行する直線文は三角形をなすと思われる。分割截線は約 1 cm。12の断面幅は約2.5cm。広端あるいは狭端部と思われ、先端部の幅は約1.5cm。凹面は布目圧痕が確認されるが、ナデあるいは磨滅のため布目の経緯数は不明。凸面の叩きは直線文が確認される。直線文は長軸・短軸に並行、斜走する。分割截面の幅は約 1 cm。13の断面幅は約 3 cm。部位は広端・狭端部と思われる。凹面は布目圧痕が確認される。ナデまたは磨滅のため布目の経緯数は不明。凸面の叩きは長軸・短軸に並行する直線文が確認される。短軸並行の直線文は三角形を構成する。分割截面の幅は約 6 mm。14の断面幅は約2.8cm。部位は広端・狭端部と思われ、先端部の幅は約1.5cmとなる。凹面は布目圧痕が確認される。経緯数は不明。凸面の叩きは短軸に並行する直線文が確認される。直線文は三角形をなす。分割截面の幅は 1 cm。15の断面幅は約 3 cm。広端・狭端部に近い部位と思われる。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデのため不明。凸面の叩きは長軸・短軸に並行する直線文で、短軸の直線文は三角形をなす。16の断面幅は約 2 cm。凹面は布目圧痕が確認される。1 平方cm内の布目の経緯数は、経10・緯16本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割截面の幅は約 1 cm。17の断面幅は約 2 cm。全体的に磨滅が著しい。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数は不明。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。18の断面幅は約 2 cm。凹面は布目圧痕が確認される。1 平方cm内の布目の経緯数は、経12・緯12本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。19の断面幅は約2.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。1 平方cm内の布目の経緯数は、経9・緯13本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。20の断面幅は約 2 cm。凹面は布目圧痕が確認される。1 平方cm内の布目の経緯数は、経10・緯10本となる。凸面の叩きは、小破片であるが花文が確認される。21の断面幅は約 2 cm。凹面は布目圧痕が確認されるが、布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは長軸に沿って条線が確認される。分割截面の幅は約 9 mm。22の断面幅は約 2 cm。広端・狭端部に近い部位と思われる。凹面は布目圧痕が確認されるが、布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは長軸・短軸に並行する直線文が確認され、短軸に並行する直線文は三角形をなす。23の断面幅は約2.3cm。広端・狭端部に近い部位と思われる。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整により不明。凸面の叩きは長軸・短軸に並行する直線文が確認される。また部分的に斜走する直線文も認められる。24の断面幅は約 2 cm。凹面は布目圧痕が確認されるが、布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは小破片ではあるが、魚鱗文と思われる。25の断面幅は約2.2cmと思われる。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整により不明。凸面の叩きは直線文が確認されるが魚鱗文の可能性が高い。分割截面の幅は約 5 mm。26の断面幅は約2.8cm。広端・狭端部に近い部位となる。1 平方cm内の布目の経緯数は、経 7・緯 7 本となる。凸面の叩きは小破片のため不明。直線文あるいは魚鱗文の可能性も考えられる。27の断面幅は2.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。1 平方cm内の布目の経緯数は、経11・緯11本となる。凸面の叩きは直線文が確認される。詳細な叩きは不明。28の断面幅は約2.3cm。広端・狭端部に近い部位と思われる。凹面は布目圧痕が確認される。1 平方cm内の布目の経緯数は、経 8・緯 9 本となる。凸面の叩きは直線文が確認される。ナデ調整のため確認が困難であるが、魚鱗文も加わる可能性も考えられる。29の断面幅は約 2 cm。広端・狭端部に近い部位と思われる。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整により不明。凸面の叩きは魚鱗・直線文が確認される。分割截面の幅は約 1 cm。30の断面幅は約2.5cm。部位は広端・狭端部と思われる。幅は欠損のため不明であるが、1.5cmと推定される。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯

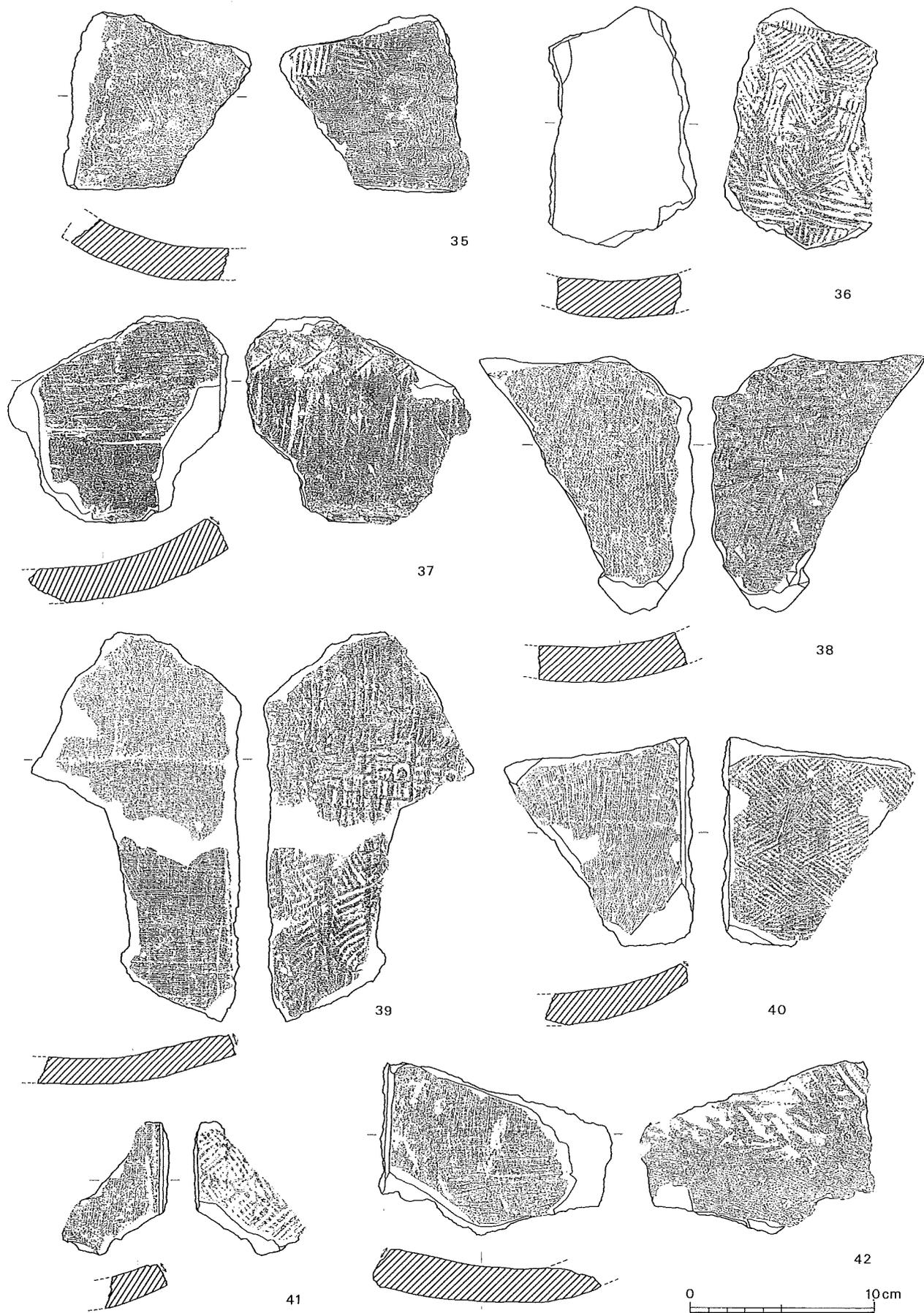


第46図 朝鮮系平瓦実測図② (S=1/4)

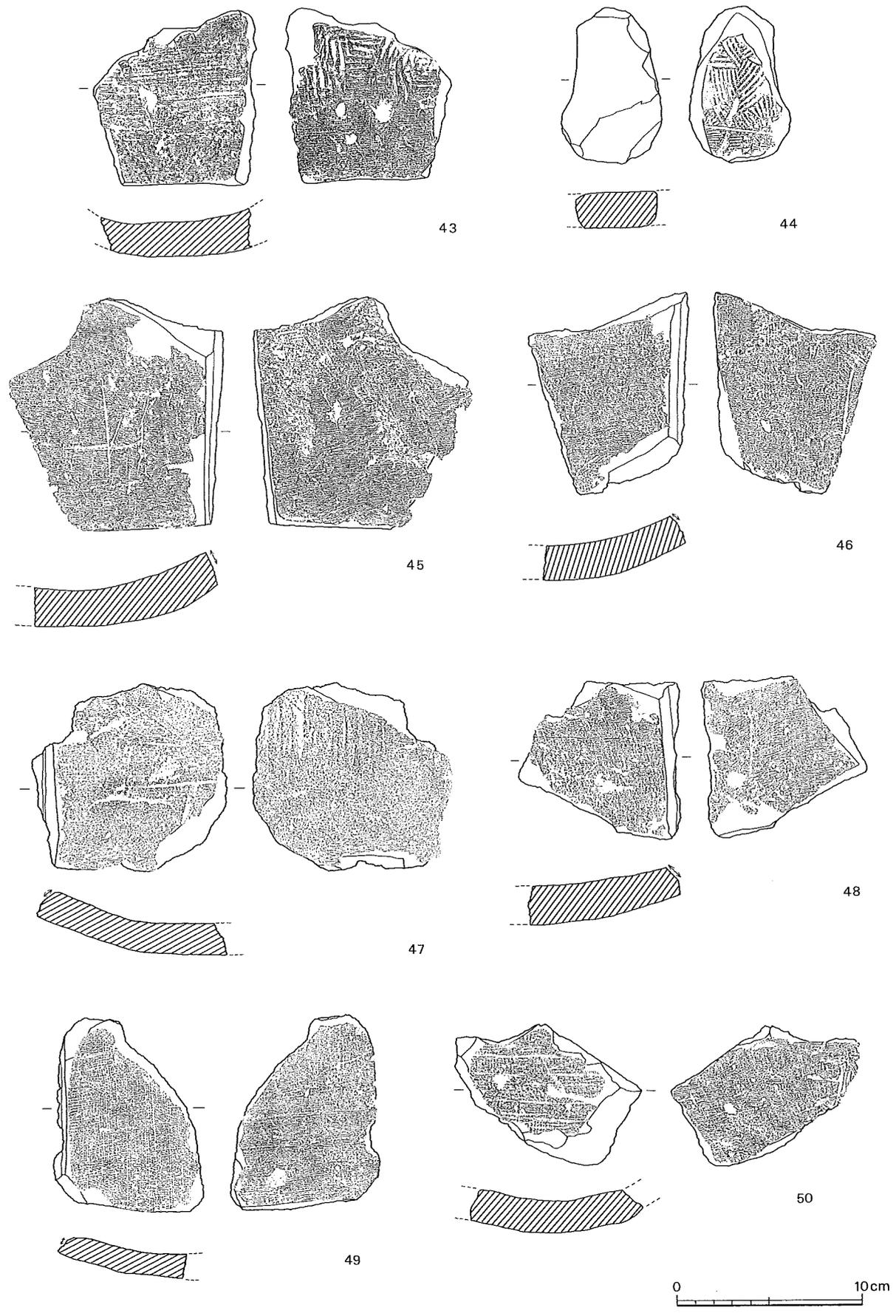


第47图 朝鮮系平瓦実測図③ (S=1/4)

数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは短軸に並行する直線文が確認され三角形をなす。31の断面幅は約2.5cm。広端・狭端部に近い部位と思われる。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは直線文が確認される。分割断面の幅は約7mm。32の断面幅は約2.3cm。部位は広端あるいは狭端部となる。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経8・緯9本となる。凸面の叩きは直線文と思われる。分割断面の幅は約8mm。33の断面幅は約3cm。部位は広端あるいは狭端部で、先端部の幅は約1cmとなる。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは部分的に短軸に並行する直線文が確認される。分割断面の幅は約8mm。34の断面幅は約2cm。部位は広端あるいは狭端部で、先端部の幅は約1.5cmとなる。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経14・緯13本となる。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。分割断面の幅は約5mm。35の断面幅は約2.5cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約1.3cm。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整により不明。凸面の叩きは直線文が確認される。長軸・短軸に並行、斜走する直線文が認められる。分割断面の幅は確認されるが磨滅のため不明。36の断面幅は約2.5cm。凹面は布目圧痕が確認される。布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは基本的に直線文が確認される。長軸に・短軸に並行、また斜走する直線文である。部分的に「○」の叩き痕が2カ所認められるが、これは刻印の役割とも考えられる。37の断面幅は約2.5cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約1cm。凹面は布目圧痕が確認されるが、ナデ調整のため布目の経緯数は不明。凸面の叩きは逆「く」の字形の叩きが確認される。また長軸に並行する直線文も確認される。分割断面の幅は1.3cm。38の断面幅は約2.5cm。部位は広端あるいは狭端部となる。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経8・緯8本となる。凸面の叩きは直線文と思われるが、ナデ調整のため断定はできない。39の断面幅は約2.3cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経10・緯10本となる。凹面に「T」の字状のくぼみが認められるが、これは模骨等の影響と思われる。凸面の叩きは魚鱗あるいは魚骨文と格子目文が確認される。また「○」の叩き痕が認められるが、36同様刻印の可能性も考えられる。分割断面の幅は約1.5cm。40の断面幅は約2cm。凹面は布目圧痕が確認されるが、ナデ調整のため経緯数は不明。凸面の叩きは綾杉文が確認される。分割断面の幅は約4mm。41の断面幅は約2cm。凹面は布目圧痕が確認される。1平方cm内の布目の経緯数は、経8・緯8本となる。凸面の叩きは直線文が確認されるが、小破片のため詳細は不明。分割断面の幅は約5mm。42の断面幅は約2.7cm。部位は広端あるいは狭端部となる。1平方cm内の布目の経緯数は、経8・緯11本となる。凸面の叩きは部分的であるが、魚鱗文と思われる。分割断面の幅は約8mm。43の断面幅は約2.5cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約1.8cm。経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩きは長軸・短軸に並行、斜走する直線文が確認される。44の断面幅は約2.5cm。凹面の布目圧痕は磨滅のため不明。凸面の叩きは魚鱗文が確認される。また弁花状の叩きも確認される。45の断面幅は約3cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約1cm。布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面で叩きの文様は確認されない。分割断面の幅は約7mm。46の断面幅は約2cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約1cm。布目の経緯数はナデ調整のため不明。凸面の叩き文様は確認されない。分割断面の幅は約1cm。47の断面幅は約2cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は1.3cm。布目の経緯数はナデ調整・磨滅のため不明。凸面の叩きは長軸に並行する直線文



第48図 朝鮮系平瓦実測図④ (S=1/4)



第49図 朝鮮系平瓦実測図⑤ (S=1/4)

図版 番号	地点	層位	色 調		焼成	胎 土	調 整		技法	切断	備 考
			凹面	凸面			凹面	凸面			
45-1	A-5	Ⅵ	青灰色	暗青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
45-2	12	I	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
45-3	B-10	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(8mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
45-4	A-5	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
45-5	B-6	Pit 34	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕			
45-6	12	I	灰白色	灰白色	良好	小礫(2mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
45-7	A-5	Ⅵ	灰白色	灰白色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕			
45-8	12	I	青黒色	青黒色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕			
45-9	11	Ⅱ	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
46-10		表採	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
46-11	B-6	Ⅲ	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫(5mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
46-12	B-5	Ⅵ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
46-13	B-6	Ⅲ	暗青灰色	青灰色	良好	小礫(5mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
46-14	12	I	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
46-15	12	I	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕			
46-16	B-5	Ⅵ	青灰色	青灰色	良好	小礫(2mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
46-17	12		灰白色	灰白色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻?	内側	
46-18	B-5	Ⅵ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕			
46-19	B-6	Ⅵ	明青灰色	明青灰色	良好	小礫(7mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕			
46-20	B-4	Ⅲ	青灰色	明青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕			
46-21	12	羽山 I	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
47-22	B-5	Ⅵ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕			
47-23	12	I	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕			
47-24	B-1	Ⅲ	暗青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
47-25	12		青灰色	青灰色	良好	小礫(2mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
47-26	10	池内	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕			
47-27	10	Ⅱ	明青灰色	明青灰色	良好	小礫(2mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
47-28	13	落込	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
47-29	12	I	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
47-30	B-3	Ⅵ	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ			
47-31	A-5		灰白色	灰白色	良好	小礫(8mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
47-32	A-5	Ⅵ	明青灰色	明青灰色	良好	小礫(4mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
47-33	12	I	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫(3mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
47-34	A-5	Pit 32	青灰色	青灰色	堅緻	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
48-35	B-7	SX1	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
48-36	B-6	Ⅱ	青灰色	青灰色	良好	小礫(5mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ			
48-37	12	I	青灰色	青灰色	良好	小礫(8mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
48-38	12	I	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕			
48-39	B-6	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	接合資料
48-40	B-5	Ⅲ	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	小礫(2mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
48-41	11	Ⅱ	青灰色	青灰色	良好	小礫(2mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
48-42		表採	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
49-43	B-10	Ⅲ	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫(7mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
49-44	12	I	浅黄橙色	浅黄橙色	甘い	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
49-45	B-6	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(8mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
49-46	B-6	Ⅲ	明青灰色	明青灰色		小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕・ナデ	桶巻	内側	
49-47	TP.6	Ⅲ	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	試掘資料
49-48	B-1	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(3mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	
49-49	TP.5	Ⅲ	青灰色	青灰色	良好	小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	試掘資料
49-50		表採	明赤褐色	明赤褐色		小礫(4mm前後)	模骨・布目痕・ナデ	叩き痕	桶巻	内側	

第16表 朝鮮系平瓦観察表

が確認される。分割断面の幅は約 8 mm。48の断面幅は約2.7cm。布目の経緯数はナデ調整により不明。凸面の叩き文様は確認されない。分割断面の幅は約 1 cm。49の断面幅は約 2 cm。部位は広端あるいは狭端部となる。先端部の幅は約1.5cm。1 平方cm内の布目の経緯数は、経 7・緯 9 本となる。凸面の叩き文様は確認されない。分割断面の幅は約 5 mm。50の断面幅は約 2 cm。凹面は布目圧痕が確認される。1 平方cm内の布目の経緯数は、経10・緯13本となる。凸面の叩き文様は確認されない。

小結

本遺跡出土の朝鮮系瓦はすべて丸・平瓦のみで、軒丸・軒平瓦は確認されなかった。本報告分はすべて破片であるため、軒丸・軒平瓦の破片が混同されている可能性も考えられる。しかし軒丸・軒平瓦の瓦当は確認されなかった。

調整等は丸・平瓦ともに同様で、凹面は布目圧痕+ナデ調整・凸面の叩きは叩きしめ+ナデ調整が確認された。また凸面における叩き痕は、魚鱗・魚骨・綾杉・直線の文様が確認されている。叩き板は凸面に残る叩き痕よりも1まわり程度大きいものであったと思われる。布目の大小も各瓦間で異なり、経緯数もそれぞれで異なる数値を出した。前者は同一の型で作られていない可能性も考えられる。後者は布の本数が多いほど、その方向に張られたことを意味すると思われる。また出土瓦はすべて分割断面をもつものであり、断面・截線は凹面寄りに認められる。ことことは桶巻作りによって作られたことを意味し、粘土円筒分割法は佐原真のいう第Ⅰ・Ⅲ種の可能性が考えられる。(佐原 1972)

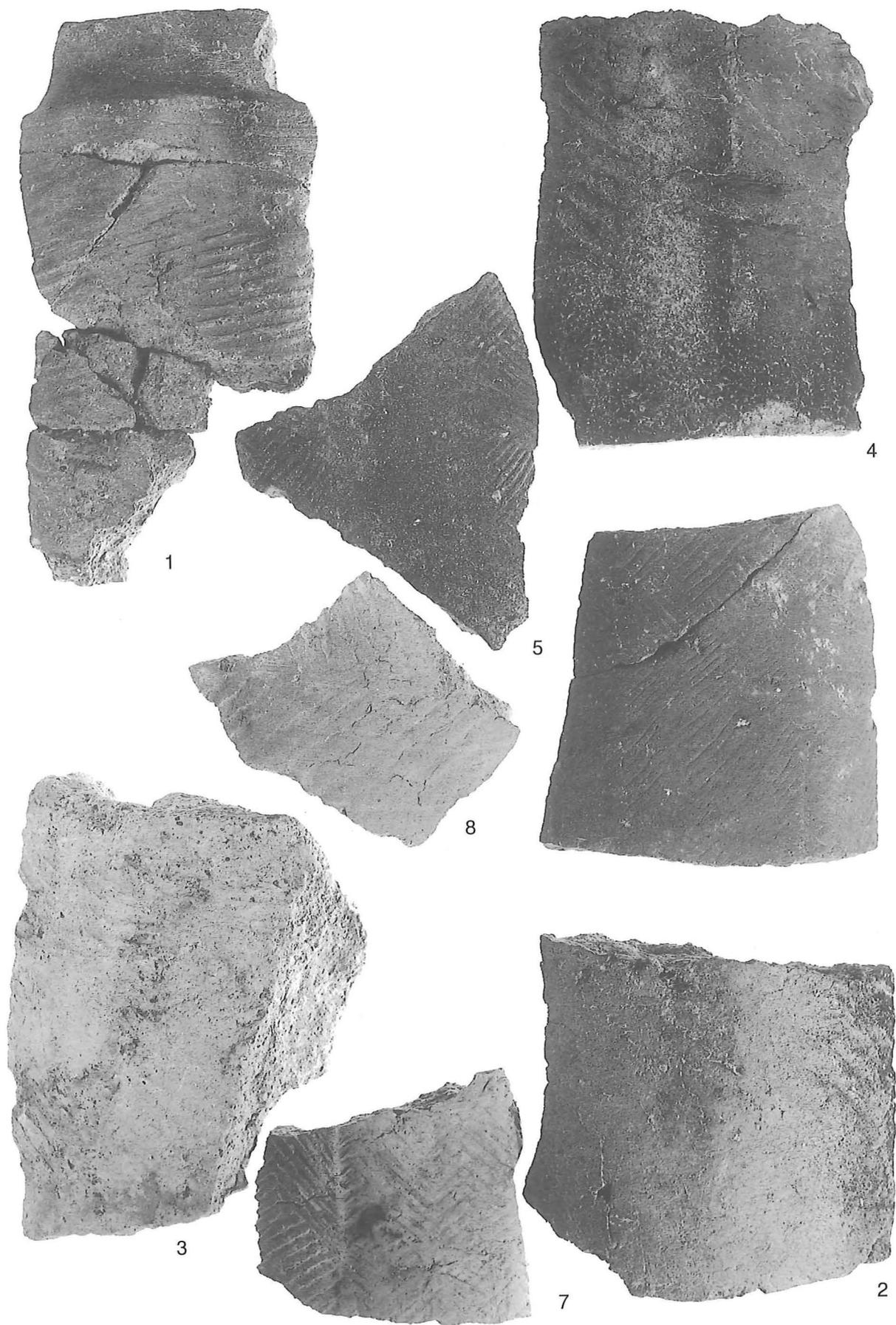
詳細な製作技法に至っては完形瓦が出土しなかったため不明である。今後の資料の増加に期待したい。(東 貴之)

【参考文献】

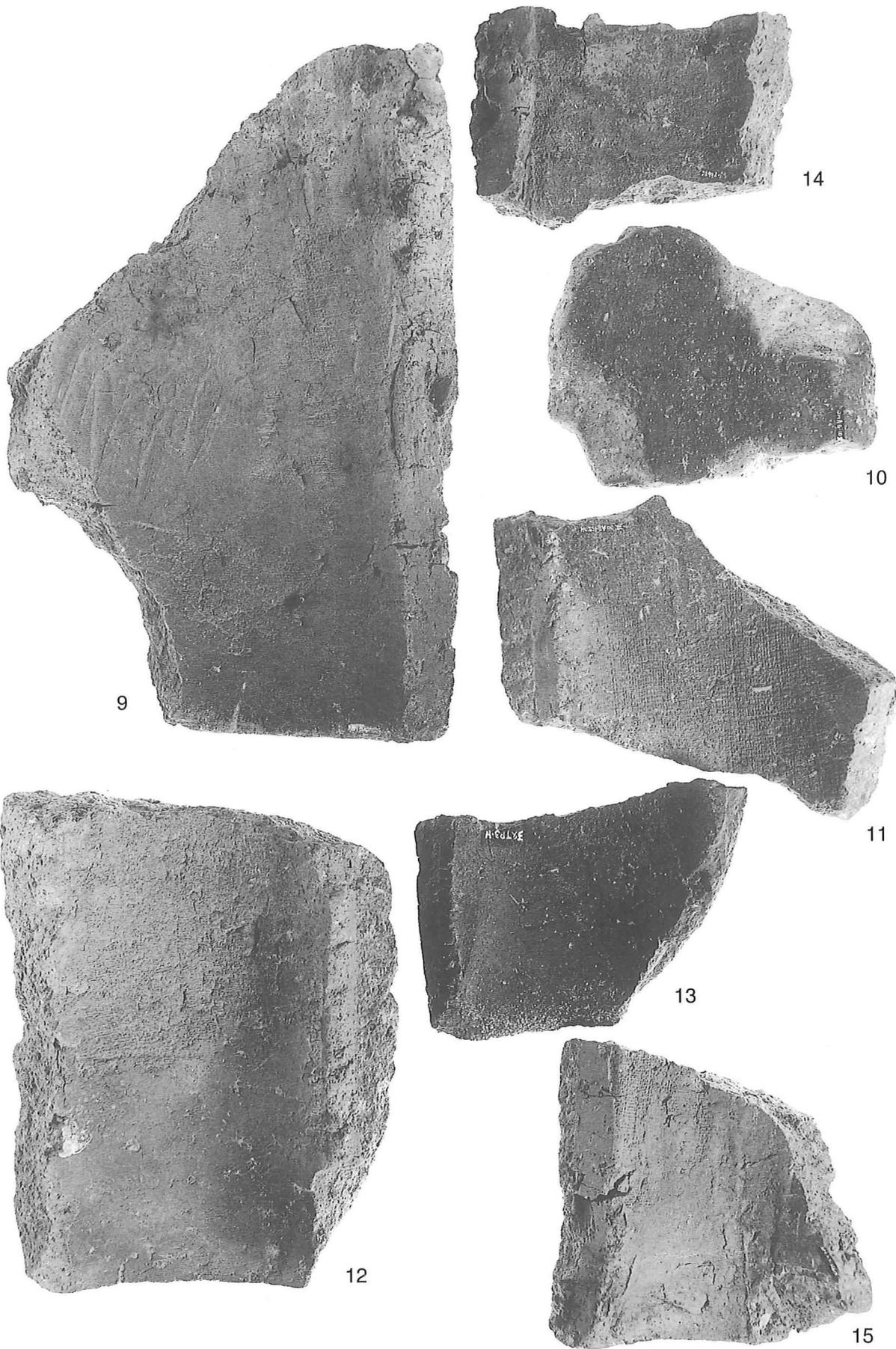
- 佐原 真 1972 「平瓦桶巻作り」 『考古學雑誌』 第58巻第2号 日本考古学会
- 正林 護 1985 『金石城』 巖原町文化財調査報告書第1集 巖原町育委員会
- 山崎信二 1993 「桶巻作り軒平瓦の製作工程」 『考古論集』 潮見 浩先生退官記念事業会
- 山崎敏昭・降矢哲男 1999 「瓦類」 『倭城の研究』 第3号 城郭談話会



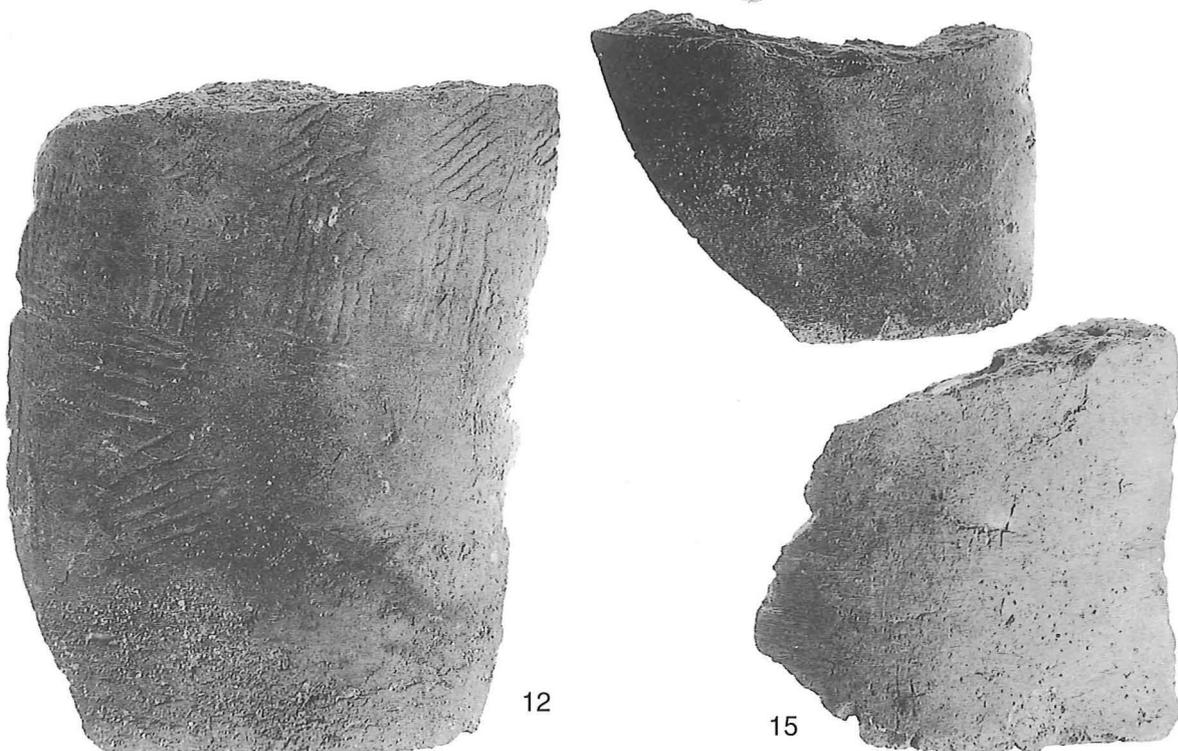
朝鮮系丸瓦①



朝鮮系丸瓦②



朝鮮系丸瓦③



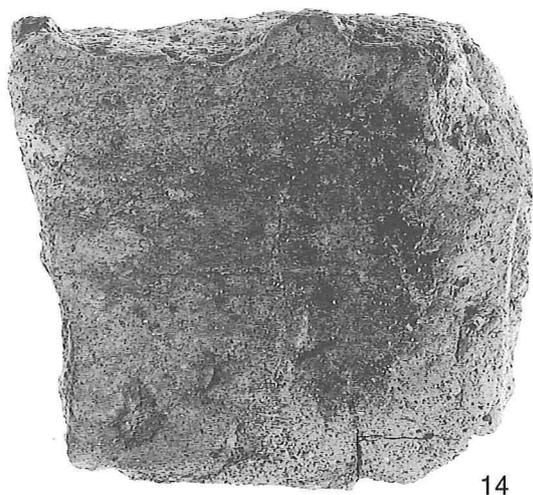
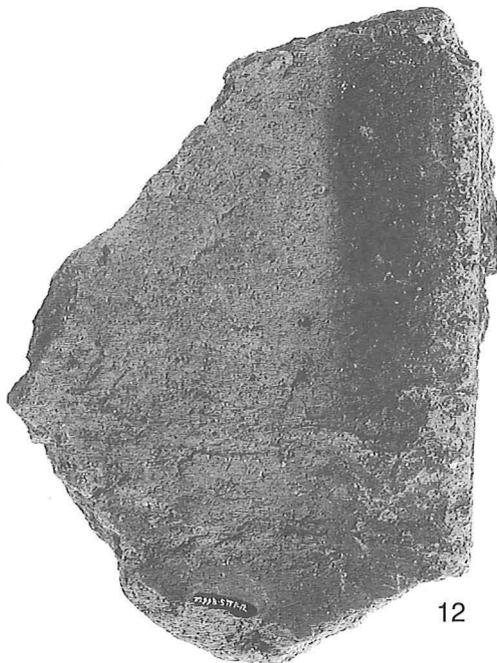
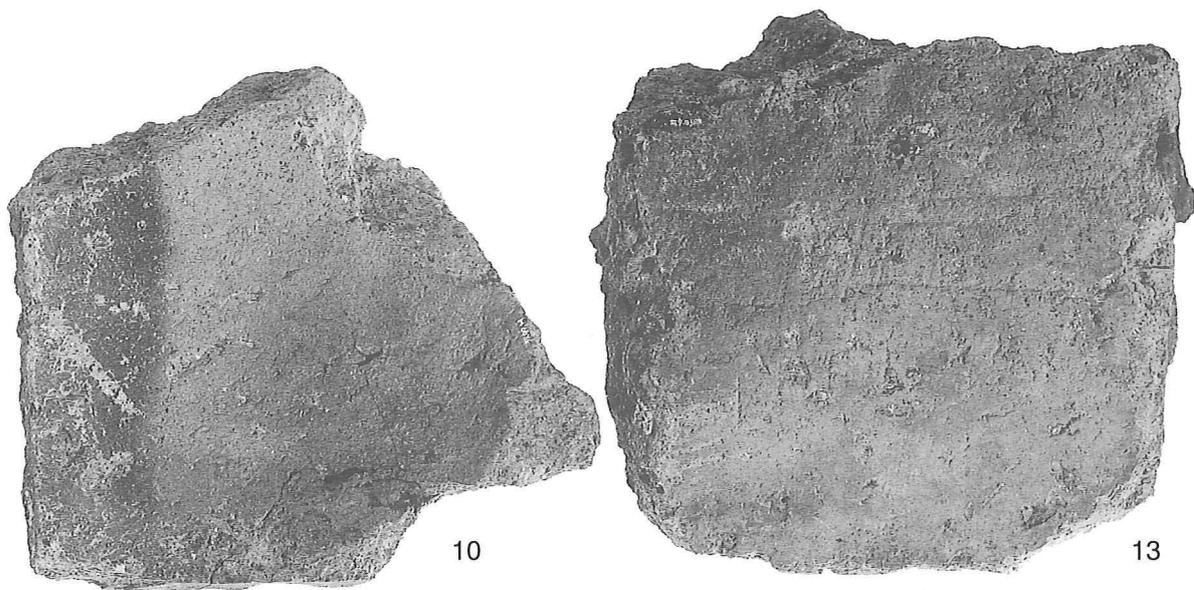
朝鮮系丸瓦④



朝鮮系平瓦①



朝鮮系平瓦②

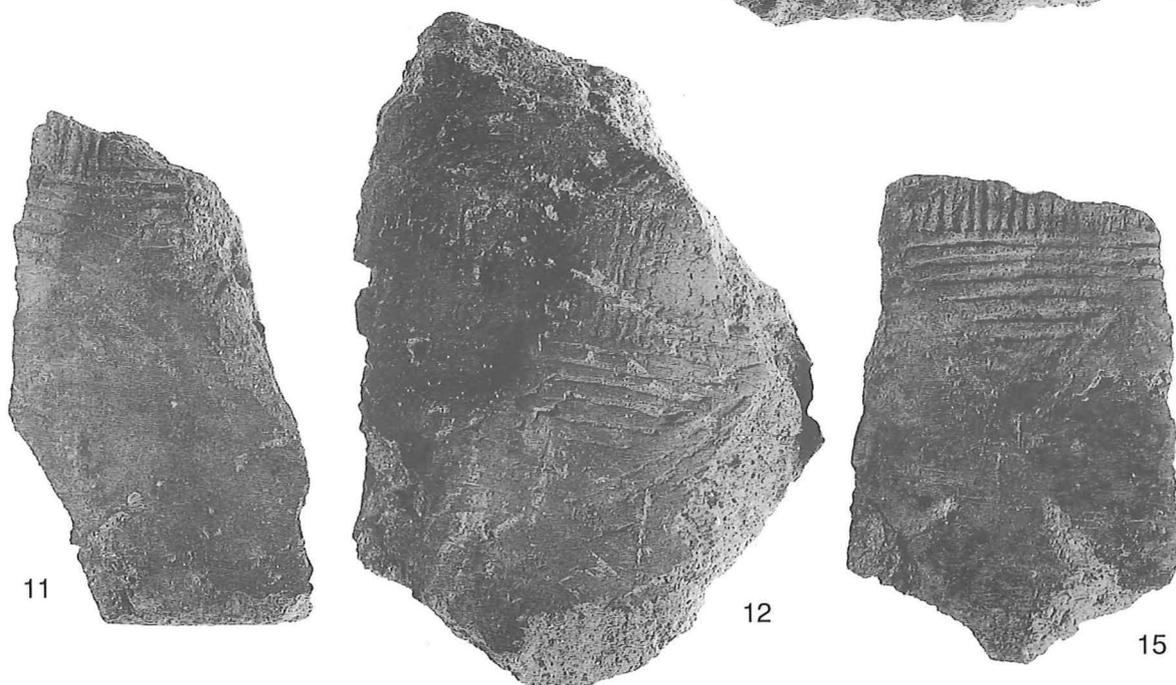


朝鮮系平瓦③



10

13



11

12

15

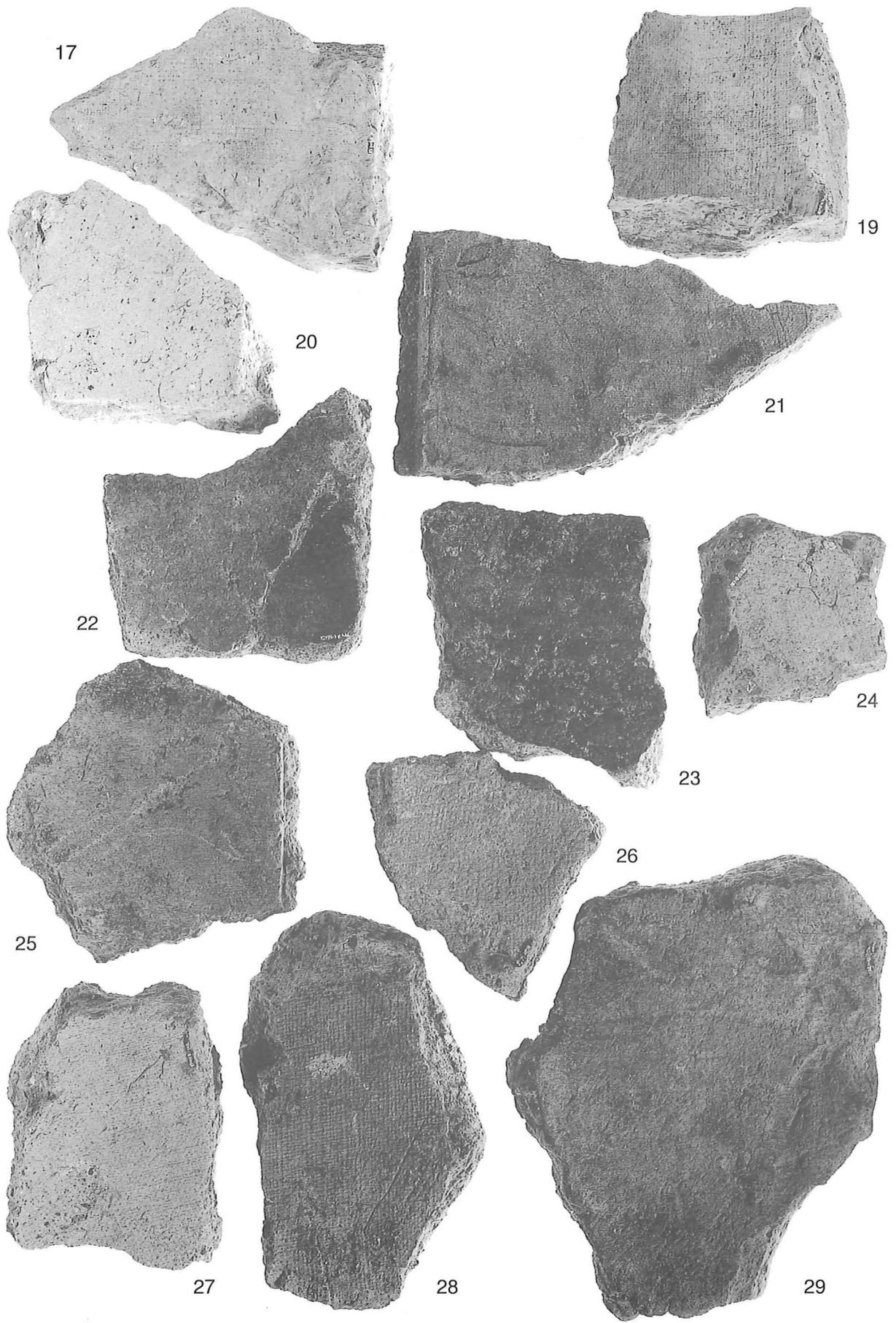


14

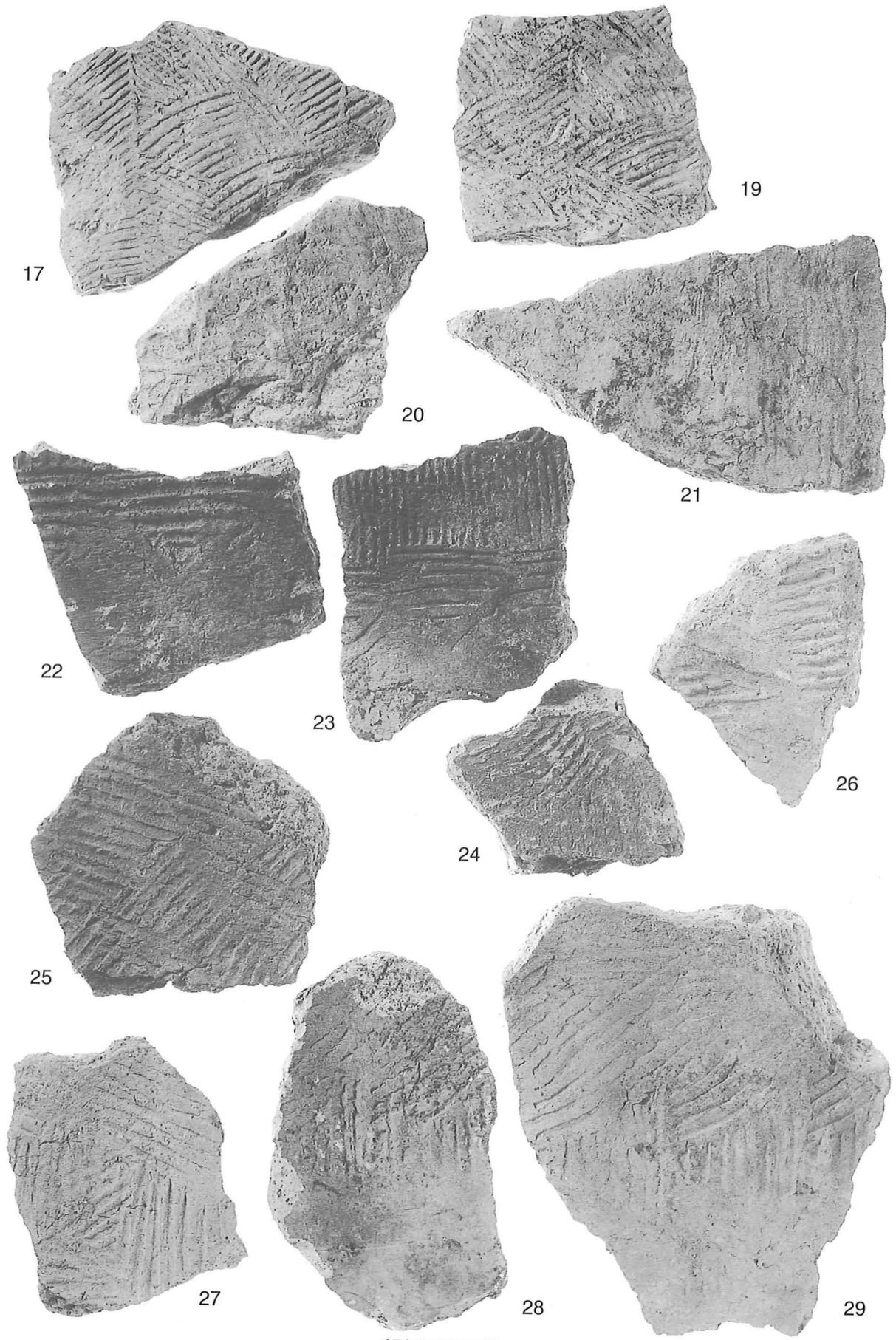
16

18

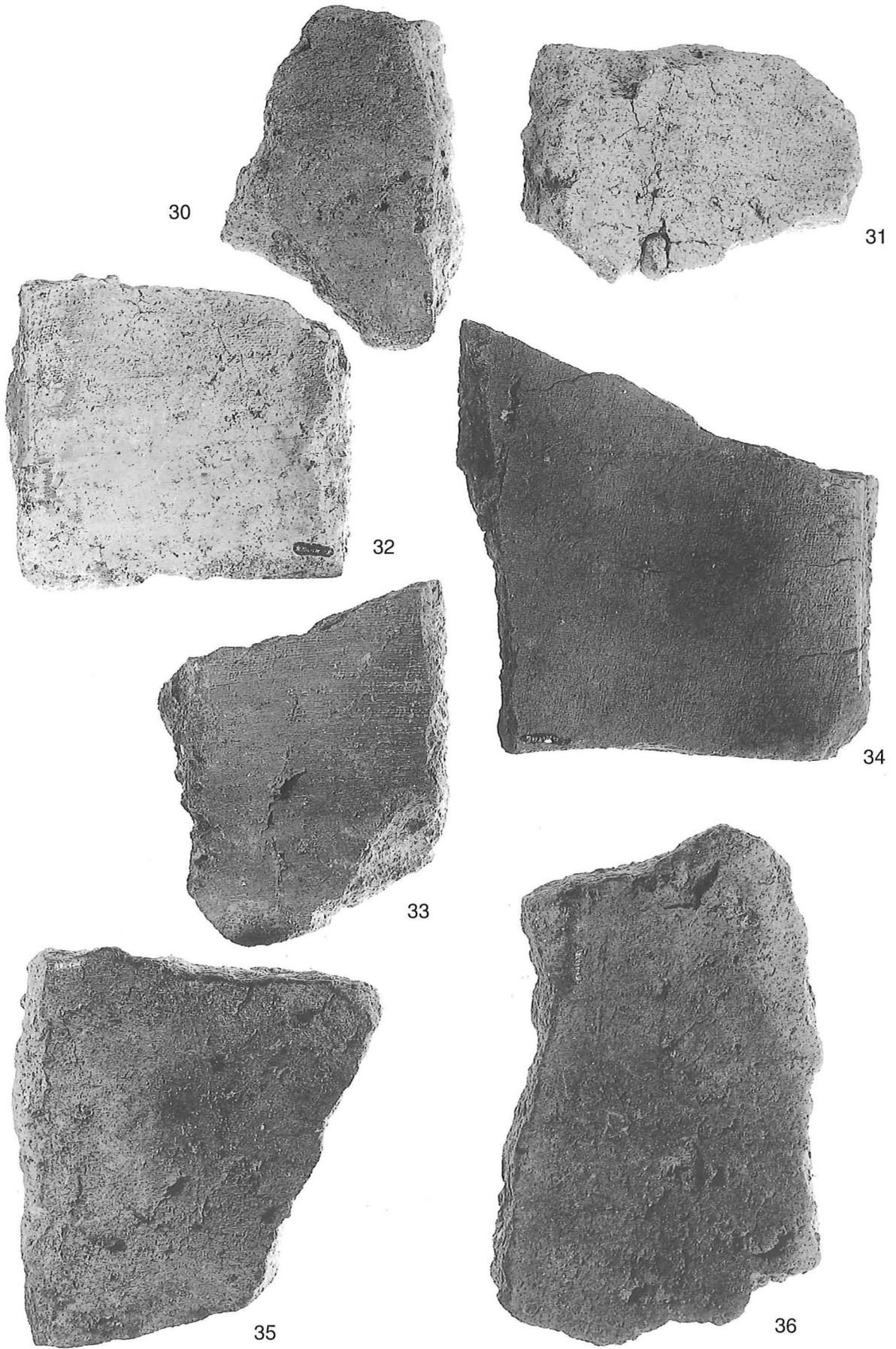
朝鮮系平瓦④



朝鮮系平瓦⑤



朝鮮系平瓦⑥



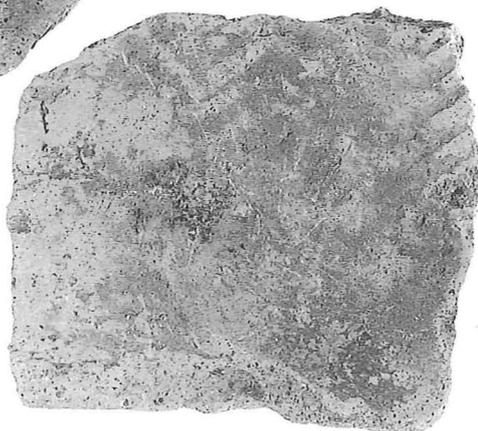
朝鮮系平瓦⑦



30



31



32



34



33



35



36

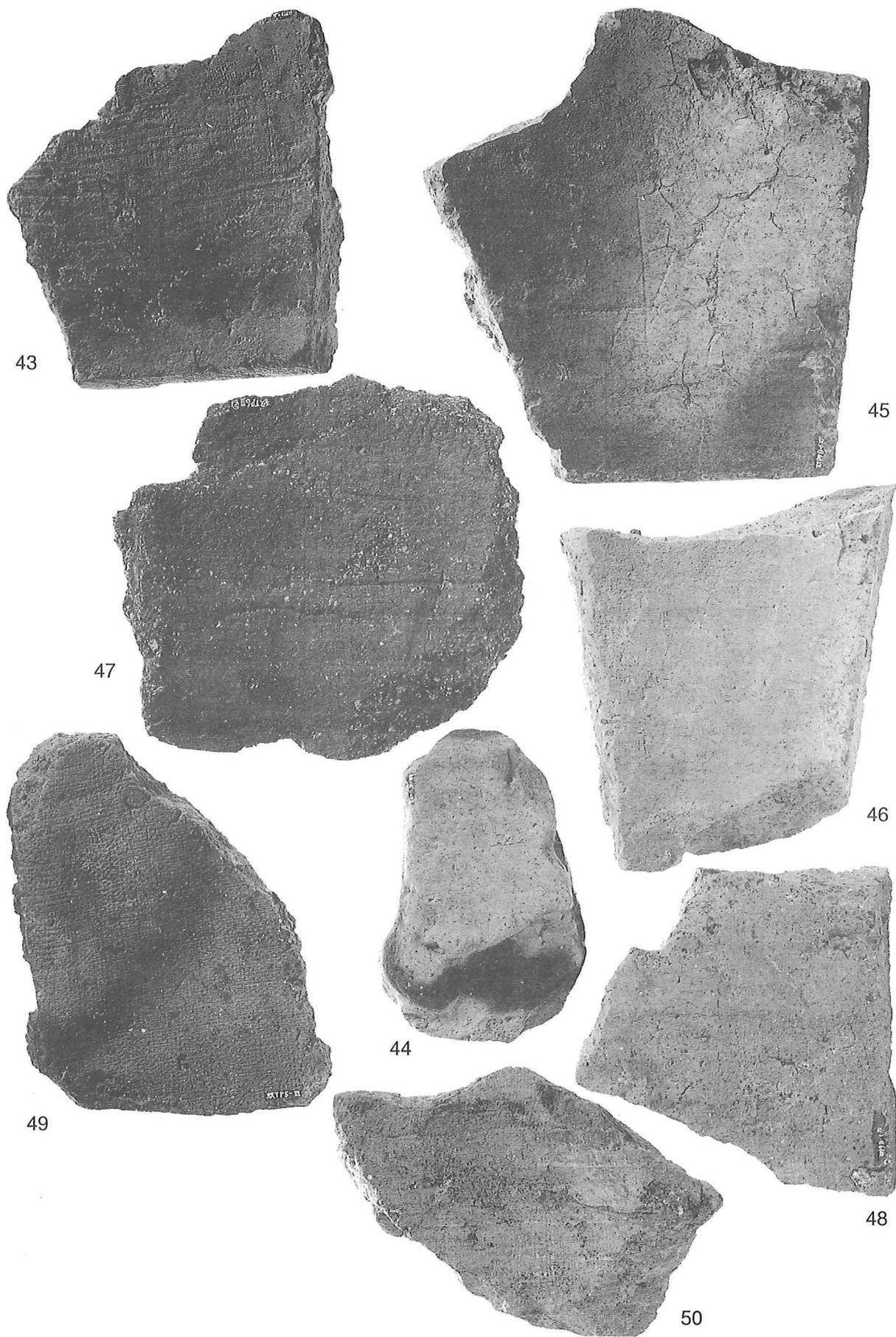
朝鮮系平瓦⑧



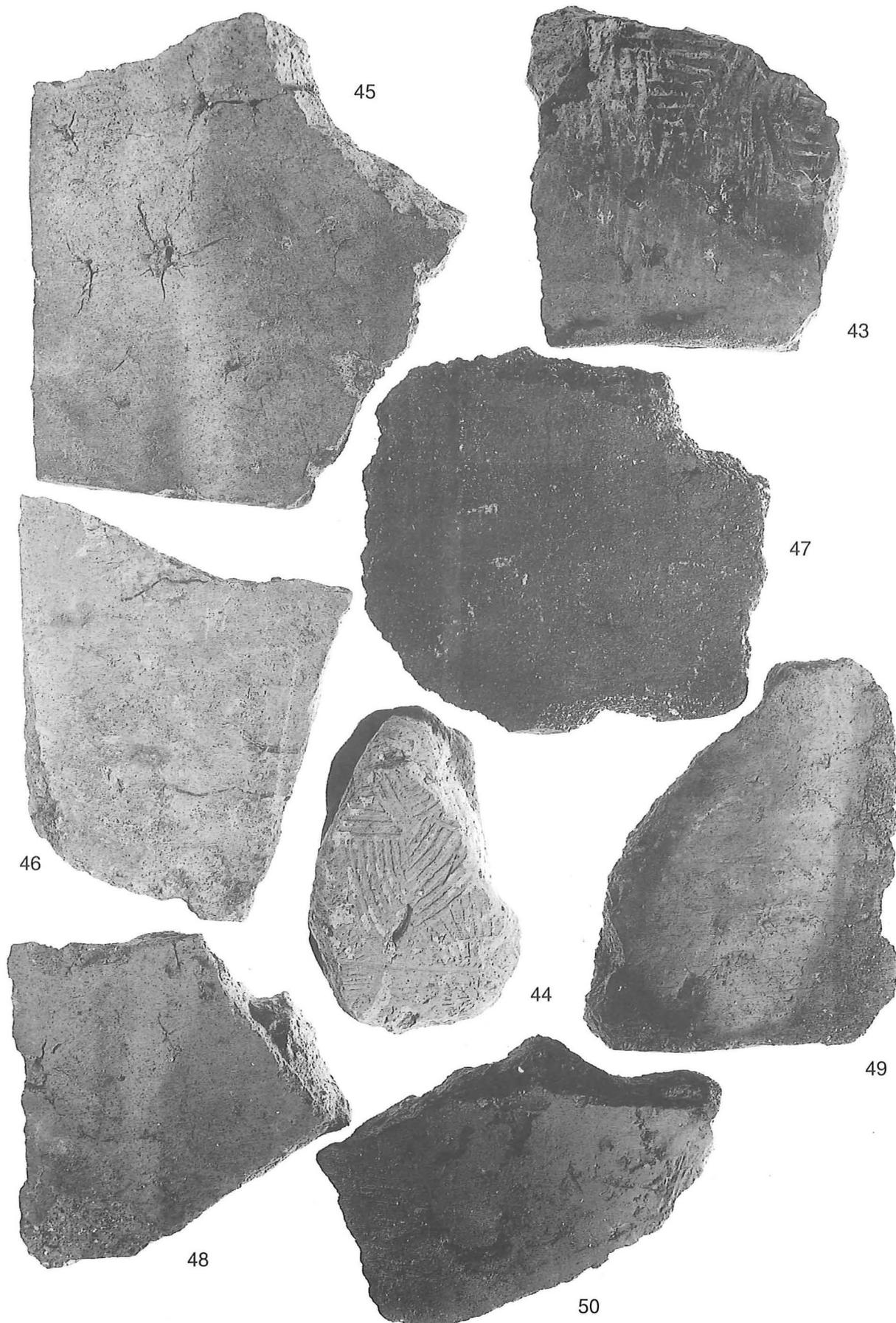
朝鮮系平瓦⑨



朝鮮系平瓦⑩



朝鮮系平瓦①



朝鮮系平瓦⑫

・近世瓦

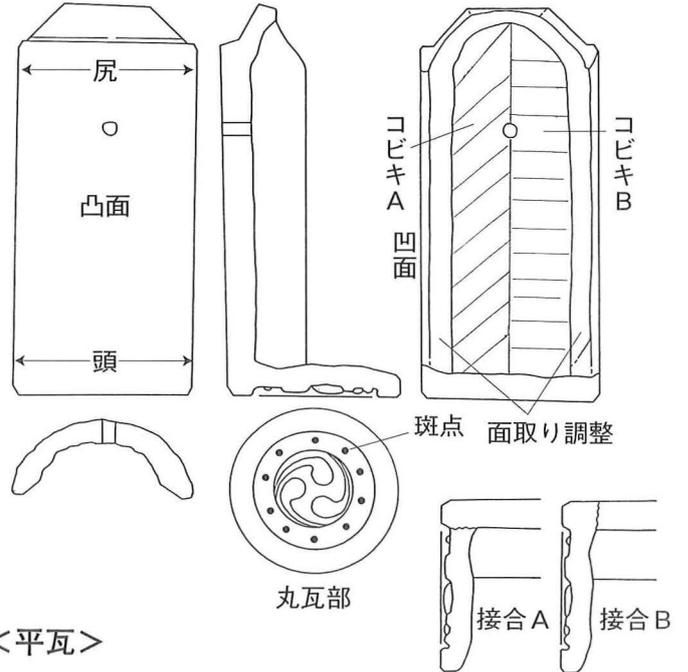
(第50図～第57図, 第17表～第21表)

今回の調査において多量の近世瓦が出土した。種別としては、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦など一般的な屋根瓦が確認されている。本報告では図化に耐えうる資料として軒丸瓦15点・軒平瓦7点・丸瓦4点・平瓦1点・棧瓦10点・その他の瓦1点を紹介する。尚、遺構に伴う出土が乏しく層位も明瞭でないため、層位別の分類は行わず器種別に分類している。ただ、20区から出土した瓦は建物遺構内から一括資料として出土している。各瓦の部分名称は右の表に従った。表中の「コビキ」とは瓦を粘土角材から切り取る際の糸切り法である。丸瓦凹面に斜め方向に緩やかな線が残る糸切り法を「コビキA」、平行した横筋が残る糸切り法を「コビキB」とした。また、文中に現れる「キラコ」とは滑石 (talc) 粉のことである。瓦当成形時にスタンプの剥がれを良くする為に使用されたとみられる。

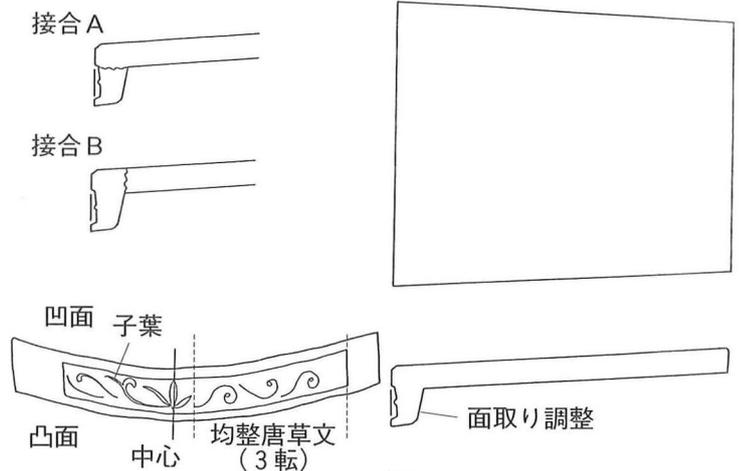
※第50図 瓦部位名称表は

『森岳城跡』—長崎県文化財調査報告書
166集—長崎県教育委員会を参考とした。

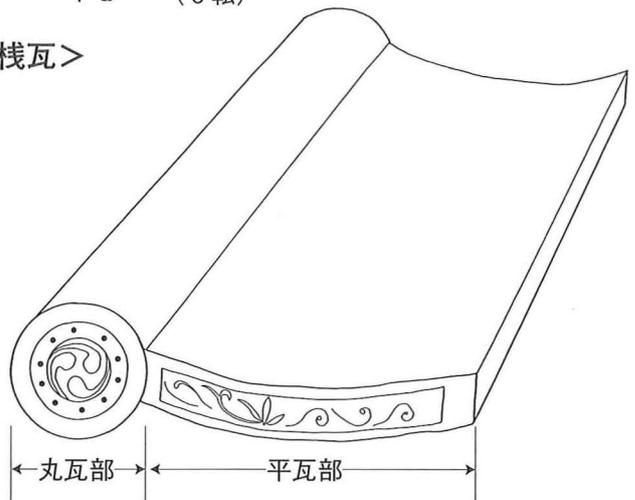
<軒丸瓦>



<平瓦>



<棧瓦>

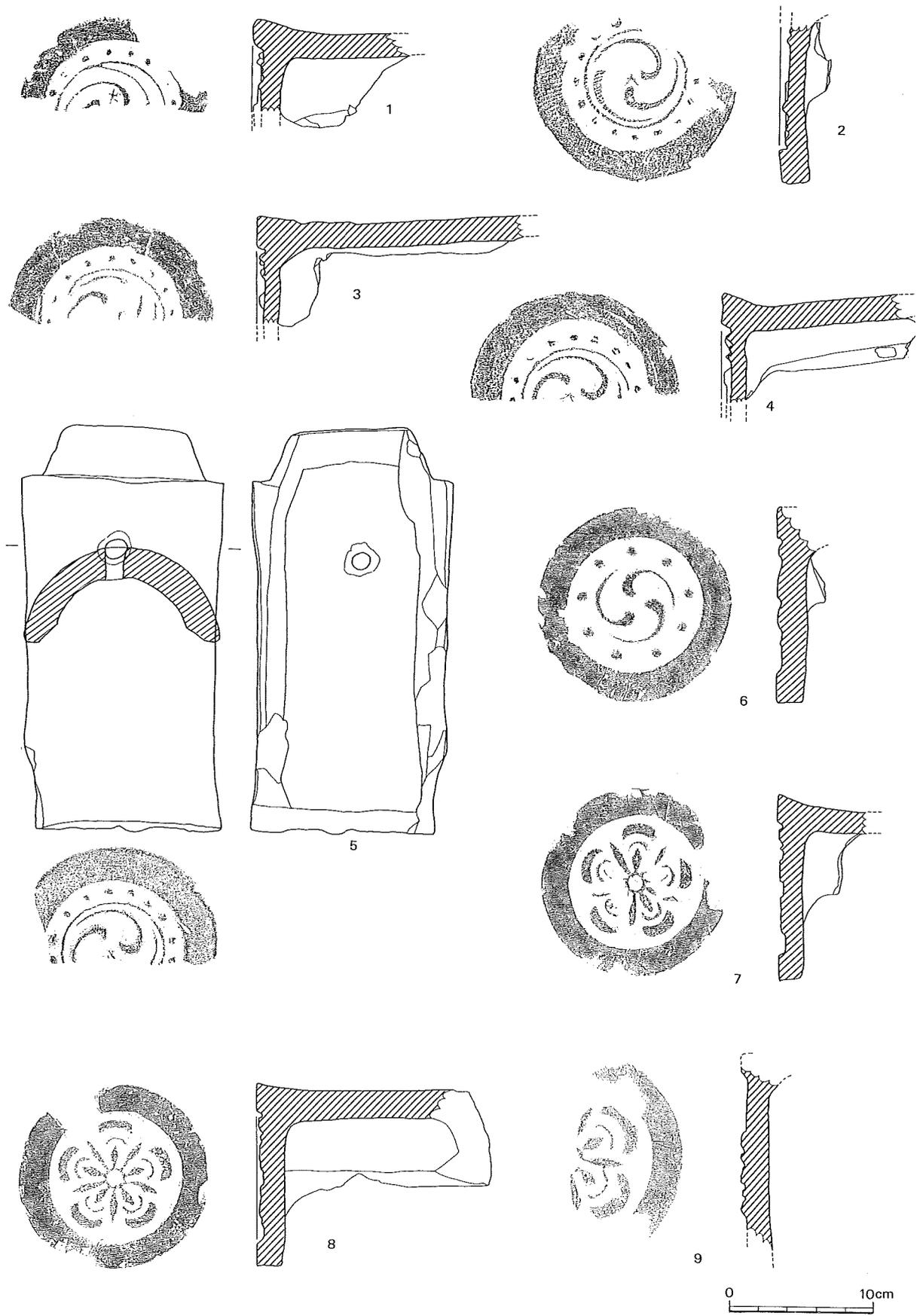


第50図 瓦部位名称表

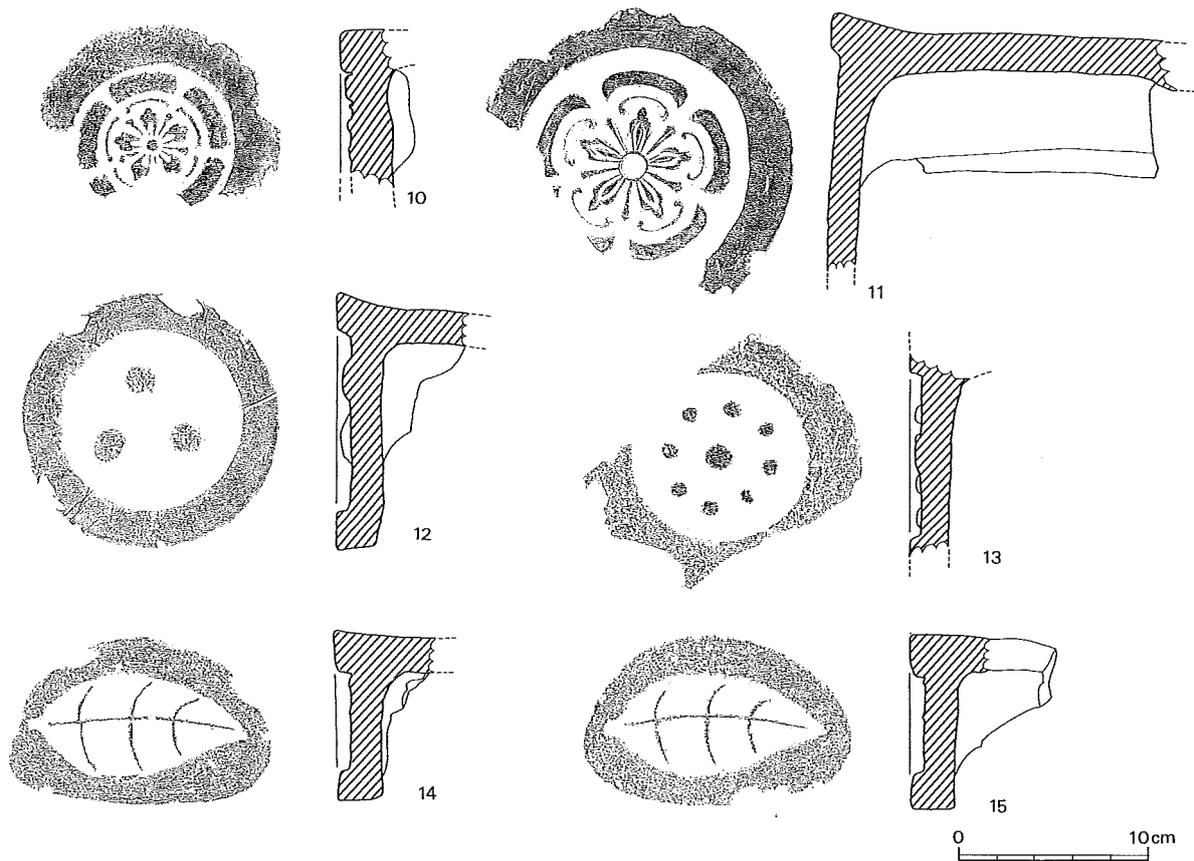
軒丸瓦（第51図・第52図，第17表）

軒丸瓦は完形は無く丸瓦部の大部分が欠損したものが多い。そのなかで比較的残存状態の良いものを15点取り上げた。

1は10区Ⅱ層出土。燻しはなされていない。色調は凹凸面共に淡青灰色。焼成は甘い。文様は三巴文。巴は左巻き。巴尾部が互いに接し圏線をなす。巴中心部に「大」の字状の痕跡が確認される，刻印であるかは不明。珠文は残存8，推定16。瓦当周縁から文様部への角度が一部直角になっていないことから，瓦当成形時に筈ずれを起こした可能性がある。丸瓦部凸面はナデが施されている。凹面は布目痕が確認される。凹面周縁には面取りが施されている。全体的に粗雑な印象を受ける。接合はBである。2はA9・10区Ⅰ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は三巴文。巴は左巻き。巴中心部に「大」の字状の痕跡が確認される，刻印であるかは不明。珠文は残存12，推定16。丸瓦部は大部分が欠損しており調整等は不明。周縁から文様までにやや高低差がある。周縁部に無数の直線痕が確認されることから，スタンプが木製であった可能性が高い。瓦当裏面には指押さえが認められる。接合はBである。3は11区Ⅱ層出土燻し瓦。色調は凹凸面共に淡灰色。色調は良好。文様は三巴文。巴は左巻きで巴尾部は長い。珠文は残存9，推定16。瓦当周縁から文様部への角度が一部直角になっていないことから，瓦当成形時に筈ずれを起こした可能性がある。瓦当裏面はナデ調整が施されている。丸瓦部凸面は丁寧なナデが施されている。凹面には模骨・布目痕・コビキBが確認され，周縁にヘラ状工具による面取りが施されている。また，瓦当部との接合部分にヘラ状工具によると思われる極めて強いナデが確認される。接合はBである。4は10区Ⅱ層出土燻し瓦。色調は凹凸面共に淡青灰色。焼成は良好。文様は三巴文。巴は左巻き。巴中心部に「大」の字状の痕跡が確認される，刻印であるかは不明。巴尾部は長い。珠文は残存9，推定16。丸瓦部凸面はナデが施されている。凸面瓦当先端部の反りが強い。凹面は布目痕が確認される。凹面周縁には面取りが施されているが粗雑である。瓦当周縁から文様部への角度が一部直角になっていないことから，瓦当成形時に筈ずれを起こした可能性がある。瓦当裏面はナデ調整が施されている。接合はBである。5はA5区P31出土瓦。燻し瓦。色調は凹凸面ともに淡青灰色。焼成は良好。文様は三巴文。巴は左巻き。巴尾部は長い。珠文は残存10，推定16。丸瓦凸面には穿孔が確認され，ナデが施されている。凹面には模骨・布目痕・コビキBが確認される。凹面周縁部には面取りが施されている。瓦当周縁・裏面にはナデ調整がなされている。接合はBである。6はA14区Ⅱ層出土燻し瓦。色調は青灰色。焼成は良好。文様は三巴文。巴は左巻きである。珠文は9。彫りは浅い。丸瓦部は欠損しており調整等は不明。瓦当周縁部および裏面にナデ調整が施されている。また，瓦当裏面上部が一部欠損しているため，接合Bが確認できる。7はA14区Ⅱ層出土燻し瓦。紋瓦である，大村家の家紋であろうか。色調は凹凸面共に青灰色。焼成は良好。瓦当部から文様部までの高低差は低い。丸瓦部は瓦当付近を残し欠損している。丸瓦部凸面はナデ調整が施されている。凹面は布目痕が確認される。瓦当部周縁・裏面にナデ調整が施されている。接合はBである。8はA14区Ⅱ層出土燻し瓦。紋瓦である。紋は7と同一。色調は凹面は暗青灰色，凸面は青灰色。焼成は良好。瓦当部から文様部までの高低差は低い。丸瓦部は約半分が欠損。丸瓦部凸面はヘラ状工具によるやや強めのナデ調整が施されている。凹面は模骨・布目痕が確認され，周縁は面取りが施されている。瓦当部周縁・裏面にナデ調整が施されている。接合はBである。9は



第51図 軒丸瓦実測図① (S=1/4)



第52図 軒丸瓦実測図② (S=1/4)

12区Ⅰ層出土燻し瓦。紋瓦である。紋は7に類似している。色調は淡黒褐色。焼成は良好。丸瓦部は欠損しており調整等は不明。瓦当文様にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。瓦当周縁部・裏面にナデが施されている。接合はBである。10は25区Ⅲ層出土燻し瓦。紋瓦である。紋は7に類似している。色調は暗黄橙色。焼成は良好。丸瓦部は欠損しており調整等は不明。瓦当文様にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。瓦当周縁部・裏面にナデが施されている。接合はBである。11はA14区Ⅱ層出土燻し瓦。紋瓦である。紋は7に類似している。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は良好。瓦当周縁・裏面はナデ調整がなされている。丸瓦部凸面はナデが施されている。凹面は模骨・布目痕が確認され、周縁にはヘラ状工具によるナデが施されている。接合はBである。12はB6Ⅲ層出土燻し瓦。紋瓦であろうか。文様は大形の珠点3点により構成されている。文様全体にズレが見られることから、范ずれの可能性はある。瓦当周縁・裏面はナデ調整がなされている。丸瓦部凸面・凹面はナデが施されているが粗雑である。接合はBである。13は表採燻し瓦。紋瓦であろうか。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は良好。文様は中心の珠点を支点とし周囲にやや小型の珠点を8点配す、という構成である。瓦当周縁・裏面はナデ調整がなされている。丸瓦部は欠損しており調整等は不明である。全体的に粗雑な作りとの印象を受ける。接合はBである。14は10区Ⅱ層出土燻し瓦。半月瓦である。色調は青灰色。焼成は良好。文様は葉である。瓦当周縁部・裏面にナデが施されている。丸瓦部凸面にはヘラ状工具によると思われるナデ調整が施されている。瓦当部と丸瓦部の接合面から接合Bと判断で

きる。15は12区Ⅰ層出土燻し瓦。半月瓦である。色調は凹面は黒褐色、凸面は暗黒褐色。焼成は良好。文様はAと同様葉である。瓦当周縁部・裏面にナデが施されている。丸瓦部凸面にはヘラ状工具によるとと思われるナデ調整が施されている。凹面にはコビキBが確認される。瓦当裏側断面に接合をよくするためと思われる刻みが円の中心に向かって確認される。このことから接合Bと判断できる。

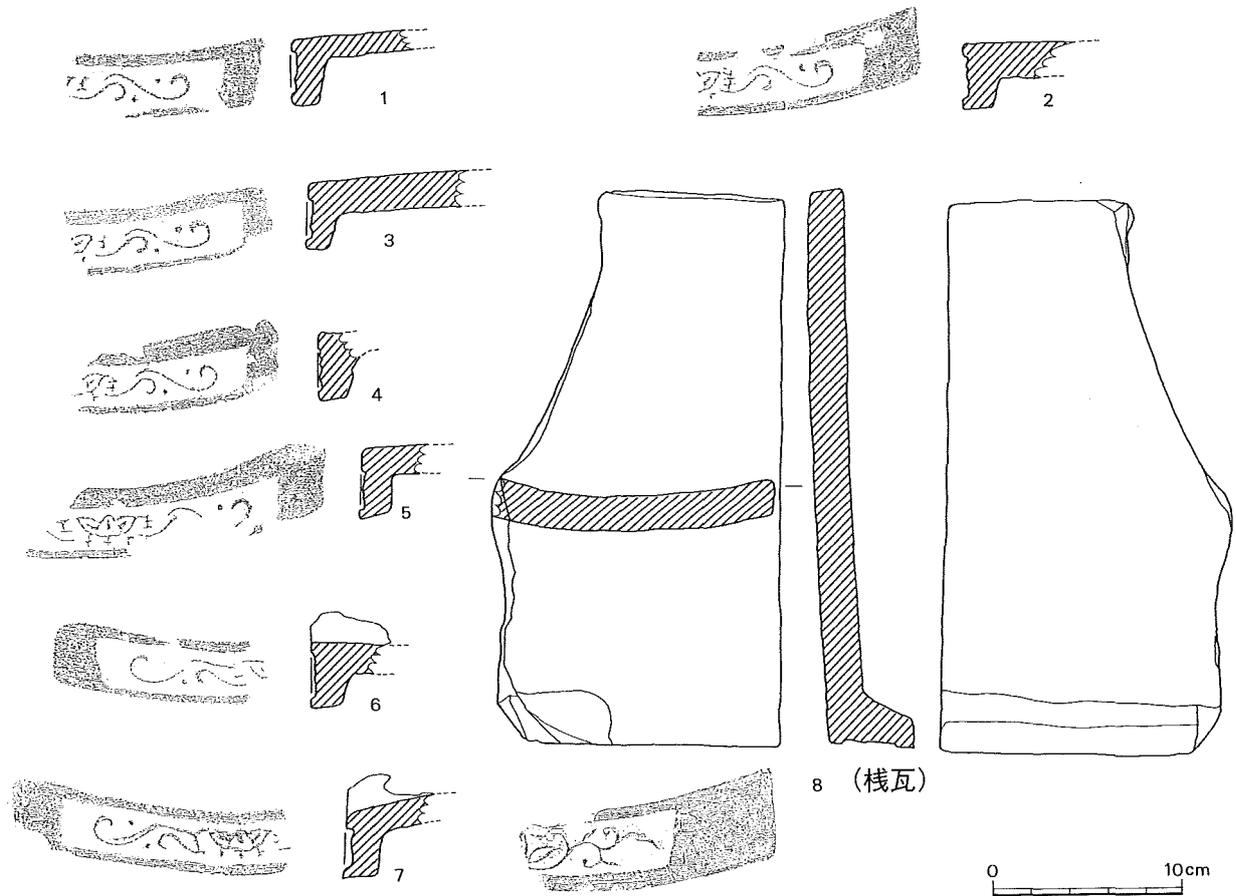
遺物番号	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		巻き	珠点	接合	備考
				凹面	凸面			凹面	凸面				
1	10	Ⅱ	軒丸	淡青灰色	淡青灰色	甘い	小礫・石英・長石	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	左	8(16)	B	
2	A9・10	Ⅰ	軒丸	暗青灰色		良好	小礫・石英・長石	ナデ	ナデ	左	12(16)	B	燻し瓦
3	11	Ⅱ	軒丸	淡灰色	淡灰色	良好	小礫	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	左	9(16)	B	燻し瓦・コビキB
4	10	Ⅱ	軒丸	淡青灰色	淡青灰色	良好	小礫	布目痕・ナデ	ナデ	左	9(16)	B	燻し瓦
5	A5・P31	—	軒丸	淡青灰色	淡青灰色	良好	小礫・石英・長石	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	左	10(16)	B	燻し瓦・コビキB・穿孔
6	6	Ⅲ	軒丸	青灰色		良好	小礫	ナデ	ナデ	右	9	B	燻し瓦
7	A14	Ⅱ	軒丸	青灰色	青灰色	良好	小礫	布目痕・ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・紋瓦
8	A14	Ⅱ	軒丸	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫・石英	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・紋瓦
9	12	Ⅰ	軒丸	淡黒褐色		良好	小礫	ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・紋瓦
10	25	Ⅲ	軒丸	暗黄橙色		良好	小礫	ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・紋瓦
11	A14	Ⅱ	軒丸	青灰色	暗青灰色	良好	小礫	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・紋瓦
12	B6	Ⅲ	軒丸	青灰色	青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・紋瓦?
13	表採	—	軒丸	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・紋瓦?
14	10	Ⅱ	軒丸	青灰色	青灰色	良好	小礫・石英	ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・半月瓦
15	12	Ⅰ	軒丸	黒褐色	暗黒褐色	良好	小礫・石英	ナデ	ナデ	—	—	B	燻し瓦・コビキB・半月瓦

第17表 軒丸瓦観察表

軒平瓦（第53図・1～7，第18表）

軒平瓦の完形はなく瓦当も欠損しているが比較的瓦当部の残存状態が良いものを7点取り上げた。どの瓦の文様も均整唐草文だが、文様等に微妙な違いを見い出せる。尚、第53図8は棧瓦である。

1はA3区Ⅳ層出土。燻しはなされていない。瓦当の右側半分周辺以外は欠損している。色調は凹凸面共に黄橙色。焼成は甘い。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は2転展開。珠文は残存2。子葉が確認される。中心飾りは残存していないが近世唐草文から推測すれば三葉であろう。凹凸面にナデが施されているが全体的に調整は甘い。接合はBである。2はB6区Ⅲ層出土燻し瓦。燻しは弱い。瓦当右半分を残し欠損している。色調は凹凸面共に灰褐色。焼成は甘い。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は2転展開。唐草は巻きがゆるく、一部摩滅している。珠点は残存1。子葉が確認される。中心飾りは三葉である。また、中心飾り下部に十字形の文様が1点確認される、おそらく欠損部とあわせて本来3点施文されていたと推測される。凹凸面にナデが施されている。接合はBである。3は10区Ⅱ層出土燻し瓦。瓦当右半分周辺以外は欠損している。色調は凹凸面共に黒褐色。焼成は良好。文様は均整唐草文で構成されている。珠点は残存2。唐草から伸びる子葉とおぼしき文様が確認される。唐草は2転展開しており、線種は太い。中心飾りは半分以上欠損しているが大きさ等から三葉と推測できる。凹面にはナデが確認され、凸面瓦当接合部にはヘラ状工具により強いナデが



第53図 軒平瓦実測図② (S=1/4)

施されている。接合はBである。また、瓦頭部に砂が付着していることから、瓦当整形時にスタンプの剥がれをよくする為に砂剥ぎが行われたと推測できる。4は12区Ⅱ層出土燻し瓦。瓦当右側半分を残し欠損している。色調は凹凸面共に灰褐色。焼成は良好。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は2転展開。珠点は残存2。子葉が確認される。中心飾りは一部欠損しているが三葉であると思われる。凸面接合部にはへら状工具による強いナデが施されている。5はB12区Ⅰ層出土燻し瓦。燻しは弱い。瓦当右側周辺2/3を残し欠損している。色調は凹凸面共に淡青灰褐色。焼成は良好。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は2転展開。珠点は残存1。子葉が確認される。中心飾りは三葉である。加えて、中心飾り下部に十字形の文様が3点確認される。文様の一部は欠損している。凹凸面にナデが施されている。接合はBである。6は10区Ⅱ層出土燻し瓦。燻しは弱い。瓦当左半分周辺以外は欠損している。色調は凹凸面共に明灰白色。焼成は甘い。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は2転展開。珠点は残存1。子葉が確認される。中心飾りは三葉と推測できる。文様の一部は摩滅している。凹凸面に丁寧なナデが施されている。接合はBである。凸面接合部にはへら状工具により強いナデ調整がなされている。7は10区Ⅱ区出土燻し瓦。燻しは弱い。瓦当左側周辺2/3を残し欠損している。色調は凹面は淡青灰色、凸面は青灰色。焼成は甘い。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は2転展開。珠文は1、子葉が確認される。中心飾りは三葉である。文様の一部は摩滅。凹凸面にはナデ調整が施されている。接合はBである。

遺物 番号	地点	層位	器種	色 調		焼成	胎 土	調 整		中心 飾り	唐草 展開	珠点 (残存)	子葉	接合	備 考
				凹面	凸面			凹面	凸面						
1	A 3	Ⅳ	軒平	黄橙色	黄橙色	甘い	小礫・石英	ナデ	ナデ	三葉	2 転	2	○	B	
2	B 6	Ⅲ	軒平	灰白色	灰褐色	甘い	小礫・石英	ナデ	ナデ	三葉	2 転	1	○	B	燻し瓦
3	10	Ⅱ	軒平	黒褐色	黒褐色	良好	小礫・石英・角閃石	ナデ	ナデ	三葉	2 転	2	○	B	燻し瓦
4	12	Ⅱ	軒平	灰褐色	灰褐色	良好	小礫	ナデ	ナデ	三葉	2 転	2	○	B	燻し瓦
5	B 12	表採	軒平	淡青灰褐色	淡青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	三葉	2 転	1	○	B	燻し瓦
6	10	Ⅱ	軒平	明灰白色	明灰白色	甘い	小礫・石英・角閃石	ナデ	ナデ	三葉	2 転	1	○	B	燻し瓦
7	10	Ⅱ	軒平	淡青灰色	青灰色	甘い	小礫	ナデ	ナデ	三葉	2 転	2	○	B	燻し瓦

第18表 軒平瓦観察表

※ 8 の棧瓦は軒平瓦との文様の差異を示す為、軒平瓦の項において紹介している。尚、遺物説明については棧瓦の項に、観察表については第21表に記載した。

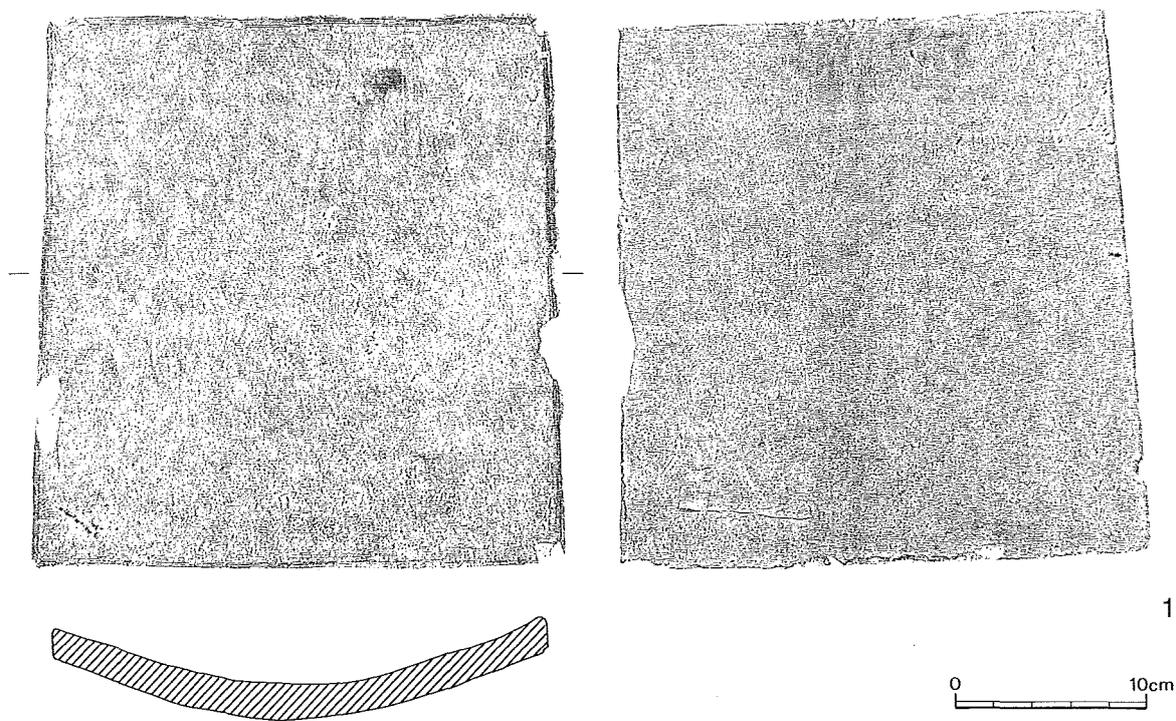
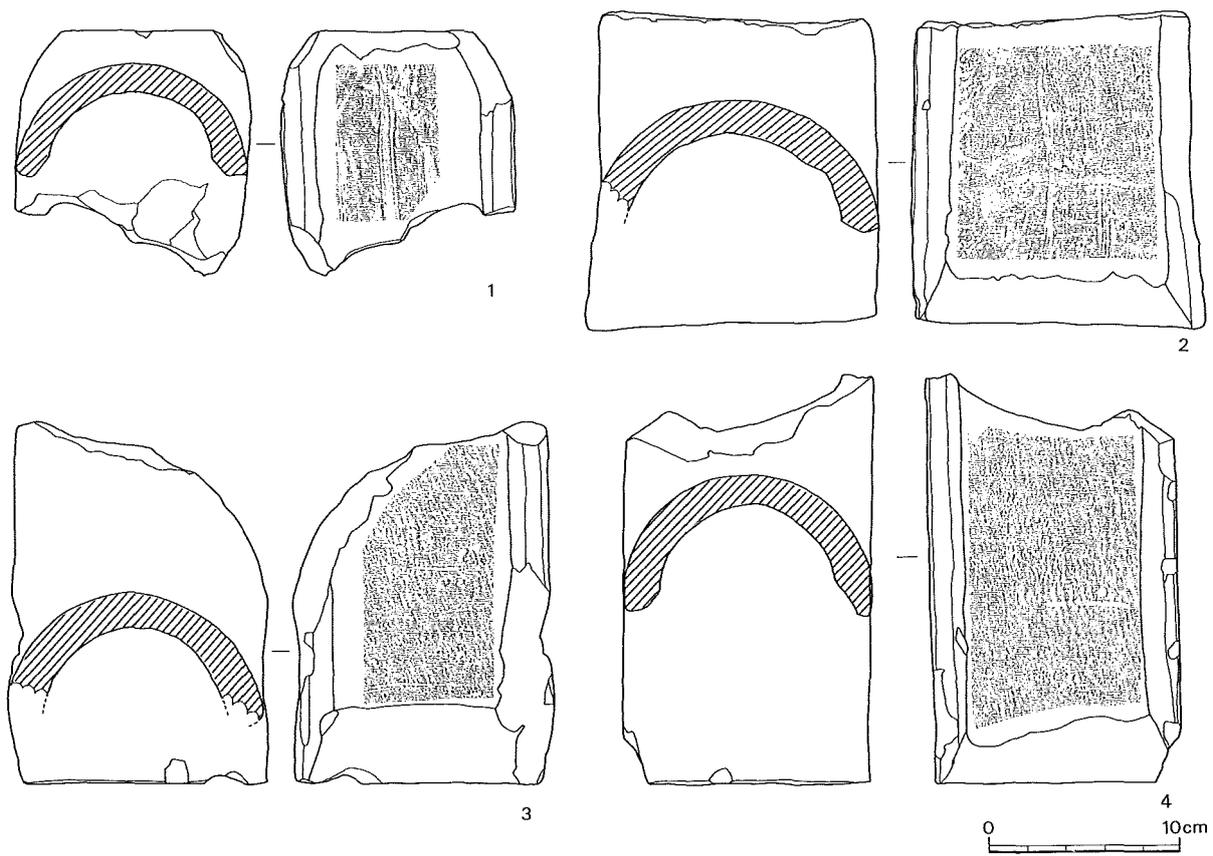
丸瓦（第54図，第19表）

丸瓦は完形がないので比較的残存状態の良いものを4点取り上げた。調整等は全て同様である。

1 はTP4Ⅳ層出土燻し瓦。部位は輪違い。色調は凹面・凸面共に暗青灰褐色。焼成は良好。先端部は欠損している。凸面および玉縁部はヘラ状工具による調整が行われた後、丁寧なナデが施されている。凹面には模骨・布目が確認される。コビキはBである。また、両端・玉縁部先端は面取りが施されている。2 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹面凸面共に青灰色。焼成は良好。尻は欠損し、左側面部が一部欠けている。凸面はヘラ状工具による調整の後、丁寧なナデが施されている。調整は強い。凹面は模骨・布目・コビキBが確認される。両端および先端部には面取りが施されている。3 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹面は青灰色，凸面は淡青灰色。尻は欠損し，両端および先端部は一部欠損している。凸面はヘラ状工具による調整の後，丁寧なナデが施されている。凹面は模骨・布目・コビキBが確認される。両端および先端部には面取りが施されている。4 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹面は青灰色，凸面は淡青灰色。焼成は良好。尻は欠損している。凸面はヘラ状工具による調整の後，丁寧なナデが施されている。凹面は模骨・布目・コビキBが確認される。両端および先端部に面取りが施されている。

遺物 番号	地点	層位	器種	色 調		焼成	胎 土	調 整		コビキ	備 考
				凹面	凸面			凹面	凸面		
1	TP4	Ⅳ	丸瓦	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	B	燻し瓦・輪違い
2	B 20	建物遺構内	丸瓦	青灰色	青灰色	良好	小礫・石英	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	B	燻し瓦
3	B 20	建物遺構内	丸瓦	青灰色	淡青灰色	良好	小礫・石英	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	B	燻し瓦
4	B 20	建物遺構内	丸瓦	青灰色	淡青灰色	良好	小礫	模骨・布目痕・ナデ	ナデ	B	燻し瓦

第19表 丸瓦観察表



第54図 丸瓦・平瓦実測図 (S=1/4)

平瓦（第54図，第20表）

平瓦は完形品を1点取り上げた。その他のものは欠損しており，軒平瓦および棧瓦と混同することを避けるため取り上げていない。

1 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹面は暗青灰色，凸面は青灰色。焼成は堅緻。凹面周縁に小さな面取りがなされている。凹凸面に丁寧なナデが施されている。

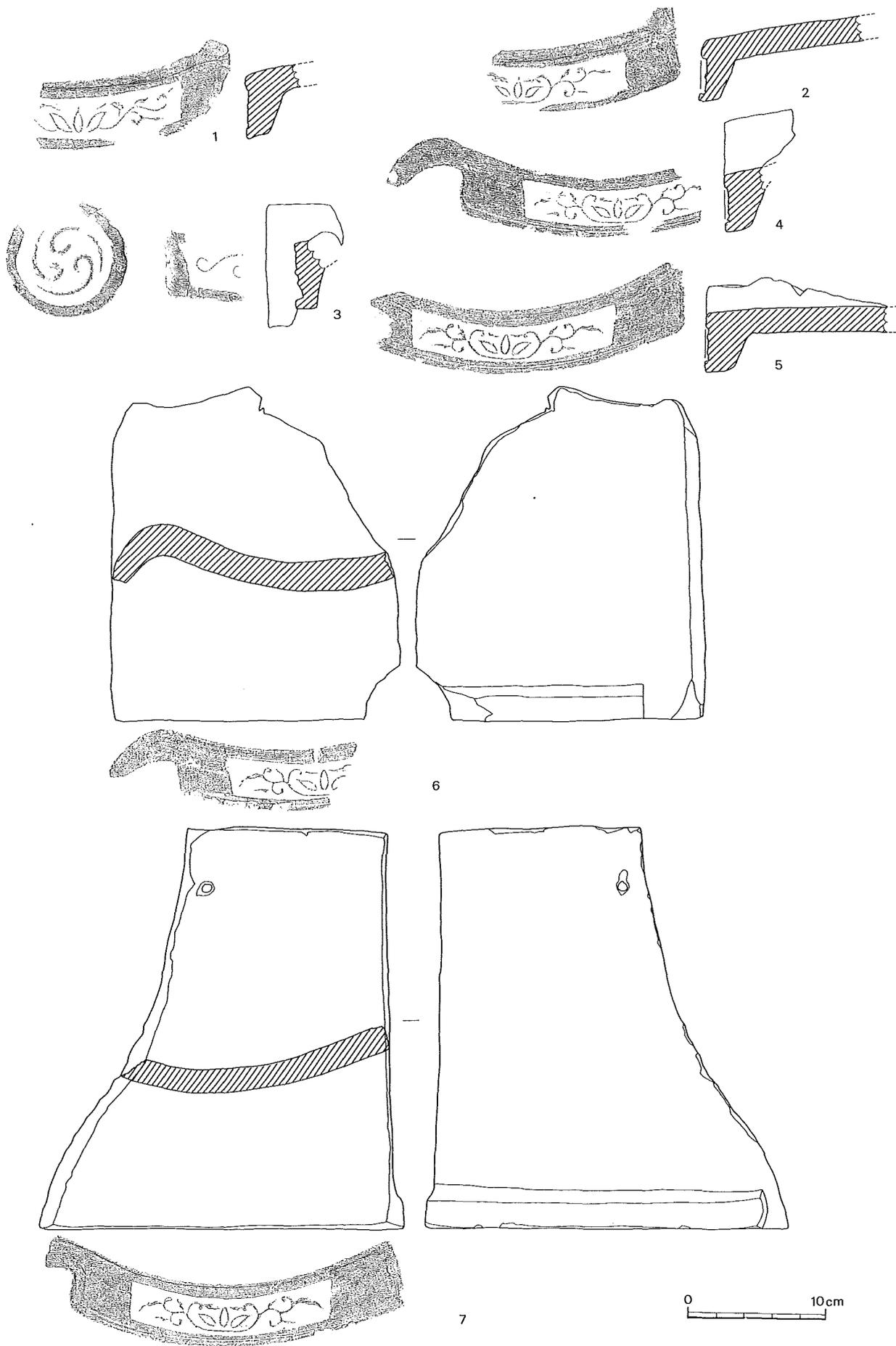
遺物 番号	地点	層位	器種	色 調		焼成	胎 土	調 整		備 考
				凹面	凸面			凹面	凸面	
1	B20	建物遺構内	平瓦	暗青灰色	青灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	燻し瓦

第20表 平瓦観察表

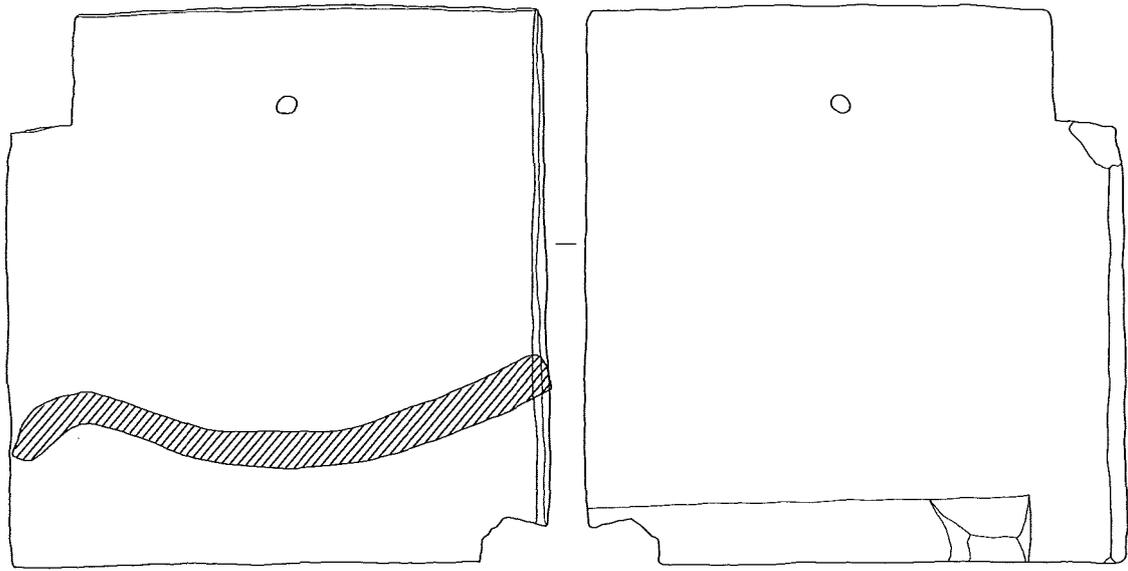
棧瓦（第53図8・第55図・第56図，第21表）

棧瓦は完形がないため瓦当部の残存状態が良いものを10点取り上げた。10点共同じ調整が確認されている。今回図化した10点中6点は20区から出土したものである。文様がほぼ同様であるため，同範関係である可能性がある。また，同調査区からは長与三彩も出土している。

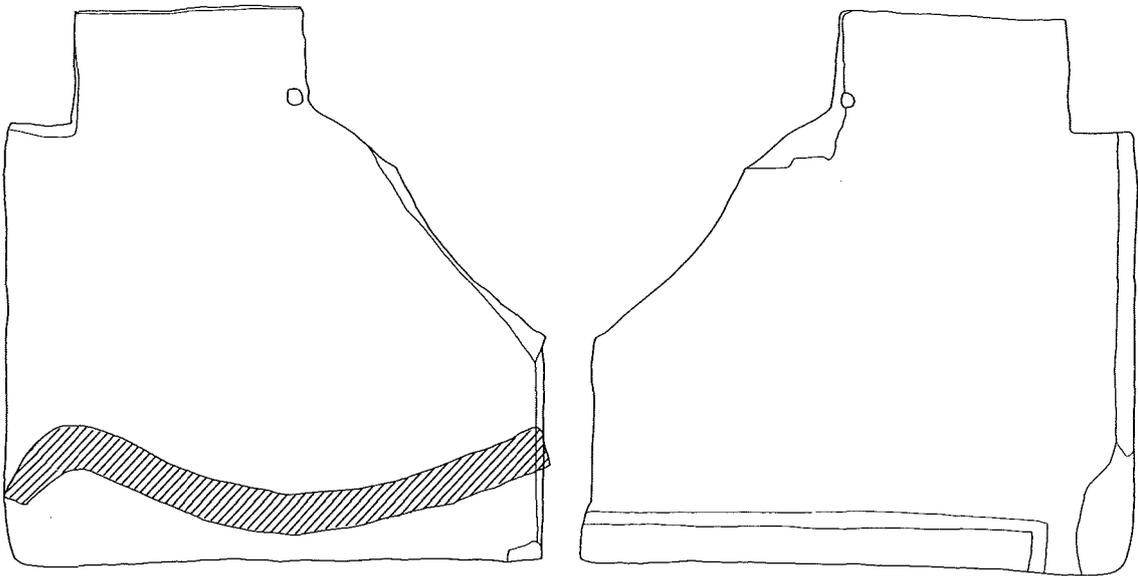
1 は25区Ⅲ層出土燻し瓦。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は良好。右側に瓦同士の接続をよくするための面取りが施される。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は2転展開。子葉が確認される。中心飾りは三葉。周縁部にズレが確認されることから瓦当成形時に范ずれを起こした可能性がある。平瓦部凹凸面・瓦当周縁にナデが施されている。接合はB。2 はA14区Ⅱ層出土燻し瓦。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は堅緻。右側に瓦同士の接続をよくするための面取りが施される。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は3転展開。左右の唐草が連結されている。子葉が確認される。中心飾りは三葉。接合面にナデが施されている。接合はBである。3 は14区Ⅱ層出土燻し瓦。色調は凹凸面共に青灰色。焼成は良好。丸瓦部・平瓦部共に欠損しているため，調整は不明。丸瓦部瓦当の文様は三巴文。巴は右巻き。巻きが強い印象を受ける。周縁・裏面にナデが施されている。平瓦部瓦当は左側を若干残すのみであるが，文様は2転展開の均整唐草文であると推測される。中心飾りは不明。瓦当部裏面にナデが確認される。欠損状態から接合Bと判断できる。4 は表採燻し瓦。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は堅緻。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は3転展開。左右



第55图 棧瓦実測図 (S=1/4)



8



9



第56図 棧瓦実測図 (S=1/4)

の唐草が連結されている。子葉が確認される。中心飾りは三葉。瓦当部にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。平瓦部凹凸面・瓦当周縁にナデが施されている。接合はBである。5 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は良好。左側に瓦同士の接続をよくするための面取りが施されている。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は左右3転展開。左右の唐草が連結されている。子葉が確認される。中心飾りは三葉。瓦当部にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。平瓦部凹凸面・瓦当周縁にナデが施されている。接合はBである。6 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は堅緻。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は左右3転展開。瓦当の一部が欠損しているが、左右の唐草は連結すると思われる。子葉が確認される。中心飾りは三葉。瓦当部にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。平瓦部凹凸面・瓦当周縁に丁寧なナデが施されている。接合はBである。7 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹凸面共に青灰色。焼成は堅緻。左側に瓦同士の接続をよくするための面取りが施されている。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は左右3転展開。左右の唐草が連結されている。子葉が確認される。中心飾りは三葉。瓦当部にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。平瓦部凹凸面・瓦当周縁に丁寧なナデが施されている。穿孔が確認される。接合はBである。8 はB20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は左右3転展開。瓦当の一部が欠損しているが、左右の唐草は連結すると思われる。子葉が確認される。中心飾りは三葉。瓦当部にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。平瓦部凹凸面・瓦当周縁に丁寧なナデが施されている。穿孔が確認される。接合はBである。9 はA20区建物遺構内出土燻し瓦。色調は凹凸面共に暗青灰色。焼成は堅緻。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は左右3転展開。左右の唐草が連結されている。子葉が確認される。中心飾りは三葉。瓦当左側の面取りは施されていない、隅瓦であろうか。瓦当部にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時にキラコを使用したと見られる。平瓦部凹凸面・瓦当周縁に丁寧なナデが施されている。穿孔が確認される。接合はBである。第53図 8 は20区建物遺構内出土燻し瓦。燻しが強い。左側半分は欠損している。色調は凹凸面共に黒褐色。焼成は堅緻。文様は均整唐草文で構成されている。唐草は3転展開、唐草は簡略化されている。中心飾りは三葉。子葉が確認される。瓦当部にキラコの付着が確認されることから、瓦当形成時にスタンプの剥がれをよくする為にキラコを使用したとみられる。凹凸面および周縁に丁寧なナデが施されている。接合はBである。

その他の瓦（第57図，第21表）

欠損が部分が多く器種が特定できなかった資料を1点取り上げた。

1 はB6区Ⅲ層出土燻し瓦。色調は青灰色。焼成は良好。表面には葉と思われる文様がヘラ状と推測される器具により描かれている。裏面はヘラ状工具によるナデが施されている。残存部分がわずかなため器種は不明であるが、鬼瓦ではないだろうか。

遺物番号	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		接合	唐草展開	キラコ	備考
				凹面	凸面			凹面	凸面				
1	25	Ⅲ	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	B	2転		燻し瓦
2	A14	Ⅱ	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	B	3転		燻し瓦
3	14	Ⅱ	棧瓦	青灰色	青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	B	2転		燻し瓦
4	表採	建物遺構内	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	B	3転	○	燻し瓦
5	B20	建物遺構内	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	B	3転	○	燻し瓦
6	B20	建物遺構内	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	B	3転	○	燻し瓦
7	B20	建物遺構内	棧瓦	青灰色	青灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	B	3転	○	燻し瓦・穿孔
8	B20	建物遺構内	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	B	3転	○	燻し瓦・穿孔
9	A20	建物遺構内	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	B	3転	○	燻し瓦・穿孔
53図8	20	建物遺構内	棧瓦	暗青灰色	暗青灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	B	3転	○	燻し瓦

遺物番号	地点	層位	器種	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	B6	Ⅲ	—	青灰色	良好	小礫	ナデ	燻し瓦・鬼瓦か？

第21表 棧瓦・その他の瓦観察表

小考察

今回図化した当遺跡出土の近世瓦群についていくつかの注目点が浮かび上がった。そこで、注目点の抽出および若干の考察を加えることにした。

軒丸瓦における巴文の変遷

軒丸瓦のなかで特に文様が三巴文+珠点で構成される瓦（第51図1～6）について、燻しの状態および文様構成により①～③に大別を行った。

- ① 1 — 巴尾部が接し圏線をなす。瓦当直径約12.8cm。燻しはなされていない。彫りが深い
- ② 2～5 — 巴尾部が圏線をなさないが長い。瓦当直径平均約14.3cm燻しが弱い。
- ③ 6 — 巴尾部が短い。瓦当直径約13.6cm。燻しが強い。彫りが浅い。

①～③の時期差を明確にすることは難しい。だが燻し等の瓦全体の作りが、①→②→③の順に堅緻になっている。仮にこの順序で考えると、A「巴尾部が短くなる」・B「瓦当が全体的に肥大化する」といった変化が確認できる。Aの視点で考えると「①→②→③」となり、Bの視点で考えると「①→③→②」となる。加えて、A+Bの視点で、②と③が平行すると捉える「①→②・③」である可能性も考えられる。ただ、先述したように、今回の出土資料のみでは時期差を特定することは困難である。今後の資料増加に期待したい。また、半月状の瓦当を有する軒丸瓦（第52図14・15）についてであるが、瓦当部が半月状であるため、大型の平瓦との併用はなかったと考えられる。塀などの比較的規模の小さな構築物に使用された可能性が高いのではないだろうか。

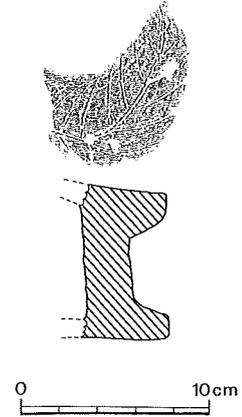
軒平瓦における唐草文の変遷（第53図 1～8）

今回図化した7点の軒平瓦は均整唐草文において共通点と同時に段階的な変化を見出すことができた。そこで、出土層位中、最下層であるⅣ層より出土した第53図1の唐草文を起点とし、下記のような大別を試みた。

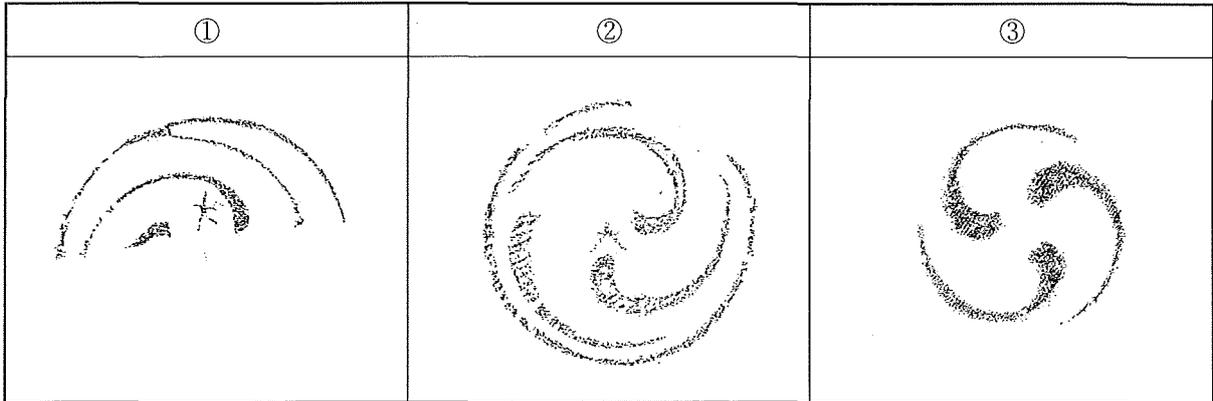
A（1～5）一線種が太い。巻きが強く短い。唐草は2転展開

B（6・7）一線種が細い。巻きがゆるく長い。唐草は2転展開

C【棧瓦】（8）一線種が細い。巻きがゆるく連結。唐草は3転展開
上記のようにA・と大別したが、単純に「A→B」という変化であると捉えることはできない。Aに属しⅣ層から出土した1・2は、層位的に見て同じAに属しⅡ層から出土している3・4に先行する可能性が高い。しかし、3・4が出土したⅡ層からはBに属する6・7も出土してい

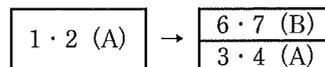


1



	A					B		C (棧瓦)
遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8
層位	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	表採	Ⅱ	Ⅱ	建物遺構内 (20区)
線種	太い					細い		細い
巻き (強さ)	強い					ゆるい		ゆるい
巻き (長さ)	短い					長い		連結
唐草展開	2転					2転		3転
均整唐草文								

層位	遺物番号	種別
Ⅱ	6・7	B
	3・4	A
Ⅲ	2	A
Ⅳ	1	A



第57図 その他の瓦実測図 (S=1/4)・軒丸瓦三巴文変遷図 (案)
軒平瓦均整唐草文変遷図 (案)・軒平瓦出土層位図・軒平瓦変遷図 (案)

るのである。このことから、「Aの3・4」と「Bの6・7」は並行関係にあったと推測される。つまり、「Aタイプのみの時期」→「A・Bの両タイプが混在する時期」との変遷をたどり、後に用いられた棧瓦（1674年、西村半兵衛が考案）の文様においてCタイプのような唐草文の簡略化が起こったと考えられる。ただ、今後の資料増加によって新たな試案が検討される可能性も十分ありうる。これからの資料増加に期待したい。

20区出土近世瓦の廃棄年代について

今回の調査において20区から近世瓦と共に長与三彩が出土している。この20区出土の遺物群は建物遺構内出土の一括資料である。そこで、近世瓦と長与三彩の共伴関係から20区出土近世瓦の廃棄年代の推定を試みると同時に今後の課題を取り上げた。

20区にあたる地点について、大村蕃が編集した総合地理書である『郷村記』によると普請役所が文化15年（1818）に二の丸より移ったとされ、それ以前は家臣の館があったと記されている。長与三彩の窯元である長与窯は寛文7年（1667）から安政6年（1859）の間、幾度か断絶しながらも存続した窯であるが、長与三彩の生産期間は1790年から1810年の20年間に限定される^(註1)。以上のことから考えると、20区の瓦群は1818年に家臣館から普請役所へと改築した際に長与三彩と共に廃棄された可能性がある。また、瓦の耐用年数を仮に30年とすると製作年代は18世紀後半と推定される。ただ、この推測は普請役所を移転する際、家臣館を取り壊し普請役所を新たに建築したのであれば成り立つが、家臣館をそのまま転用したのであれば成り立たない。残念ながら現在のところ普請役所の建物が立て替えなのか家臣館の転用なのかは明らかにされていない。また、一部立て替えの可能性も考えられる。今後の文献等の研究成果に期待したい。

(井立 尚)

【参考文献】

- 森 郁夫 1986『瓦』考古学ライブラリー43ニューサイエンス
坪井利弘 1987『棧瓦屋根のデザイン』理工学社
市本芳三 1995「瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
東 貴之 1998「第三章第2節遺物7・瓦」『沖城跡』—長崎県文化財調査報告書第143集— 長崎県教育委員会

(註1) 川口洋平氏（長崎県教育庁）のご教示による。

※本稿を書くにあたり、以下の方々の協力・教示を得た。心よりお礼申し上げます。(敬称略)

川口洋平（長崎県教育委員会）・渡辺洋子・東 貴之；竹中哲朗（国見町教育委員会）

本多和範（長崎県教育委員会）



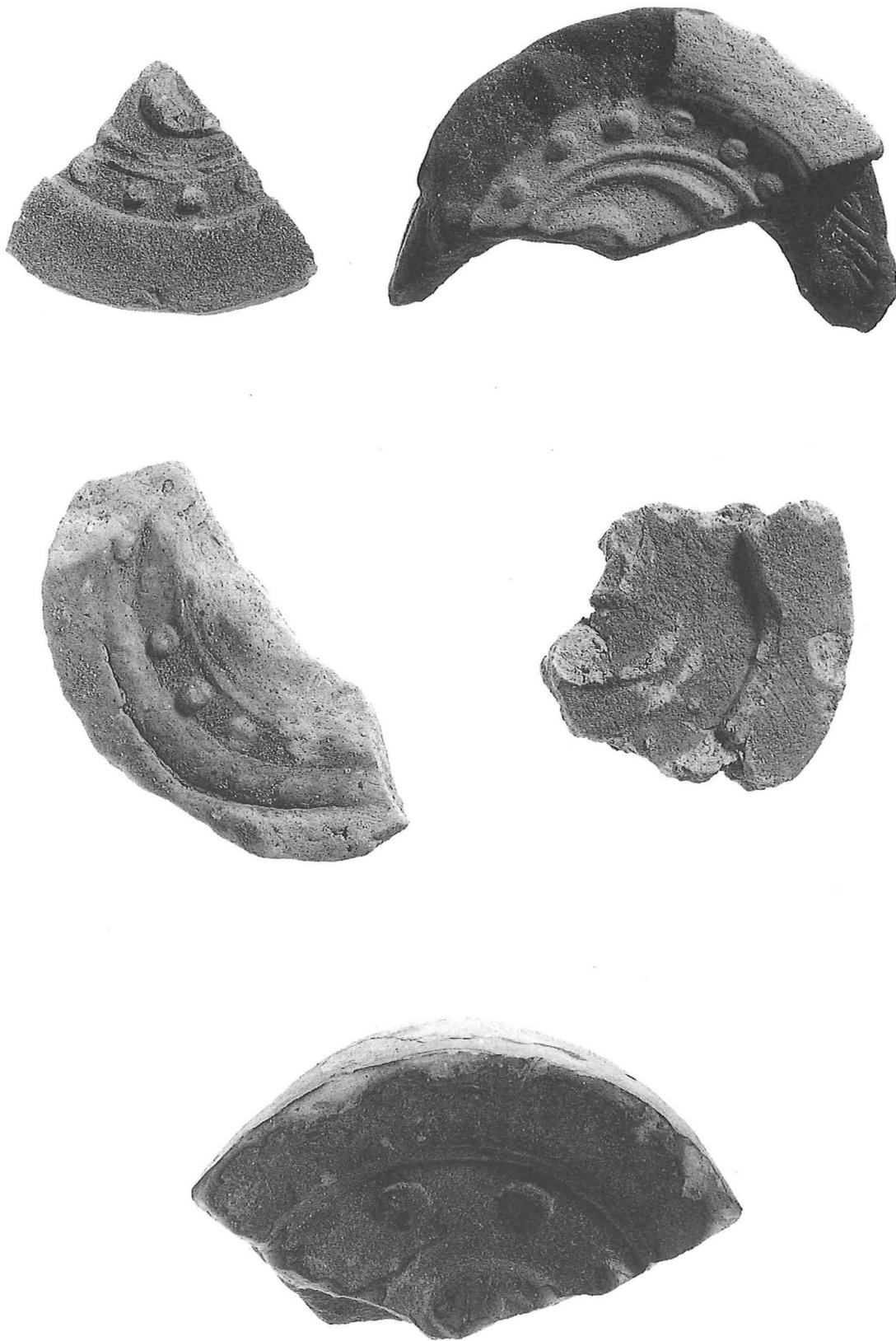
近世瓦①



近世瓦②



近世瓦③



近世瓦④



近世瓦⑤



近世瓦⑥



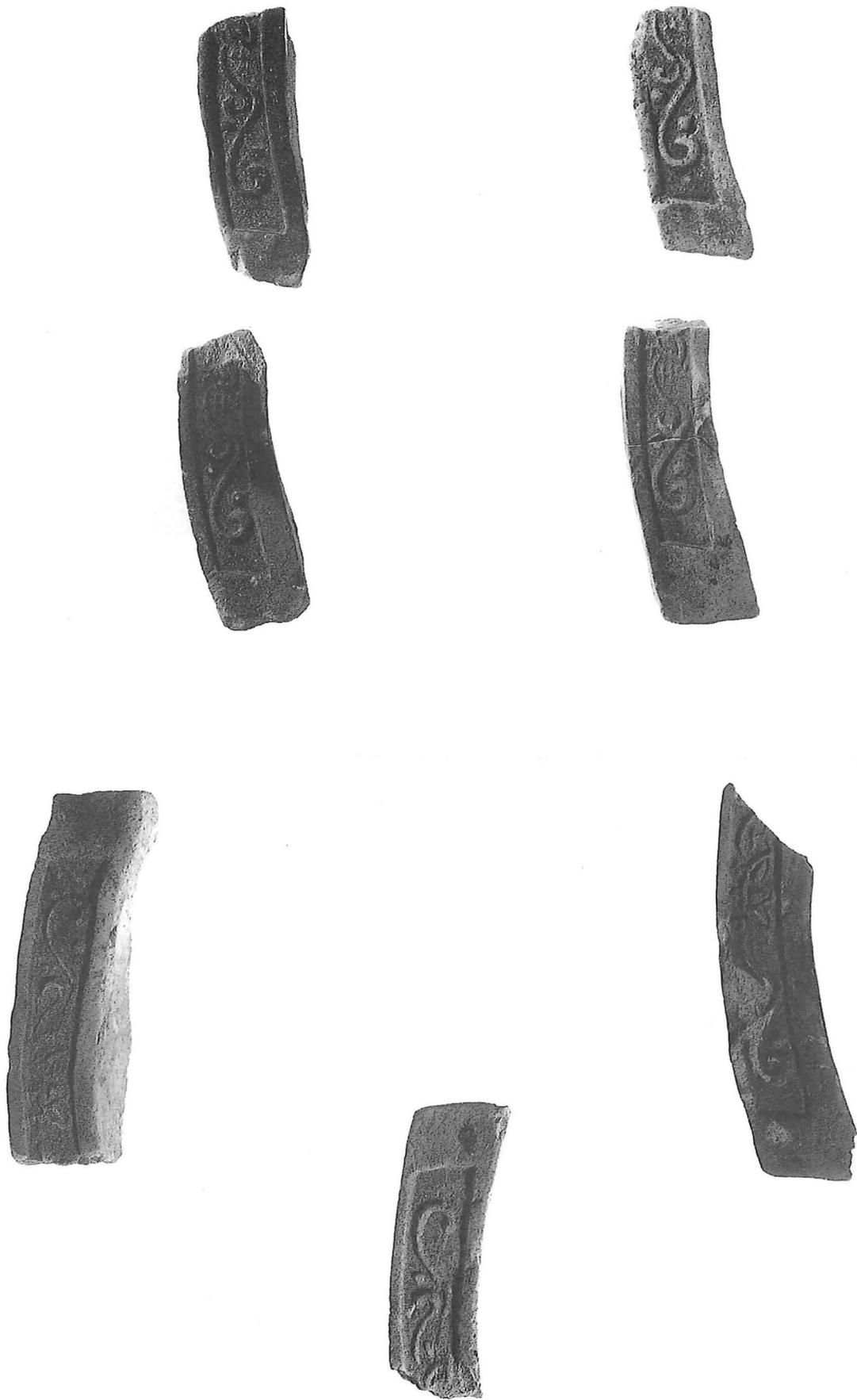
近世瓦⑦



近世瓦⑧



近世瓦⑨



近世瓦⑩



近世瓦①



近世瓦⑫



近世瓦⑬



近世瓦⑭

縄文土器（第58図～第81図，第22～34）

10・11・12区は調査前に池が存在した場所である。他の調査区同様，近世の遺構・遺物を前提に調査を行った。しかし調査途中に多量の縄文土器が出土，縄文時代の遺物包含層が確認された。土層の堆積も良好であったが，時間的な制約のため遺物と層位の関係を十分に把握することができなかった。調査終盤になり分層を試みたが，遺物はすでに取り上げた状況であった。

遺構（第60図）

今回の調査で貯蔵穴遺構を3基確認した。部分的ではあるが，残りは極めて良好である。貯蔵穴は岩盤をくり抜いた状態となっており，中からは遺物も確認されている。また貯蔵穴内における土層堆積は良好で層位観察を行うことができた。以下3基の貯蔵穴を説明する。

No.1貯蔵穴（第58図）

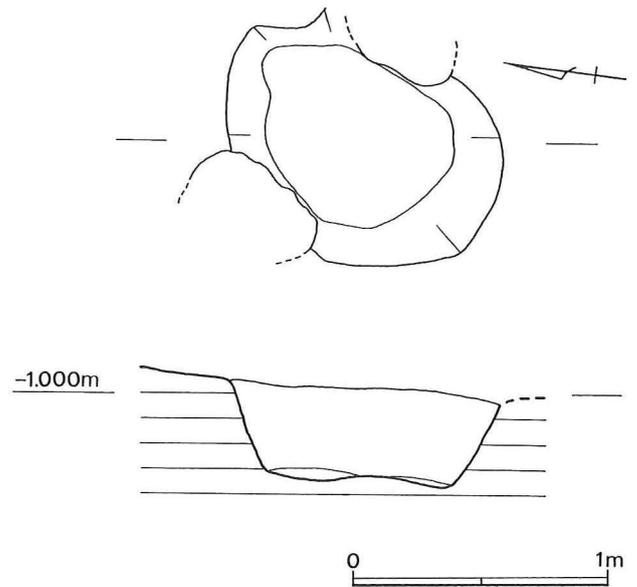
A-12区西側に位置する。形状は略円形。直径は長軸約1.2m・短軸約0.9m，底面直径は長軸約0.8m・短軸約0.6mを測る。天候等の影響により埋土は半分程度流失してしまい，土層観察等の調査を行うことができなかった。遺物出土は未確認。また堅果類・木片等も同様である。

No.2貯蔵穴（第59図）

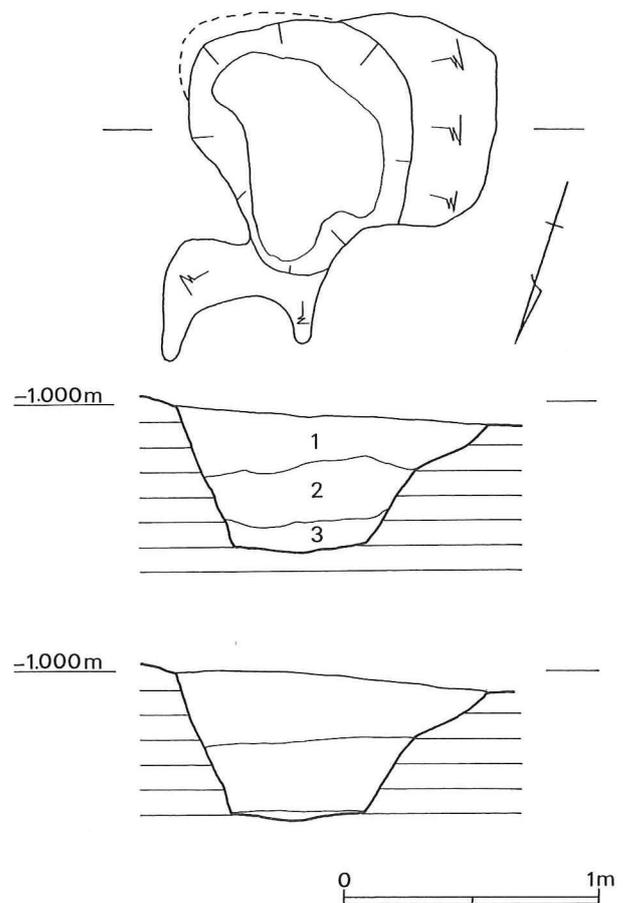
A-12区西側，No.1貯蔵穴の東隣に位置する。形状は略円形。直径は長軸約1.0m・短軸約0.9m，底面直径は長軸約0.8m・短軸約0.6mを測る。この貯蔵穴からは堅果類が数点しか出土していない。土層観察等の結果，層位は3層に分層できることが確認された。層序は以下の通り。

1層：暗青灰色混礫土…粘質土ベースに礫を含む。最大10cm前後の礫も数点存在する。出土土器は2点。腐食木片が数点出土。

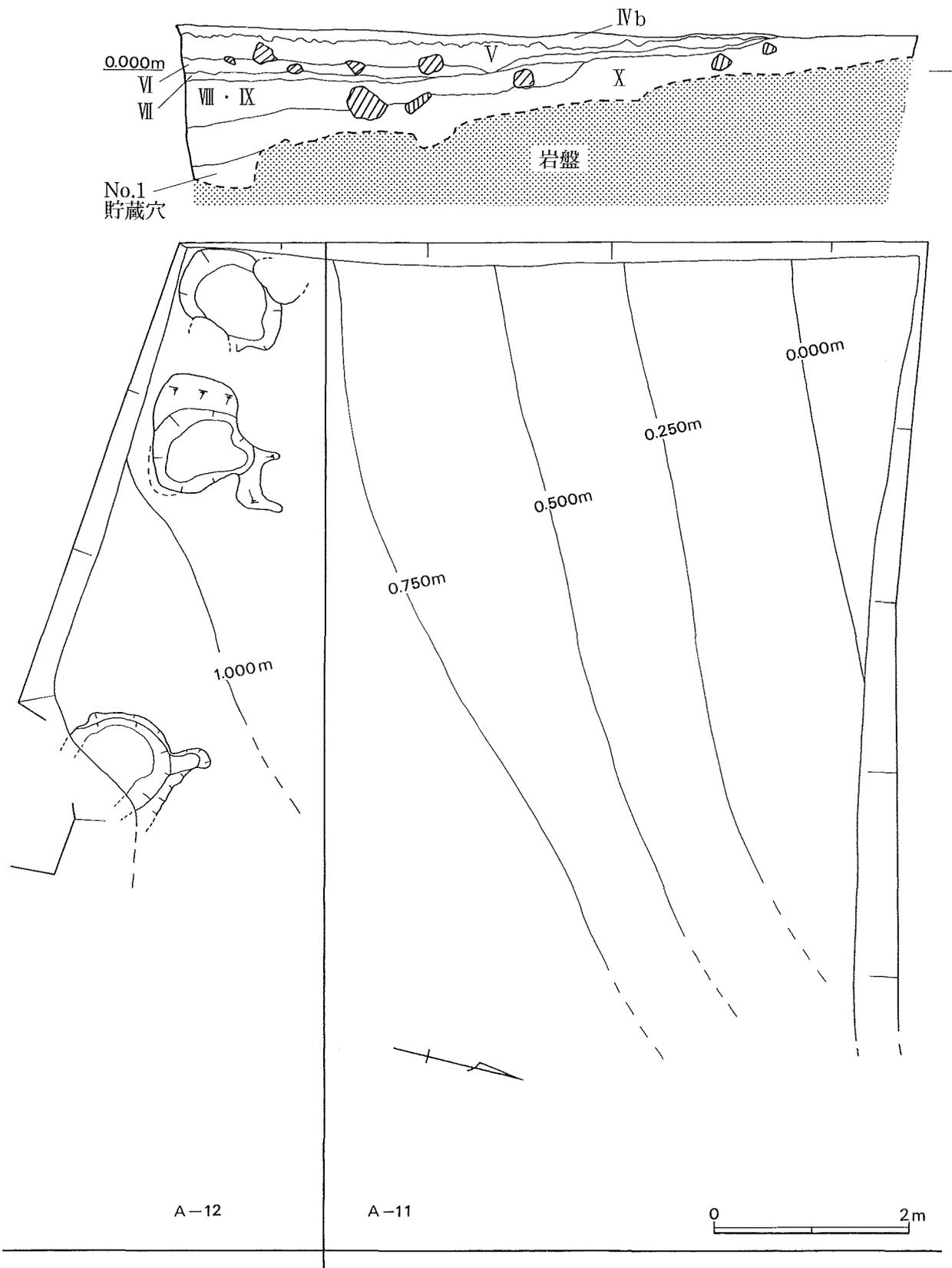
2層：暗青灰色粘質土…堅果類・木片・葉を含む。層の途中から小枝等が確認される。また，覆土中に直



第58図 No.1貯蔵穴実測図（S=1/30）



第59図 No.2貯蔵穴実測図（S=1/30）



IV b : ビニール袋等が混入。また池底のため、
 V層との境には凹凸が著しい。
 V : 砂層。
 VI : 12区南壁では3分層ができる。

VII : 堅果類の堆積層。12区南壁に比して密度は希薄。
 VIII : Ⅹ砂層と貝層。12区南壁では分層ができる。
 X : 直径10~40cm前後の礫で構成される。
 岩盤 : 青灰色の風化礫。

第60図 A-11・12区遺構配置図および西壁土層図 (S=1/30)

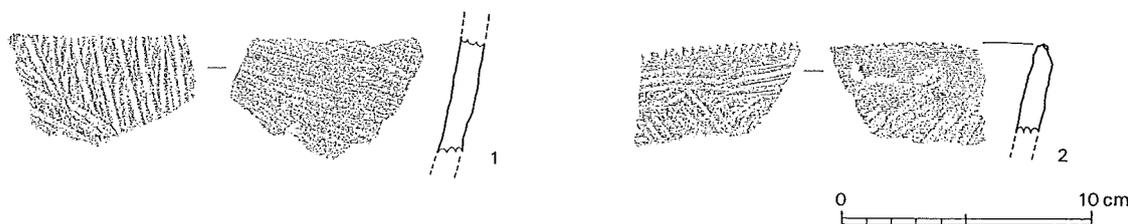
径3 cm前後の小礫も確認される。出土土器は1点。

3層:暗青灰色砂質土…木片および小枝等を含む。直径10cm前後の小礫を数点確認。堅果類も出土しているが、2層に比して少なく数点である。小礫は1層に比して少ない。葉等も少ない。

また、形状は略円形としているが、実際は不整形の形状となっている。これは岩盤のくぼみを利用して貯蔵穴を作ったものか、あるいは足掛け場のためかが考えられる。

No.2 貯蔵穴内出土土器 (第61図, 第22表)

1 は内・外面に横走・斜走条痕を地文にもつ。地文はナデ調整が施され、その後縦走・斜走の順で施文が加えられる。また、内・外面には炭化物の付着が確認される。2 は口縁部。内・外面に横走・斜走する貝殻条痕を地文にもつ。外面は部分的であるが、縦走あるいは斜走条痕・鋸歯状の条痕・最後に口縁直下の横走条痕の順で施文されると思われる。また、口唇部外面側にヘラ状工具による刻みが確認される。内面は地文・ナデの後、口縁部にナデ消し加わる。内・外面には炭化物の付着も確認される。



第61図 No.2貯蔵穴内出土土器 (S=1/3)

図版 番号	出土 地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	地文(貝殻条痕)		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
61-1	12	貯蔵穴内	黒褐色	明褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2cm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	縦・斜走	○	○	
61-2	12	貯蔵穴内	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(1cm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	縦・斜・横走	○	○	

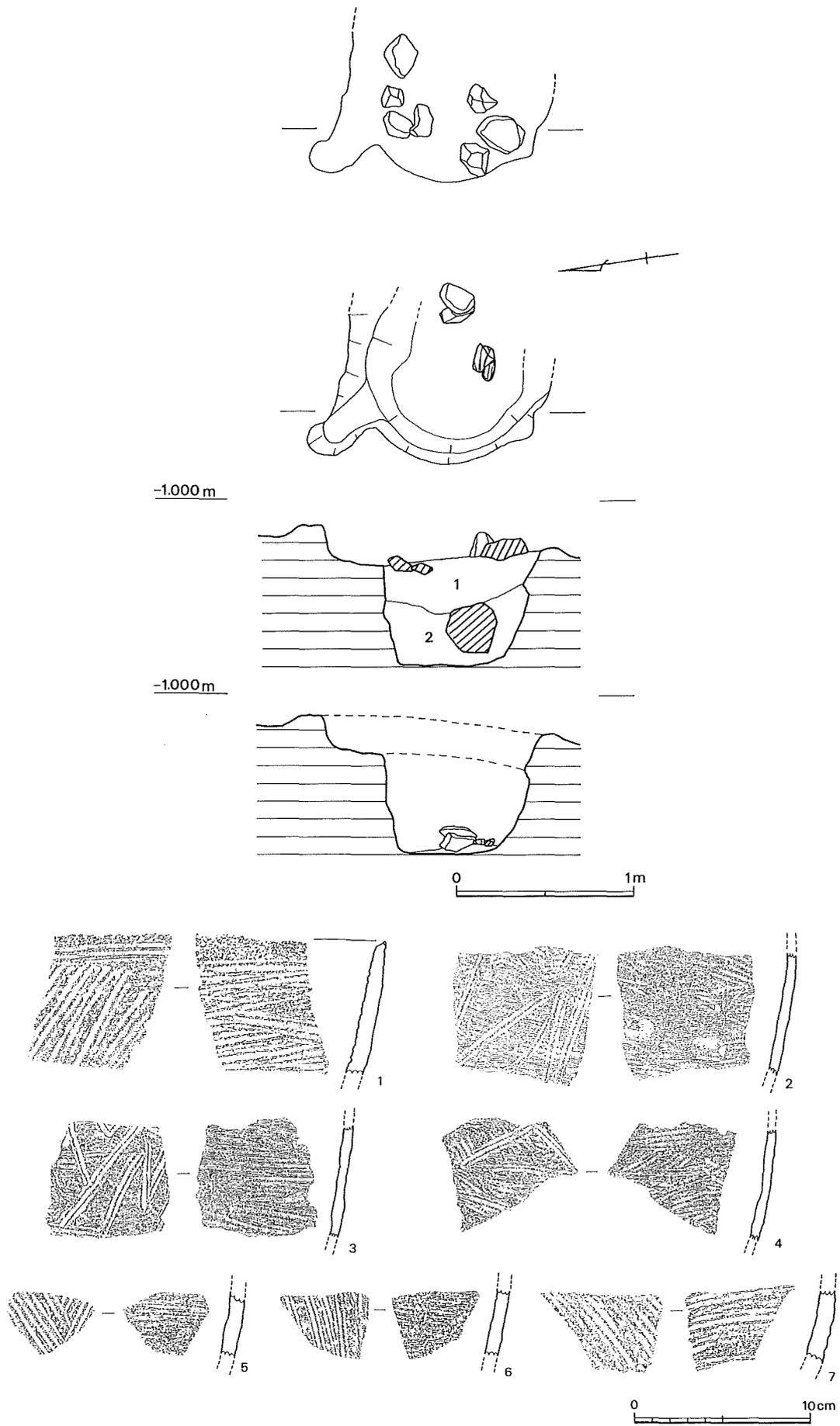
第22表 No.2貯蔵穴内出土土器観察表

No.3貯蔵穴 (第62図)

A-12区西側, No.2貯蔵穴の東隣に位置する。形状は略円形。直径は長軸約1.3m (推定)・短軸約1.2m, 底面直径は長軸約0.8m (推定)・短軸約0.6mを測る。貯蔵穴は一部が調査区壁面と重なっており、調査は完掘するまでには至らなかった。土層堆積も良好で基本的にはNo.2貯蔵穴と同様であるが、3層が存在しない点では異なる。また遺構検出時に20cm前後の小礫群が確認されている。X層のものかあるいは貯蔵穴に関連したものかは不明である。1・2層との境には木片・枝葉等がほぼ一面に検出されたがどのような目的で使用されたかは不明である。可能性のひとつとして貯蔵物を覆う目的で使用したことも考えられる。当該貯蔵穴の北側に足掛け場と思われる遺構が検出されている。これはNo.2貯蔵穴同様、自然地形を利用して作ったものかあるいは人為的なものかが考えられる。また、貯蔵穴の断面を観察すると若干の抉れが確認されるが、意図的なものかどうかは不明。出土土器もNo.2貯蔵穴に比して多量に出土しているが、図化できるものだけをここでは掲載した。

No.3貯蔵穴内出土土器 (第62図, 第23表)

1 は1層出土。内・外面ともに横・斜走の貝殻条痕・ナデを地文にもつ。外面は斜走する貝殻条痕の施文の後、口縁部直下に横走条痕が施される。内・外面ともに炭化物の付着が確認される。2 は一括



第62図 No.3貯蔵穴実測図 (S=1/30) および出土土器 (S=1/3)

出土。地文は内・外面ともに横・斜走の貝殻条痕・ナデが施される。外面施文は2条単位で貝殻条痕をつけている。3は外面…横・斜走条痕+内面…横走条痕+ナデが地文として確認される。文様は二枚貝を2条単位で斜・縦走方向に施文を行う。2と施文が類似している。また内・外面ともに炭化物の付着が認められる。4も3同様一括出土。地文は内・外面ともに横・斜走する貝殻条痕+ナデが確認される。外面は貝殻条痕が2～3条単位で横・斜走方向で施文されている。また炭化物も内・外面に確認され、内面には粘土帯の痕跡も認められる。5は1層出土。外面は横・斜走条痕+ナデ、内面は横走条痕+ナデの地文が確認される。施文は2条単位で斜走する貝殻条痕となり、互いが重なり合う文様となる。外面には炭化物の付着も確認される。6は1層出土。内・外面ともに横走する貝殻条痕+ナデを地文にもつ。文様は2条単位で縦走する貝殻条痕を施文。また炭化物の付着が内・外面ともに認められる。7は2層出土。地文は内面に横走条痕が確認されるが外面は不明。外面は横・斜走する条痕、あるいは拓影のように斜走条痕の可能性も考えられる。したがって斜走条痕が地文であれば、施文はないことになる。内面には炭化物の付着が認められる。

図版 番号	出土 地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	地文(貝殻条痕)		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
62-1	12	貯蔵穴内1	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(1層前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	斜・横走	○	○	
62-2	12	貯蔵穴内	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1層前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	斜走	○	○	
62-3	12	貯蔵穴内1	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1層前後)・砂粒	横・斜走	横走	斜・縦走	○	○	
62-4	12	貯蔵穴内	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1層前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	横・斜走	○	○	
62-5	12	貯蔵穴内1	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(1層前後)・砂粒	横・斜走	横走	斜走	○		
62-6	12	貯蔵穴内1	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(1層前後)・砂粒	横走	横走	縦走	○	○	
62-7	12	貯蔵穴内2	明褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・雲母片・小礫(1層前後)・砂粒		横走		○		

第23表 No.3貯蔵穴内出土土器観察表

遺物(第63図～第79図, 第24表～第34表)

遺構とは別に遺物包含層からは多量の縄文土器が出土している。出土遺物が多いのは11区で10・12区と比べ圧倒的に多い。しかしながら形式的に判別できるものは少なく、また層位との関係が明瞭に把握できないため遺物の時期は不明である。ここでは文様・地文・調整等での分類を行い、また一部層位的に確認している遺物を参考に出土土器の整理を行う。

第I群土器(第63図～第71図, 第24表～第28表)

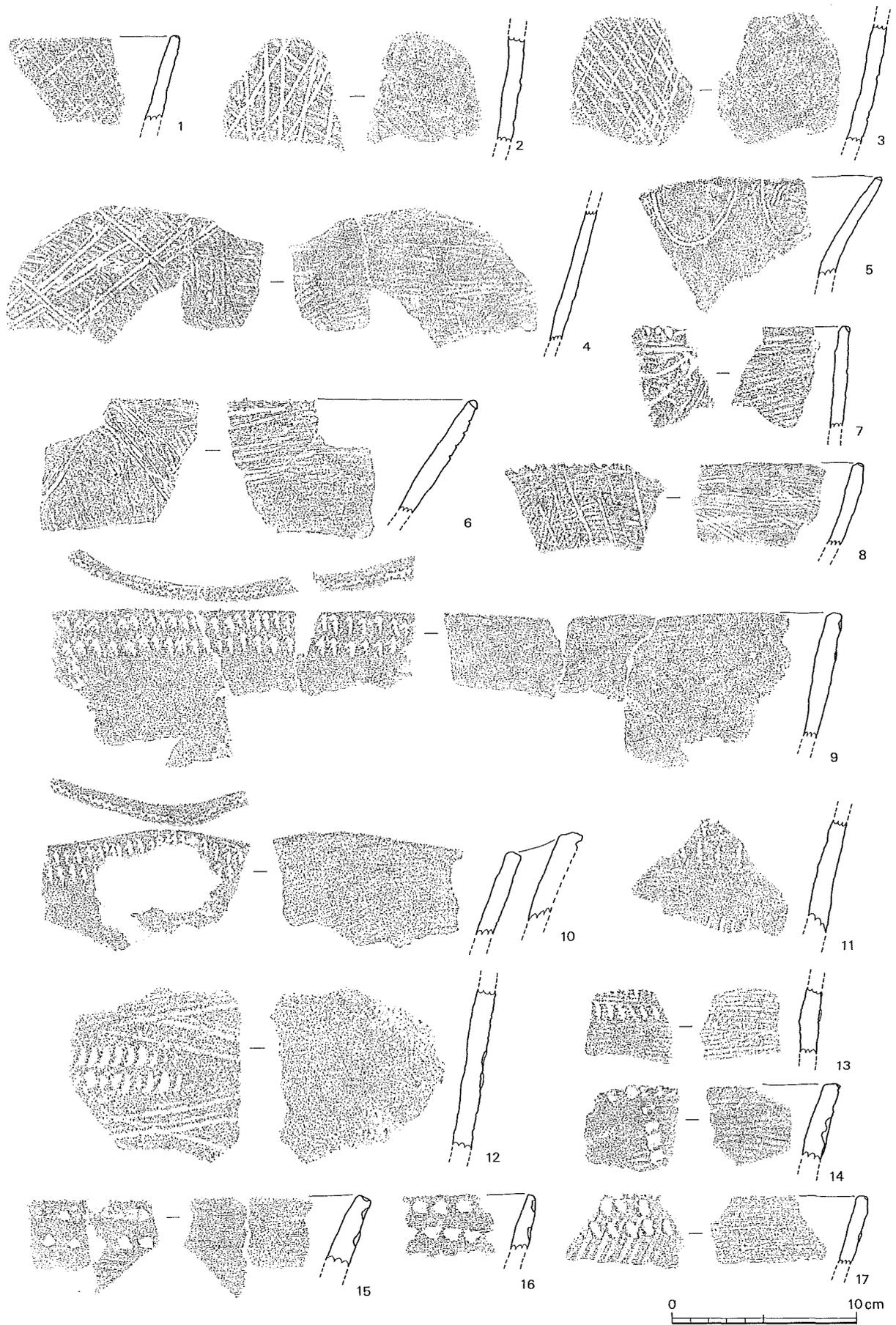
内・外面に横・斜走する条痕を地文にもつ。口唇部には刻みを有し、口縁部外面には貝殻等による施文が確認される。また施文の違いによって分類を試みた。^(註1)

第I-a群土器(第63図～第64図, 第24表)

横・斜走の貝殻条痕+ナデを地文にもち、口縁部に刻みおよび貝殻腹縁・斜走する細沈線を含む。口縁部の器形は外反するが内湾するものも含む。第I群は塞ノ神式土器の後半に類似すると思われる。

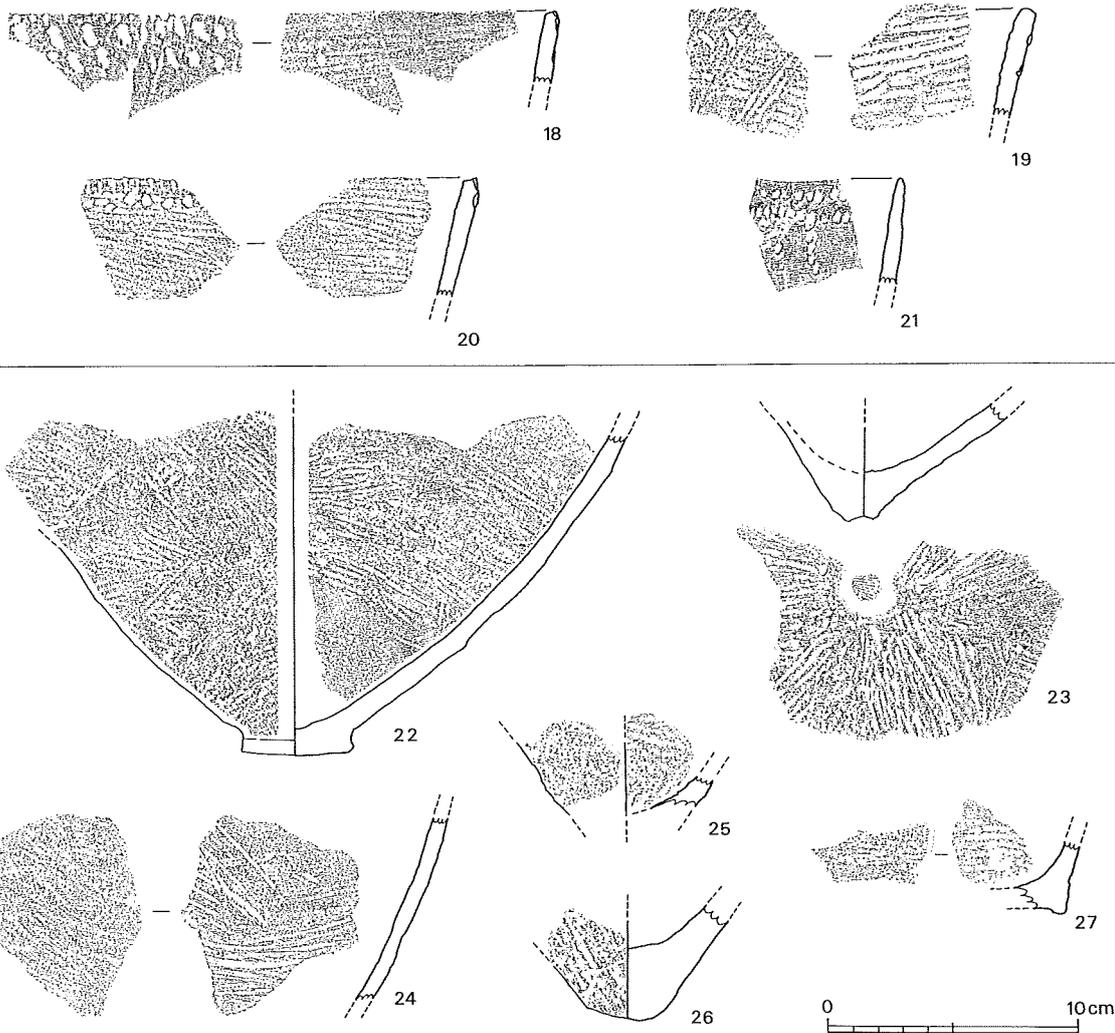
1の地文は不明。内・外面は横・斜走条痕が考えられる。口唇部に刻みが確認されるが、先細のヘラ状工具の可能性も高い。文様は格子目状に施文され、\→/の順で施文がされる。2・3は1同様地文は不明。横・斜走条痕が考えられる。3は池中I下貝層出土。施文は\→/の順で確認される。^(註2)

4の地文は内・外面ともに横・斜走条痕が確認される。文様は貝殻条痕を2条単位で施文。\→/の順で確認される。5の地文は不明。磨滅が著しい。口唇部に若干の刻みを残す。文様は2条単位の貝殻



第63图 第I-a群土器实测图 (S=1/3)

条痕を半月状に口縁・口唇部間への施文が確認される。6の地文は外面に横・斜走、内面に横走条痕が確認される。内・外面は条痕後にナデが施される。口唇部にはへら状工具による刻みを確認。文様は貝の先端部によって斜方向に細沈線が施される。7の地文は内面に横走条痕が確認されるが外面は不明。外面は横・斜走条痕の可能性が高い。口唇部は平坦に調整、その後外面に刻みを加える。文様は沈線が曲線状に施文され、丸棒状工具によるものと思われる。8の地文は内・外面に横走条痕が確認される。口唇部は平坦に調整され、口唇外面に丸棒状工具で刻みが加わる。文様は沈線が\の方向で施文されているが、工具等は磨滅のため不明。また内面に粘土帯が確認される。9の地文は不明。ただし内・外面にはナデおよび指頭圧痕が確認される。口唇部は刻みではなく貝殻腹縁が加わる。口縁部は貝殻腹縁による連続刺突が2列確認される。また部分的に縦走する貝殻腹縁がみられるが施文方向は不明。10の地文は内面に斜走条痕が確認されるが、外面は磨滅および剥落により不明。口唇部は平坦調整が確認され、その後貝殻腹縁が施される。また口縁部は2列の貝殻腹縁が確認され口縁部は波状をなす。11の地文は剥落等により不明であるが、外面に若干の横走条痕が確認される。文様は貝殻腹縁が施文される。12は池中Ⅰ下貝層出土。磨滅が著しい。地文は外面のみ横走条痕が施される。文様は沈線と貝殻腹縁が確認される。沈線は貝殻を2条単位で\→/の順に施文を行う。貝殻腹縁は2列確認される。13は地文は内・外面ともに横走条痕が施される。文様は貝殻腹縁を2列確認。14の地文は内・外面ともに横走条痕。内面は部分的に指頭圧痕が確認される。口唇部は平坦に調整が施される。口唇外面には刻みが確認されるが工具等は不明。文様は半截竹管による連続刺突が縦方向に加わり、下から上への刺突が確認される。15の地文は内・外面ともに横走条痕が確認される。口唇部は平坦に調整が施される。口縁部は半截竹管による連続刺突が2列確認される。口唇部も同様に半截竹管による刺突が施される。16の地文は不明。口縁部は半截竹管による連続刺突が3列確認される。17の地文は内面のみ横走条痕が確認される。文様は斜走沈線を施文、その後口縁部に2列の連続刺突を加える。半截竹管によって施文されたと思われる。18の地文は内面に横走条痕が確認される。外面はナデ消しされたものと思われる。口唇部にはへら状工具による刻みが施される。口縁部は半截竹管による連続刺突が2列施文される。19の地文は内・外面に斜走条痕が確認される。2~3条の斜走条痕→刺突が施文されるが、刺突の工具は不明。20の地文は内・外面に横・斜走条痕が確認される。口唇部は平坦に調整され、へら状工具または貝の先端による刻みが口唇外側に施される。また口唇直下には1列の連続刺突が確認される。丸棒状工具によるもので、ほぼ上から下へかけ施文。21の地文は不明。2列の連続刺突がほぼ上から下へ施される。その後2列目の刺突から斜方向に刺突が施される。これもほぼ上から下へ刺突が確認される。22の地文は内・外面に横・斜走条痕が確認される。底部は高台となるが全体的にバランスが悪い。貼付の可能性も考えられる。また岩盤直上で出土しており、出土土器群の中で層位的には最も古い時期に位置づけられる。23の地文は外面に縦走条痕、内面は指頭圧痕が確認される。底部は尖底となり先端部に向かって条痕が確認される。底面は二枚貝の腹部による押捺が確認される。また器壁は均一ではなく傾きも非対称である。23は胎土・条痕・調整が22と似ており、同時期の可能性も考えられる。24の地文は内・外面に横・斜走条痕が施される。特に外面には指頭圧痕も確認される。22に類似。25・26の地文は外面に縦走条痕を確認、内面は指頭圧痕が残る。25は尖底と思われる。27の地文は内・外面ともに横走条痕を確認、底面は上げ底になる。小破片のため詳細は不明。



第64図 第I-a群土器実測図 (S=1/3)

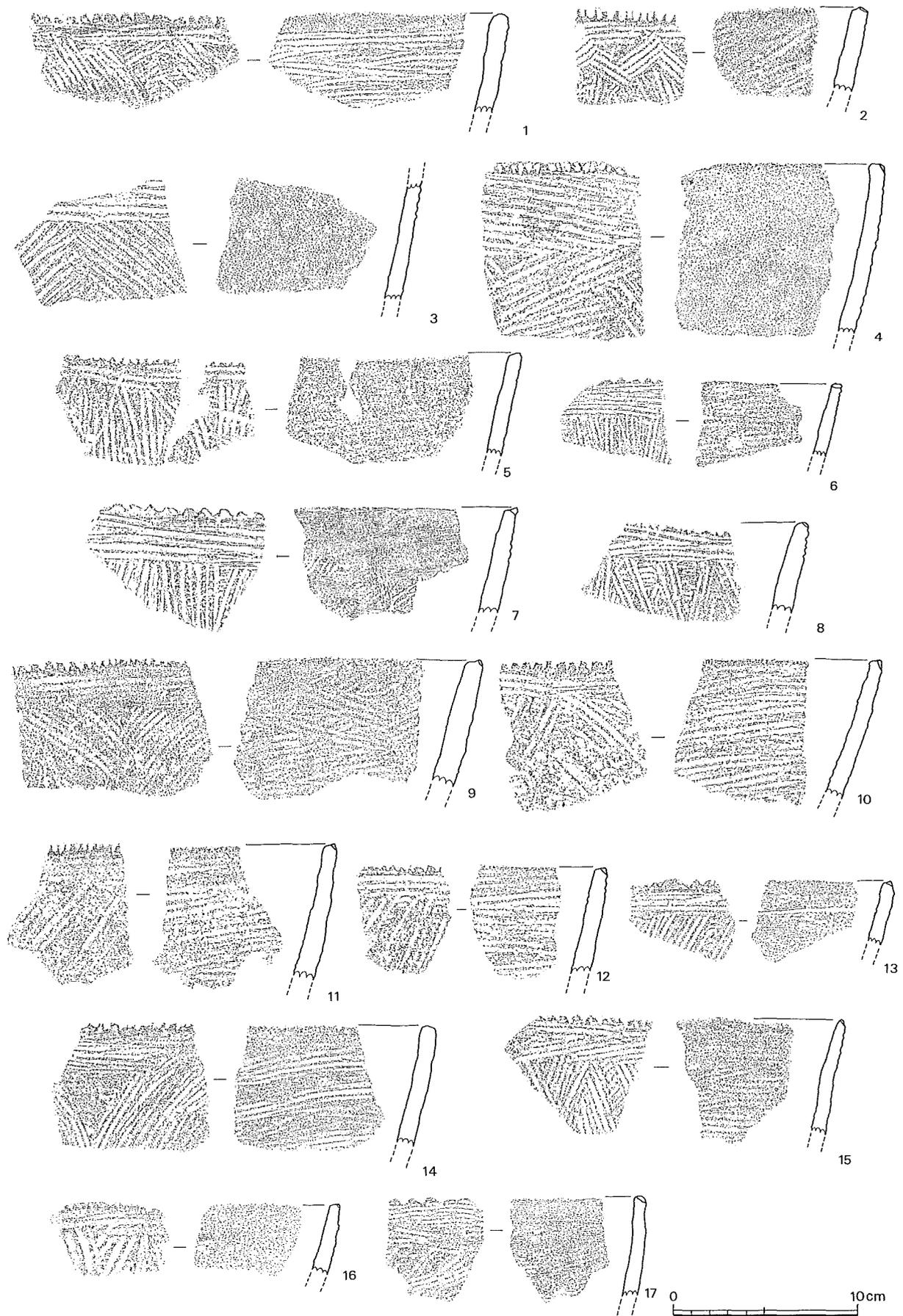
図版番号	出土地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	地文(貝殻条痕)		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
63-1	11	池中Ⅱ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕			
63-2	11	池中Ⅱ	灰褐色	黒色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○		
63-3	11	池中Ⅰ下貝	褐灰色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○		
63-4	12	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・小礫(3mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○		
63-5	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒			貝殻条痕			波状口縁
63-6	11	池中Ⅱ	黒色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(5mm前後)・砂粒	横・斜走	横走	貝殻条痕	○	○	
63-7	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2mm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕			
63-8	11	池中Ⅱ	浅赤褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒	横走	横走	貝殻条痕			
63-9	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒			貝殻腹縁			
63-10	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(3mm前後)・砂粒		斜走	貝殻腹縁			波状口縁
63-11	11	池中Ⅱ	灰白色	灰白色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(3mm前後)・砂粒	横走		貝殻腹縁			
63-12	11	池中Ⅰ下貝	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒	横走		貝殻条痕+腹縁			
63-13	11	池中Ⅱ	褐灰色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒	横走	横走	貝殻腹縁			
63-14	11	池中Ⅱ	灰黄褐色	灰白色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒	横走	横走	半截竹管			
63-15	11	池中Ⅱ	灰白色	灰白色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(3mm前後)・砂粒	横走	横走	半截竹管			
63-16	11	池中Ⅱ	灰白色	灰白色	良好	深鉢	口縁部	角閃石・雲母片・小礫(4mm前後)・砂粒			半截竹管			
63-17	11	池中Ⅱ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2mm前後)・砂粒		横走	半截竹管			
64-18	11	池中Ⅱ	黒褐色	浅黄褐色	良好	深鉢	底面	雲母片・小礫(1mm前後)・砂粒		横走	半截竹管	○		
64-19	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒		斜走	条痕+半截竹管	○	○	
64-20	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	丸棒状工具			
64-21	11	池中Ⅱ	黒色	灰褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2mm前後)・砂粒			丸棒状工具	○	○	波状口縁
64-22	11	池中Ⅱ	灰褐色	黒褐色	良好	深鉢	底面	石英・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○	○	高台付
64-23	11	池中Ⅱ	暗褐色	灰褐色	良好	深鉢	底面	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒	縦走		貝殻条痕			尖底
64-24	11	池中Ⅱ	灰褐色	黒色	良好	深鉢	胴部	石英・雲母片・小礫(3mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○		
64-25	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	底面	石英・雲母片・小礫(1mm前後)・砂粒	縦走		貝殻条痕			尖底?
64-26	11	池中Ⅱ	褐灰色	黒褐色	良好	深鉢	底面	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒	縦走		貝殻条痕			尖底?
64-27	11	池中Ⅱ	灰褐色	黒褐色	良好	深鉢	底面	石英・小礫(1mm前後)・砂粒	横走	横走	貝殻条痕	○		

第24表 第I-a群土器観察表

・第Ⅰ-b群土器（第65図・第66図・第67図，第25表）

地文は内・外面に横・斜走条痕をもつ。口縁部は外反または内湾する。文様は数条単位で縦・横・斜方向にほぼ直線で施される。口唇部刻みの大半は外側刻みを有する。底部状況は不明であるが、尖底・丸底・平底の可能性が考えられる。

1の地文は内面に横走条痕+指頭圧痕が確認され、文様は斜走→横走条痕の順となる。口唇部外面はヘラ状工具による刻みを有し、直下はナデ消しが施される。2の地文は内面に斜走条痕が確認される。外面は不明。文様はほぼ縦走→斜走→横走の順が確認される。また斜走条痕は\→/の順となる。口唇部外面はヘラ状工具による刻みを有する。3は口縁部片。地文は内・外面不明。内面は指頭圧痕が確認される。文様は斜走→横走の順で、斜走条痕は/→\の順となる。口唇部刻みは不明。外面刻みが考えられる。1・2の状況から3は波状口縁の可能性が高い。4の地文は内・外面不明。内面は指頭圧痕が確認される。文様は斜走→横走の順で施文、斜走条痕は\→/の順になる。口唇部外面はヘラ状工具による刻みを有する。5・6の地文は内面に横走条痕が確認されるが外面は不明。文様は斜走→横走の順となる。口唇部は平坦に調整される。外面はヘラ状工具による刻みを有すが、6は丸棒状工具の可能性も考えられる。7は内・外面に横走条痕。内面はナデ消しが丁寧に施される。文様・口唇部刻みは5と同様。ただし刻みに用いた工具は不明。8の地文は外面に横走条痕が確認される。内面は磨滅のため不明。文様は基本的に5と同じだが、2条単位での斜走条痕は異なる。9・10の内面に地文が確認され、9は横・斜走・10は横走条痕が認められる。外面は不明。口唇部は平坦に調整され、外面はヘラ状工具の刻みを有する。11・12の地文は内面に横・斜走条痕が確認される。外面は磨滅のため不明。文様は斜走→横走条痕の順となる。口唇部は平坦に調整、外面はヘラ状工具の刻みを有する。13の地文は内面に横走条痕を確認。外面は不明。文様および施文順は11・12と同じ。口唇部刻みも同様だが、工具は貝の先端によるものと思われる。14の地文は内面に横走条痕を確認するが外面は不明。内面は3条単位の条痕も確認されその後ナデ消しが加わる。文様・刻みは9・10と同じ。15の地文は内面に横・斜走条痕が確認されるが外面は不明。文様は斜走→横走条痕の組み合わせとなる。口縁～口唇部の外反が目立つ。口唇部外面に刻みを有する。工具は不明だが貝の先端による可能性が高い。16は磨滅が著しく地文も不明。文様は斜走→横走で構成される。口唇部外面は刻みを有する。その他詳細は不明。17の地文は内・外面に横・斜走する条痕が確認される。文様等は不明。口唇部外面に刻みを有す。工具は不明だが貝の先端による可能性が高い。18の地文は内面に横・斜走条痕が確認される。外面は不明。文様は斜走→縦走となる。縦走条痕は2条単位で確認され、口唇部外面は刻みを有する。磨滅が著しいため詳細は不明。19の地文は内・外面に横・斜走条痕が確認される。文様は2条単位の斜走条痕が確認される。口唇部外面はヘラ状工具によると思われる刻みを有する。20は内・外面に横走条痕+ナデ消しが施される。文様は不明。口唇外面直下に粘土貼付後、外面刻みを施す。21～26は内面に横・斜走条痕+ナデ消しが確認されるが外面は不明。これらの土器文様は斜走条痕の組み合わせとなる。いずれも胴部下半で21・22・25は底部に近く、平底になる可能性が高い。27の地文は内面に横・斜走、外面は斜走条痕が確認される。文様は確認されない。胴部下半と思われ、尖底・丸底・平底の可能性が考えられる。この土器は第Ⅰ-a群の底部片に類似するが判断が困難なためⅠ-b群に含めた。28の地文は内面に横・斜走条痕+ナデ消しが確認されるが外面は不明。文様・調整等は26と同様。29・30・31の地文は横・斜走条痕が確認される。外面は不明。文様は斜走条痕の組み合わせと

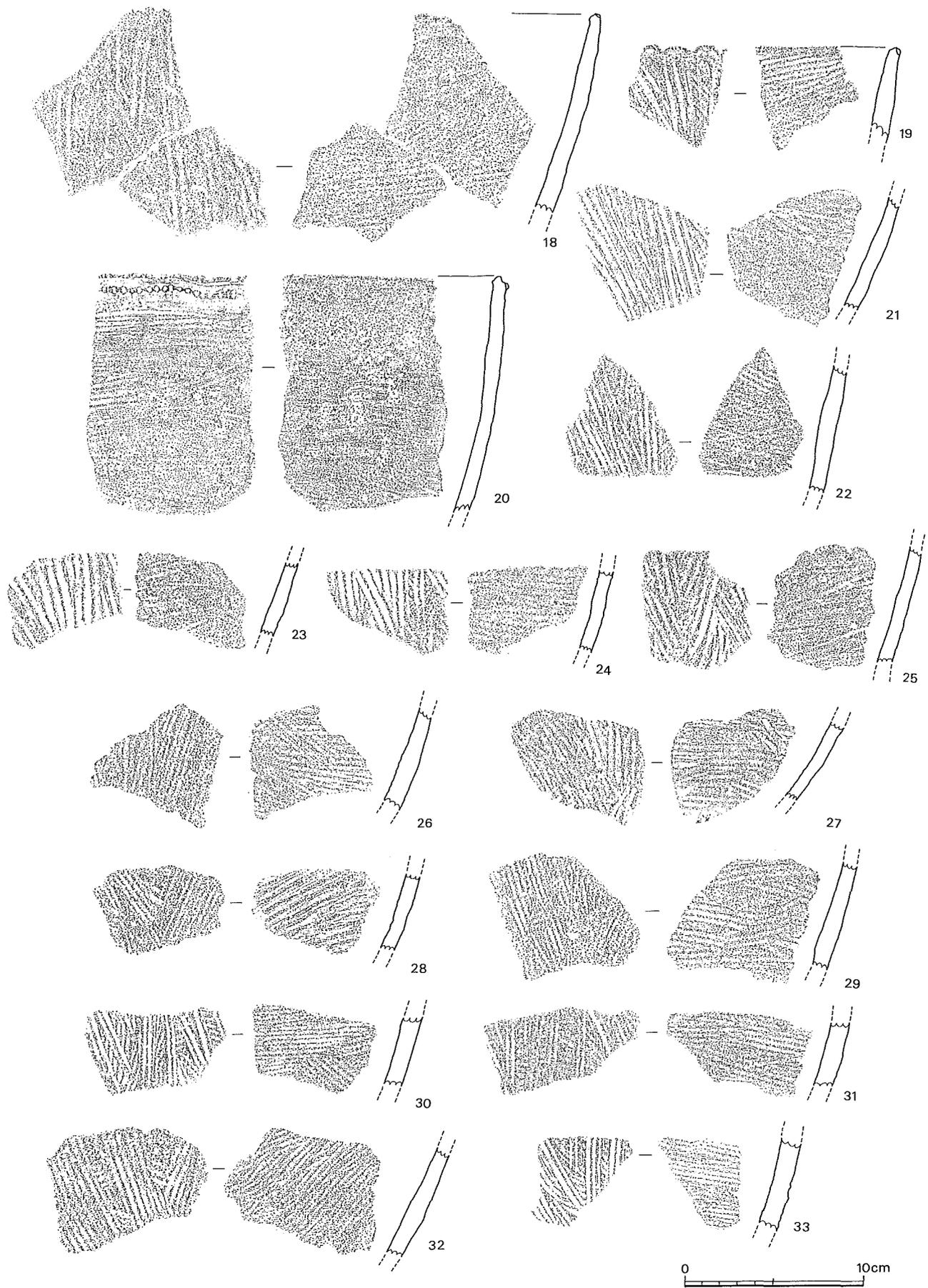


第65図 第I-b群土器実測図① (S=1/3)

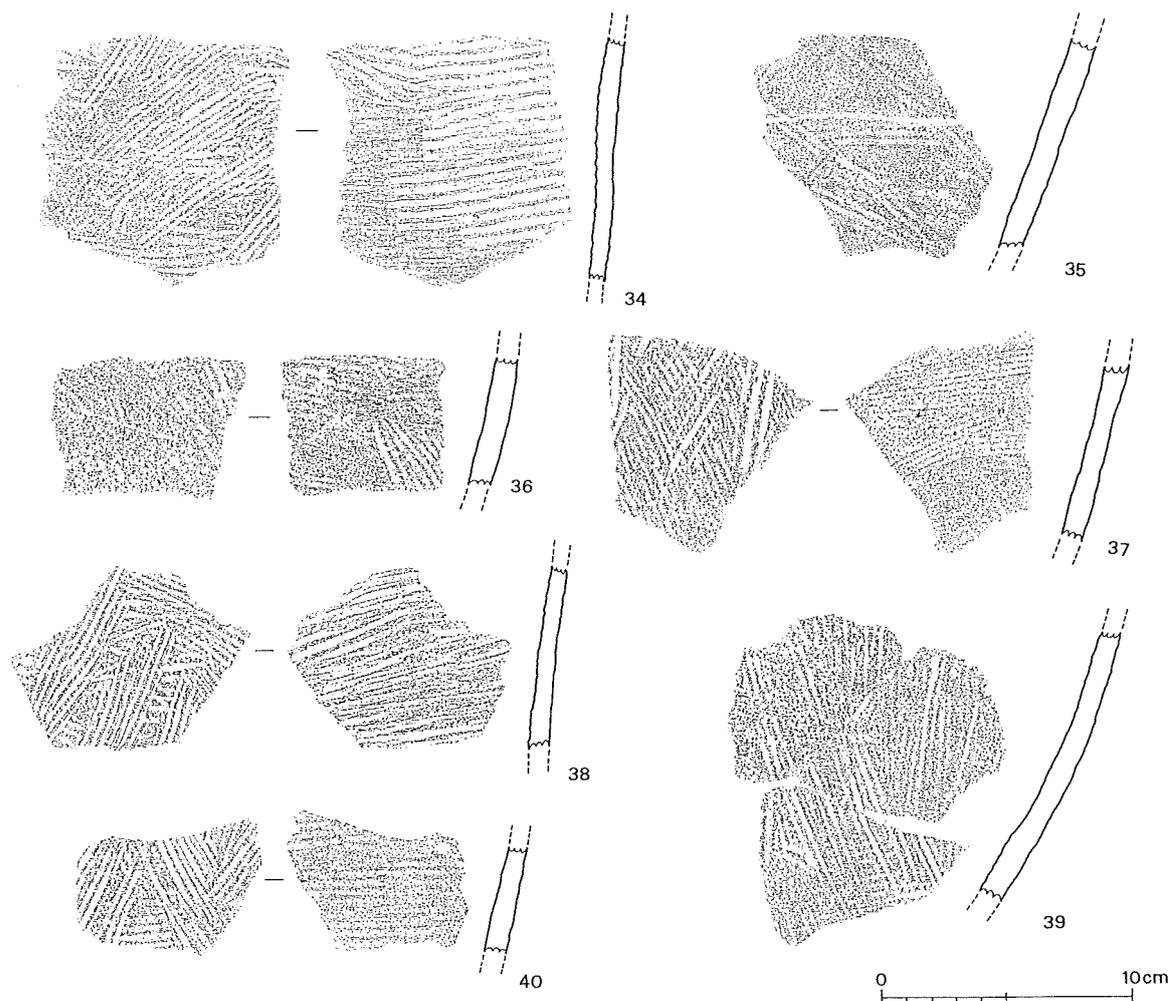
なる。また30は2条単位の条痕も確認され、その後斜走する擦過条痕が施される。32の地文は斜走条痕が確認されるが外面は不明。文様は29~31と同様。33の地文は内面に斜走条痕が確認される。文様は29~32と同様であるが、斜走条痕は曲線も含む。また斜走条痕は2条単位の施文が確認される。34の地文は内面に横・斜走、外面に横走条痕が確認される。内面は外面より条痕は大きい。文様は3条単位で櫛描きされる。また斜走条痕後に指頭圧痕も確認される。この土器は粘土帯が確認され、内傾接合がわかる。35の地文は内・外面不明。全体的に磨滅が著しく内面は特に顕著である。文様は横・斜走条痕の組み合わせで、2条単位の条痕が横走→斜走の順で施文される。また施文後の指頭圧痕も確認される。34同様この土器は粘土帯が確認され内傾接合がわかる。36の地文は内面に横・斜走条痕、外面に斜走条痕+ナデ消しが確認される。文様は確認されず土器の磨滅は著しい。37の地文は内面に斜走条痕が確認されるが外面は不明。文様は斜走条痕後、2条単位で斜走条痕を櫛描きする。38の地文は内面に横・斜走、外面に斜走条痕が確認される。文様は斜走条痕後、3条単位の条痕で方向へ櫛描きする。39の内面の地文は斜走条痕+ナデ消しが確認される。また内面は部分的に磨滅が著しい。外面は部分的だが横走条痕が確認される。文様は2条単位による貝殻条痕が/→\の順で施文される。胴部下半と思われる。また上面に粘土帯が確認され内傾接合がわかる。40の地文は内・外面に横走条痕が確認される。文様は斜走条痕の組み合わせで\→/の順で施文される。また内面は部分的に指頭圧痕も確認される。

図版番号	出土地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	地文(貝殻条痕)		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
65-1	11	池中Ⅱ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒	横走	斜・横走	貝殻条痕			波状口縁
65-2	11	池中Ⅱ	黒褐色	暗褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(3mm前後)・砂粒		斜走	貝殻条痕	○		波状口縁
65-3	11	池中Ⅰ下貝	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒			貝殻条痕	○		
65-4	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒			貝殻条痕	○	○	波状口縁
65-5	不明	表採	黒褐色	灰褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(3mm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕	○		波状口縁
65-6	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕	○		波状口縁
65-7	12	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・砂粒	横走	横走	貝殻条痕	○		波状口縁
65-8	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒	横走		貝殻条痕	○		波状口縁
65-9	11	池中Ⅱ	褐灰色	灰黄褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(4mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕	○	○	波状口縁
65-10	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・砂粒		横走	貝殻条痕	○	○	
65-11	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕	○	○	
65-12	12	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・砂粒		横・斜走	貝殻条痕	○	○	
65-13	12	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(4mm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕			
65-14	不明	表採	黄褐色	明黄褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(3mm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕	○		波状口縁
65-15	11	池中Ⅱ	黒褐色	暗褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			波状口縁
65-16	11	池中Ⅱ	黒褐色	浅黄褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒			貝殻条痕			
65-17	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○	○	
66-18	11	池中Ⅱ	明灰色	灰白色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○		
66-19	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○		波状口縁
66-20	11	池中Ⅱ	褐灰色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(3mm前後)・砂粒	横走	横走	貝殻条痕	○	○	
66-21	12	池中Ⅱ	明褐色	明褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-22	11	池中Ⅱ	灰褐色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-23	12	池中Ⅱ	灰白色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-24	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-25	11	池中Ⅱ	褐灰色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕		○	
66-26	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(1mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-27	11	池中Ⅱ	褐灰色	明褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒	斜走	横・斜走	貝殻条痕			
66-28	11	池中Ⅱ	灰褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕		○	
66-29	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-30	11	池中Ⅱ	黒褐色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	石英・雲母片・小礫(1mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-31	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒		横・斜走	貝殻条痕			
66-32	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1mm前後)・砂粒		斜走	貝殻条痕			
66-33	12	池中Ⅰ上貝	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(3mm前後)・砂粒		斜走	貝殻条痕	○		
67-34	11	池中Ⅱ	褐灰色	黒色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒	横走	横・斜走	貝殻条痕	○	○	
67-35	11	池中Ⅱ	暗黄褐色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(5mm前後)・砂粒			貝殻条痕			
67-36	12	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・雲母片・小礫(3mm前後)・砂粒	斜走	横・斜走	貝殻条痕			
67-37	11	池中Ⅱ	灰褐色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒		斜走	貝殻条痕	○		
67-38	11	池中Ⅰ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒	斜走	横・斜走	貝殻条痕			
67-39	11	池中Ⅱ	黒褐色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・砂粒	横走	斜走	貝殻条痕			
67-40	11	池中Ⅱ	褐灰色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒	横走	横走	貝殻条痕			

第25表 第Ⅰ-b群土器観察表



第66图 第I-b群土器实测图② (S=1/3)

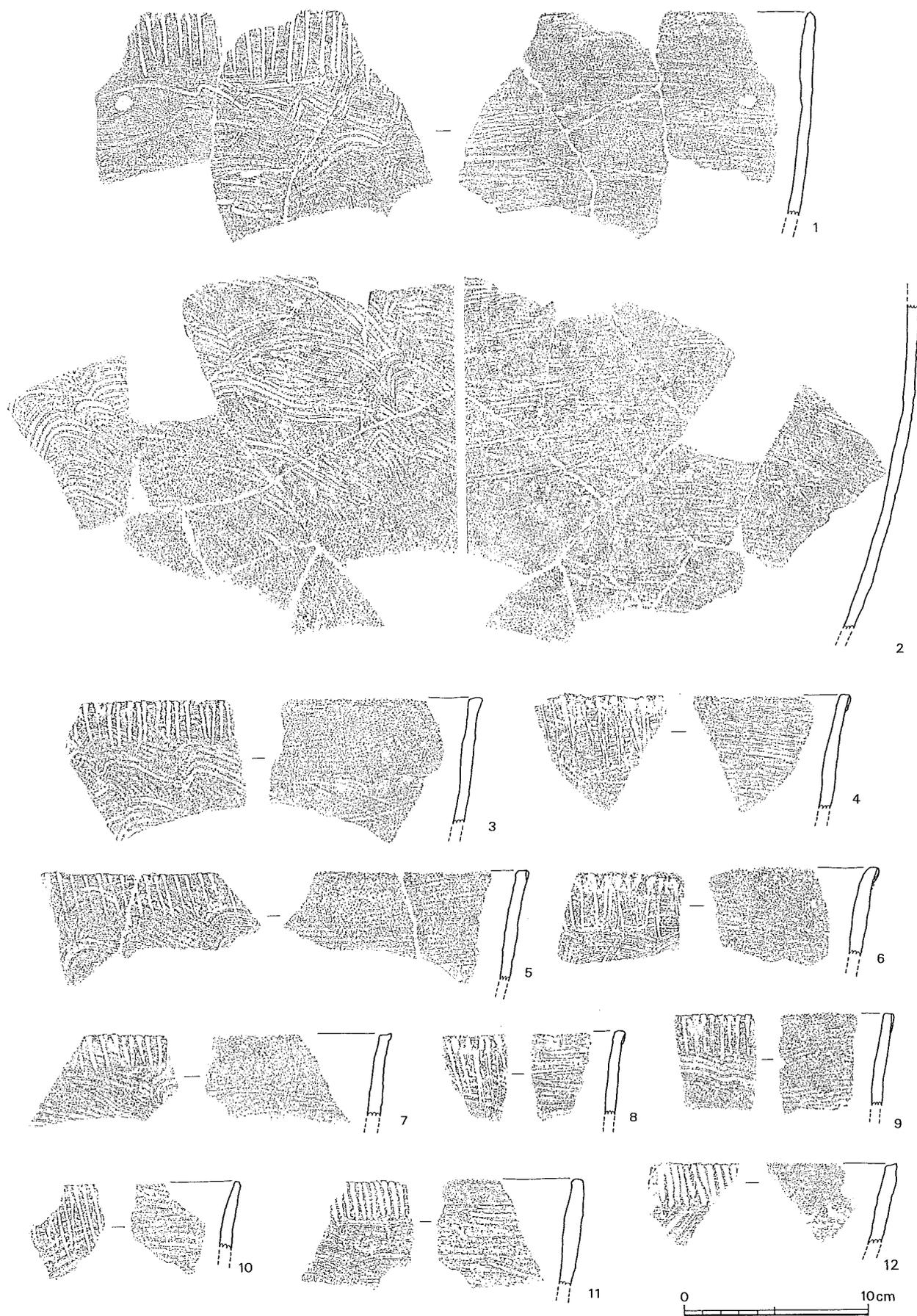


第67図 第I-b群土器実測図③ (S=1/3)

・第I-c群土器 (第68図・第69図, 第26表)

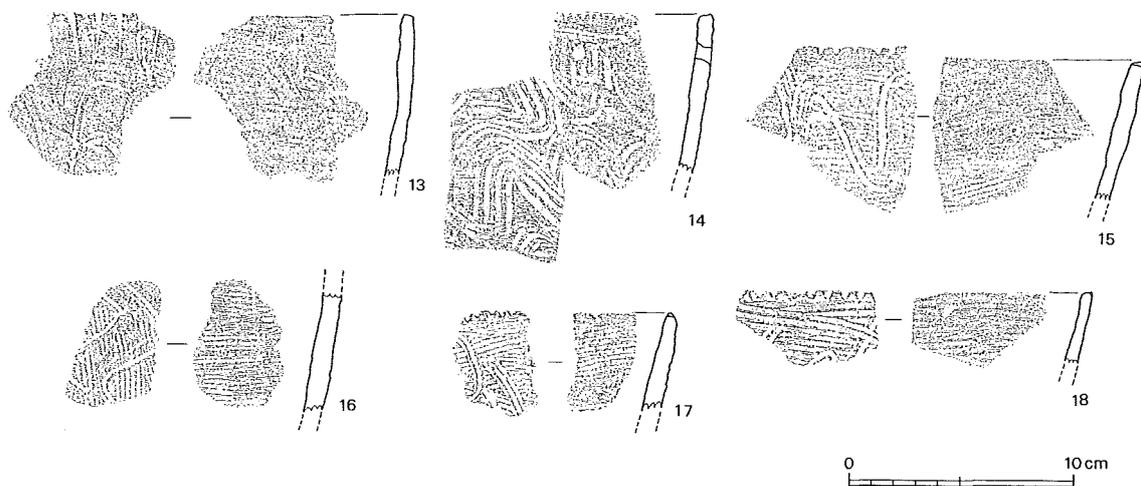
地文は横・斜走条痕+ナデ消しが確認される。文様は貝を数条単位で施文を行い、全体に曲線文様を施す。口唇部の外側に刻みを有するが、口唇~口縁部間にかけての刻みも確認される。底部は不明。尖底・丸底・平底が考えられる。

1の地文は内・外面とも横・斜走条痕+ナデ消しを確認、内面には指頭圧痕も確認される。文様は曲線条痕が波状・山形状に施文される。その後、口唇部外面~口縁部にかけて櫛描き状の刻みを縦方向に施す。工具は不明。また左側に補修孔が確認され、外面→内面方向へ穿孔している。2の地文は内面に斜走条痕+ナデ消しを確認され、その後指頭圧痕が加わる。外面は不明。文様は1同様曲線条痕を施文される。2~4条の条痕で波・弧状の曲線を施文する。胴部下半は磨滅により地文・文様が消えている。また土器は粘土帯で割れている可能性が高い。文様・調整等から1と同一個体の可能性が考えられる。3の地文は内・外面に横・斜走条痕+ナデ消しが施される。また内面には指頭圧痕も確認される。口縁部に波状の曲線條痕を施文、その後刻みが施される。口唇部の器壁は薄く調整され、その際に余った粘土を口唇部外面へ入れ込んだ痕跡が確認される。刻みは口唇部外面~口縁部間に縦走する櫛描文が施される。4の地文は内・外面に横走条痕+ナデ消しが施される。内面には条痕後の指頭圧痕も認められる。文様は部分的に曲線條痕を確認、口唇部外面は刻みを施す。口唇部は平坦に調整され、



第68図 第I-c群土器実測図① (S=1/3)

これにより口唇部外面を肥厚させている。刻みは口縁部にかけて櫛描きの縦走施文を行う。この土器は波状口縁をなす。5の地文は内面に横走条痕+ナデ消しが施される。また指頭圧痕も確認される。外面は不明。曲線文様が波状に施されるが、波状よりも半円状に近い施文と思われる。口唇部は平坦調整を行い、その際に余った粘土を口唇部外面へ入れ込んだ痕跡が確認される。6の地文は内面に斜走条痕+ナデ消しが施され、また指頭圧痕も確認できる。外面は不明。文様は曲線条痕が部分的にわかる。口唇部の器壁は薄く調整され、その際に余った粘土を口唇部外面へ入れ込んだ痕跡が確認される。刻みは口唇部外面～口縁部にかけて櫛描き条痕が縦方向に施される。7の地文は内面に横・斜走条痕+ナデ消し、内面は指頭圧痕も確認される。文様は曲線条痕を施す。口唇部は平坦に調整され、余った粘土を口唇部外面に入れ込んである。刻みは口唇部外側から口縁部にかけて斜走条痕を櫛描き施文。8・9・10の地文は内面に横走条痕+ナデ消しが確認される。外面は不明だが8・10は横走条痕を施す。施文・調整等は曲線条痕が確認される。刻みは8・10は斜走、9は縦走条痕が櫛描き施文される。11は内面に横走条痕+ナデ消しが確認されるが外面は不明。12の地文は内・外面ともに不明。11・12は内・外面に指頭圧痕が確認される。文様は曲線条痕。口唇部は平坦調整。刻みも口唇部外面～口縁部間に斜走条痕を櫛描き施文。11・12は同一個体の可能性も考えられる。13の地文は内面に横走条痕+ナデ消し。内・外面には指頭圧痕も確認される。文様は3条単位で曲線条痕を楕円状に施文するが線は細い。口唇部は平坦調整され、その後刻みが施される。刻みは口唇部外面～口縁部間に斜走条痕を櫛描きするが線は細い。14の地文は内・外面ともに不明。内面にはナデが確認される。文様は6条単位の曲線条痕を蛇行施文。口唇部外面はヘラ状工具による刻みが施される。また口唇部直下に補修孔が外面→内面方向への穿孔が確認される。15の地文は内面に横・斜走、外面は横走条痕+ナデ消しが確認される。また内・外面には指頭圧痕も確認される。文様は1～4条単位の曲線条痕を蛇行施文させる。口唇部は平坦に調整され、外面にはヘラ状工具による刻みが施される。この土器は波状口縁をなす可能性も考えられる。16は内面に横走、外面に斜走条痕が認められる。文様は曲線条痕。17の地文は内・外面に斜走条痕が確認される。文様は部分的であるが曲線条痕が施される。口唇部内・外面はナデ調整が施され、貝の先端によると思われる刻みが確認される。18の地文は内面に横走、外面は斜走条痕が確認される。内面はナデ消しされ、その後指頭圧痕が加わる。文様は曲線条痕を施文。口唇部外面には丸棒状工具によって刻みが施される。



第69図 第I-c群土器実測図② (S=1/3)

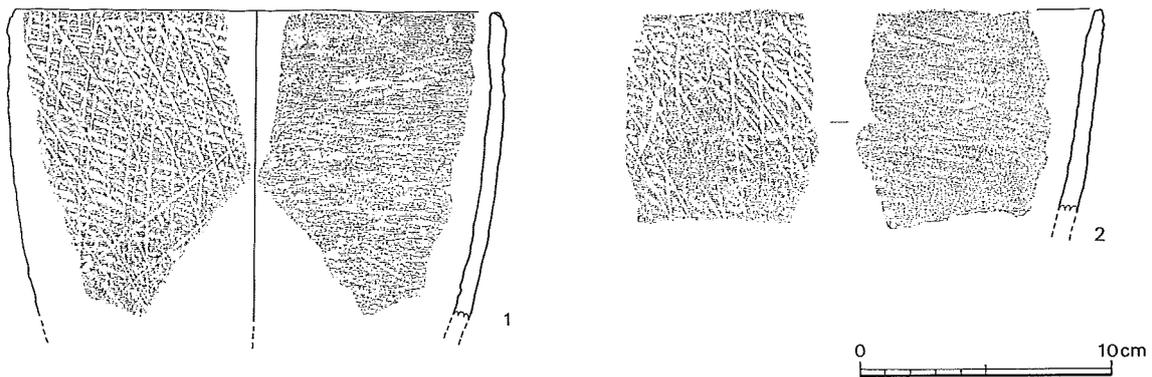
図版 番号	出土 地区	層 位	色 調		焼成	器種	部 位	胎 土	地文(貝殻条痕)		施 文	炭化物		備 考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
68-1	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(1cm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○	○	補修孔アリ
68-2	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(1cm前後)・砂粒		斜走	貝殻条痕	○	○	
68-3	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(2cm前後)・砂粒	横・斜走	横・斜走	貝殻条痕	○	○	
68-4	11	池中Ⅱ	黒色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(3cm前後)・砂粒	横走	横走	貝殻条痕	○	○	波状口縁
68-5	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2cm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕	○	○	
68-6	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2cm前後)・砂粒		斜走	貝殻条痕	○	○	
68-7	11	池中Ⅱ	黒褐色	灰褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(3cm前後)		横・斜走	貝殻条痕	○		
68-8	11	池中Ⅱ	黒色	黒色	良好	深鉢	口縁部	雲母片・小礫(3cm前後)	横走	横走	貝殻条痕	○	○	
68-9	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(1cm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕	○		
68-10	11	池中Ⅱ	黒色	黒色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2cm前後)・砂粒	横走	横走	貝殻条痕	○	○	
68-11	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2cm前後)・砂粒			貝殻条痕		○	
68-12	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(2cm前後)・砂粒			貝殻条痕			
69-13	11	池中Ⅱ	明灰褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(3cm前後)・砂粒		横走	貝殻条痕	○	○	
69-14	11	池中Ⅱ	褐灰色	淡黄色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(4cm前後)・砂粒			貝殻条痕	○		補修孔アリ
69-15	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(2cm前後)・砂粒	横走	横・斜走	貝殻条痕	○		
69-16	12	池中Ⅱ	明褐灰色	明褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(5cm前後)・砂粒	斜走	横走	貝殻条痕			
69-17	12	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(3cm前後)・砂粒	斜走	斜走	貝殻条痕	○		
69-18	11	池中Ⅱ	黒色	灰褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・小礫(2cm前後)・砂粒	斜走	横走	貝殻条痕	○	○	

第26表 第Ⅰ-c群土器観察表

・第Ⅰ-d群土器(第70図, 第27表)

文様は縦走→斜(＼)走の順で施文される。条痕は直線的に口唇部～胴部間を施文。ここでは2点図化した。小破片も2点確認されているが、1と同一個体の可能性も考えられる。

1の地文は内面に横走, 外面に斜走条痕が施される。条痕後, 内・外面はナデ消しされている。文様はほぼ縦走→斜(＼)走の組み合わせが確認される。縦走は口唇外面から胴部にかけて2条単位での櫛描きが施される。また縦走条痕は刻みを兼ねている。斜走条痕の条痕単位は不明。口唇部直下から櫛描きされる。2の地文は内面に横・斜走条痕, 外面に斜走条痕が施される。文様・調整等は1と同じ。



第70図 第Ⅰ-d群土器実測図(S=1/3)

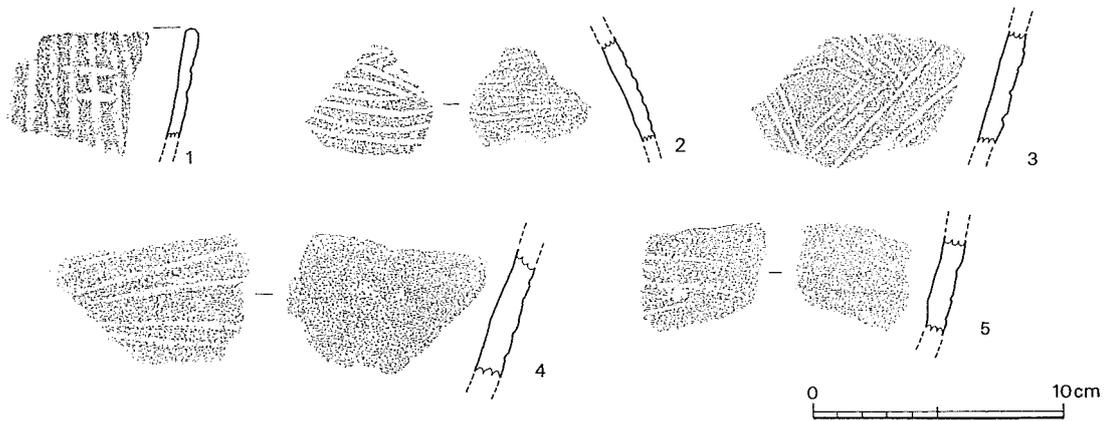
図版 番号	出土 地区	層 位	色 調		焼成	器種	部 位	胎 土	地文(貝殻条痕)		施 文	炭化物		備 考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
70-1	11	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・雲母片・小礫(1cm前後)・砂粒	斜走	横走	貝殻条痕	○	○	櫛書き条痕
70-2	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(5cm前後)・砂粒	斜走	横・斜走	貝殻条痕	○	○	櫛書き条痕

第27表 第Ⅰ-d群土器観察表

・その他の土器群（第71図，第28表）

ここではa~dに該当しない土器を扱う。基本的に文様は沈線で構成されるが，施文方法はそれぞれ異なる。

1の地文は内・外面ともに不明。口唇部は平坦調整がなされる。文様は口唇部外面から縦走沈線に丸棒状工具によって施文，縦走沈線後に「コ」の字型の沈線が口縁部に施される。2の地文は内面に横走条痕+ナデ消しが確認されるが外面は不明。文様は丸棒状工具によって弧状沈線が施される。この土器の上部には直線的な文様も確認される。曲線・直線文様の組み合わせであるが施文順序は不明。また条痕の状況からすると，内側に傾くものと思われる。3の地文は内・外面ともに不明。ただし指頭圧痕が内・外面に確認される。文様はへら状工具によって幾何学状に四角形を施文する。また下部に粘土接合帯が確認され内傾であることがわかる。右京西遺跡出土のNo.27土器に非常に似ているが，地文の有無についてこの土器は異なる。4・5の地文は内・外面ともに不明。ただし内・外面にナデと指頭圧痕が確認される。文様はへらまたは丸棒状工具による細沈線が横・斜方向に施される。2点とも2本単位で施文したものであると思われる。4の上部は粘土帯が確認され内傾接合であることがわかる。



第71図 その他の土器群実測図（S=1/3）

図版番号	出土地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	地文(貝殻条痕)		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面				
71-1	10	IV	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・小礫(2mm前後)・砂粒			沈線			
71-2	11	池中I	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(3mm前後)・砂粒		横走	沈線			
71-3	11	池中II	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・小礫(3mm前後)・砂粒			細沈線			内傾接合
71-4	11	池中II	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)・砂粒			細沈線			内傾接合
71-5	11	池中II	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	石英・角閃石・雲母片・小礫(1mm前後)・砂粒			細沈線			

第28表 その他の土器群観察表

小結

第Ⅰ群は貝殻条痕系土器群であり、施文の違いによりa～dに4分類した。そのほとんどに内・外面に地文（貝殻条痕）が確認され、条痕がないものはナデ消し加わると思われる。また地文がないものも確認され、土器全面をナデによって調整を行っているものと思われる。文様は直線および曲線の貝殻条痕が確認され、口唇部のほとんどは外側に刻みを有する。文様は直線施文→曲線施文へ変化していると思われるが、層位的に遺物が把握されていないため断定はできない。口唇部刻みは刻みだけのもの、口唇部まで延びるもの2種類が確認される。後者は刻み・文様としての機能を兼ねたものとして考えられる。この施文技法は第Ⅰ-c群にみられる。第Ⅰ-d群では胴部にまで達するが、先後関係で捉えることはできない。現時点で第Ⅰ-a～Ⅰ-d群土器は時間的に並行関係、あるいは先後関係であったのかは不明である。

また貯蔵穴内出土の土器であるが、すべて直線の条痕で施文されている。土層細分も行ったが、すべて同じような土器が出土している。また第Ⅰ-a群の22は岩盤直上で出土していることは遺物説明で述べた。このことから貯蔵穴内の土器は第Ⅰ群と考えられ、施文方法から分類すると第Ⅰ-b群に含まれることがいえる。No.1貯蔵穴において出土土器が確認されなかったことも遺物説明で述べた。しかし、他の貯蔵穴（No.2・3）から考えると第Ⅰ群の時期と並行関係であることがいえる。

(註1) 第Ⅰ群土器の資料整理にあたっては水ノ江和同氏よりいろいろとご教示を得た。しかし本報告の分類については筆者に責がある。

(註2) 斜走条痕の方向は、左上-右下・右上-左下の2種類が確認される。ここでは前者を＼、後者を／に置き換えて条痕方向とする。

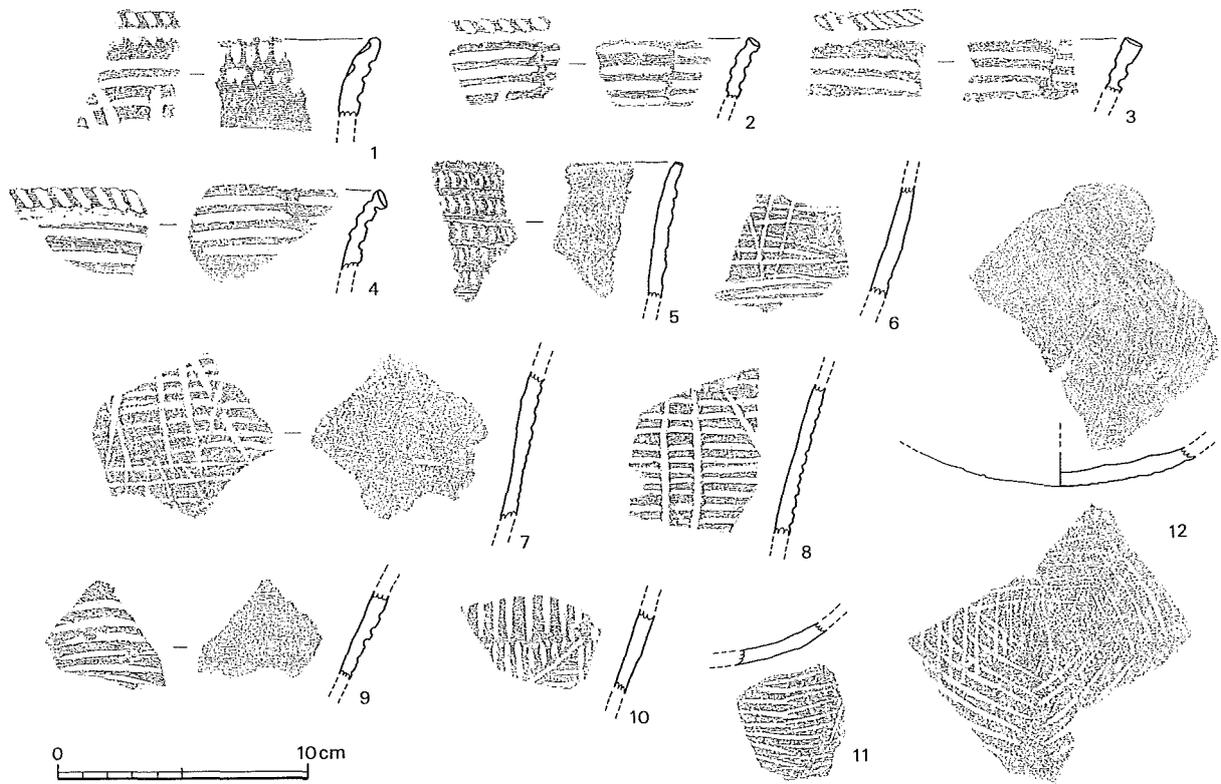
【参考文献】

- 麻生 優編 1967『岩下洞穴』佐世保市教育委員会
賀川光夫ほか 1978『日本の縄文土器展』別府大学附属博物館
高橋信武 1985『右京西遺跡』荻台地の遺跡Ⅹ 荻町教育委員会
藤田和裕 1985『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書第71集 長崎県教育委員会
江本 直 1988『曾畑』熊本県文化財調査報告第100集 熊本県教育委員会
宮坂孝宏 1993『白鳥平A遺跡』熊本県文化財調査報告第127集 熊本県教育委員会
高橋信武 1997「平椀式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古会
福田一志編 1997『伊木力遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第134集 長崎県教育委員会
町田利幸 1997『黒丸遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第132集 長崎県教育委員会
吉田 寛 1999『龍頭遺跡』大分県文化調査報告書第102輯 大分県教育委員会

・第Ⅱ群土器（第72図・第73図，第29表）

ここでは前期後半の曾畑式土器を第Ⅱ群とした。出土点数が少なく，小破片であるため詳細は不明である。胎土は主に滑石の混入が確認され1～2mm前後のものが目立つ。文様も幾何学文様で構成されている。また一括資料が確認されたことも曾畑式土器を第Ⅱ群にした根拠でもある。

1 は外反口縁である。内・外面はナデ調整が確認される。文様は丸棒状工具によって短沈線が施され，施文順序は横走沈線→斜走沈線の順となる。口縁部内面は2列の刺突列点文が確認される。施文具は半截竹管と思われ，下から上に刺突が加わる。また口唇部には丸棒状工具による刻みが斜方向に確認される。2 は外反口縁である。内・外面ともにナデ調整が確認される。文様は内・外面に丸棒状工具と思われる沈線が確認される。外面は横走→斜走の順で施文が行われる。横走する短沈線は内・外面に4段確認される。口唇部は丸棒状工具によって斜方向に刻みが施される。3 は内・外面ともにナデが確認される。文様は横走する短沈線が内・外面に3段確認される。施文具は丸棒状工具と思われる。口唇部も丸棒状工具による刻みが斜方向に施される。4 は1～3に比して口縁部の外反が強い。内・外面にはナデ調整が確認される。文様は外面に横走→斜走，内面には横走する短沈線が確認される。施文具は丸棒状工具によるものと思われる。口唇部も丸棒状工具による刻みが斜方向に施されている。口唇部直下には横走する短沈線が潰されている。このことは外面施文後に口唇部を成形したものと思われる。5 は内・外面ともにナデ調整が確認される。文様はナデ調整後に横走する連続刺突が加わる。施文具は半截竹管によるものと思われ，一定の間隔で刺突が行われている。連続刺突は5段確認される。口唇部はヘラ状工具よると思われる刻みが斜方向に施される。5 は深堀遺跡出土第Ⅲ群第1類土器⁽⁴⁾に類似しているが，内面に条痕を有する点では異なる。6 は胴部上半。内・外面にナデ調整が確認される。文様は丸棒状工具によって短沈線が施され，横走→斜走の順序で施文が行われる。7 は胴部上半。内・外面はナデ調整が確認される。文様は短沈線で構成されると思われる。施文は横走→斜走，斜走沈線は\→／の順で行われる。施文具は丸棒状工具と思われる。また内面には粘土帯が確認され接合は内傾であることがわかる。8 は胴部上半。内・外面ともにナデ調整。内面には指頭圧痕が確認される。文様は横走→縦・斜走沈線の順で施文が行われる。9 は内・外面ともにナデ調整。内面は希薄ではあるが横走条痕も確認される。文様は丸棒状工具によって横走沈線が施されるが，部分的であるため詳細は不明。10は内・外面にともナデ調整が確認される。内面は希薄であるが斜走条痕が確認される。文様は縦・斜・横走沈線で構成される。施文具は丸棒状工具によると思われる。施文順序は縦走→斜・横走の順が確認されるが，斜・横走の先後関係は部分的であるため詳細は不明。11は底部。内・外面にナデ調整が確認される。文様は底部中心に向かって沈線が放射状に施されると思われる。12は内・外面ともにナデ調整が施されるが，内面は僅かに条痕が確認される。文様は直線の組み合わせで多角形を構成している。いわゆる蜘蛛巣形の底部である。施文具は丸棒状工具と思われる。また内面には指頭圧痕も確認される。



第72図 第Ⅱ群土器実測図① (S=1/3)

図版番号	出土地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	調整		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
72-1	12	池中Ⅱ	褐灰色	明褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線	○		
72-2	12	池中Ⅱ	褐灰色	明褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線			
72-3	12	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線			
72-4	11	池中Ⅰ上貝	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線	○	○	
72-5	11	池中Ⅰ上貝	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線	○		
72-6		池内	褐灰色	明褐灰色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線	○		
72-7	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線			
72-8		池内	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線	○	○	
72-9	11	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	条痕+ナデ	沈線			
72-10		池内	褐灰色	灰褐色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	条痕+ナデ	沈線	○		
72-11	11	池中Ⅰ上貝	褐灰色	黒褐色	良好	深鉢	底部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	ナデ	沈線	○	○	
72-12		池内	暗黄橙色	暗黄橙色	良好	深鉢	底部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	条痕+ナデ	沈線			
73-13	12	池中Ⅱ	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	一括資料	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	ナデ	条痕+ナデ	沈線	○	○	波状口縁

第29表 第Ⅱ群土器観察表

13の地文は内面に貝殻条痕が確認されるが外面は不明。条痕調整後は内・外面にナデ調整が施される。文様帯は口縁部・胴部（最大径）・胴部下半の3つに区画される。口縁部は横走→斜走沈線の順で施文される。斜走沈線は\→/の順で施文され山形文をなしている。胴部（最大径）は折帯文で構成され、/→\の順で施文が行われている。胴部下半は横走沈線に直線沈線と曲線沈線が組み合わせられる。直線沈線は1・3・4本単位で「く」の字状の施文が確認され、「×」の字状も施文も部分的であるが確認される。曲線沈線は「8」の字状の施文が認められる。また半円状の施文も確認されるが部分的なものである。口唇部は連続刺突が斜方向に刻まれている。断面は三角形の形状をなす。刺突は上→下方向へ施されている。口唇部直下に連続刺突が確認されるがこれは部分的に施文したものである。おそらく外周途中で連続刺突を止めたものと思われる。13は緩やかな波状口縁をなしており、波頂部は6カ所確認できる。

小結

今回、出土土器が小破片であり、遺物の絶対量が少ないことから詳細な分類は困難であった。しかし、口縁部の形態は大きく2種類に分類された。口縁部内面に連続刺突を有するものと短沈線を有するものである。前者は1段と2段に細分を行うことが可能である。このことから本遺跡出土の曾畑土器が単一の土器群で構成されたものではないことが言えよう。

また一括資料が確認されたことから、他の遺物は流土によって移動していないことが考えられる。先述の通り第Ⅱ群土器は大きく2種類に分類できたが、出土点数・遺物の規模などから今回は一括した。

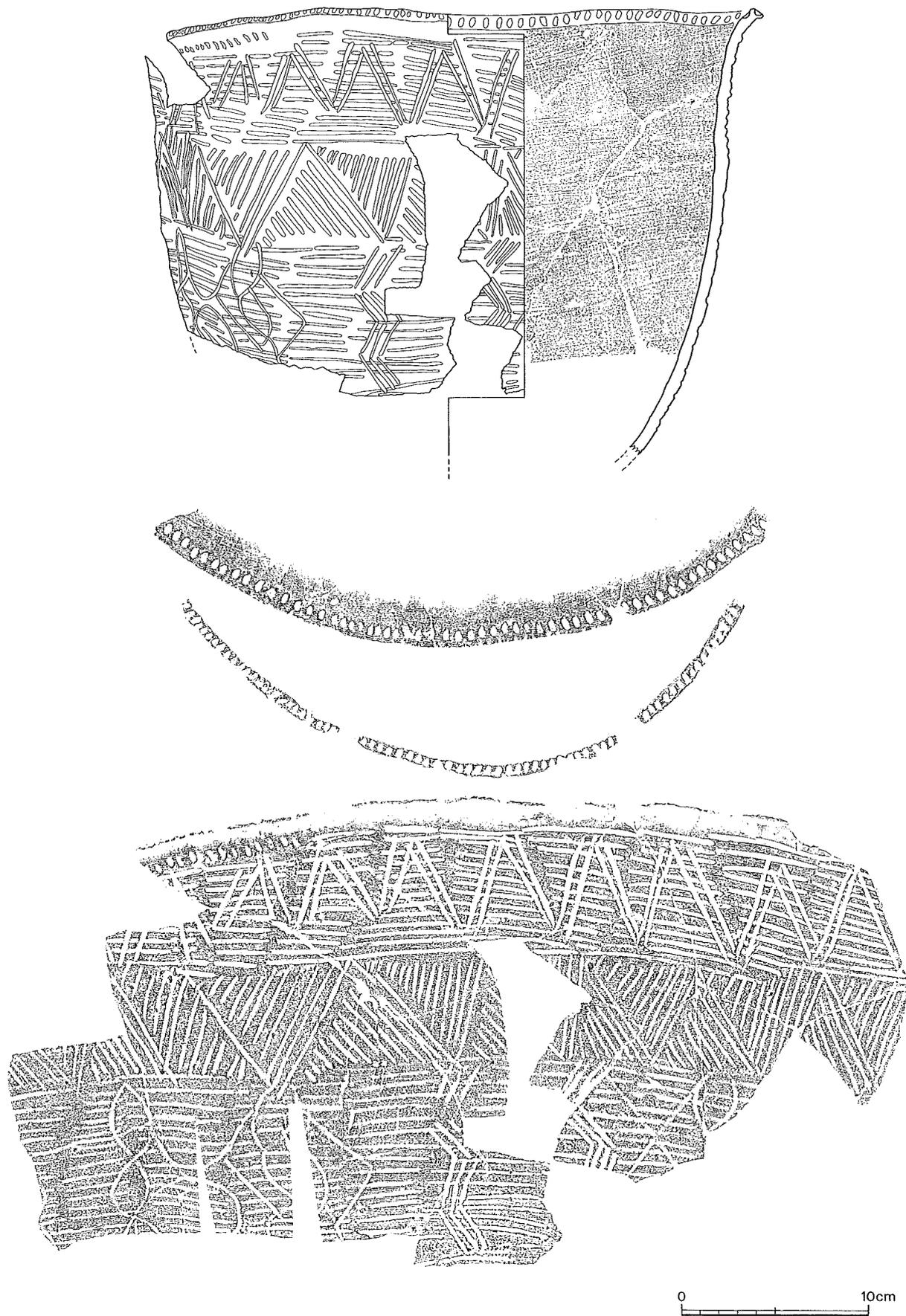
(註) Fig11.第Ⅲ群第1類土器実測図68に類似。

【参考文献】

渡邊康行 1984『長崎市立深堀小学校校舎建築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎市教育委員会

江本 直 1988『曾畑』熊本県文化財調査報告第100集 熊本県教育委員会

同志社大学考古学研究室編 1990『伊木力遺跡』多良見町教育委員会



第73图 第Ⅱ群土器実測图② (S=1/3)

・ 第Ⅲ群土器 (第74図・第75図, 第30表)

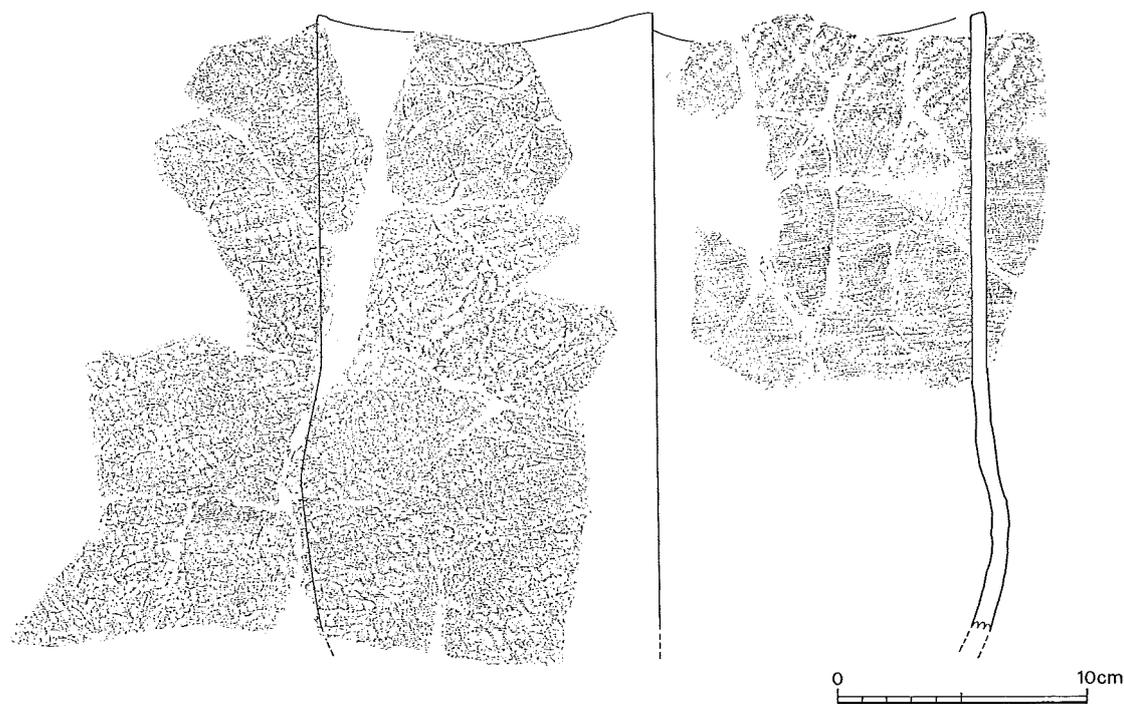
中期の船元式系土器と春日式系土器と思われる一群である。後者は胎土に滑石を含み、器壁は薄く、土器表面は滑石混入土器特有の光沢がある。土器の内・外面は貝殻条痕調整である。第75図 1・2 のように口縁部が内湾するキャリパー形を呈する土器があり、春日式土器と判断した根拠にもなっている。

船元式系土器 (第74図, 第30表)

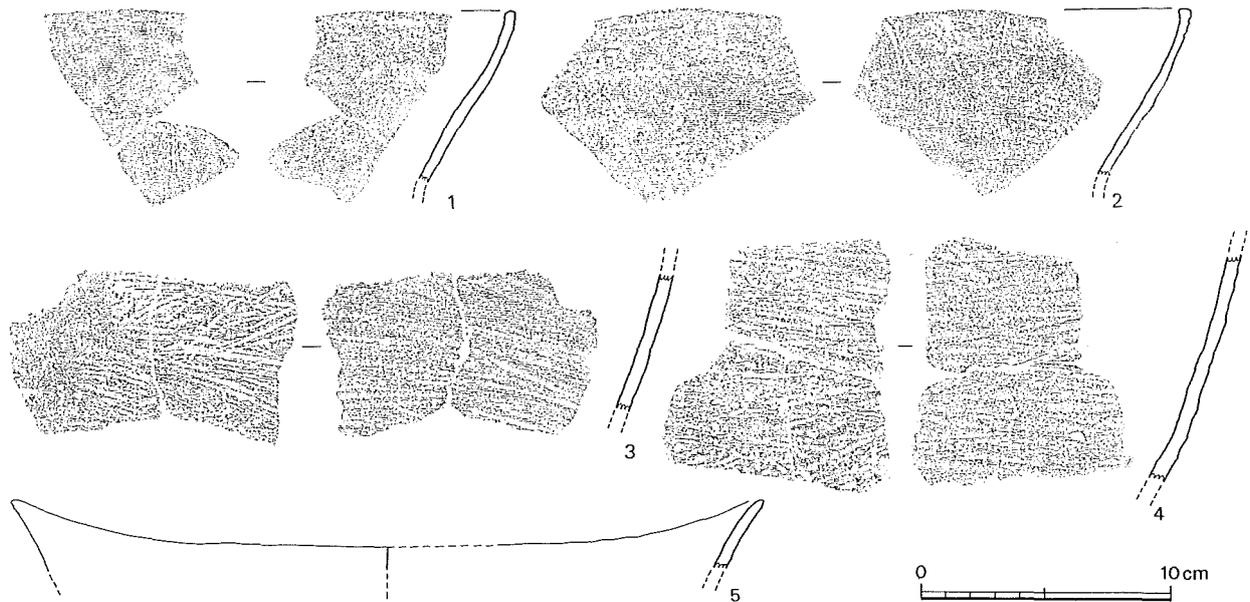
底部は欠損のため施文は不明である。おそらく撚糸文と思われ、また底部の形状は丸底の可能性が高い。器形は一般的な船元式土器に比べると起伏の変化が乏しい。内面は条痕+ナデ調整が確認され、口縁部には撚糸文も加わる。撚糸は内・外面ともに＼方向となる。口唇部は波状口縁をなすが、部分的に欠損している。波頂数は推定6と思われる。

春日式系土器 (第75図, 第30表)

1・2 は口縁部。キャリパー形を呈するものと思われる。内・外面ともにナデ調整が施され、全体的に指頭圧痕も確認される。またナデ調整以前の貝殻条痕も希薄ではあるが内・外面に確認される。口唇端部は平坦に調整され、調整時に余った粘土を内面に入れ込んでいる。1・2 は同一個体の可能性も考えられる。3・4 は内・外面に貝殻条痕が確認される。内面は横走条痕、外面は横・斜走条痕となっている。条痕はナデによって消されており、その後指頭圧痕が施されている。この土器も同一個体の可能性が考えられる。5 は舟形の口縁部。波状口縁をなし、波頂部は長軸に2カ所あったと思われる。口縁内面には条痕が確認される。内・外面ともにナデ調整が施されている。



第74図 第Ⅲ群土器実測図 (S=1/3)



第75図 第Ⅲ群実測図 (S=1/3)

図版 番号	出土 地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	調整		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
74	12	池中Ⅱ	褐灰色	灰褐色	良好	深鉢	口縁~胴部	角閃石・雲母片・小礫(1㎠前後)・砂粒	ナデ	条痕+ナデ	撚糸	○		
75-1	A-13	V	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・小礫(1㎠前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ		○	○	キョリバー形
75-2	A-14	石垣遺構下	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・小礫(1㎠前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ		○	○	キョリバー形
75-3	11	池中Ⅰ	灰白色	灰白色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(1㎠前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ				
75-4		池内ツカ	灰白色	灰白色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(1㎠前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ				
75-5		池内貝	褐灰色	褐色	良好	深鉢	口縁部	滑石・小礫(2 前後)	ナデ	条痕+ナデ		○	○	波状口縁

第30表 第Ⅲ群土器観察表

小結

第Ⅲ群土器は縄文中期に比定されることが確認された。この他に大村湾沿岸では伊木力遺跡第6群土器が同時期にくると思われる。第6群土器は船元式土器と報告されている。本遺跡と同型式の土器であるが施文方向が異なる。第Ⅲ群は斜方向に撚糸文が施文されるのに対し、第6群は横方向に施文されている。また前者は撚糸のみで施文が構成されるのに対し、後者は撚糸以外の施文も加わる。船元式土器の型式変化でみると第Ⅲ群土器が後続すると思われる。

【参考文献】

同志社大学考古学研究室編 1990『伊木力遺跡』多良見町教育委員会

・第Ⅳ群土器（第76図，第31表）

後期初頭の坂の下式系土器を一括した。胎土に滑石を含む。文様は阿高式土器の凹線文が沈線化したもので、施文も浅く、粗雑である。口縁部に数条の横走沈線を施すのみの資料もある。

1 は内・外面に条痕+ナデが確認される。文様は口縁部に 2~3 条の横走沈線が施される。施文具は丸棒状工具の先端を尖らせたものと思われる。口唇部は平坦に調整が施される。また部分的に口唇部に粘土貼付後、端部を丸棒状工具で刺突を行う。部分的な刻みである。刻みはほぼ上から下へと行われる。内面の口縁部直下から器壁が薄くなっており、断面は内湾気味となる。2 は 1 同様である。粘土帯が確認され内傾接合であることがわかる。また 2 は 1 と同一個体の可能性も考えられる。3 は内面に横・斜走，外面に斜走条痕が確認される。その後内・外面ともにナデが施され，外面には指頭圧痕も確認される。4 は内面に横・斜走，外面に斜走条痕が確認される。また内・外面にはナデが施され，外面には指頭圧痕も確認される。この土器は粘土接合帯で接合していることから内傾であることがわかる。5 は内面に横走条痕が確認される。外面は不明。内・外面ともにナデが施されており，ナデ後の指頭圧痕も確認される。外面はヘラ状工具によると思われるナデ調整も認められ，斜方向に調整痕が確認される。口唇端部は刻みがほどこされ，指によって施文されたものと思われる。6 は内・外面ともにナデ調整が確認される。また内面には指頭圧痕も認められる。文様は横・斜走する大小の沈線が施文される。施文具はヘラ状・丸棒状工具を併用したものと思われる。口唇部は平坦に調整されている。6 の粘土接合帯は口唇部直下と口縁部直下の 2 カ所が確認される。前者は外傾接合，後者は内傾接合となっている。7 は内・外面ともにナデ調整が確認される。文様は丸棒状工具で大小の沈線を施文している。内面は指頭圧痕が顕著にみられ，また粘土接合帯も 2 カ所確認される。いずれも内傾接合となっている。8 は後期阿高式系土器と思われる。内・外面ともに条痕+ナデ消しが施され，ナデ消し後の指頭圧痕も確認される。文様は横走する連続刺突が 2 段施文されている。施文具は丸棒状工具で上から下に刺突が施される。また刺突文直下には指による横走沈線が確認される。9 の底面は鯨骨痕が確認される。部分的であるが内・外面ともにナデ痕が確認される。内面は粘土帯の痕跡を残しており，内傾接合であることがわかる。

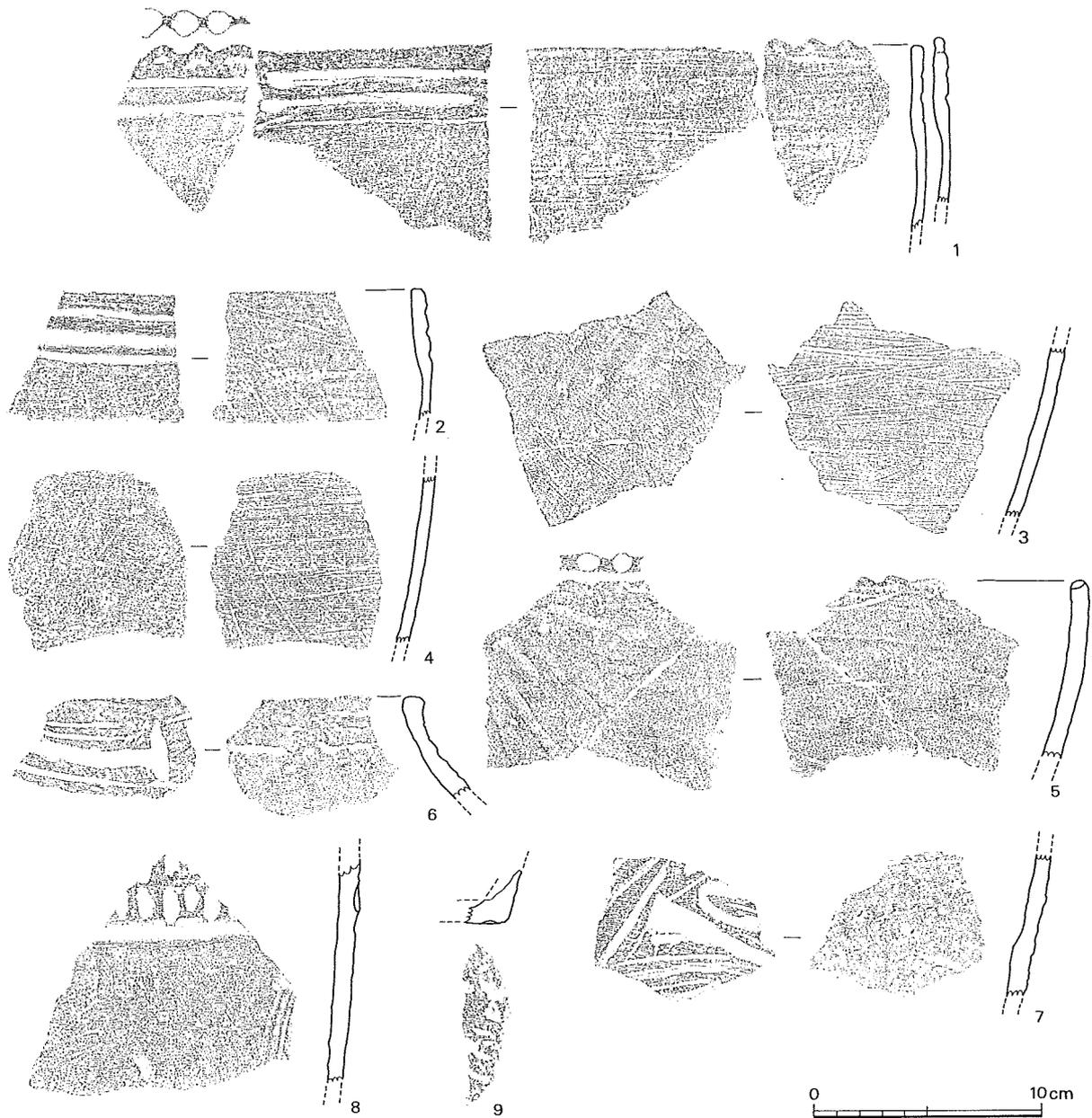
小結

坂の下式土器は伊木力遺跡からも確認されており，本型式は第 9 群土器と報告されている。第Ⅳ群土器は第 9 群土器よりも出土点数が少ない。そのため施文の種類が乏しい。多くの文様が存在したとも考えられる。口唇部刻みの起伏も少なく，無文の土器も確認されている。これは地域的なものであろうか。

【参考文献】

同志社大学考古学研究室編 1990『伊木力遺跡』多良見町教育委員会

古門雅高ほか 1997『伊木力遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第134集 長崎県教育委員会



第76図 第Ⅳ群土器実測図 (S=1/3)

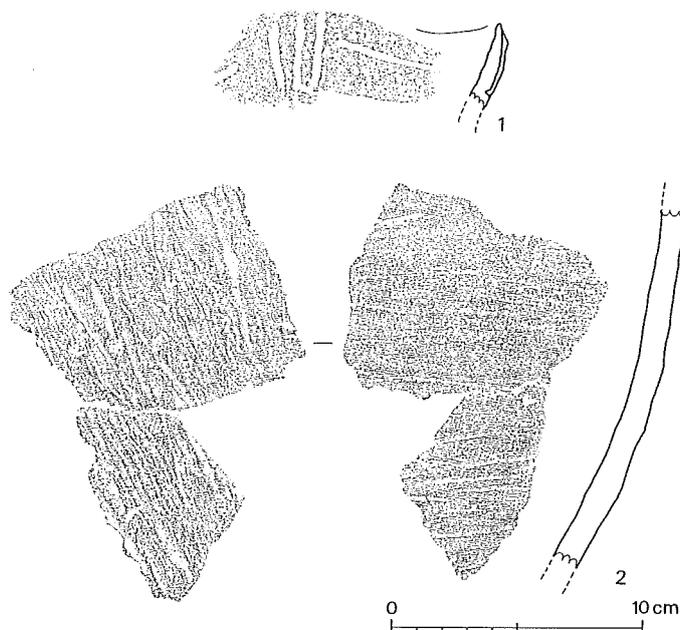
図版 番号	出土 地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	調整		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
76-1	12	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(2mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ	沈線	○		
76-2	12	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(2mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ	沈線			内傾
76-3	12	池中Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	滑石・小礫(1mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ				
76-4	11	池中Ⅰ・Ⅱ	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(2mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ				
76-5	11	池中Ⅰ上具	明黄褐色	明黄褐色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫(1mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ				
76-6		表採	明褐色	明褐色	良好	深鉢	口縁部	滑石・角閃石・小礫2mm前後	ナデ	ナデ	沈線	○		
76-7	11	池中Ⅰ上具	灰白色	灰白色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(2mm前後)	ナデ	ナデ	沈線			内傾・外傾
76-8		池内	褐色	褐色	良好	深鉢	胴部	滑石・角閃石・小礫(3mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ	刺突・沈線			口縁~胴部
76-9	12	池中Ⅱ	明褐色	明褐色	良好	深鉢	底部	滑石・角閃石・小礫(2mm前後)	ナデ	ナデ				鯨底・内傾

第31表 第Ⅳ群土器観察表

・第V群土器（第77図，第32表）

後期中葉の宮下式系土器と思われる資料と，後期の粗製土器を一括した。1は内湾する口縁部を持ち，さらに口縁部を波状に成形するという点で，典型的な宮下式の深鉢形土器といえる。北久根山式土器以来の沈線端刺突の技法も多用している。粗製土器は混和材として貝粉を胎土に混入させ，器壁も厚いところから後期と判断した。

1は内・外面ともにナデ調整が確認される。文様は沈線と刺突の組み合わせで構成されている。沈線は縦走と斜走が確認できる。縦走沈線は上から下へ施文されている。この縦走沈線の止めの部分には力を加えており，その部分だけ刺突状になっている。斜走沈線も同様である。刺突文は4カ所確認でき，斜走沈線との間に施文されている。1は波状口縁をなす。2は内面に横走条痕が確認されるが外面は不明。内・外面ともにナデ消しが施される。外面は斜方向にナデが施されており，ナデ後の指頭圧痕も確認される。外面のナデはヘラ状工具によるものと思われる。



第77図 第V群土器実測図（S=1/3）

図版番号	出土地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	調整		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
77-1	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)	ナデ	ナデ	沈線・刺突	○		波状口縁
77-2	12	池内	灰褐色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	破碎貝粉・角閃石・小礫(3mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ			○	

第32表 第V群土器観察表

小結

第V群土器は出土点数が少ない。しかし重要な意味をもつ土器^(註)である。この土器は大村湾沿岸部では確認されていない土器群である。県内では五島灘沿岸部で確認されている。大村湾沿岸部での出土は本遺跡が初めての例であり，他の沿岸部地域でも出土する可能性が高いと思われる。

(註) 第77図1をさす。

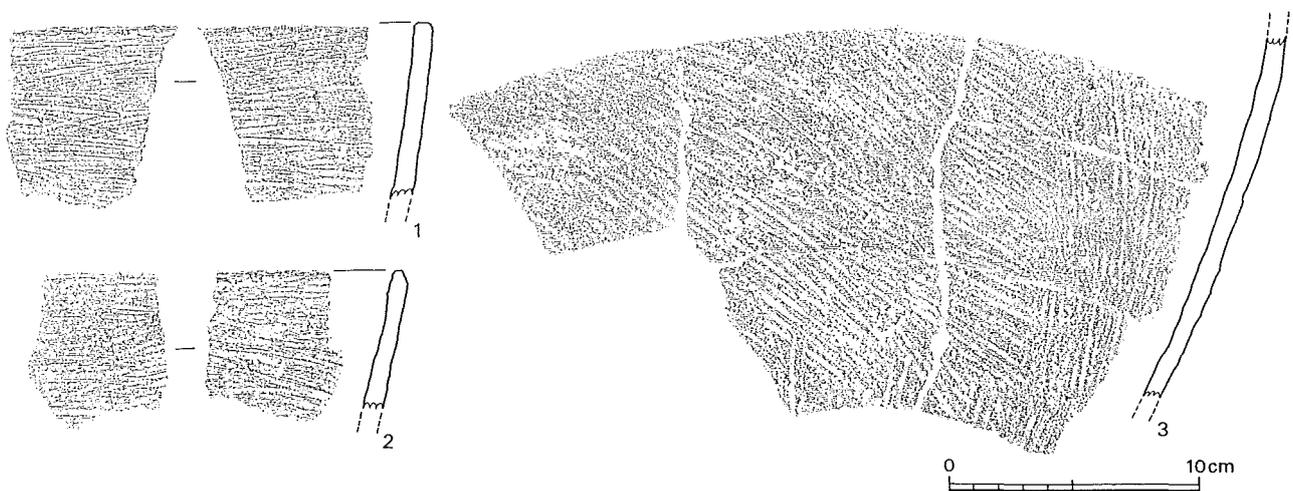
【参考文献】

古門雅高ほか 1998『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書第1集 長崎県富江町教育委員会

・第Ⅵ群土器（第78図，第33表）

晩期中葉の黒川式系土器と判断した一群である。3は胎土に結晶片岩を混和材として入れている。大村市付近の当該期の甕形土器の胎土に結晶片岩を混入することはすでに指摘されている（大野2001）。深鉢形土器と考えられる資料はいずれも外面は貝殻腹縁による条痕調整で、内面はササラ条痕か、条痕ナデ消し調整である。

1は内・外面ともに貝殻条痕+ナデ調整が施され、外面は部分的に指頭圧痕も確認される。口唇部は部分的に平坦調整がなされている。2は1同様内・外面に貝殻条痕+ナデ調整が施される。内面には指頭圧痕も確認される。口唇部は1に比して丸みを帯びる。3は内・外面ともに貝殻条痕+ナデ消しが施される。特に内面はナデ調整が強く、条痕をほとんど確認することができない。3は粘土帯で接合しており、4カ所粘土帯が確認される。土器の傾きは内傾である。



第78図 第Ⅵ群土器実測図（S=1/3）

図版 番号	出土 地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	調整		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
78-1	11	池中Ⅰ上貝	暗黄橙色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・結晶片岩・小礫(2mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ		○		
78-2	11	池中Ⅰ上貝	黒褐色	褐灰色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・結晶片岩・小礫(2mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ				
78-3	11	池中Ⅰ上貝	褐灰色	褐灰色	良好	深鉢	胴部	角閃石・結晶片岩・小礫(2mm前後)	条痕+ナデ	条痕+ナデ				内傾

第33表 第Ⅳ群土器観察表

小結

今回3は第Ⅵ群とした。しかし外面条痕が斜・縦走しており、またナデ消しも強くは施されていない。内面はほとんどナデによって消されている。1・2と様相が異なる土器である。3は今後検討する必要がある。

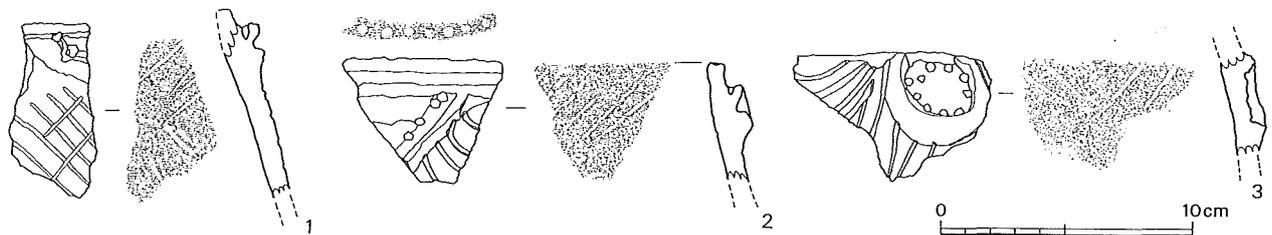
【参考文献】

大野安生 2001「沖田地区出土土器の検討」『西海考古』第4号 西海考古同人会

・第Ⅶ群土器（第79図，第34表）

第Ⅰ～Ⅵ群土器に該当しない土器を第Ⅶ群とした。基本的に文様は粘土紐・沈線・刺突の組み合わせで構成される。胎土の特徴からは第Ⅴ群に類似するが，断定する根拠が希薄なため第Ⅴ群とは別にした。

1 は内・外面にナデが施される。文様は基本的に沈線と刺突で構成される。施文順序は粘土紐を横→円の順で貼り付け後，沈線および刺突を加える。刺突は粘土貼付（横走）の上面も確認することができる。施文具は沈線・刺突ともに丸棒状工具によるものと思われる。内面には斜走する細沈線が＼／方向に確認される。2 も1同様の調整・施文が確認される。1と異なる点は横→斜の順で粘土紐が貼り付けられ，内面に／方向の細沈線が施されていることである。口唇部にも刺突が確認される。施文具は丸棒状工具によるものと思われる。3 は内・外面ともにナデ調整が施され，内面は指頭圧痕も確認される。外面は1・2同様に粘土紐貼り付けが確認され，その後沈線が＼→／の順で施文される。施文具はへら状工具によるものと思われる。また粘土紐（横走）の上面には丸棒状工具によると思われる刺突も確認される。口唇部の調整等は不明。内面は／方向で細沈線が施され，施文具はへら状工具と思われる。



第79図 第Ⅶ群土器実測図（S=1/3）

図版 番号	出土 地区	層位	色調		焼成	器種	部位	胎土	調整		施文	炭化物		備考
			外面	内面					外面	内面		外面	内面	
79-1	11	池中Ⅰ下貝	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(2mm前後)	ナデ	ナデ	沈線・刺突	○	○	第Ⅴ群に類似
79-2	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(3mm前後)	ナデ	ナデ	沈線・刺突	○		第Ⅴ群に類似
79-3	11	池中Ⅱ	黒褐色	黒褐色	良好	深鉢	口縁部	石英・角閃石・雲母片・小礫(3mm前後)	ナデ	ナデ	沈線・刺突	○		第Ⅴ群に類似

第34表 第Ⅶ群土器観察表

玖島城跡出土の第Ⅰ群土器について

はじめに

今回の調査で多量の縄文土器が出土しているが、中でも特に貝殻条痕系土器群が大半を占めている。これらの土器群は第Ⅰ群として分類を行い、さらに施文の違いによってa～dの4つに細分を試みた。ここでは第Ⅰ群土器の検討および層位的な関係を把握し、その位置づけを図ることを目的とする。

出土土器について

第Ⅰ群土器は貝殻条痕系土器群である。内容等はp.126～p.139で触れている。もう一度簡単ではあるが、各土器群の概要を説明する。

第Ⅰ-a群土器

地文は貝殻条痕で構成される。口縁部はラッパ状に開くものと底部から直線的に立ち上がるものがある。施文は直線的な文様で構成され、施文具は貝殻あるいはヘラ状工具と思われる。口唇部は刻みを有する。また貝殻腹縁による数段の連続刺突文が確認される。口唇部は貝殻腹縁によって刺突が施される。

第Ⅰ-b群土器

右京西遺跡の断面採集土器に類似する。貝殻条痕を地文にもち、口唇外面は刻みを有する。文様は直線條痕の組み合わせで構成される。これらの土器群は第Ⅰ群土器の中で最も多く確認されている。貯蔵穴内から出土した土器もこの群に含まれる。

第Ⅰ-c群土器

貝殻条痕を地文にもち、文様は曲線條痕が施文される。曲線條痕は全面に施文されていたと思われる(第68図2)。口唇部は外面刻みを有するものと口縁部まで刻みがのびるものとが確認される。

第Ⅰ-d群土器

貝殻条痕を地文にもつ。直線的な文様が確認され、施文は縦走と斜走の組み合わせで構成される。縦走沈線は口唇部外面から胴部まで確認される。

以上が第Ⅰ群土器の特徴である。この土器群は施文を中心として分類を行ったものである。施文は直線・曲線・刺突が確認され、また施文の組み合わせによって様々な文様が確認される。

層位について

縄文土器が出土した地点は本来は池が存在しており、したがって水抜きを行った後で調査を行っている。土層の堆積状況は極めて良好であり、調査区の壁面すべてに水平堆積が確認された。基本層序は池中Ⅰ層と池中Ⅱ層に分層されており、貝層は前者に2層、後者に1層確認されている。また前者は池中Ⅰ層上貝と池中Ⅰ層下貝の名称を与えている。後者は貝層と礫層で構成されている。しかし複数の時期におよぶ縄文土器が出土していることを考えると、層位の細分化が必要となった。新規に作成した土層図は第60図のように7分層することができた。土層の新旧関係は第80図の通りである。池中Ⅱ層はⅨ(貝)・Ⅹ(礫)層に対応する。貝層の絶対年代が6200±50年となっていることからⅨ層は海底であったといえる。したがって第Ⅰ群土器はⅩ層からの出土と考えられる。

	I:攪乱	攪乱層
	II:暗茶色粘質土層	近世の遺物と包含層および遺構
	IIIa:黄褐色混礫土層	
	IIIb:淡黄褐色混礫土層	
池中I	IVa:暗茶色粘質土層	ガタの堆積層。
	IVb:暗灰色粘質土層	ビニール等が混入。池底のためV層との境には摩滅が著しい。
	Va:青灰色砂質土層	砂層。しまりが強い。
	Vb:青灰色砂質土層	砂層。Va層よりも柔らかい。
	Vc:青灰色砂質土層	砂層。Vb層よりも柔らかい。
	VIa:青灰色混砂貝層	貝層 (5390±70y.B.P.)
	青灰色砂質土層	砂層。(VIa層とVIb層との間に挟まれた約20cmの堆積層。)
	VIb:青灰色混砂貝層	貝層 (5360±80y.B.P.)
	VII:青灰色砂質土層	堅果類の堆積層。12区南壁に比して密度は希薄。
	VIII:青灰色砂質土層	砂層
池中II	IX:青灰色混砂貝層	貝層 (6200±50y.B.P.)
	X:青灰色混礫土層	直径10～40cm前後の礫で構成される。
岩盤	岩盤	玉葱状の剥離が確認される。粘土質に風化している。

※ 貝層の年代は補正值を表している。

第80図 基本層序新旧対応表

時期について

第I群土器がX層からの出土と考えると、層位的には最も古い時期の土器群であることがいえる。第I-a群土器は貝殻条痕系土器が分類基準となることは先述したが、この分類した基準の中に塞ノ神式土器が含まれている。第63図5・6・8は口縁部がラッパ状に開き、山形・平行の沈線が施文される。また9・10・11・12は貝殻腹縁文が施文される。これらの土器は河口貞徳のいう塞ノ神B式c・B式dに相当すると思われる。したがって第I-a群土器は塞ノ神式の後半に位置づけが可能と思われる。また岩盤直上で第64図22の出土が確認されており、第63図23～27は胎土・調整等が22に類似している。層位的に最も古い時期に位置づけした根拠でもある。したがって第I-a群土器は塞ノ神式土器の後半に位置づけが可能であることがいえよう。

次に第I-b群の土器であるが右京西遺跡出土土器に施文・口唇部刻みが類似していることは先述の通りである。高橋信武は右京西遺跡出土土器を「塞ノ神式土器と従来の轟式土器との橋渡しをなす一時期を有することは疑いない。」と述べている。この状況が西九州に該当するとすれば、第I-a群→第I-b群への型式的な変遷も考えられる。

第I-c群土器であるが、口唇部の刻みに①「口唇部外面に刻みを施すもの」・②「口唇外面から口縁部まで刻みを施すもの」が確認される。第I-b群には②の技法は確認されず、すべて①の技法で刻みは施されている。また第I-d群には①の技法は確認されず、②の技法が確認される。第I-c群と相異点は②が胴部まで達することである。

以上のことから第I群の型式的な変遷が考えられるとすれば、第I-a群→第I-b群→第I-c群→第I-d群があげられる。施文では(山形・平行沈線)→(直線條痕)→(曲線條痕)→(直線沈線)に変遷。刻みは(口唇部刻み)→(口唇部外面刻み)→(口唇部外面～口縁部刻み)→(口唇部外面～胴部刻み)への変遷が辿れる(第81図)。しかし第I群土器はX層からは一括で出土したものと思われる。施文等による変遷の有無は不明であるが、第I群土器は早期末に位置づけられると考えられる。

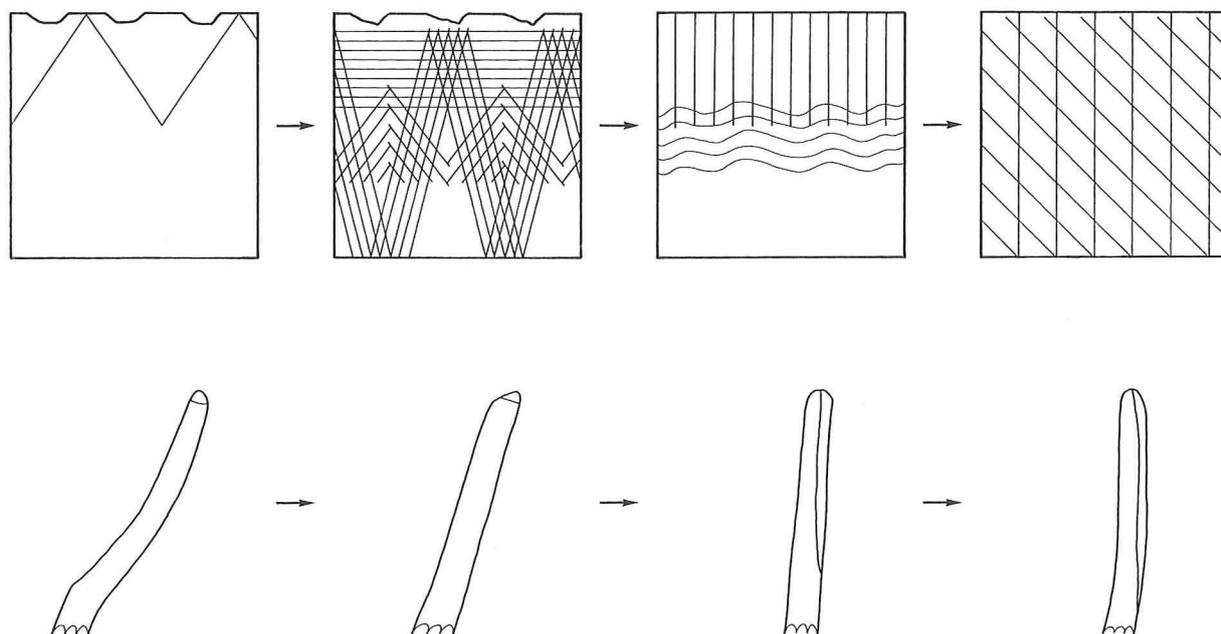
また貯蔵穴であるが、土器は第I-b群が確認されることから早期末に比定される。県内で早期末の貯蔵穴は現段階での報告例はない。これまで前期の貯蔵穴が古い時期とされており、大村湾沿岸部では伊木力遺跡から前期の貯蔵穴が確認されている。早期末の貯蔵穴は県内で初例である。

おわりに

今回第Ⅰ群土器を層位的に把握してきた。時期的には塞ノ神式土器の後半に比定される。すなわち早期末頃に相当するものと思われる。第Ⅰ群土器には4種類の土器が確認されたが、いずれも一括資料と思われ、型式的な変化が存在したかは不明である。

第Ⅰ-b群土器が右京西遺跡出土の土器に類似することも判明した。県内では報告例はなく大きな成果といってよいだろう。今後の調査例で上記の型式的変遷が層位的に把握されることに期待したい。

早期末頃の土器群は確認されたが、前期前葉の轟式土器は確認されていない。前期後葉の曾畑式土器は確認されている。Ⅸ層(6200±50)は貝の堆積層であることから、早期末以降に海進があったと思われる。このことから轟式段階には別の場所に拠点を置いていたと考えられる。(東 貴之)



第81図 第Ⅰ群土器変遷案(上段…施文変遷, 下段…口唇・口縁部変遷)

【参考文献】

- 麻生 優編 1967『岩下洞穴』佐世保市教育委員会
- 賀川光夫ほか 1978『日本の縄文土器展』別府大学附属博物館
- 稲富裕和ほか 1980『黒丸遺跡』大村市黒丸遺跡調査会
- 高橋信武 1985『右京西遺跡』荻台地の遺跡Ⅹ 荻町教育委員会
- 藤田和裕 1985『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書第71集 長崎県教育委員会
- 宮坂孝宏 1993『白鳥平A遺跡』熊本県文化財調査報告第127集 熊本県教育委員会
- 高橋信武 1997「平楯式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古会
- 福田一志編 1997『伊木力遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第134集 長崎県教育委員会
- 町田利幸 1997『黒丸遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第132集 長崎県教育委員会
- 吉田 寛 1999『龍頭遺跡』大分県文化調査報告書第102輯 大分県教育委員会



出土土器状況（第64図22）



11・12区西壁土層



No. 1 貯蔵穴検出状況



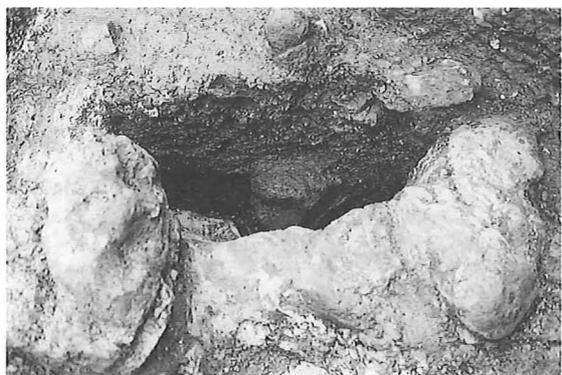
No. 2 貯蔵穴検出状況



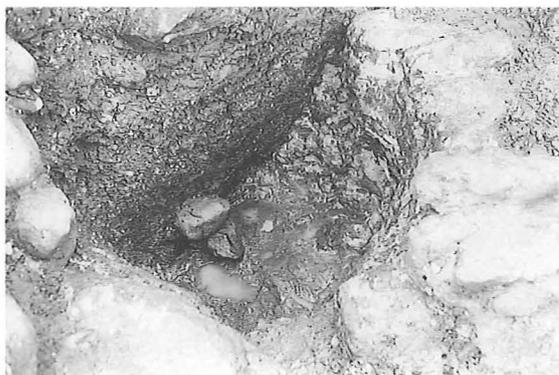
No. 2 貯蔵穴土層堆積状況（南から）



No. 3 貯蔵穴検出状況

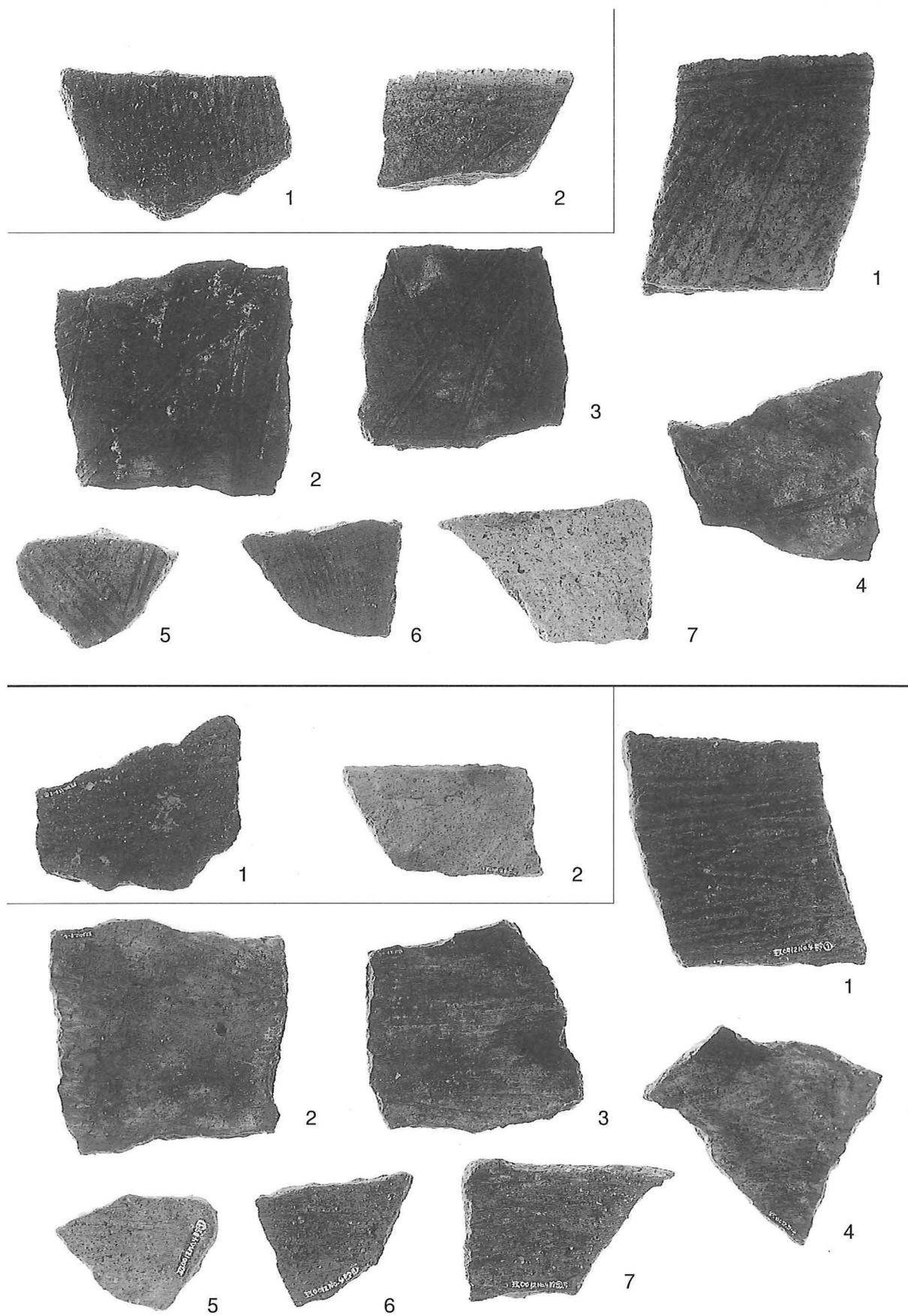


No. 3 貯蔵穴土層堆積状況（西から）

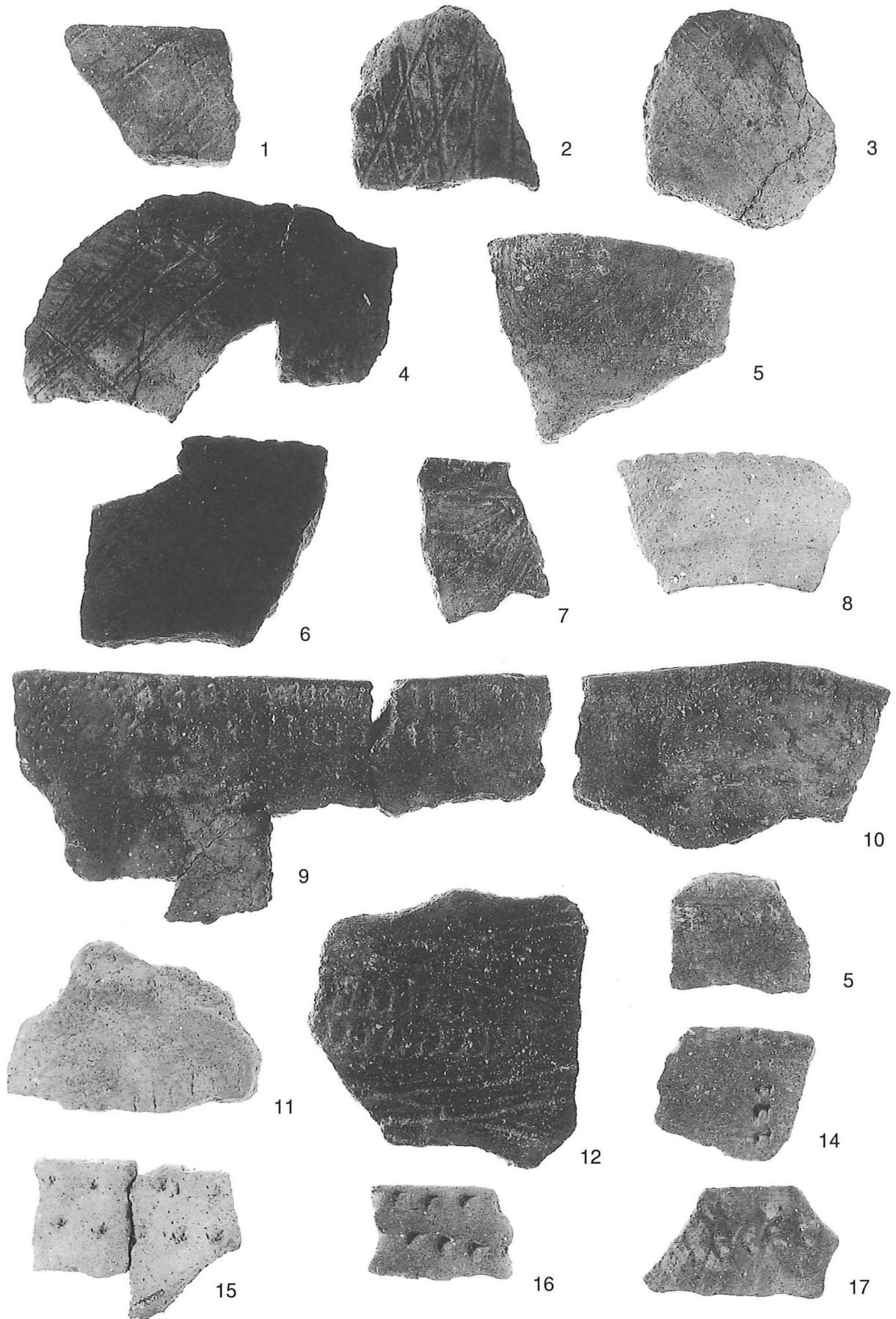


No. 3 貯蔵穴半掘状況（北西から）

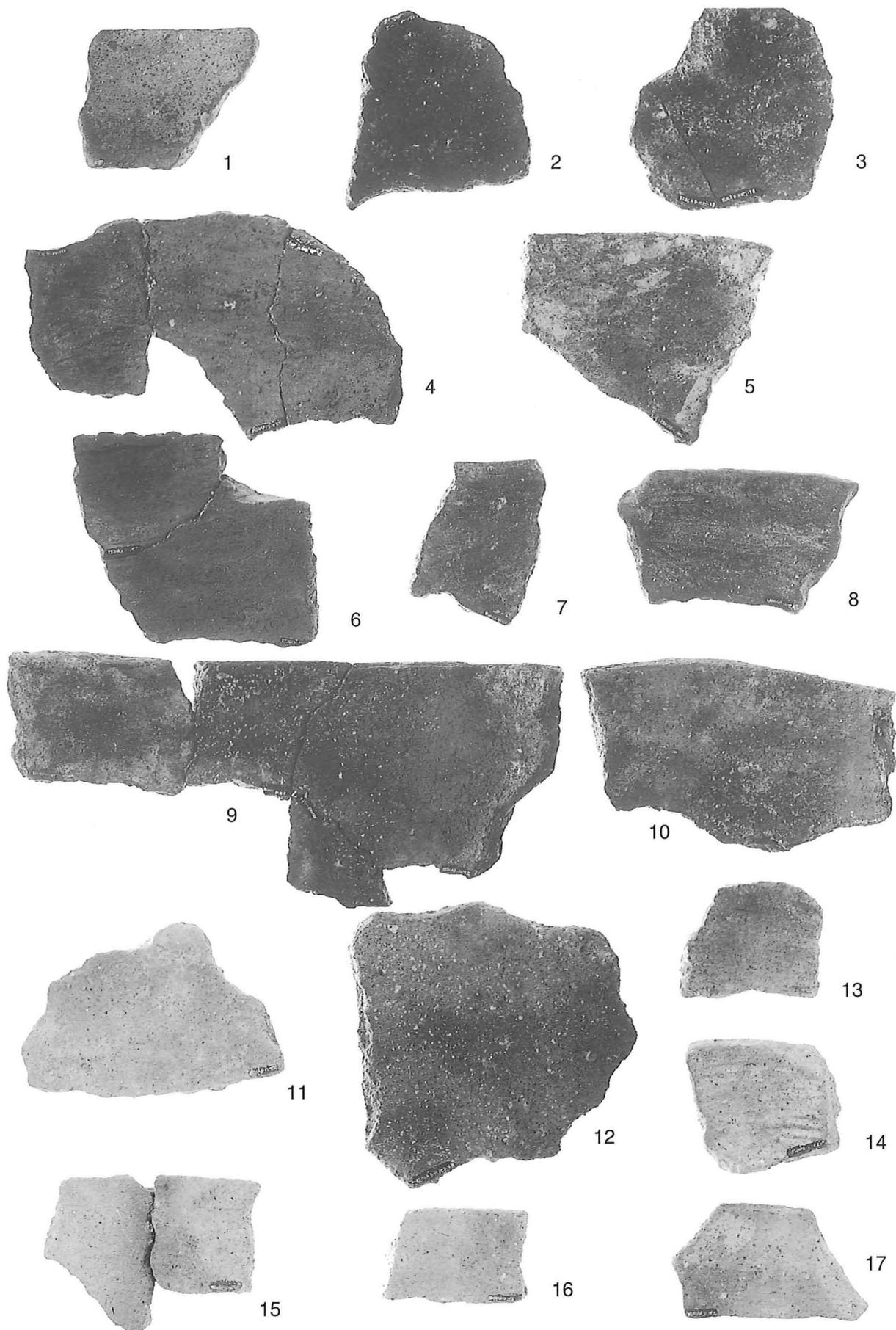
出土土器・土層・貯蔵穴



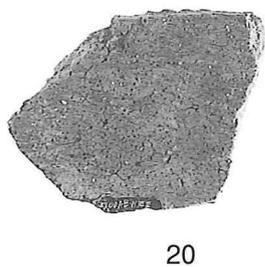
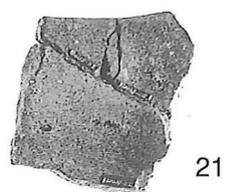
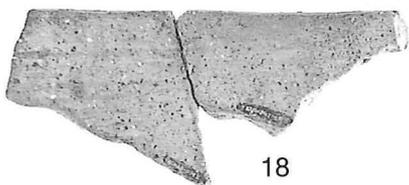
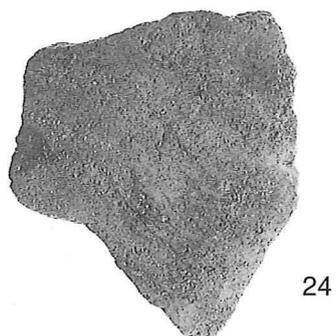
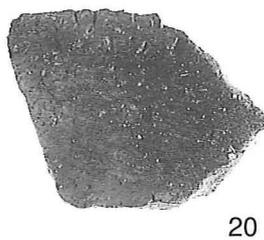
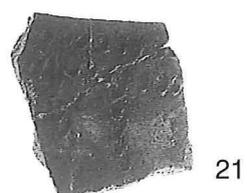
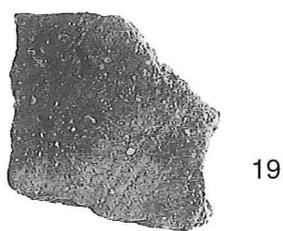
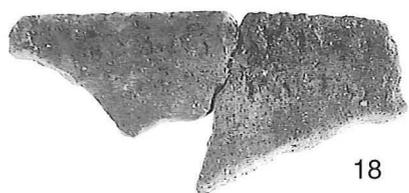
貯蔵穴内出土土器 (S=1/2)



第I-a群土器① (S=1/2)



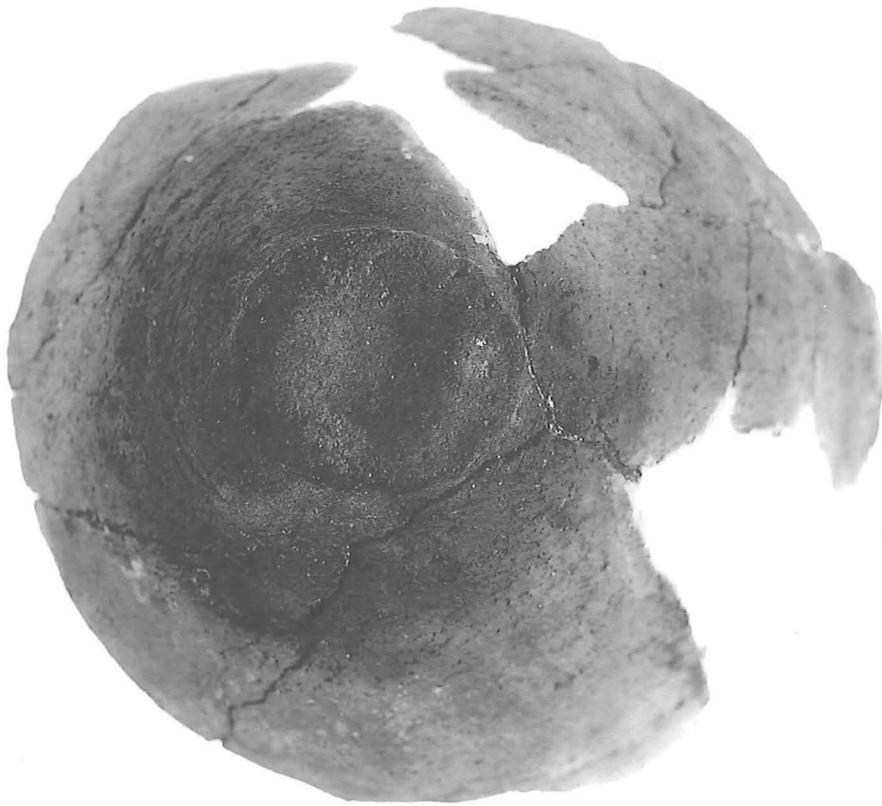
第 I - a 群土器② (S=1/2)



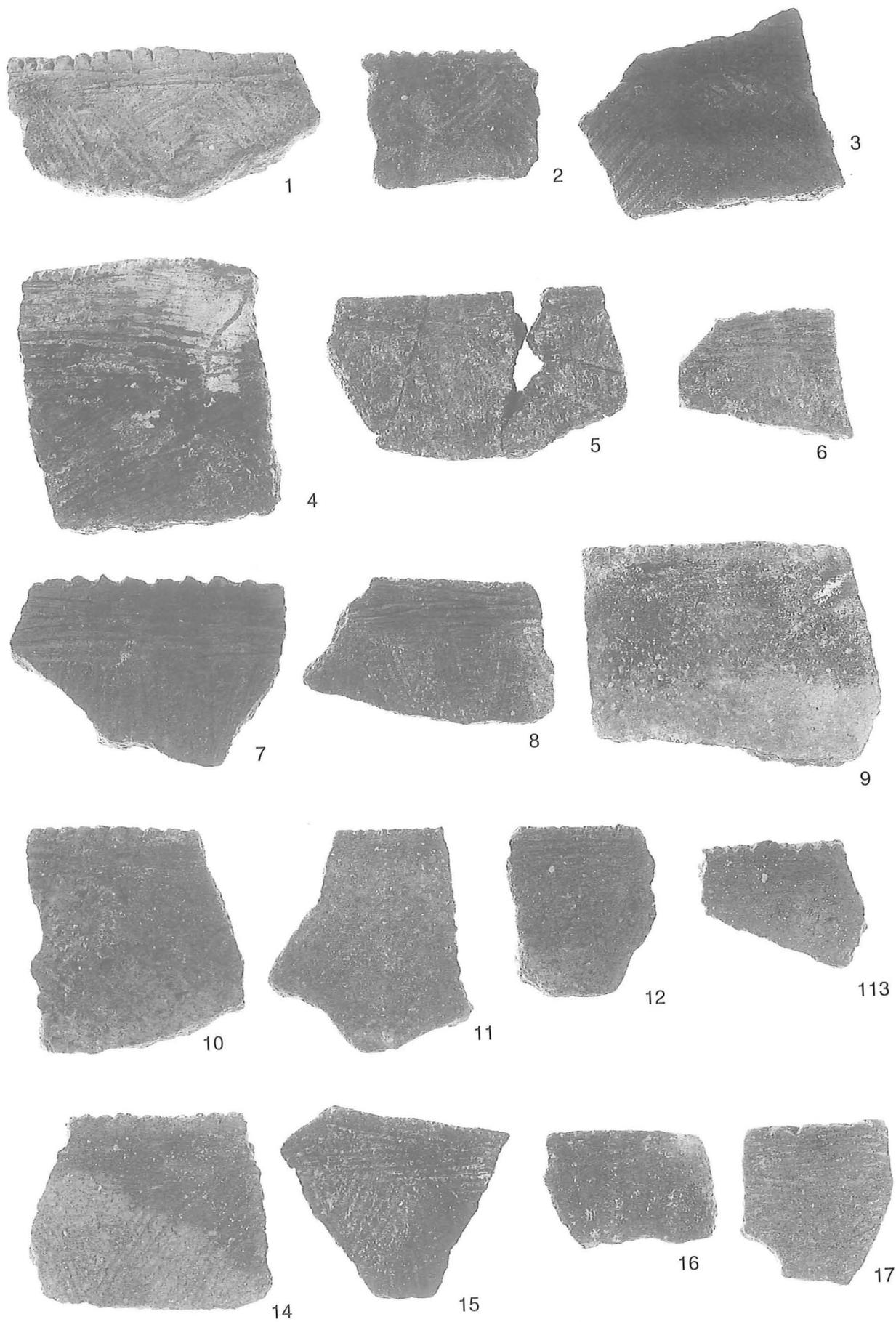
第I-a群土器③ (S=1/2)



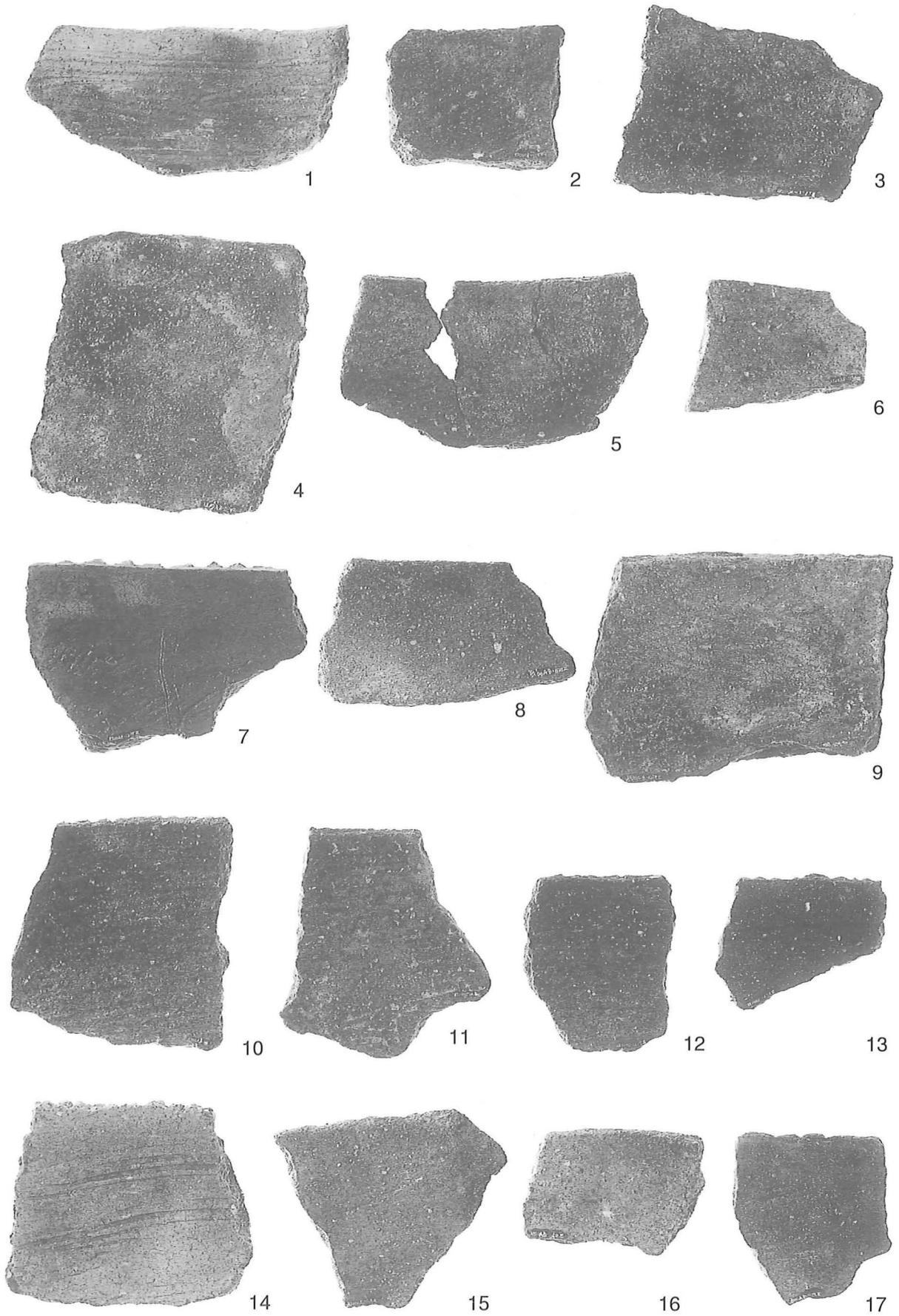
第 I - a 群土器④ (S=1/2)



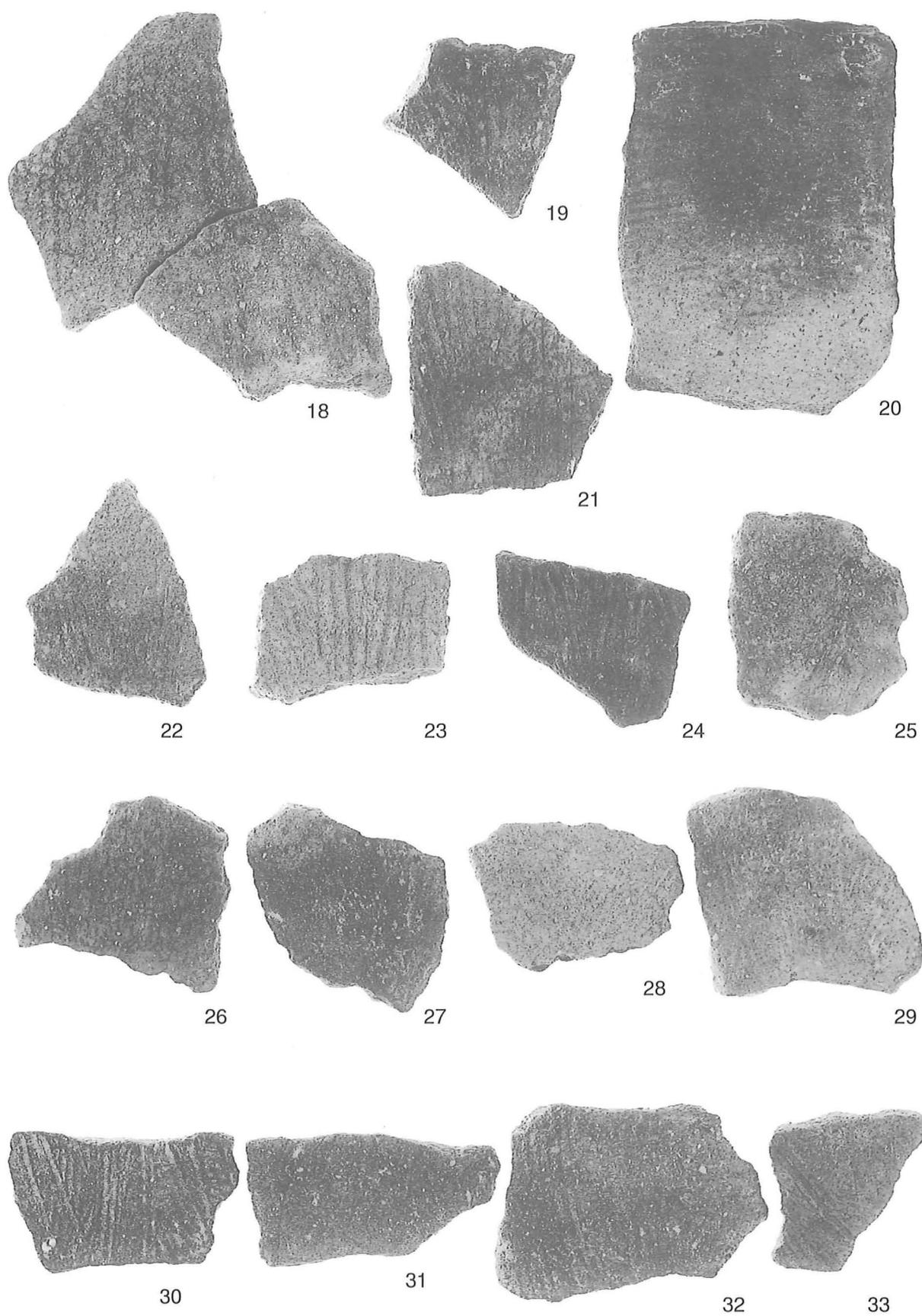
第 I -a 群土器⑤ (S=1/2)



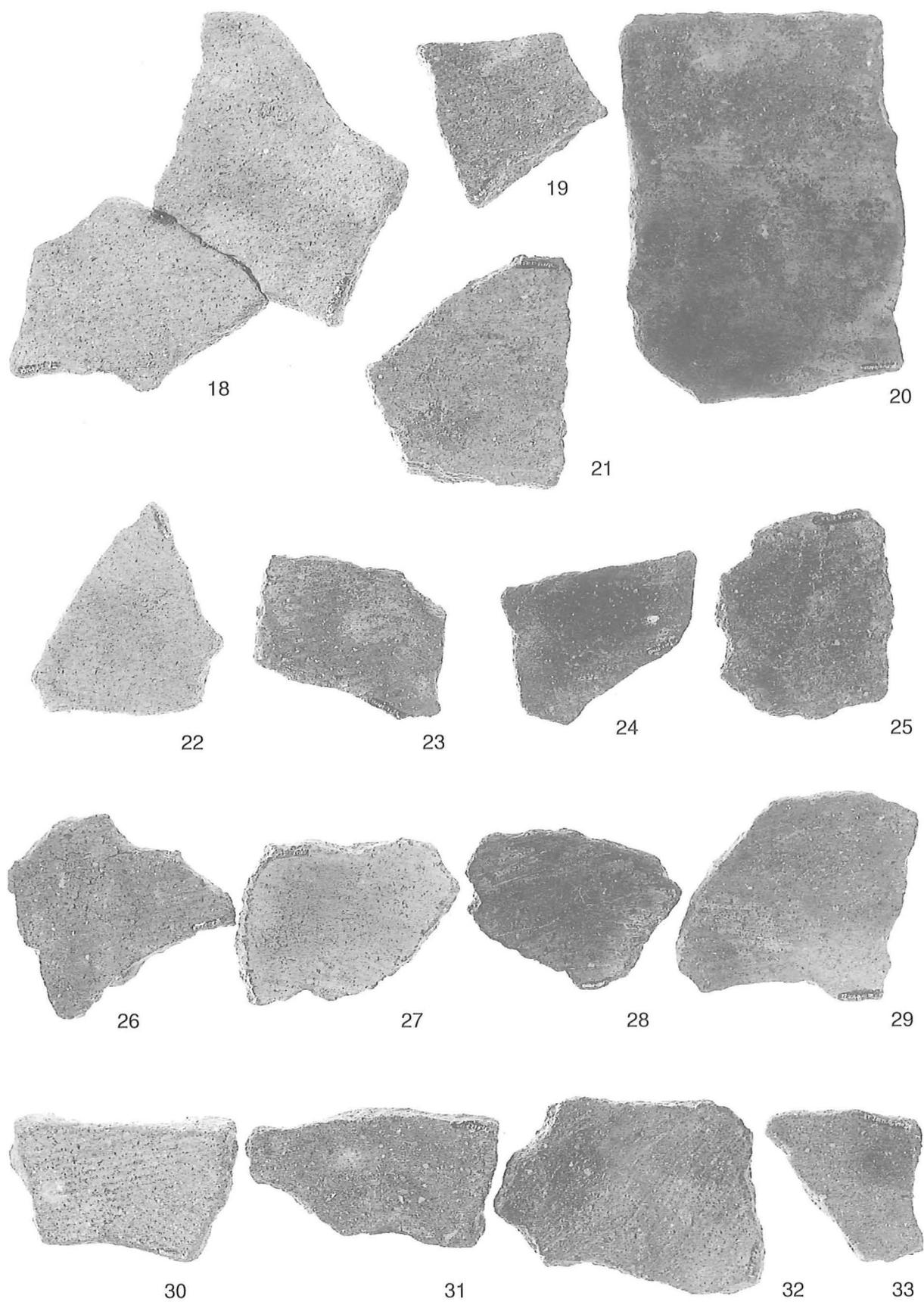
第 I - b 群土器① (S=1/2)



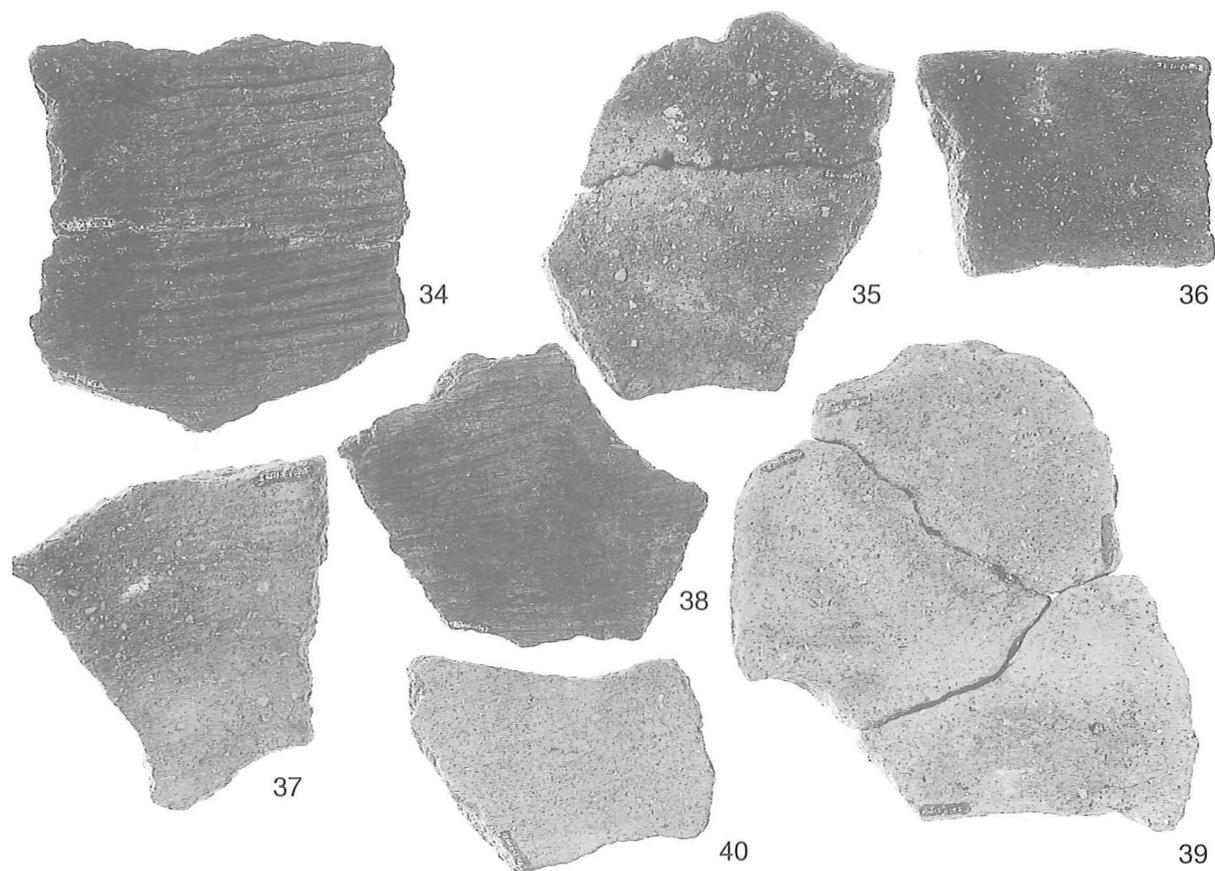
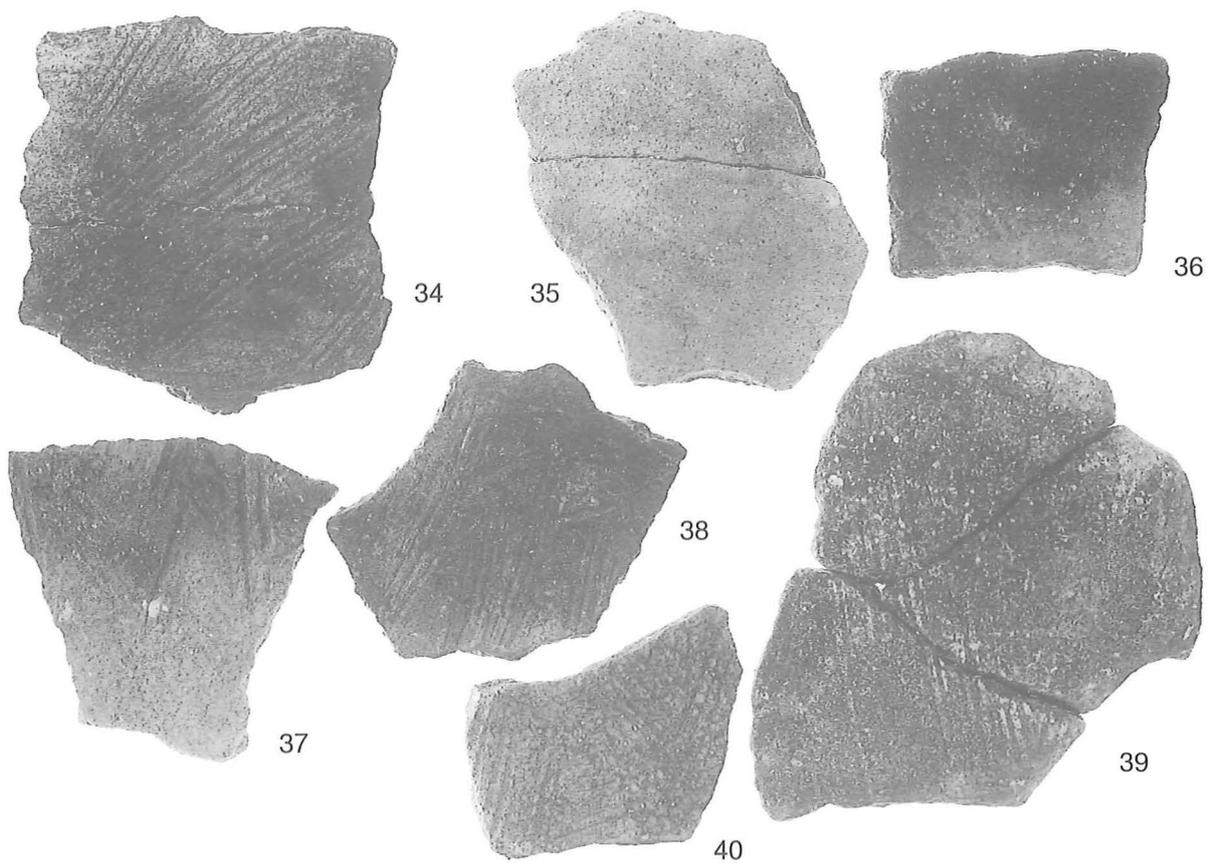
第 I - b 群土器② (S=1/2)



第I-b群土器③ (S=1/2)



第 I - b 群土器④ (S=1/2)



第I-b群土器⑤ (S=1/2)

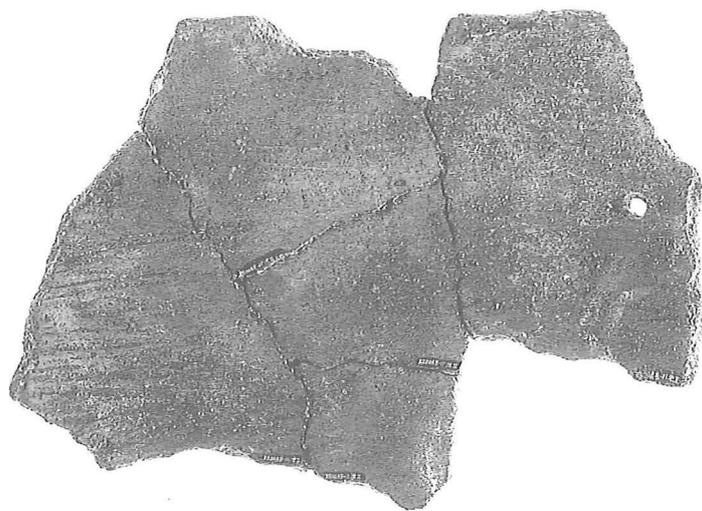


1



2

第I-c群土器① (S=1/2)

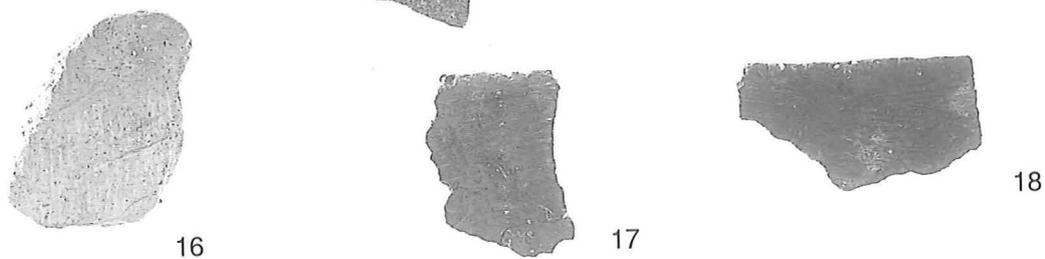
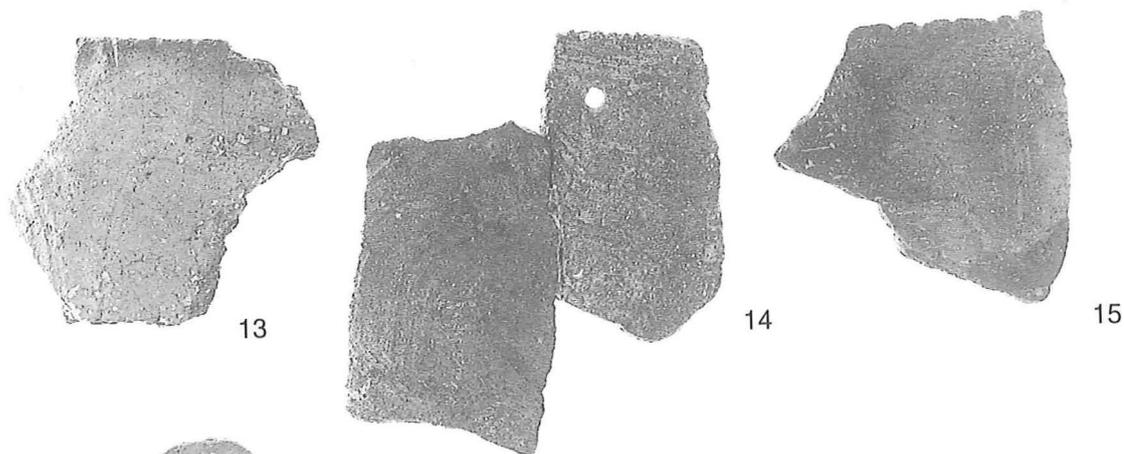
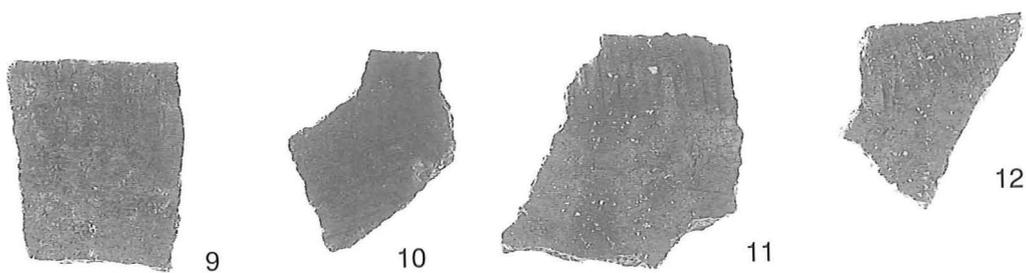
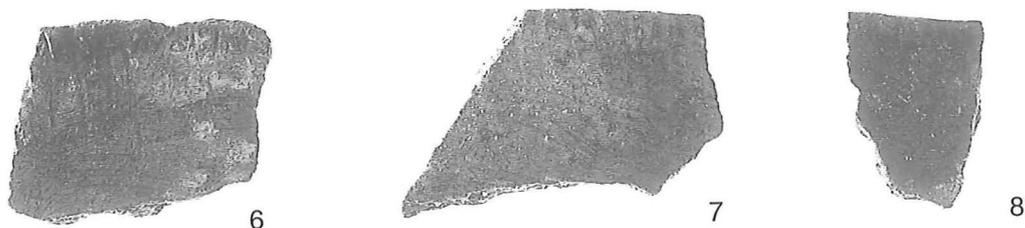
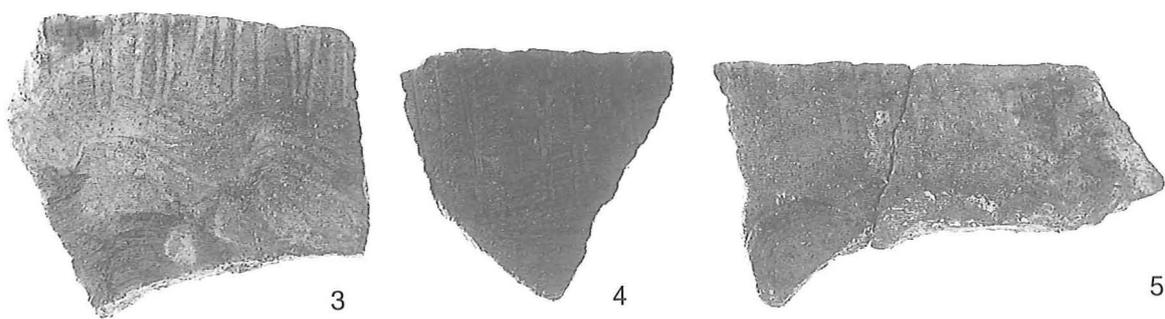


1

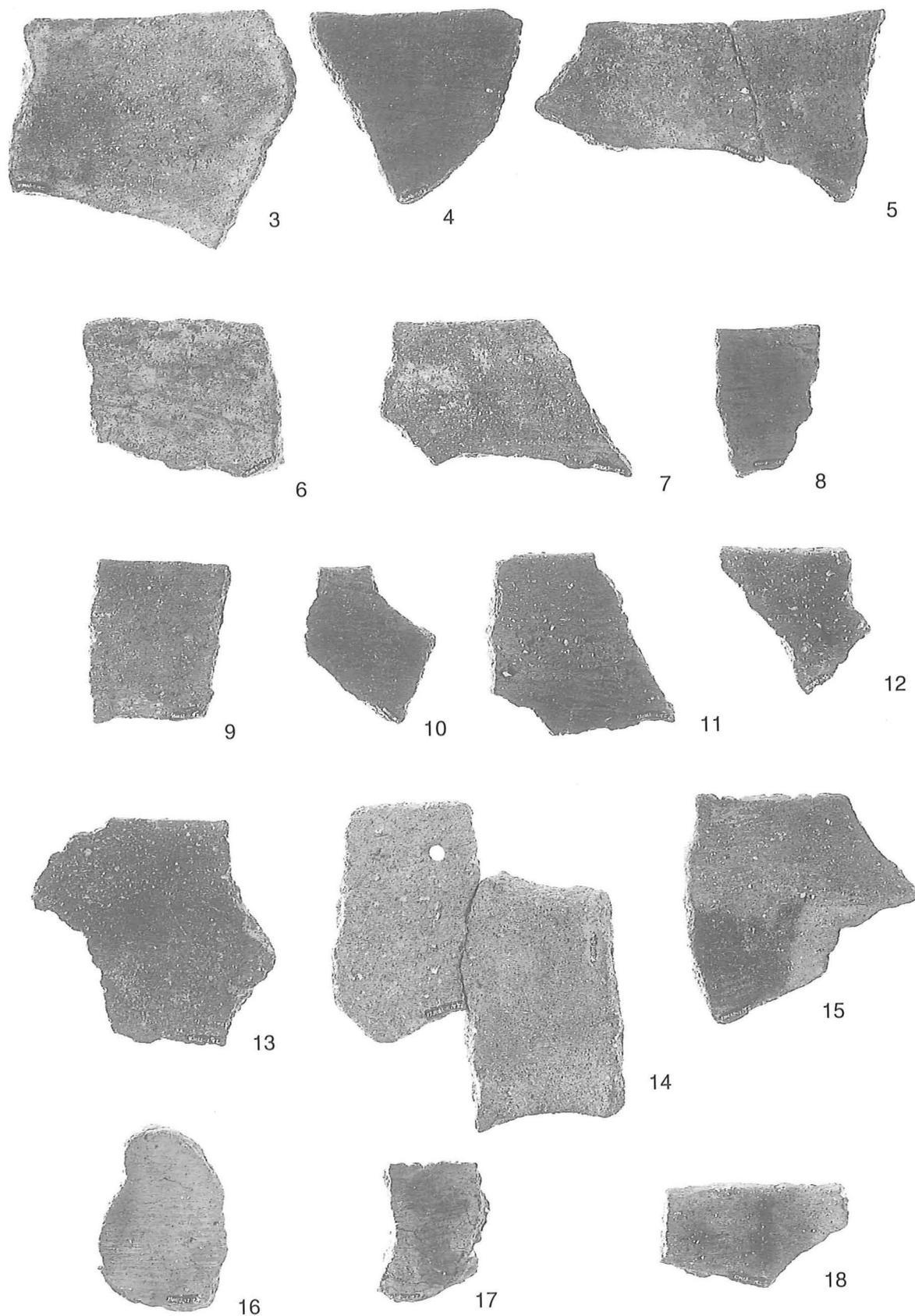


2

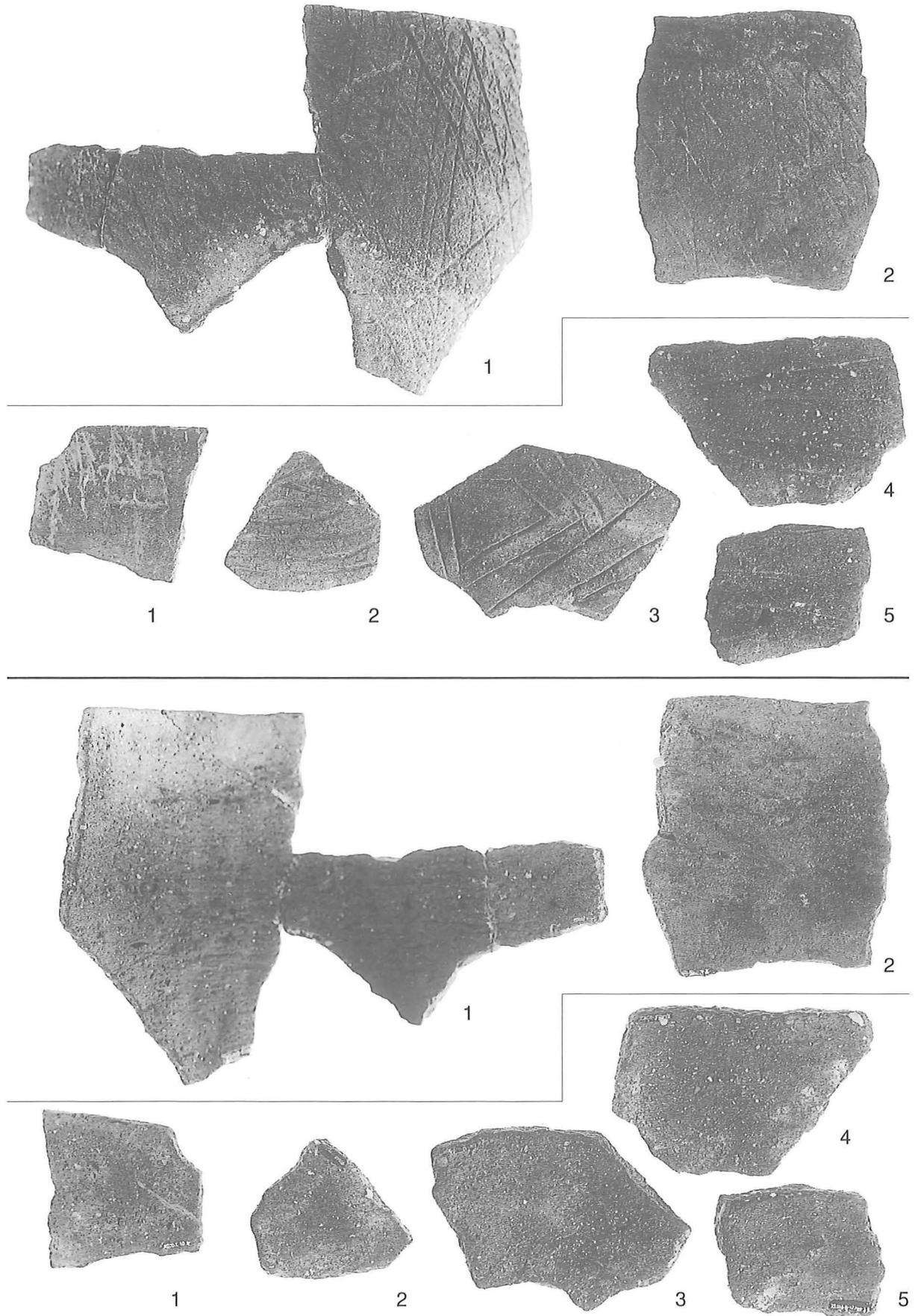
第I-c群土器② (S=1/2)



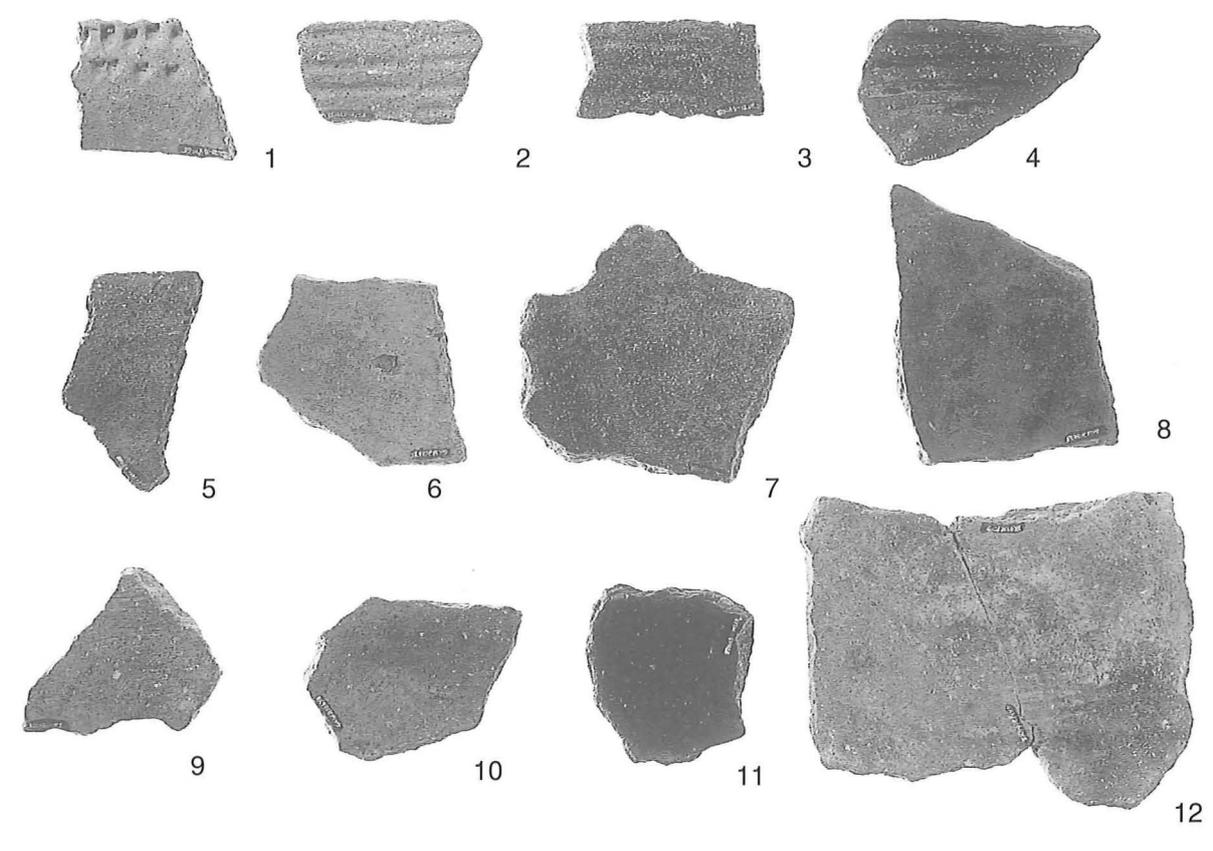
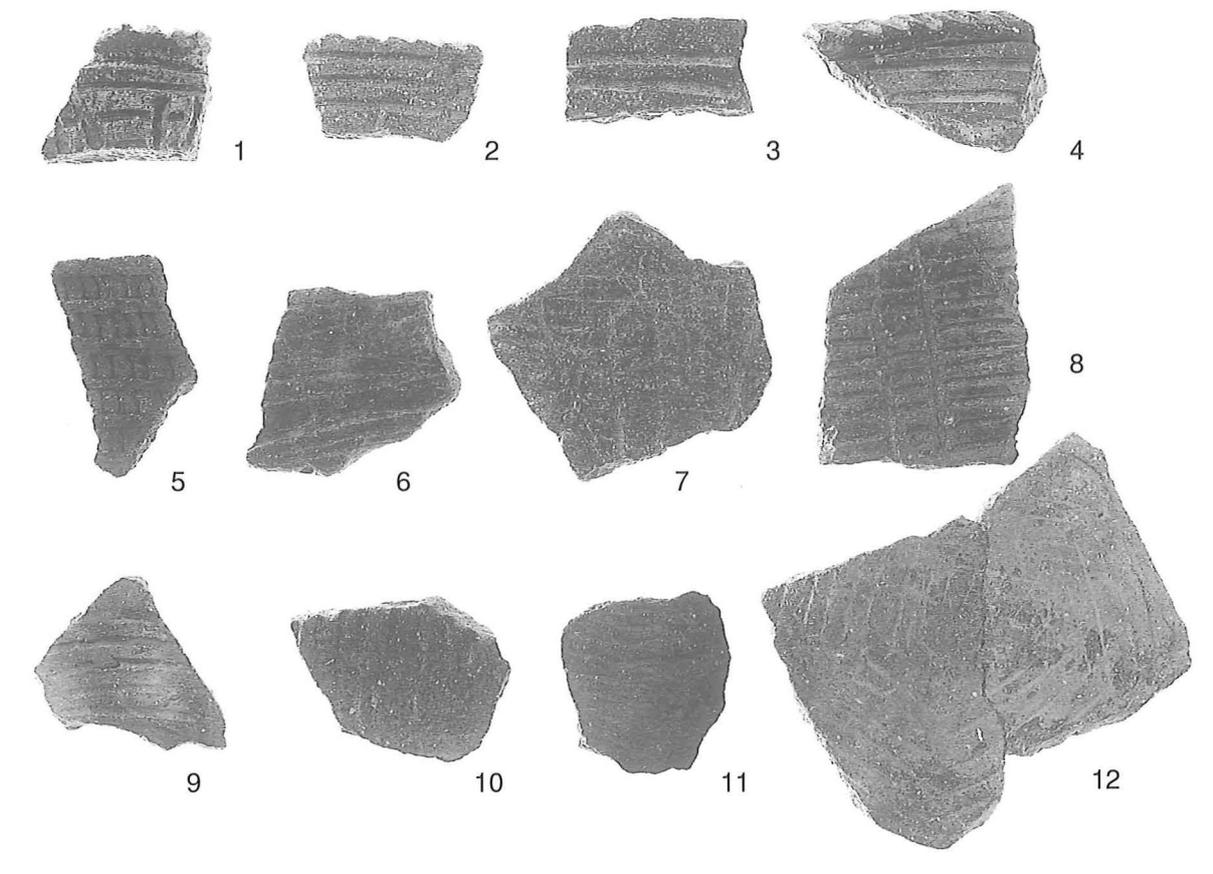
第 I -c 群土器③ (S=1/2)



第I-c群土器④ (S=1/2)



第I-c群土器⑤・その他の土器



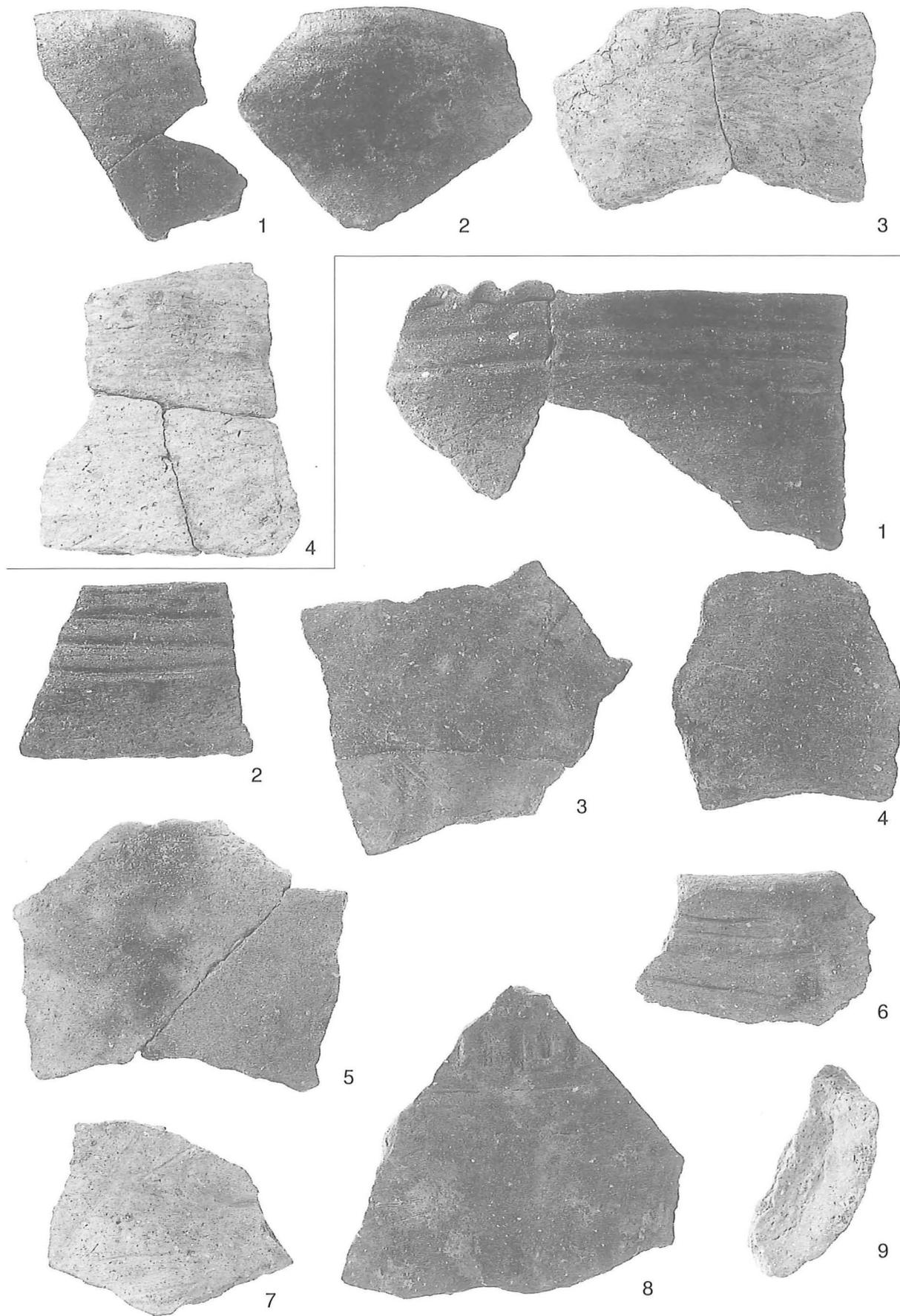
第Ⅱ群土器①



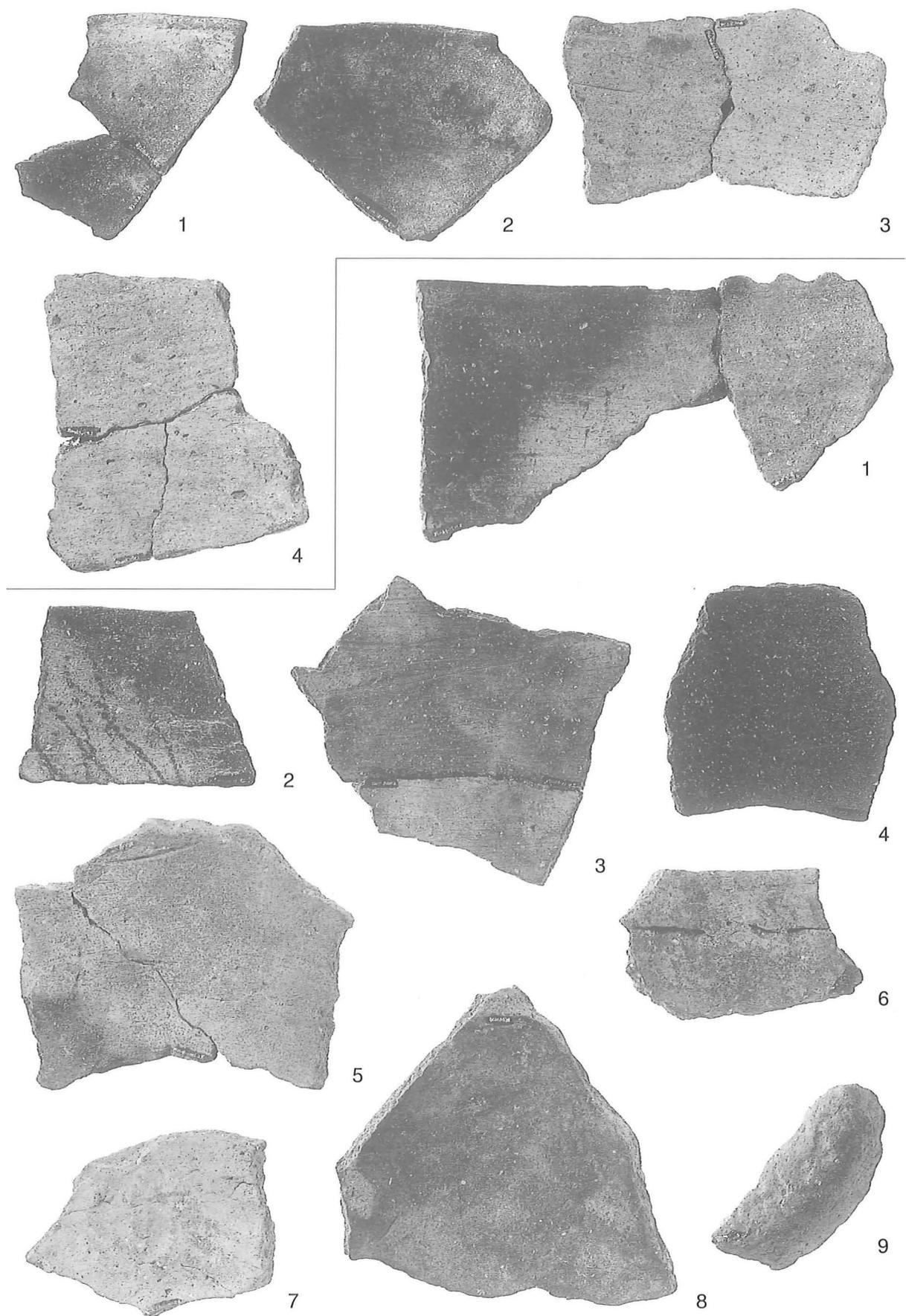
第Ⅱ群土器②（上）・第Ⅲ群土器①（下）



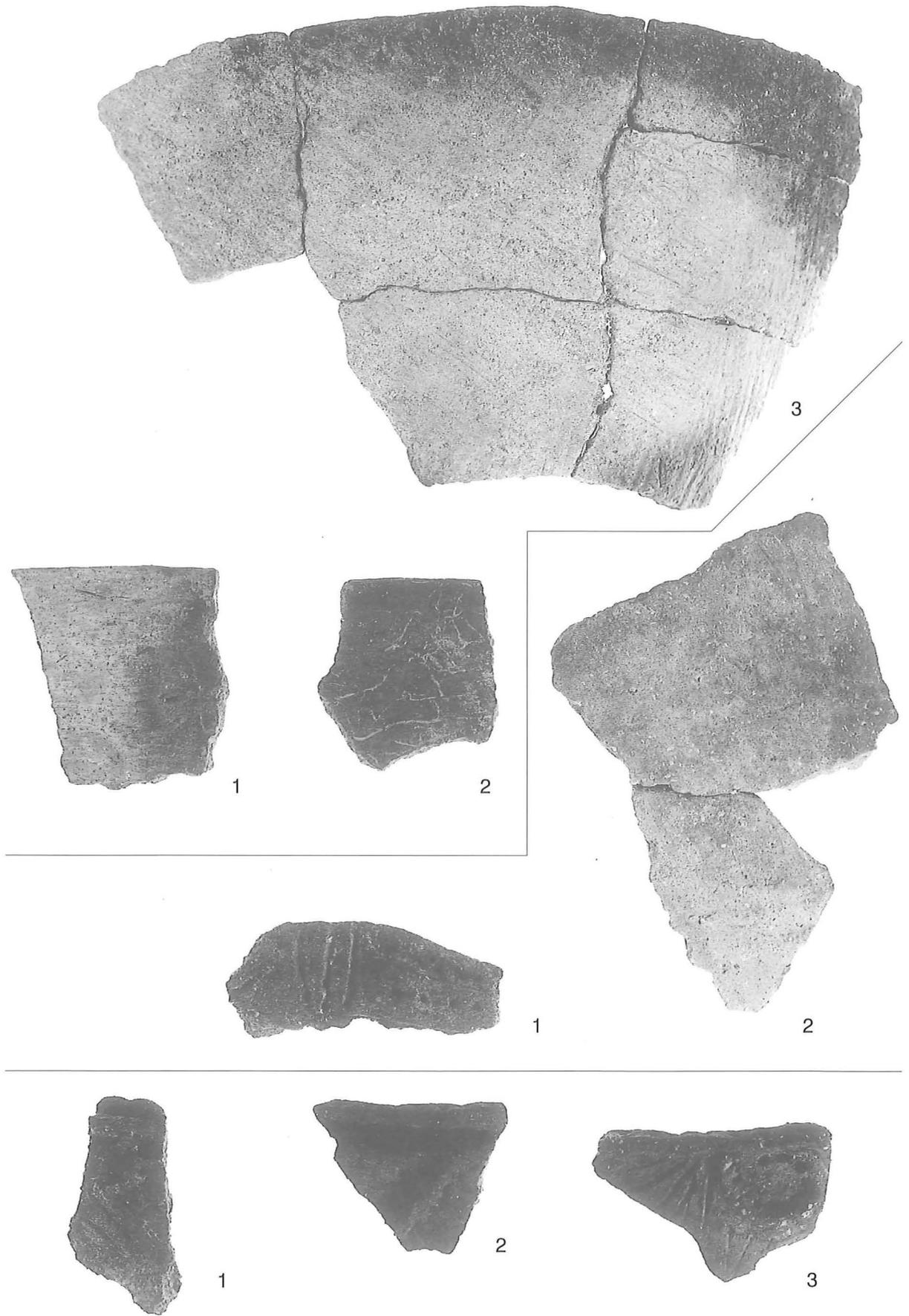
第I-d群⑥(上)・第III群土器②(下)



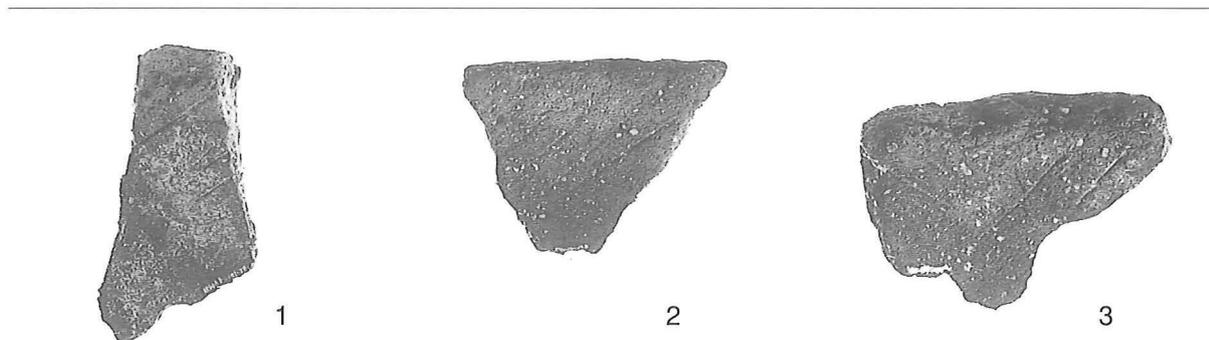
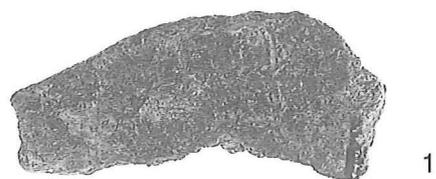
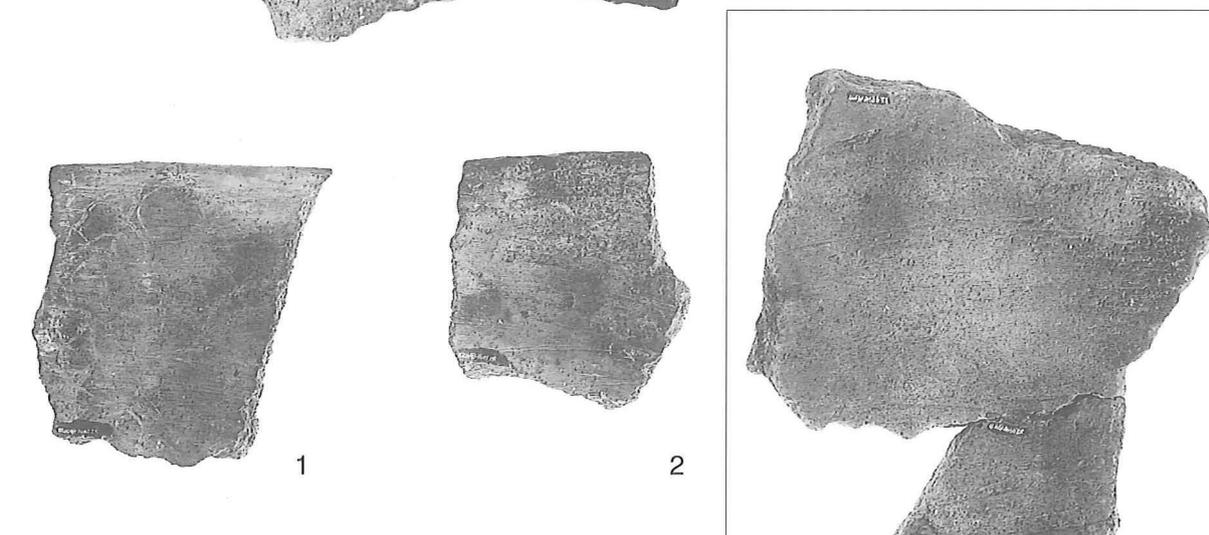
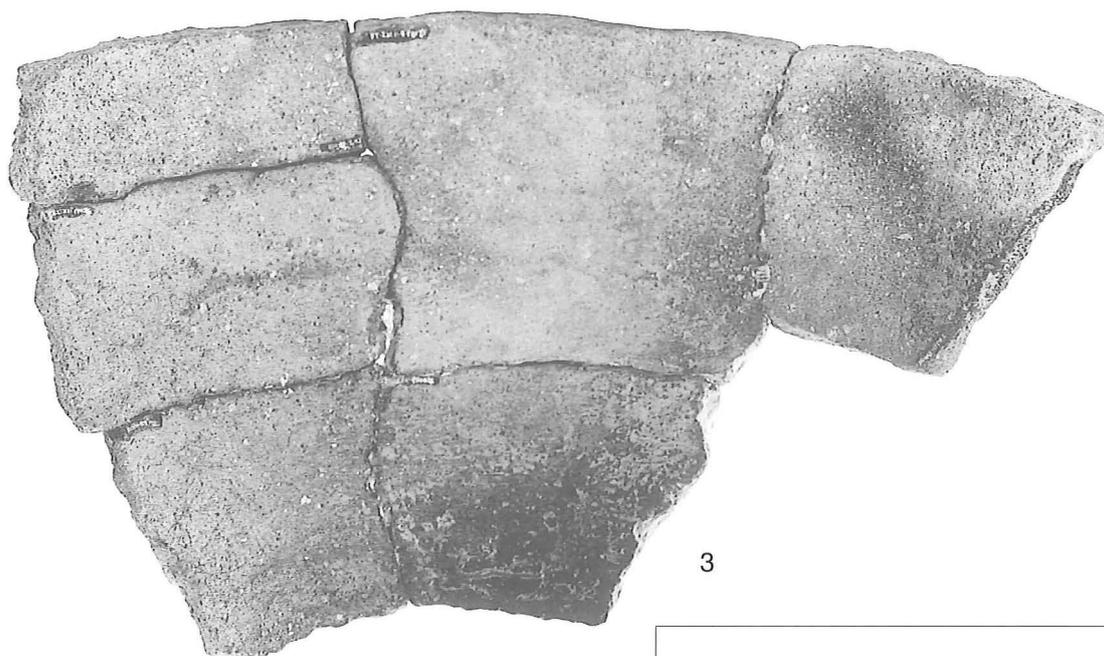
第Ⅲ群土器③(上)・第Ⅳ群土器①(下)



第Ⅲ群土器④(上)・第Ⅳ群土器②(下)



第V群土器①（中段）・第VI群土器①（上段）・第VII群土器①（下段）



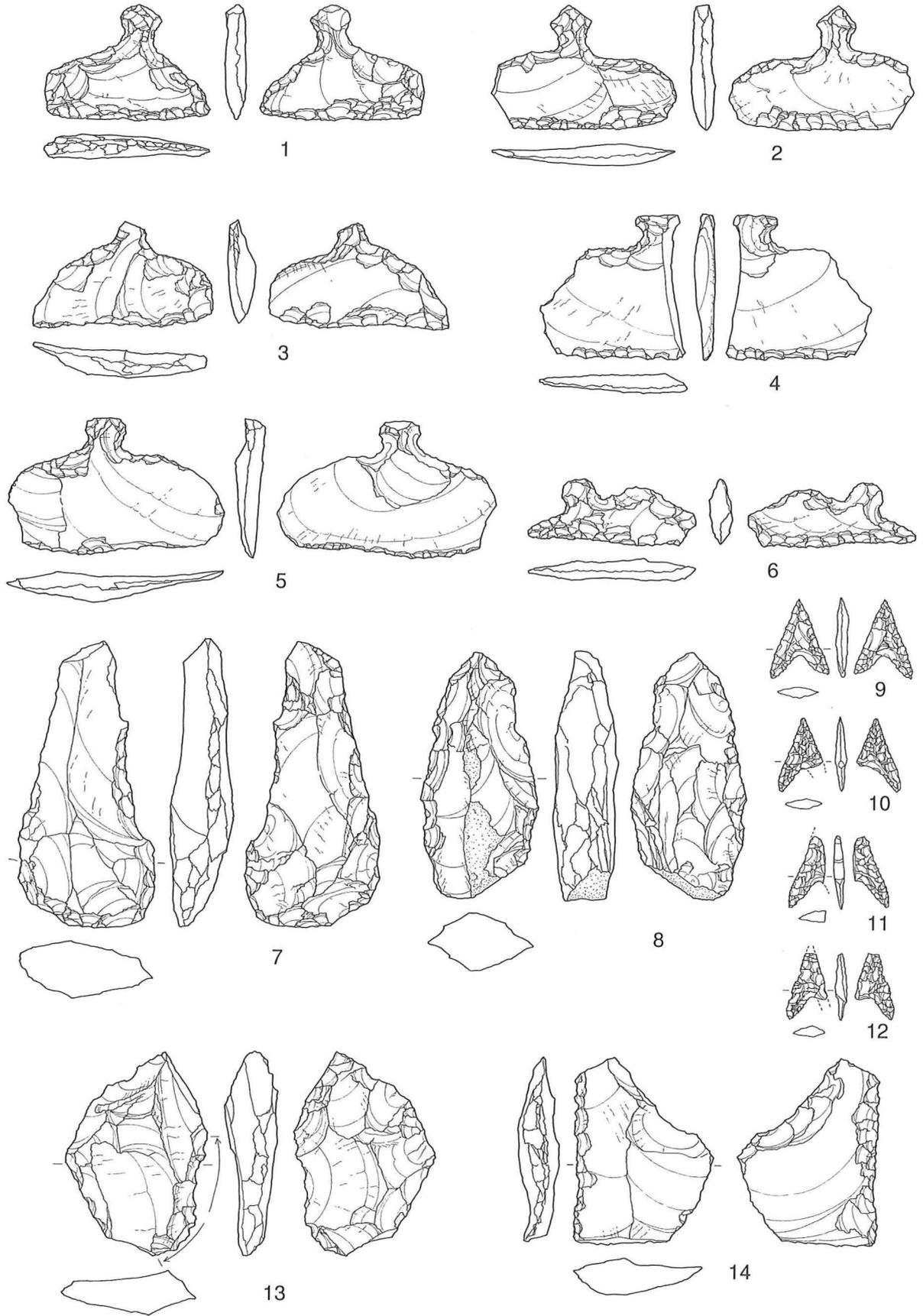
第V群土器②（中段）・第VI群土器②（上段）・第VII群土器②（下段）

石器

1～6は横広の剥片を素材とする石匙の一群である。素材の獲得方法については、ややばらつきはあるものの、つまみ部を打面とする横広の剥片を使用する傾向にある。共通することは刃部の加工の在り方と、刃部の形状にある。刃部加工は、素材剥片の形状を活かし、加工は小さな加工に止まる。刃部は直線的で、他遺跡出土の石匙がやや緩やかなカーブを描くのとは異なる。また、石匙に錐としての機能をも持たせるという6などの例は、早期の遺跡に散見されることから、早期の最終末の段階にまで伝統的にあったと考えることができる。7は鎌崎型スクレイパー状のものである。鎌崎型スクレイパーとして断定できないのは、刃部加工が丁寧であり、加工上相違することを考慮してのことである。刃部は丸く加工し、持ち手と思われる部分の加工は、やや簡略化されている。持ち手の部分はシャフト等に差し込んだことも考えられよう。8は分厚い縦長剥片の周辺を加工し、尖頭状に仕上げているが、自然面の残り具合から考えるならば、石銛の未製品の可能性もある。ただし、この石器をいわゆる石銛として捉えることができるか否かについては慎重を期さなければならない。海岸部の遺跡で出土する尖頭状の石器については通常石銛として報告される場合が多いが、田平町つぐめの鼻遺跡出土の石銛との形態・加工差は歴然としており、石銛の機能を推定はできるものの尖頭状石器として捉え、つぐめの鼻遺跡出土の石銛とは別にしておく。13・14は搔器である。2点とも刃部加工に特徴がある。剥片の縁辺に一定の間隔で粗い加工を施し、それ以上の細かな加工をおこなっていない。このことから考えると、非常に粗い作業工程を想定しなければならないであろう。9～12は、2等辺三角形を呈する石鏃で、先鋭に加工されている。脚部の作りも先鋭で、4点は共通する加工技術の中で制作されたと考える。石材については、すべて玄武岩を使用しているが、玄武岩の中でも良質のものを選択しており、不純物が非常に少ない。縄文後期から晩期においては、不純物が混入する地元産出の玄武岩を多様する傾向があると判断するが、早期・前期段階までは素材を選択していることを示唆しておきたい。

小結

石器は土器の在り方から、縄文時代早期終末のものとして捉えることができる。出土石器は石鏃・石匙・搔器を主体としており、この他に石皿や石斧を石器組成として持つ縄文時代早期とはやや異なる。遺跡の出土石器からみれば石匙や搔器が主体となる石器群である。石匙は、刃部が直線的であることに大きな特徴があると言えよう。搔器については刃部が鋸歯状で、粗い加工をおこなっていることを特徴とする。この加工は、対象物との工程を考えるならば、加工あるいは解体作業の初期段階での使用を考える必要があるであろう。鎌崎型スクレイパー様の石器については、刃部加工の在り方が問題になるが、柄をもつ搔器としての位置づけが可能であろう。石鏃は、二等辺三角形の鋭角な先端部・脚部に特徴がある。この石鏃が本遺跡での出土から、縄文早期終末での位置づけ可能な事例として今後比較検討の材料となり得るものとする。以上の石器組成が先述したように、縄文時代早期の石器組成を継承している部分が多いが、敲石や石皿などの道具が出土していないことは、早期と前期の中間的な組成として捉えるこのもできよう。この遺跡より一段階早い時期の田平町つぐめの鼻遺跡では、石銛が多数出土し、キルサイトとしての位置づけもされている。本遺跡の時期、に大村湾内に海水が流入しているかどうかは大きな問題だが、漁労を連想させる石器が卓越しているとは言えない本遺跡は、大村湾の環境復元に一石を投ずることとなる。

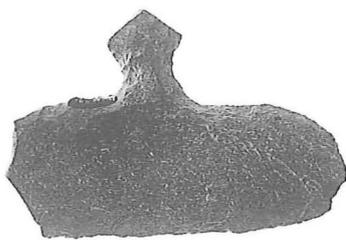


0 5cm

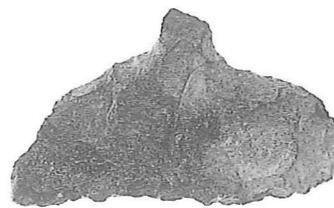
第82图



1



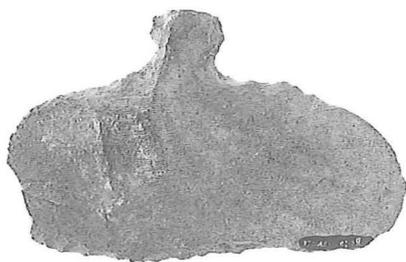
2



3



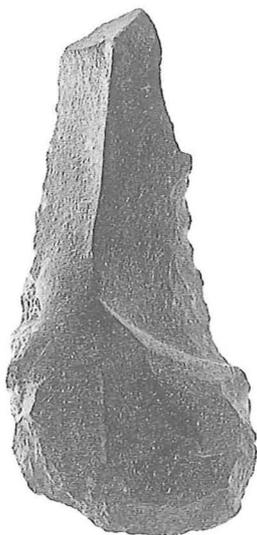
4



5



6



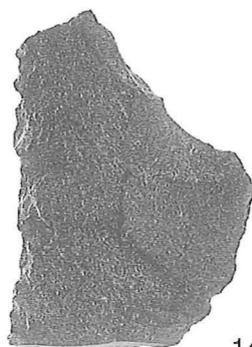
7



8



13



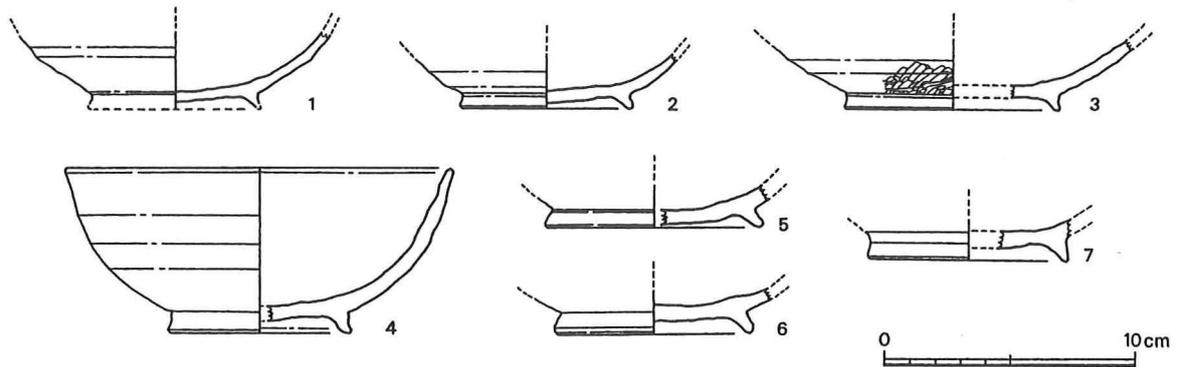
14

写真120

古代

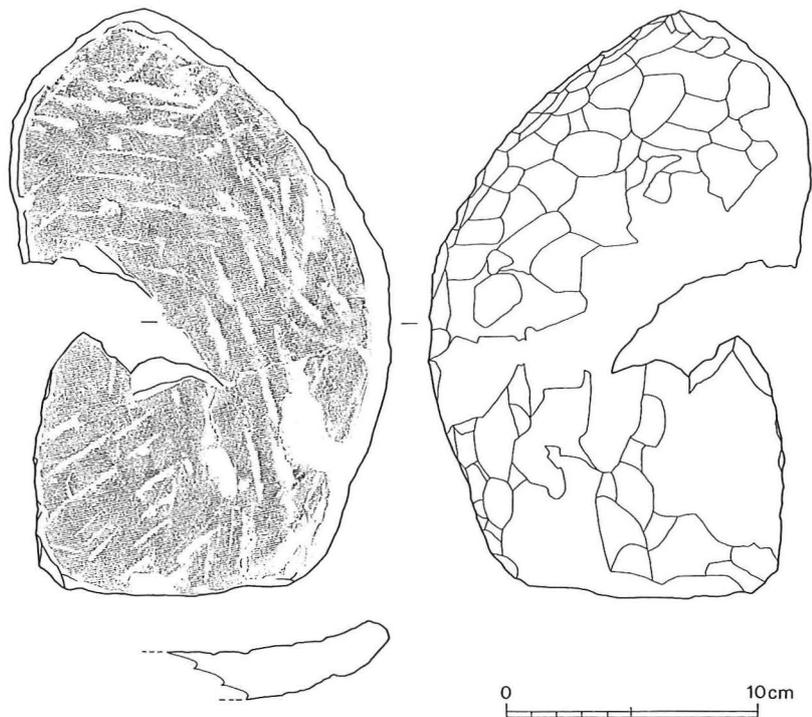
各地区から黒色土器が出土した。1 は内黒のいわゆる黒色土器A類で、26区5層から出土した。薄い丁寧なつくりで高台内に板目がのこる。2 は黒色土器B類で27区ピット6から出土した。見込みが丸く窪んでいる。3 も黒色土器B類で26区のSK12から出土した。体下部にミガキがのこる。4 は黒色土器A類で26区の4層から出土した。やや厚手で見込みが窪んでいる。5・6 は黒色土器B類で12区2層から出土した。7 は26区のピット71から出土した黒色土器A類である。概ね森隆のいう九州系IV類に相当すると思われる。実年代は10世紀前後が与えられている⁽¹⁾。

(1) 森隆1995「黒色土器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社による。



第83図

26区SK-11内出土。滑石製である。内・外面に鑿痕が確認され、また外面はスス痕も確認される。口唇部は斜方向に鑿痕が著しく、口縁部と胴部の屈曲が極端である。このことは本来石鍋として使用していたものを、石皿に転用したものと考えられる。石鍋が貴重品であったことから再利用する必要性があったものと思われる。(東 貴之)

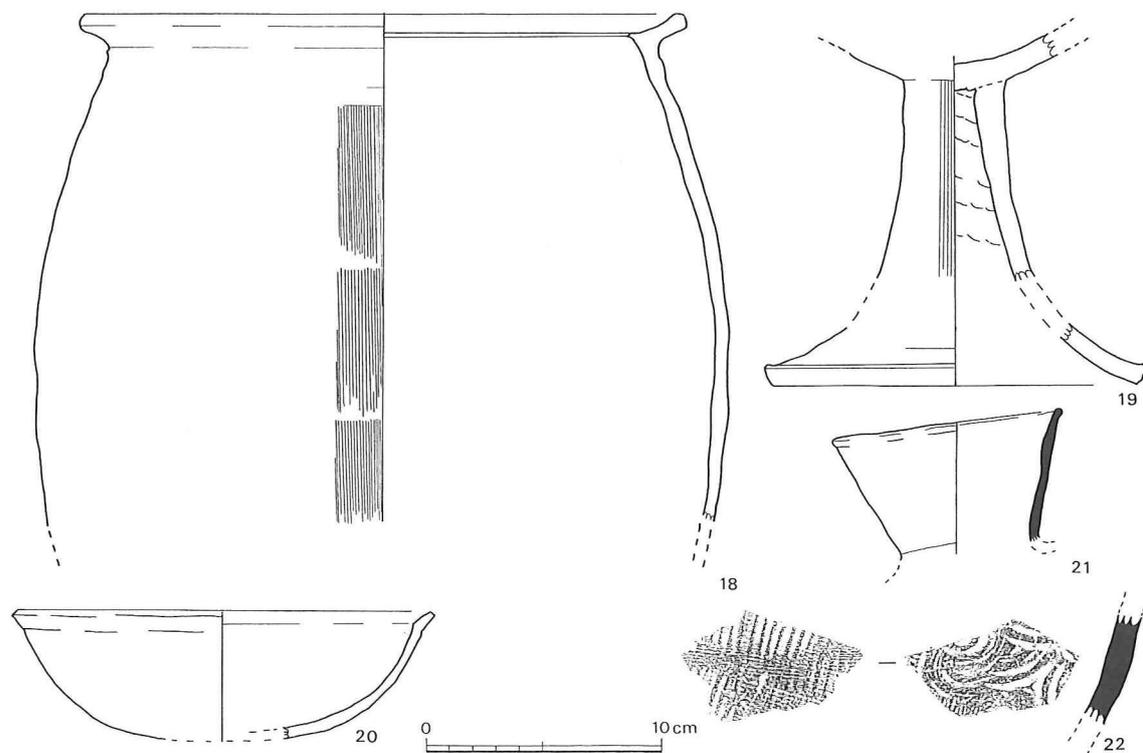


第84図 石皿

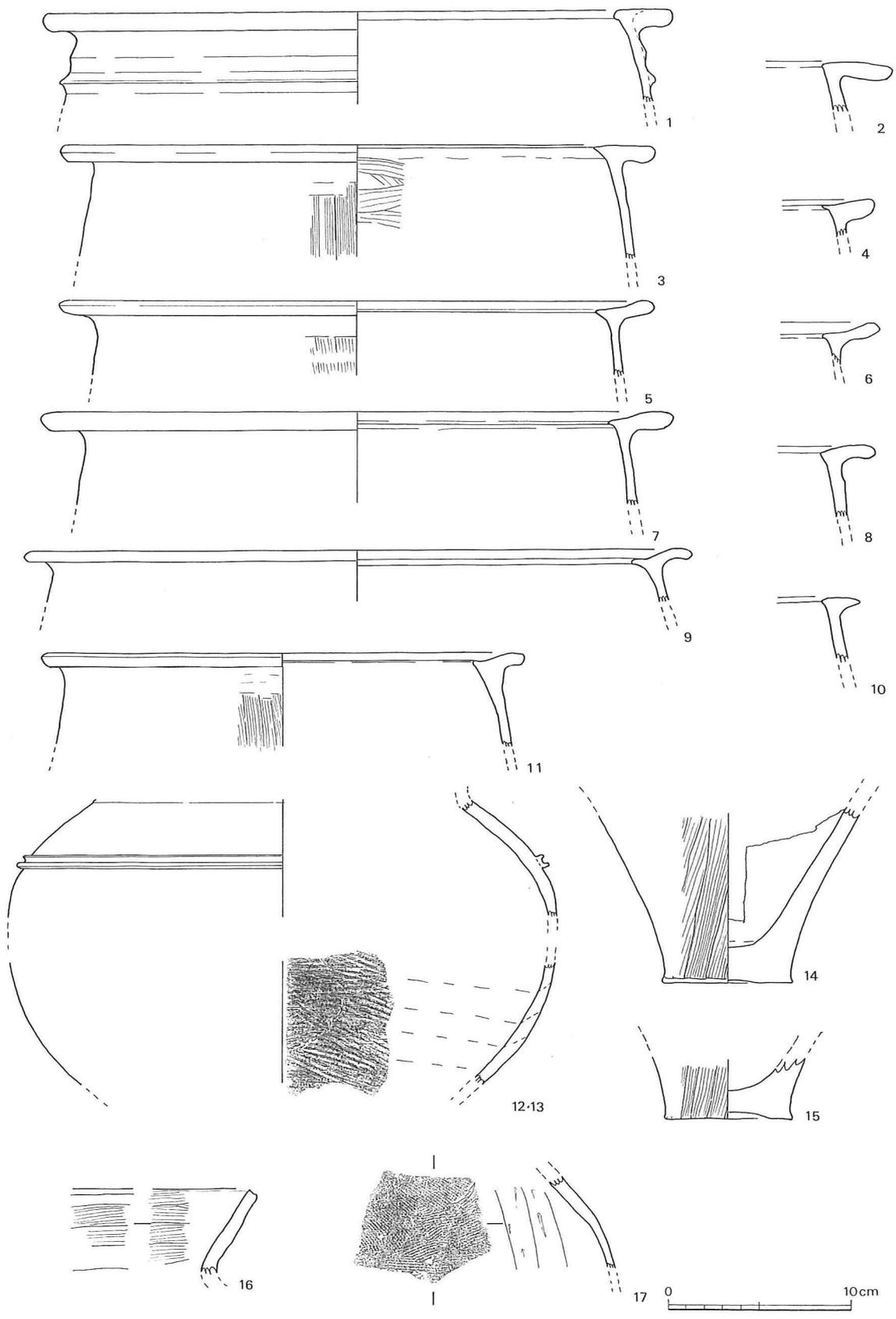
弥生時代から古代にかけての土器 (第85・86図)

1 はほぼ水平にのびる逆L状口縁を呈し、口縁下に三角突帯を巡らす。2 はやや外側に傾斜する逆L字状の口縁部を持つ。3 は逆L字状の口縁を呈しており、上面はほぼ水平である。4 は内傾する逆L字状の口縁を呈する。5・6・7 は4 と同じ特徴を有する甕口縁部片である。8・9・11は外反する端部を有する逆L字状の口縁部片である。10は短い逆L字状口縁で上面は丸い。12・13は同一個体に復元でき、壺肩部以下胴部片である。胴部中位上に断面M字突帯を張り付け、頸部径は約21cm、胴部最大径は30cmを測る。14・15は甕胴部片で、ともに上げ底を呈するが14は弱い。外面には縦方向の刷毛が施され、内面は丁寧になでられる。18は黒髪式系統の甕で、内側に傾斜する口縁部は「く」の字に開き、上面は内側に窪んでいる。胴部外面は縦刷毛が連続断続的に行われており、内面は丁寧になでられる。19は高坏脚部片2点で、途中で復元している。脚部端部はしっかりと面取りしており、脚円筒部も比較的長い。外面は縦刷毛、脚部端部は横ナデ、内面はナデ調整が見られるが、粘土紐痕跡が残り、左回転で巻き上げられる。

16・17は土師器甕片で、布留式新段階併行期の特徴を有する。16は「く」の字に開口縁部をもち、く口縁端部は面取りされ、内外面とも刷毛調整が行われている。17は甕胴部下半で外面に細かい刷毛目調整、内面は縦方向に長いへら削り、胴部中位を中心に丁寧に削られている様子だが、全体的に器壁を薄くする意識は感じられない。20は土師器杯で口縁端部が外反し、内外面刷毛調整であるが、回転を利用したものではない。また、焼成が非常に良く、赤褐色を呈さず、須恵器に近い質感である。非常に特徴的な資料である。21は平瓶口縁部片で、復元径で10cmを測り、体部が比較的丸い段階のものであろう。年代的には隣接する玖島崎古墳群に近い。22は須恵器甕胴部片であり、外面にはタタキのあと部分的に横位のカキ目調整がみられる。(竹中)



第85図



第86图

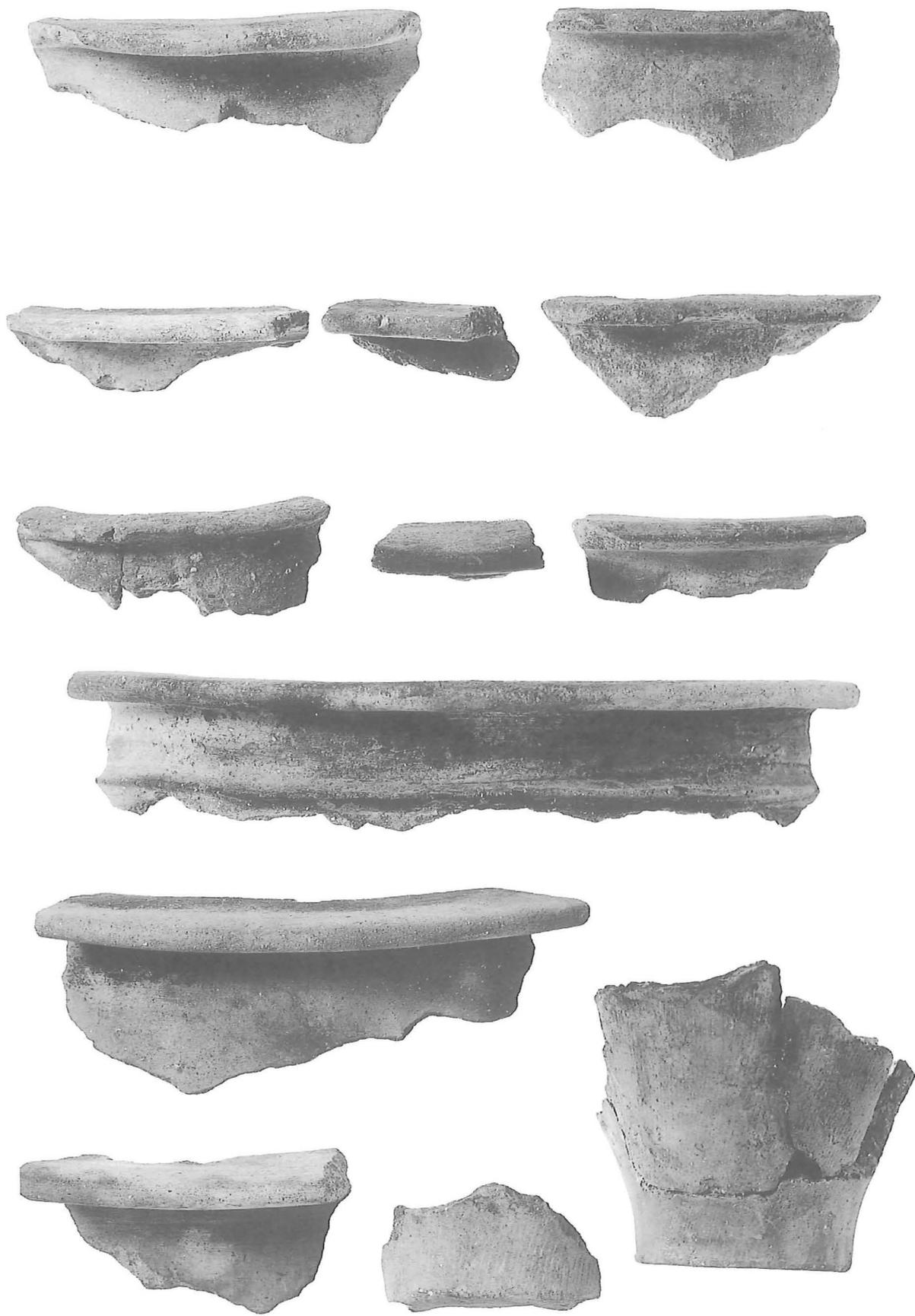


写真121

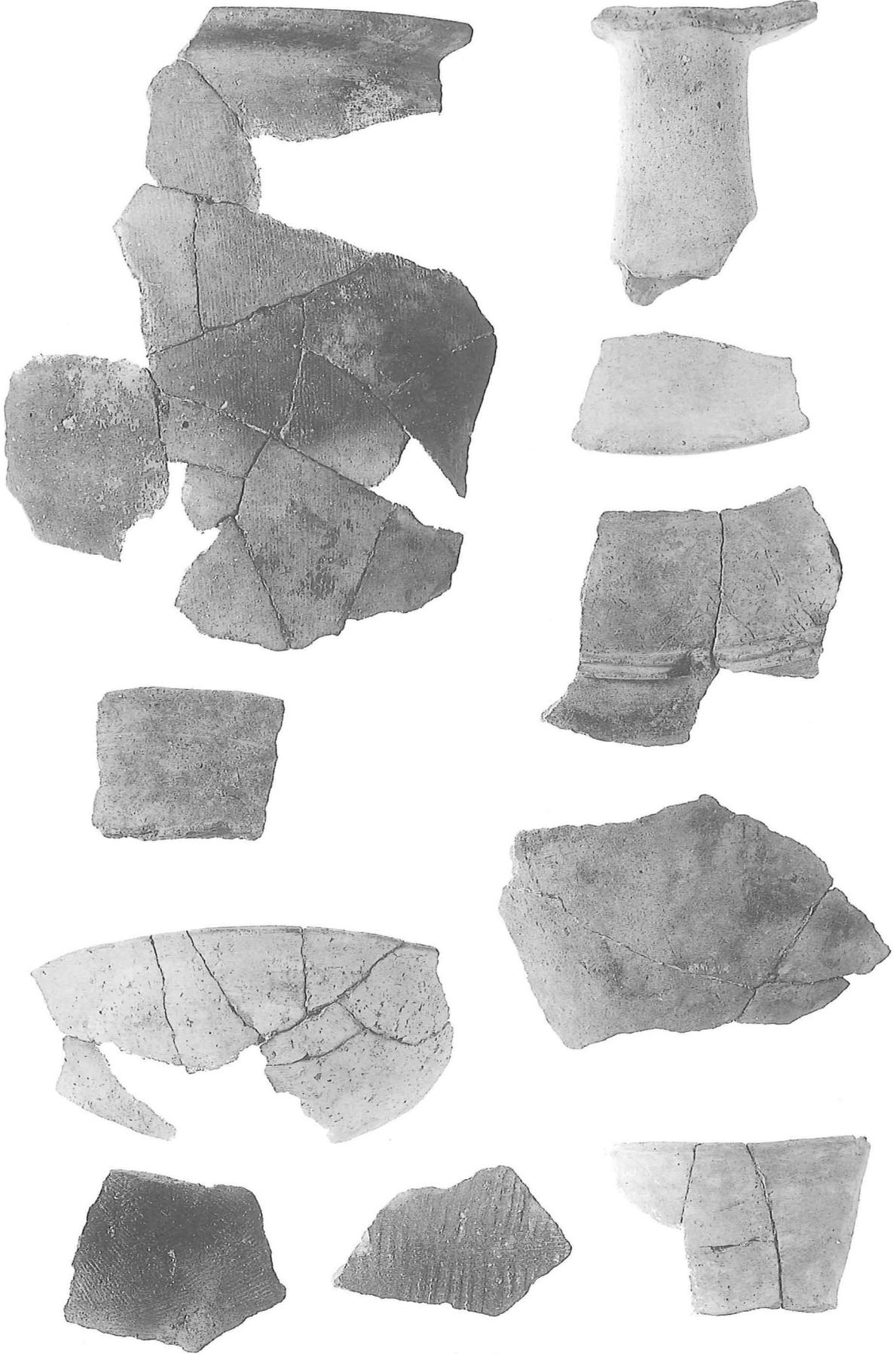


写真122

I. 玖島城跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

試料名	遺物No, 遺構No	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	層上部	貝	酸洗浄, ベンゼン合成 長時間測定	β 線計数法 (液体シンチレーション法)
No. 2	貝層下部	貝	酸洗浄, ベンゼン合成 長時間測定	β 線計数法 (液体シンチレーション法)
No. 3	貝層	貝	酸洗浄, ベンゼン合成 長時間測定	β 線計数法 (液体シンチレーション法)

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No. 1	4960±70	+1.1	5390±70	交点: Cal BC 3790 2 σ : Cal BC 3960 ~ 3650 1 σ : Cal BC 3910 ~ 3710	156569
No. 2	5800±50	-0.5	6200±50	交点: Cal BC 4690 2 σ : Cal BC 4790 ~ 4570 1 σ : Cal BC 4750 ~ 4750, Cal BC 4730 ~ 4640	156570
No. 3	5550±80	0.0	5960±80	交点: Cal BC 4430 2 σ : Cal BC 4590 ~ 4260, 1 σ : Cal BC 4490 ~ 4330	156571

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から，単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5, 568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は，標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正¹⁴C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （68%確率）および2 σ （95%確率）は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

II. 玖島城跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、ピット65（近世の建物跡の覆土）、11区池中2層（近世以前の堆積層）の堆積物2点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 試料を秤量し5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉2、シダ植物孢子2形態の計26である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを試料1cm³中の花粉密度と併せて図1に示す。なお、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属, モミ属, マツ属複維管束亜属, スギ, イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科, ヤマモモ属, ハ
ンノキ属, カバノキ属, ハシバミ属, クマシデ属-アサダ, クリ, シイ属-マテバシイ属, コナラ属
コナラ亜属, コナラ属アカガシ亜属, ニレ属-ケヤキ, エノキ属-ムクノキ, モチノキ属, ツタ, ツ
ツジ科, ニワトコ属-ガマズミ属, イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

セリ亜科, ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子, 三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) ピット65

花粉密度が非常に低く, イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科のみが検出される。

2) 11区池中2層

樹木花粉の占める割合が非常に高く, 特にコナラ属アカガシ亜属, シイ属-マテバシイ属の出
現率が高い。他に, エノキ属-ムクノキ, クリ, ハシバミ属, マキ属などが低率に検出される。
草本花粉は少なく, セリ亜科, ヨモギ属が出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

1) ピット65

花粉密度が非常に低いため, 花粉などの有機質遺体は分解された可能性が考えられる。

2) 11区池中2層

樹木花粉の占める割合が非常に高いことから, 周囲は森林の状態であり, コナラ属アカガシ亜
属, シイ属-マテバシイ属を主要高木相とする照葉樹林が分布していたと考えられる。草本花粉
は少なく, 森林の切れ目などにセリ亜科, ヨモギ属の草本が生育していたと考えられる。

参考文献

金原正明：(1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角
川書店, p. 248-262.

島倉巳三郎：(1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村 純：(1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

中村 純：(1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究,
13, p.187- 193.

中村 純：(1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

中村 純：(1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

Ⅲ. 玖島城跡における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 試料

試料は、花粉分析と同様、ピット65（近世の建物跡の覆土）、11区池中2層（近世以前の堆積層）の堆積物2点である。

3. 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から1cm³を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、一晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）1分類群、真一中塩性種（海一汽水生種）1分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表1に示す。

1) ピット65

珪藻殻片がわずかに検出された。

2) 11区池中2層

淡水生種の*Cyclotella* sp., 海水生種の*Grammatophora* sp.がわずかに検出された。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

以上の分析結果から、ピット65（近世の建物跡の覆土）、11区池中2層（近世以前の堆積層）の堆積物の珪藻密度は非常に低く、ほとんど検出されなかった。珪藻の生育しにくい比較的乾燥した堆積環境が推定される。

参考文献

- Hustedt, F.(1937-1938) Systematische und ologishe Untersuchungen uber die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl.15, p.131-506.
- Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.
- Lowe, R.L.(1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
- Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K.&, Watanabe, T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—, 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 第四紀研究, 27, p.1-20.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 珪藻学会誌, 6, p.23-45.

はじめに

長崎県大村市に所在する玖島城跡は、西暦1600年頃の城郭跡とされている。今回の発掘調査では、城郭に使用されたと考えられる多量の瓦が出土している。この時期の長崎県における城郭の瓦については、国内で生産されたものに加えて朝鮮から輸入された瓦も使用されたと考えられている。本報告では、瓦の材質すなわち胎土を調べることにより、その特徴を捉えて比較し、玖島城における瓦の生産供給事情について考える。なお、現時点では、当該期の朝鮮産の瓦はもとより長崎県における当該期の城郭の瓦についても分析例はないため、即座に国内産か朝鮮産かを判別することはできないが、試料間の胎土の違いを捉えることや胎土から推定される生産地の地質学的背景などは、その生産に関わる重要な資料になり得ると考える。

1. 試料

試料は、玖島城跡から出土した4点の瓦片である。発掘調査者により試料番号1~4が付されている。発掘調査所見では、試料番号1は国産の平瓦、試料番号2は国産または朝鮮産の丸瓦、試料番号3および4は朝鮮産の平瓦であるとそれぞれ考えられている。試料の一覧表は、分析結果を呈示した表1に併記する。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。本分析では、薄片作製観察と蛍光X線分析を行う。薄片作製観察の方法は、縄文土器や土師器のような低温焼成で比較的粗粒の砂粒を含む胎土の土器でも須恵器や陶器のように高温焼成で含まれる砂粒が比較的少ない胎土の土器でも分析が可能なことと地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。今回のような近世の瓦では、地域や時期により焼成技術が大きく異なることが予想されることから、薄片作製観察は適しているといえる。一方、蛍光X線分析も試料の種類に関わらず分析を行うことができることはいままでの分析データを数字として比較できるという利点は大きい。今回の分析は、これら互いの分析の利点を生かして、より効果の大きい分析結果を得ることを目的とする。以下に各分析方法について説明する。

(1) 薄片作製観察

薄片は試料の一部を切断し、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。顕微鏡観察は岩石学的手法を用いて構成鉱物および組織を明らかにすることを目的に進められ、各試料の特徴把握および比較検討を可能ならしめる客観的試料の作成に努めた。

(2) 蛍光X線分析

SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 およびIg.Lossの11成分の化学組成を分析し、分析値から粘土ノルム計算を行って焼成物から胎土の鉱物成分を推定する。

一般に陶磁器等の化学組成分析表による品質判定は、 SiO_2 、 Al_2O_3 、 Na_2O 、 K_2O 、 Fe_2O_3 の含有量を

比較することでなされることが多いが、的確な判定資料として利用されることを目的としてここでは粘土ノルム計算法による解析を行う。岩石学の分野では火成岩の化学組成から構成鉱物の種類と量比を計算する目的で、1902年以降C I P Wノルム計算が用いられてきた。粘土ノルム計算は粘土・土壌など堆積物・変質物で形成される含水鉱物・炭酸塩鉱物などを含む天然物質中の鉱物組成を計算するために考案された計算法である（五十嵐，1983）。本文で用いている計算法は焼成物等から原土の鉱物組成を推定するシュミレーションプログラムで、陶磁器など含水鉱物を原料とするが、高温加熱により無水状態になっている製品の化学組成から、原料の化学組成と鉱物組成を推定することを目的としている。ただし、粘土鉱物を多く含む岩石や鉱石、陶土等は化学組成が同じであっても生成過程（物理化学条件）の相違により、鉱物組成が異なるため、岩石学におけるC I P Wノルム法のように一義的に一定の規則によって計算することはできない。このため粘土ノルム計算法ではいくつかの鉱物の有無により、他の鉱物組成を類推して計算する方式を採用している。従ってこの種の鉱物の有無はX線回折試験・顕微鏡観察などにより予め知られていなければならない。今回は顕微鏡観察により、前提となる鉱物が確認されている試料（試料番号1, 2）もあるが、高温焼成された試料では手がかりとなる粘土鉱物は消失している試料（試料番号3, 4）もある。ここでは1）薄片で確認される範囲で試料番号1と2ではセリサイト・カオリンが主成分であると仮定し、緑泥石・モンモリロナイトを伴う条件での計算を行うこととし、2）試料番号3と4では粘土鉱物としてセリサイトに乏しいことから、カオリンが主成分で、緑泥石・モンモリロナイトを伴う条件での計算を行うこととした。

以下に蛍光X線分析装置および測定条件を記す。

1) 装置

理学電機工業社製RIX1000（FP法のグループ定量プログラム）

2) 試料調整

試料を振動ミル（平工製作所製T1100:10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉碎した後、105°Cで4時間乾燥させた。この微粉碎試料から以下の条件でガラスビートを作成した。

溶融装置：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）

溶剤および希釈率：融剤（ホウ酸リチウム）5.000g:試料0.500g

剥離剤：LiI（溶融中2回投入）

溶融温度：1, 200°C 約7分

3) 測定条件

X線管：Cr(50Kv-50mA)

スペクトル：全元素K α

分光結晶：LiF, PET, TAP, Ge

検出器：F-PC, SC

計数時間：Peak40sec, Back20sec

3. 結果

(1) 薄片作製観察

観察結果を一覧表にして表1に示す。以下に各試料の観察事項を述べる。

表1 胎土薄片観察結果

試料番号	出土区	種類	発掘所見	鉱物						片						岩				素地の鉱物				素地の性状				推奨焼成温度			
				石英	カリ長石	斜長石	白雲母	角閃石	緑閃石	単斜輝石	不透明鉱物	チャート	粘板岩	砂岩	凝灰岩	火山ガラス	流紋岩	花崗岩	セリサイト	石英	酸化鉄結核	色調	配向性	粘土量	淘汰						
1	A-5VI	平瓦	国産	△		△~+		+		+	+	+	+	+	+	+	△		△~+	+	△		△				△		△		900°C+
2	A-3VI	丸瓦	国産または朝鮮産?	△~+		+		+	+	±	±	±	±	±	±	±	△~+		△~+		△		△		+		△		△		900°C+
3	B-4III	平瓦	朝鮮産?	△~+		+		+		±	±	±	±	±	±	±	△~+		△~+		△		△		+		△		△		900°C-
4	B-6VI	丸瓦	朝鮮産?	△		△~+				±	±	±	±	±	±	±	△~+		△~+		△		△		+		○		△		1,150°C±

注

量比 ◎:多量 ○~○:多量~中量 ○:中量 ○~△:中量~少量 △:少量 △~+:少量~微量 +:微量 +~+:微量~きわめて微量 ±:きわめて微量

素地の性状

Col:素地の色調 ○:濃色 ○~△:濃色~中間 △:中間 △~+:中間~淡色 +:淡色.

Ori:素地の配向性 ○:強い ○~△:強い~中程度 △:中程度 △~+:中程度~弱い +:弱い.

Cly:素地の粘土量比 ○:多い ○~△:多い~中程度 △:中程度 △~+:中程度~少ない +:少ない.

Srt:淘汰の程度 ○:良好 ○~△:良好~中程度 △:中程度 △~+:中程度~不良 +:不良.

1) 試料番号 1

肉眼的に黄褐色を呈する瓦片で、石英および長石類の粗粒を斑点状に多く含む。

a) 鉱物片

石英：少量存在し、最大粒径0.55mmの他形粒状を呈する。一部には強い波状消光を有するものおよび部分溶融組織を有するものがある。しかし、斜長石に加熱変化は見られず、セリサイトも少量で残存していることから溶融組織は焼成時に生じたものではなく、酸性火山岩あるいは半深成岩起源でもともと原岩中で生じた組織であろうと推定される。

斜長石：少量～微量で存在し、最大粒径0.60mmの破片粒状を呈する。加熱変化は認められず、集片双晶が発達する。

角閃石：微量存在し、最大粒径0.35mmの破片粒状を呈する。黄緑色～緑褐色の多色性が認められ酸化角閃石化している。

単斜輝石：微量～きわめて微量存在し、最大粒径0.32mmの他形粒状を呈する。淡黄褐色の色調を有し、多色性は認められない。一方向に劈開が発達し斜消光する。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、最大粒径0.30mmの他形粒状を呈する黒色鉱物で、外形から磁鉄鉱と判定される。

b) 岩片

チャート：微量存在し、粒径最大0.60mmの垂角礫状を呈する。玉ずい質の微晶質石英の集合体で構成されている。

砂岩：微量～きわめて微量で存在し、粒径最大0.45mmの垂角礫状を呈する細粒石英質砂岩である。

凝灰岩：微量存在し、粒径最大0.60mmの円礫状を呈する。一部は非晶質であるが、一部は珪化されている。

火山ガラス：微量存在し、粒径最大0.32mmの不規則な骨片状ないし棒状を呈する透明なガラス岩の破片である。

c) 素地中の鉱物

粘土鉱物：素地を構成する粘土鉱物は加熱変化を受け、多くは非晶質化しているが、一部は鱗片状で残留し、やや含鉄質のセリサイト様鉱物と判定される。

石英：素地中には0.02mm以下の破片状石英が少量散在している。

d) 素地の性状

素地は淡黄褐色を示すやや砂質な粘土で構成されるが、鉱物片・岩片を比較的多く含むため、粘土の含有量は中程度である。粘土鉱物は定向配列を示し、素地の中程度の配向性の原因となっている。粘土の淘汰度は中程度である。

e) 推定焼成温度

胎土に含まれる角閃石が酸化角閃石化していること、粘土鉱物の大部分に加熱変化がみられ、多くが非晶質化していることから焼成温度は900°Cと推定される。石英片にみられる高温クラックは原岩（酸性火山岩または半深成岩）の斑晶中に生じたもので、焼成時の組織ではないと判定した。

2) 試料番号 2

肉眼的に赤褐色を呈し、緻密質で、粘土の比率が高い瓦片である。石英粒や凝灰岩片が点在してい

る。

a) 鉱物片

石英：少量存在し，最大粒径0.70mmの他形粒状を呈する。波状消光が認められる。加熱変化はみられない。

斜長石：微量存在し，最大粒径0.90mmの破片板状を呈する。加熱変化は認められず，集片双晶および累帯構造が発達している。

角閃石：微量～きわめて微量で存在し，最大粒径0.22mmの破片粒状を呈する。淡緑色～緑色の多色性が顕著で，ほとんど酸化していない。

単斜輝石：きわめて微量で存在し，粒径最大0.15mmの他形粒状を呈する。淡黄褐色の色調で，多色性は見られず，斜消光する。

緑簾石：きわめて微量で存在し，粒径最大0.22mmの不規則粒状で検出される。

不透明鉱物：微量～きわめて微量存在し，最大粒径0.20mmの他形粒状を呈する黒色鉄鉱物で外形から磁鉄鉱と判定される。

b) 岩片

凝灰岩：少量～微量で存在し，最大粒径1.0mmの円礫状を呈する。微細な火山砕屑物で構成され一部はユータキシティック組織を示す。しかし，大部分は珪化または珪長質鉱物化作用を受けて変質している。

流紋岩：微量で存在し，粒径1.25mmの角礫状を呈する。微量の晶子を伴うガラス岩（黒曜岩）の岩片である。

c) 素地中の鉱物

粘土鉱物：少量存在し素地を構成する。大部分は加熱変化して非晶質化している。一部は粒径0.02mm以下の鱗片状または針状を呈して残存し，やや含鉄質なセリサイト様鉱物と判定される。

石英：素地中には0.02mm以下の破片状石英が少量散在している。

酸化鉄結核：微量存在し，最大粒径1.0mmの粒状を呈する。赤鉄鉱の集合体で膠結されている。

d) 素地の性状

素地は濃色～中間の灰褐色を示す粘土で構成され，配向性は中程度で粘土鉱物が配列している。粘土はやや砂質なセリサイト質粘土で，一部は非晶質化している。大型岩片を含み淘汰の程度は不良である。

e) 推定焼成温度

胎土に含まれる粘土鉱物（セリサイト）に加熱変化が認められ非晶質化しているが，一部は残存していることから900°C+と推定される。

3) 試料番号 3

肉眼的に煉瓦色を呈する瓦片で，石英および長石類の粗粒を含んでいる。

a) 鉱物片

石英：少量～微量で存在し，最大粒径1.16mmの破片状粒状を呈する。高温クラックおよび部分熔融組織が認められる。

カリ長石：微量存在し，最大粒径1.0mmの他形粒状を呈する正長石である。加熱変化は認められな

い。

斜長石：微量存在し，最大粒径0.60mmの板状および破片粒状を呈する。加熱変化は認められず，風化作用による汚染が著しい。

白雲母：きわめて微量で存在し，粒径0.15mmの葉片状を呈する。

角閃石：きわめて微量存在し，最大粒径0.35mmの破片粒状を呈する。淡緑色～緑色または淡緑色～褐緑色の多色性が顕著である。一部は軽度に酸化角閃石化している。

緑簾石：きわめて微量存在し，最大粒径0.02mmの他形粒状を呈する。

不透明鉱物：微量存在し，最大粒径0.30mmの他形粒状を呈する黒色鉄鉱物である。

b) 岩片

チャート：微量存在し，粒径最大0.52mmの垂円礫状を呈する。玉ずい質な微晶質石英の集合体で構成される。

砂岩：少量～微量存在し，粒径最大3.10mmの垂角礫状を呈する細粒石英質砂岩である。

凝灰岩：微量存在し，最大粒径0.45mmの垂円礫状を呈する。微細な火山碎屑物で構成され，多くはセリサイト化している。

c) 素地中の鉱物

粘土鉱物：きわめて微量存在し，粒径0.02mm以下の鱗片状を呈する。加熱変化を受けた形跡はみられず，もともとセリサイトに乏しい粘土と推定される。

石英：素地中には0.02mm以下の破片状石英が少量散在している。

d) 素地の性状

素地は淡黄褐色～黄褐色を示す粘土で構成され，配向性は弱い。粘土はやや砂質な粘土で，粘土の含有比は低く，大型の鉱物片・岩片を包含するため，淘汰の程度は不良となっている。

e) 推定焼成温度

胎土に含まれるカリ長石と一部の角閃石に加熱変化はなく，また，粘土鉱物に加熱変化が認められないことから900°Cと推定される。石英に高温クラックと部分溶融組織が認められるこのような現象は約1,150°C以上で生ずるが，他鉱物にこれに対応する変化が見られないことから原岩（おそらく酸性火山岩または半深成岩の石英斑晶）の組織と考えられ，焼成時に生じた現象ではないと推定される。

4) 試料番号 4

肉眼的に煉瓦色を呈する瓦片で，石英および長石類の粗粒は少なく，粘土分に富んでいる。

a) 鉱物片

石英：少量存在し，最大粒径1.05mmの破片状粒状を呈する。高温クラックと部分溶融組織が認められる。

カリ長石：正長石として少量～微量存在し，最大粒径1.30mmの他形粒状を呈する。周縁部に沿って加熱変化し，微溶化している。

緑簾石：きわめて微量で存在し，粒径最大0.05mmの他形粒状を呈する。

不透明鉱物：微量存在し，粒径最大0.23mmの他形粒状を呈する。黒色鉄鉱物で外形から磁鉄鉱と推定される。

b) 岩片

花崗岩：微量存在し，最大粒径2.2mmの角礫状を呈する。石英・斜長石・カリ長石で構成される酸性深成岩の岩片である。

粘板岩：きわめて微量で存在し，粒径0.31mmの扁平状を呈する。やや含鉄質の白雲母～セリサイト質の雲母鉱物で構成されている。

c) 素地中の鉱物

粘土鉱物：素地が濃色であるため粘土鉱物の存在を確かめることはできない。おそらく非晶質化しているものと思われる。

石英：素地中には0.02mm以下の破片状石英が少量～微量散在している。

d) 素地の性状

素地は濃色で黒褐色を示す粘土で構成され，配向性は弱い。粘土はやや含鉄量に富む粘土とおもわれ，その含有比は低く，大型の鉱物片・岩片を包含するため，淘汰の程度は不良となっている。

e) 推定焼成温度

素地が濃色であるため胎土に含まれる粘土鉱物の加熱変化は不明であるが，石英片に高温クラックと部分熔融組織が発達していることと正長石の外縁部が微溶化していることから焼成温度は1, 150°Cと推定される。

(2) 蛍光X線分析

分析結果を表2に示す。表の上段には化学組成，中段に計算の途上で得られる原土の推定化学組成(補正化学組成)，下段に粘土ノルム鉱物組成を掲げた。また，粘土ノルム鉱物組成計算をもとに，石英-粘土鉱物-長石類，カオリン-セリサイト-その他の粘土鉱物，および石英・長石-粘土鉱物-その他の鉱物の各三角図を図1に示した。

石英・長石-粘土鉱物-その他の鉱物三角図では，試料による組成の差は小さく，3試料ともに8.4～10.2%のその他の鉱物が含まれ，その大半は水酸化鉄(褐鉄鉱)である。これに対し，石英-粘土鉱物-長石類三角図，およびカオリン-セリサイト-その他の粘土鉱物三角図では試料により異なる傾向がみられる。石英-粘土鉱物-長石類三角図では試料番号1, 2では長石類の含有がきわめて少なく，斜長石としてそれぞれ5.17%，2.22%が計算されるのに対し，試料番号3, 4では長石の含有量が高く，それぞれ18.41%，18.07%が計算され，このうち10%以上はカリ長石であると推定され，顕微鏡観察結果と整合する結果を得ている。

カオリン-セリサイト-その他の粘土鉱物三角図では4試料ともにカオリンに富み，34～40%のカオリンを含むと推定され，この他に試料番号1, 2では6.8～8.3%のセリサイトが存在していたと計算される。しかし，試料番号3, 4ではセリサイトは計算上は無視される程度の量である。

表2 化学組成と粘土ノルム鉱物組成の復元計算表

表2-1 化学組成(wt%)

試料番号	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Ig.loss	Total
1	66.14	1.25	21.35	6.60	0.09	1.13	0.64	0.34	1.04	0.09	1.33	100.00
2	66.08	1.25	21.49	8.56	0.10	1.04	0.49	0.05	0.87	0.07	0.00	100.00
3	65.73	0.88	18.69	6.42	0.14	1.32	1.40	0.66	1.87	0.68	2.21	100.00
4	62.00	0.90	21.55	7.76	0.13	1.81	0.83	0.23	2.35	0.15	2.28	99.99

表2-2 補正化学組成(wt%)

試料番号	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	H ₂ O+	Total
1	62.50	1.18	20.18	6.23	0.08	1.07	0.60	0.32	0.98	0.08	6.77	100.00
2	61.29	1.16	19.93	7.94	0.09	0.97	0.46	0.05	0.81	0.07	7.23	100.00
3	63.23	0.85	17.98	6.17	0.14	1.27	1.34	0.63	1.80	0.65	5.94	100.00
4	58.99	0.85	20.51	7.39	0.13	1.72	0.79	0.22	2.24	0.14	7.02	100.00

表2-3 粘土ノルム鉱物組成(wt%)

試料番号	石英	カリ長石	曹長石	灰長石	カオリン	セリサイト	緑泥石	褐鉄鉱	イルメナイト	ルチル	アパタイト	Total
1	37.15	0.00	2.72	2.45	38.02	8.31	2.95	6.94	0.18	1.09	0.20	100.00
2	37.33	0.00	0.39	1.83	40.71	6.83	2.66	8.84	0.19	1.06	0.16	100.00
3	34.62	10.63	5.37	2.41	34.09	0.00	3.50	6.87	0.29	0.69	1.54	100.00
4	27.76	13.22	1.86	2.99	39.90	0.00	4.75	8.22	0.27	0.71	0.33	100.00

注

焼成物等復元計算の条件

- 1: セリサイト・緑泥石・モンモリロナイトが存在するとして計算
- 2: セリサイト・緑泥石・モンモリロナイトが存在するとして計算
- 3: 緑泥石・モンモリロナイトが存在するとして計算
- 4: 緑泥石・モンモリロナイトが存在するとして計算

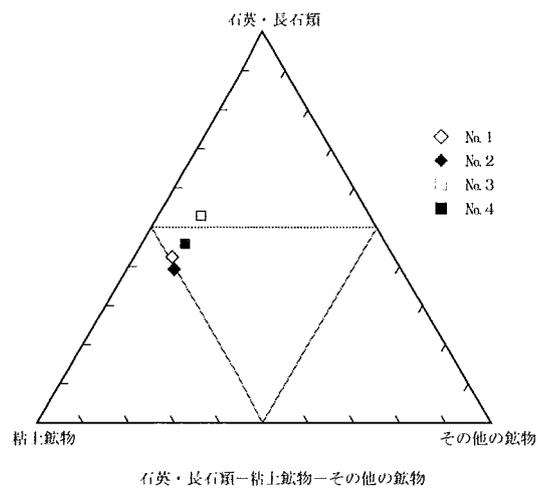
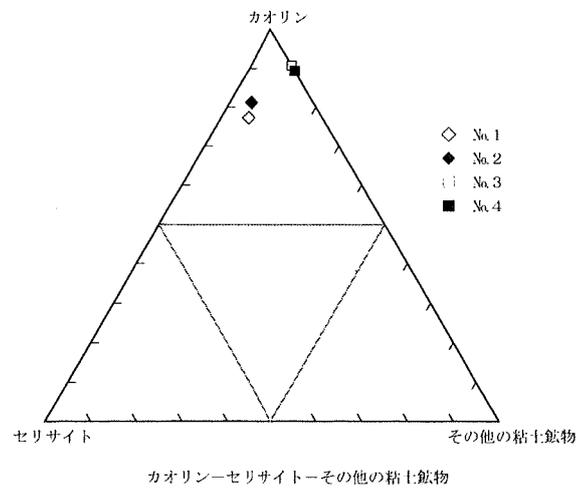
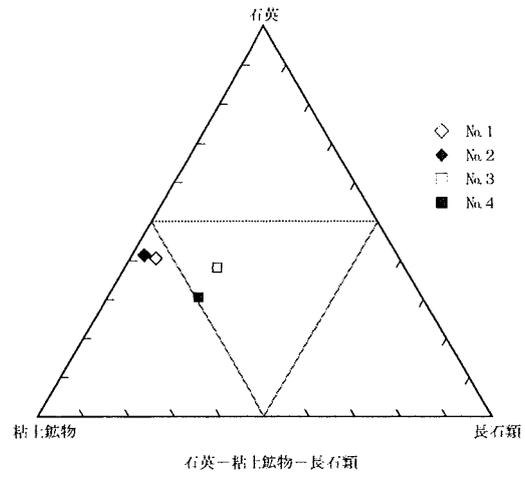


図1 粘土ノルム鉱物組成三角ダイアグラム

4. 考察

4点の試料は、薄片観察でも化学組成でも大きくは試料番号1, 2のグループと試料番号3, 4のグループに分けられ、さらに試料番号3と4も分けられる可能性がある。各グループの特徴は以下のよう述べる事ができる。

a) 薄片観察

- 1) 試料番号1, 2の鉱物片では斜長石は含まれるがカリ長石を欠如していることと、単斜輝石および角閃石が含まれることが特徴的であるが、対照的に試料番号3, 4ではカリ長石が観察されるが、斜長石はみられないことが特徴となっている。
- 2) 岩片では、試料番号2を除く3点にチャート、砂岩、粘板岩の古期堆積岩類が含まれる。さらに、試料番号1に凝灰岩と火山ガラス、試料番号2に凝灰岩と流紋岩の破片が特徴的に含まれている。試料番号3には凝灰岩が微量で含まれ、試料番号4では花崗岩片が含まれている。
- 3) 全体的には試料番号1, 2には火山岩源の碎屑片(斜長石・単斜輝石・角閃石・凝灰岩・火山ガラス・流紋岩)が目立つのに対し、試料番号3, 4では深成岩源の碎屑片(カリ長石・花崗岩)が含まれている。

b) 化学組成

- 1) 18.7~21.5%の Al_2O_3 、6.6~8.6%の Fe_2O_3 を含有することは共通し、いわゆる含鉄粘土の特徴を示している。この他には試料番号1, 2と比較して試料番号3, 4の K_2O の含有量が高いことおよび試料番号3の P_2O_5 が異常に高い(0.68%)ことが指摘される。
- 2) 化学組成から粘土ノルム法により復元計算された粘土の鉱物組成では4試料ともに34~40%のカオリンを含み、この他に試料番号1, 2では6.8~8.3%のセリサイトが計算されるが、試料番号3, 4ではセリサイトは計算されない。一方、試料番号1, 2では長石の含有量が少なく、斜長石として2.2~5.2%と計算されるのに対し、試料番号3, 4では含有量が高く、18.1~18.4%と計算され、このうちの10%以上はカリ長石であると推定された。
- 3) 瓦の焼成温度は鏡下で観察される組織から試料番号1, 2の2試料が $900^{\circ}C+$ 、試料番号3が $900^{\circ}C-$ 、試料番号4が $1, 150^{\circ}C$ と推定される。

以上の特徴を総合すると試料番号1と2は、同一の地質学的背景を有する地域内で作られたものであり、試料番号3と試料番号4は、試料番号1, 2ともまた互いにもそれぞれ異なる地質学的背景の地域で作られた可能性がある。

ここでいう地質学的背景とは、例えばある河川の流域を想定した場合、その河川の水系の周囲に分布している地質の状況であり、また、沖積低地を想定した場合は沖積低地を形成した河川流域の地質という程度の意味合いである。したがって、上記の同一の地質学的背景を有する地域内とは、具体的な場所がわかれば、同じ河川の中流域とか同じ沖積低地内と言い換えることもできる。今回の試料で推定される地質学的背景は、試料番号1, 2では古期堆積岩の他に火山岩の分布が考えられる地域であり、試料番号3では古期堆積岩類の分布する地域、そして試料番号4では花崗岩類が分布する地域が想定される。冒頭で述べたように、現時点では試料の産地については国内産、朝鮮産という所見しかないために、想定される地質学的背景について推定される産地との関係を議論することはできない。ただし、国内産の可能性が指摘された試料番号1と2が同じ特徴を有する胎土であること、朝鮮産の

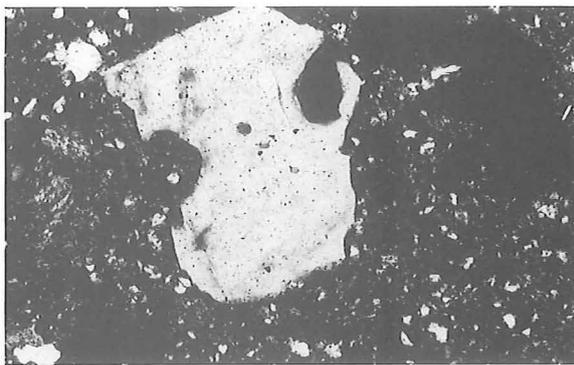
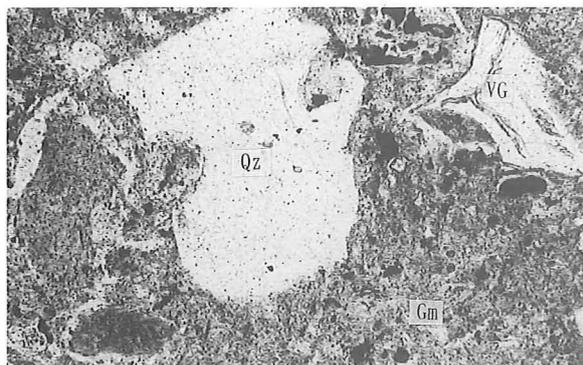
可能性が指摘された試料番号 3 と 4 が試料番号 1, 2 と比較的明瞭に胎土が異なること特に試料番号 4 は焼成温度も他の 3 点より高く、土だけではなく焼成技術の違いも読み取れることなどから、今回の胎土分析結果は、発掘調査所見と整合的な内容であったといえる。

今後は、周辺同時期の試料の分析データを蓄積すると同時に、考古学所見から原産地と想定される地域（国内および朝鮮でも）を具体的にあげることが必要と考えられる。ある程度想定される地域がわかれば、胎土分析により具体的な検討が可能になると考えられる。また、確実に朝鮮産の瓦とされるものを対象に同様な分析を行い、基準となるデータを作成しておくことも重要である。

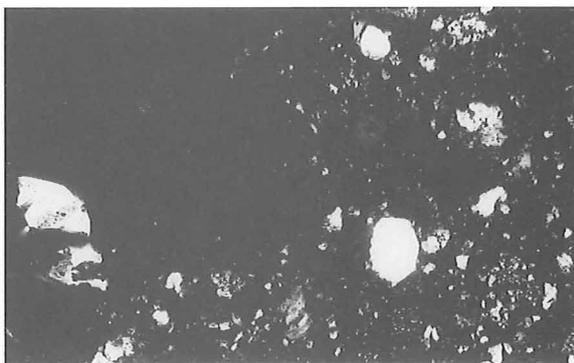
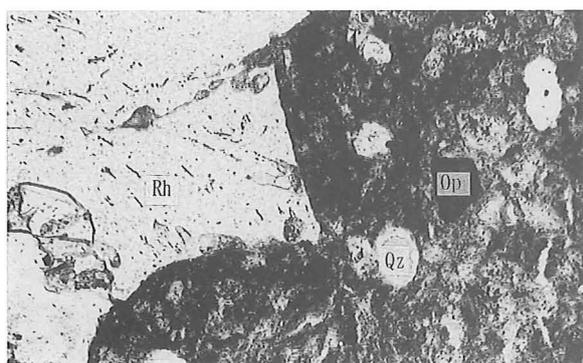
引用文献

- 五十嵐俊雄 (1983) 「マイクロコンピュータによる粘土ノルム計算について」. 未開発陶磁器原料資源調査報告書 (昭和57年度). p.119-136, 地質調査所.

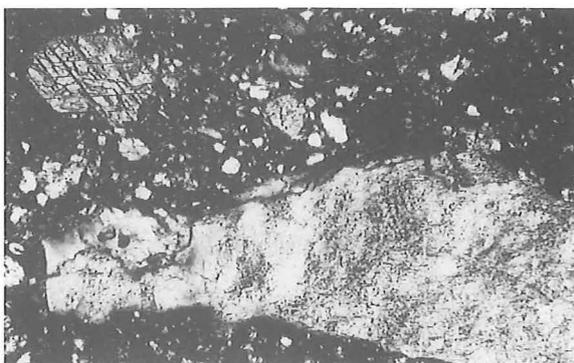
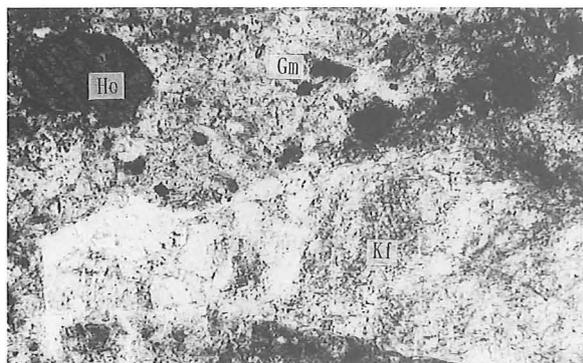
図版1 胎土薄片



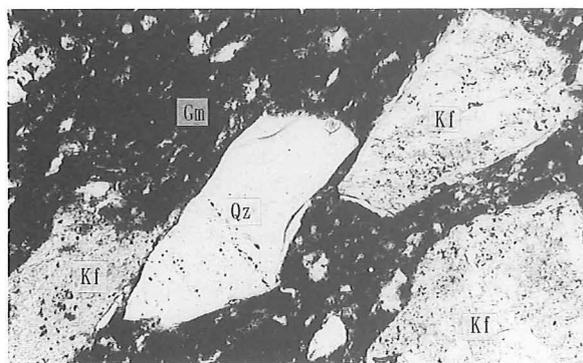
1. 試料番号1 (A-5VI 平瓦 国産)



2. 試料番号2 (A-3VI 丸瓦 国産or朝鮮産?)



3. 試料番号3 (B-4III 平瓦 朝鮮産?)



4. 試料番号4 (B-6VI 平瓦 朝鮮産?)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Ho:角閃石, Op:不透明鉱物, Rh:流紋質ガラス岩(黒曜岩), VG:火山ガラス, Gm:基質.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

はじめに

玖島城跡は、慶長3年(1599年)に大村喜前が大村家の居城として築いた、浅瀬によってつながった小島を利用した平山城である。

これまでの発掘調査で、11区および12区より貝層が検出された。これらの貝層は、弥生時代や縄文時代の土器等を含むものもあり、玖島城築城以前の堆積層と考えられる。そのため、築城以前の遺跡周辺の古環境に関する情報を含んでいる可能性がある。今回の分析調査では、出土した貝類の同定を行い、貝類堆積時の堆積環境などの検討を行う。

1. 試料

試料は11区、および12区の貝層から採集された貝類である。土壌からの選別が終了した状態で、貝層別に分類されていた。

2. 分析方法

肉眼およびルーペ下で観察し、種を同定する。二枚貝綱は左右を分類し、破片数と重量を測る。分類や学名は奥谷編(2000)、波部・小菅(1967)に、各部分の名称や計測部位は奥谷編(2000)による。なお、貝類の生態については、特にことわりのない限り、奥谷編(2000)に基づく。なお、同定・解析には、千葉県立中央博物館の黒住耐二先生のご協力を得た。

3. 結果

検出された貝類の種名を表1に、各試料の検出状況を表2に示す。以下、貝層ごとに各貝の概要をまとめる。

<11区 貝下層>

・イボウミニナ

やや開放的な内湾の潮間帯中部～下部、泥底に棲息する。2個体検出される。殻頂が欠損しているが、殻長は27～30mm前後になると推定される。

・シドロガイ

潮間帯下部から水深約50mの砂底に棲息する。1個体検出される。殻頂が欠損しているが、

表1 貝類種名一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
盤足目	Order Discopoda
ウミニナ科	Family Batillariidae
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>
ソデボラ科	Family Strombidae
シドロガイ	<i>Srtomus (Doxandaer) japonicus</i>
ムカデガイ	Family Vermetidae
オオヘビガイ	<i>Serpulorbis imbricatus</i>
タマガイ科	Family Naticidae
ゴマフダマ	<i>Natica tigrina</i>
新腹足目	Order Neogastropoda
アッキガイ科	Family Muricidae
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
二枚貝綱	Class Bivalvia
フネガイ目	Order Arcoida
フネガイ科	Family Arcidae
ヒメアカガイ	<i>Scapharca troscheli</i>
カキ目	Order Ostreoida
イタボガキ科	Family Ostreidae
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
マルスダレガイ目	Order Venerida
ツキガイ科	Family Lucinidae
イセシラガイ	<i>Andontia stearnsiana</i>
キクザルガイ科	Family Chamidae
サルノカシラ	<i>Pseudochama retroversa</i>
キクザル属の一種	<i>Chama</i> sp.
バカガイ科	Family Mactridae
シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>
ニッコウガイ科	Family Tellinidae
ヒメシラトリ	<i>Macoma incongrua</i>
シオサザナミ科	Family Psammobiidae
ムラサキガイ	<i>Soletellina diphos</i>
マルスダレガイ科	Family Veneridae
シラオガイ	<i>Circe (Redicirce) sulcata</i>
イオウハマグリ	<i>Pitar (Pitarina) sulfureum</i>
シオヤガイ	<i>Anomalocardia squamosa</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
マルスダレガイ科の一種	gen. et sp. indent.

殻長は55.5mm前後になると推定される。

・オオヘビガイ

潮間帯の岩礫礁に棲息する。1 個体検出される。表面が多孔質になり、他の貝に比べて風化している。

・アカニシ

水深30m以浅の砂泥底に棲息する。1 個体が検出される。殻が破損し、表面が多孔質になり、他の貝に比べて風化している。殻長は116.7mmを測る。

・ヒメアカガイ

内湾潮間帯に棲息する。泥質の場所に見られる貝である。右殻が5点、左殻が4点検出される。いずれの殻もあまり破損していない。貝合わせの結果、同一個体と確認できたのは4個体である。合わさる左殻のない右殻1点の殻頂部には小孔が貫通し、肉食の貝類等に襲われた痕の可能性が

ある。最大の個体が殻長51.7mm、殻高42.9mm、殻厚35.3mmを測る。

・マガキ

汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底、泥底に棲息する。左殻が1点検出される。殻は一部破損し、表面が多孔質であり、他の貝に比べて風化している。殻高47.0mmの比較的小型の個体である。

・イセシラガイ

潮間帯直下から水深20mの砂泥底に棲息する。右殻が1点、左殻が4点検出される。殻が薄いため、多くの殻が破損している。比較的残りの良い左殻2点の計測結果は、殻長73.0mm前後・殻高66.9mmと、殻長49.5mm前後・殻高46.3mm前後である。

・サルノカシラ

潮間帯下部～水深20mの岩礁に棲み、右殻で岩に固着して生活する。右殻のみ2点検出される。殻

表2 試料の検出状況

地区	出土地点	分類群	部分	数*	重量(g)	備考
001区	11区 貝下層	イボウミニナ		2	2.2	
		シドロガイ		1	10.7	
		オオヘビガイ		1	26.9	
		アカニシ		1	113.0	
		ヒメアカガイ	右	5	35.7	同一個体4
		左	4	35.4		
		マガキ	左	1	5.5	
		イセシラガイ	右	1	12.8	
			左	2	3.47	1個体は殻頂欠損
		破片			10.8	
		サルノカシラ	右	2	18.1	
		キクザル属の一種	左	4	16.8	
		シオフキ	左	1	3.2	
		ヒメシラトリ	右	4	2.1	
		シラオガイ	右	19	113.5	同一個体11
			左	15	85.5	
		イオウハマグリ	左	1	1.5	
		アサリ	右	3	9.6	同一個体3
			左	4	12.1	
		マルスタレガイ科の一種	左	1	+	殻頂部
	二枚貝類	右	1	+	殻頂部	
	貝破片				5.6	
	マツ属複雑管束亜属	球果	3	3.3	破片あり	
	炭化材	破片			2.4	
	12区 貝上層	シオフキ	右	5	42.9	
			左	3	29.1	
		カガミガイ	右	1	21.9	同一個体2
			左	1	22.4	
		ハマグリ	右	2	32.2	同一個体2
			左	4	66.7	
オキシジミ		右	5	45.7	同一個体	
		左	4	30.3		
A-12区 貝上層 (a)	ムラサキガイ	右	1	33.5	同一個体	
		左	1	33.9		
	ハマグリ	右	1	38.2		
左		1	39.7			
12区 貝上層 (b)	イボウミニナ		4	4.0		
	ゴマフダマ		1	1.5		
	ヒメシラトリ	左	1	0.1	殻頂欠損	
	イオウハマグリ	右	1	0.8	同一個体	
		左	1	0.9		
	シオヤガイ	左		1.4	破片	
	オキシジミ	左	1	6.0		
貝破片				0.6		

*基本的に、二枚貝綱は殻長部の残るものを、腹足綱は全体の1/2以上残るものをカウントした。
+は0.1g未満を示す。

頂は左に傾く。前種と同様に表面が多孔質であり、風化が激しい。

・キクザル属の一種

岩礁帯に棲む、キクザル属の貝である。岩に固着する側である、左殻のみが4点検出される。殻頂は右へ傾く。輪板肋が襞状に突出する。すべての殻に破損がみられ、表面が多孔質であり、風化が激しい。

・シオフキ

潮間帯下部～水深20mの細砂底に棲息する。左殻が1点のみ検出される。殻の一部が破損するが、殻長40.3mm前後・殻高39.8mmを測る。

・ヒメシラトリ

潮間帯～水深50mの泥底に棲息する。右殻のみが4点検出される。殻はいずれも破損している。1点は殻長30mm前後・殻高23.3mm前後である。

・シラオガイ

潮間帯下部～水深20mの砂底に棲息する。右殻19点、左殻15点が検出される。貝合わせにより、同一個体と確認できたのは11個体である。殻に小孔が貫通するものが含まれ、肉食の貝類等に襲われた痕の可能性がある。最大の殻は殻長45.7mm・殻高39.1mmを測り、最小の殻は殻長18.1mm・殻高33.0mmを測る。全体として、殻長30～45mm程度のサイズが多い。

・イオウハマグリ

波部・小菅（1967）によれば、内湾奥の潮間帯泥底に棲息する。左殻が1点検出される。殻は完形であり、殻長27.5mm・殻高23.7mmを測る。

・アサリ

潮間帯中部から水深10mの砂礫泥底に棲息する。右殻が3点、左殻が4点検出される。このうち、貝合わせにより同一個体と確認できたのは、3個体である。最大の個体は殻長43.9mm・殻高30.3mm、最小の個体は殻長32.1mm・殻高24.3mmを測る。

・マルスダレガイ科

属種不明の左殻1点が検出される。殻頂部の破片である。

・その他の貝類

二枚貝綱科不明の右殻殻頂部の破片1点が検出される。また、綱以下を同定できない破片が5.6kgある。

・植物遺体

炭化したマツ属複維管束垂属の球果3点とその破片、および炭化材の破片が検出される。

<12区 貝上層>

・シオフキ

右殻5点、左殻3点が検出される。このうち、貝合わせにより同一個体と確認できたのは2個体である。最大の個体は殻長66.9mm・殻高57.2mm・殻厚44.8mm、最小の個体は殻長48.9mm、殻高42.8mmを測る。

・カガミガイ

潮間帯下部から水深60mの細砂底に棲息する。左右殻各1点が検出され、貝合わせの結果、同一個

体と確認された。破損は見られず、完全な形状である。殻長60.1mm・殻高60.6mm・殻厚31.2mmを測る。

・ハマグリ

潮間帯下部から水深20mの内湾の砂泥底に棲息する。右殻2点、左殻4点検出される。貝合わせの結果、同一個体と確認できたのは2個体である。最大の個体は殻長81.1mm・殻高66.9mm・殻厚40.1mm、最小の個体は殻長52.6mm・殻高44.5mm・殻厚28.4mmを測る。

・オキシジミ

潮間帯下部から水深20mの砂泥底に棲息する。右殻5点、左殻4点検出される。貝合わせの結果、同一個体と確認できたのは2個体である。殻に小孔が貫通するものが含まれ、肉食の貝類等に襲われた痕の可能性がある。最大の個体は殻長51.2mm・殻高53.7mm・殻厚36.8mm、最小の個体は殻長40.1mm・殻高42.5mmである。

〈A-12区 貝上層 (a)〉

・ムラサキガイ

水深20mくらいまでの亜潮間帯、泥底に棲息する。左右殻各1点が検出され、貝合わせの結果、同一個体と確認された。縁辺がやや破損するが、ほぼ全体が残存する。殻長121mm前後・殻高65mm前後・殻厚35.6mmを測る。

・ハマグリ

左右殻各1点が検出され、貝合わせの結果、同一個体と確認された。破損は見られず、完全である。殻長87.6mm・殻高69.9mm・殻厚43.8mmを測る。

〈12区 貝上層 (b)〉

・イボウミニナ

やや開放的な内湾の潮間帯中部～下部、泥底に棲息する。4個体検出される。いずれも殻長先端と殻底が破損するが、ほぼ全体が残存する。推定殻長は、最大の個体で33.1mm前後、最小の個体で26.3mm前後を測る。

・ゴマフダマ

潮間帯から水深30mの砂泥底に棲息する。1個体検出される。殻はほぼ全体が残存する。殻長18.4mm・殻幅15.8mmを測る。

・ヒメシラトリ

左殻1点が検出される。殻頂部を欠く破片であるが、同種が他に検出されていないので、1点とカウントする。

・イオウハマグリ

左右殻各1点が検出され、貝合わせの結果、同一個体と確認された。破損は見られず、完全である。殻長21.5mm・殻高18.4mm・殻幅13.6mmを測る。

・シオヤガイ

内湾潮間帯の泥底に棲息する。左殻が1点検出される。殻頂部を欠く破片であるが、同種が他に検出されていないので、1点とカウントする。

・オキシジミ

左殻が1点検出される。後縁の縁辺は破損する。殻に小孔が貫通し、肉食の貝類等に襲われた痕の可能性はある。殻長46.2mm・殻高45.5mmを測る。

・その他の貝

綱以下を同定できない破片が0.6gある。

4. 考察

11区および12区の貝層から検出された貝類は、少なくとも2綱5目13科20種に分類される。これらの種類は、内湾の潮間帯から水深20m前後の砂泥底に棲息する種が多い。このことから、これらの貝殻が検出された貝層の堆積時には、基本的に内湾の干潟のような堆積環境であったことが推定される。とくに、イボウミニナ、ヒメアカガイ、オキシジミが含まれることから、泥質干潟のような環境であった可能性がある。一方、オオヘビガイやサルノカシラなど、岩礫礁や岩礁に棲む種類も一部含まれるが、これらは他の貝に比べて風化している。そのため、他の環境で生育していた貝類が死後に潮流などによって運ばれてきた可能性がある。

本貝層の性格については、棲息環境が類似する種が検出されたこと、二枚貝の合弁のものが多いこと、肉食貝に襲われて死亡したと考えられる殻が含まれること、人為的な破損痕跡が認められないこと等を考慮すると、自然貝層の可能性はある。しかし、自然貝層であるとするれば、もっと多くの種類が検出されることが予想されることから、人為的な選択を経ている可能性も否定できない。

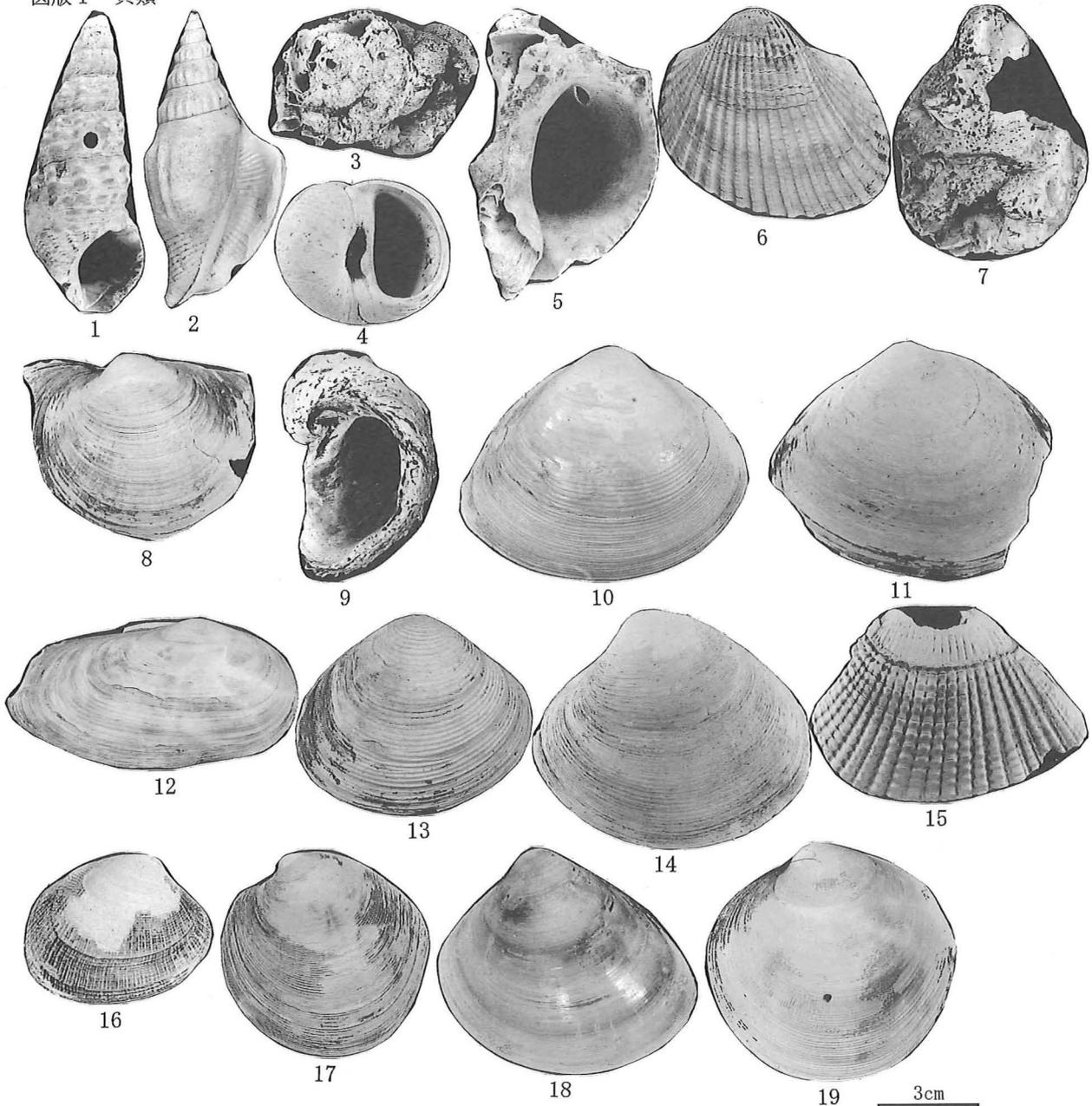
今回の分析調査により、玖島城築城以前の古環境の一端を明らかにすることのできる、貴重な資料が得られた。今後、貝殻の放射性炭素年代測定による年代観の把握、珪藻分析による出土地点の堆積環境の復元や、貝類の堆積状態や平面分布についても調査を行い、さらに築城以前の環境変遷の詳細を明らかにしたい。

引用文献

波部忠重・小菅貞男(1967)標準原色図鑑全集3 貝. 223p., 保育社.

奥谷喬司編(2000)日本近海産貝類図鑑. 1173p., 東海大学出版会.

図版1 貝類



- 1. イボウミニナ (11区;貝下層)
- 2. オオヘビガイ (11区;貝下層)
- 3. アカニシ (11区;貝下層)
- 7. マガキ : 左 (11区;貝下層)
- 9. サルノカシラ : 右 (11区;貝下層)
- 11. ヒメシラトリ : 右 (11区;貝下層)
- 13. シラオガイ : 右 (11区;貝下層)
- 15. シオヤガイ : 左 (12区;貝上層(b))
- 17. カガミガイ : 左 (12区;貝上層)
- 19. オキシジミ : 左 (12区;貝上層(b))

- 4. ゴマフダマ (12区;貝上層(b))
- 5. アカニシ (11区;貝下層)
- 6. ヒメアカガイ : 左 (11区;貝下層)
- 8. イセシラガイ : 右 (11区;貝下層)
- 10. シオフキ : 右 (12区;貝上層)
- 12. ムラサキガイ : 右 (A-12区;貝上層(a))
- 14. イオウハマグリ : 左 (11区;貝下層)
- 16. アサリ : 右 (11区;貝下層)
- 18. ハマグリ : 左 (12区;貝上層)

3cm
 (1, 4, 11, 14, 15)

2cm
 (2, 7, 9, 13)

1cm
 (3, 17, 18)

1cm
 (5, 6, 8, 10, 16, 19)

1cm
 (12)

まとめ

今回の玖島城跡の調査で得られた成果について、要点を絞って総括してみたい。まず、江戸初期と推定される整地層及び遺構が確認され、奢侈品を含む豊富な遺物が出土したことがあげられる。玖島城に関する古記録⁽¹⁾は、築城を慶長四年（1599）とするが、今回の調査成果はまさにこの記録と合致している。文献記録が考古学によって裏付けられる稀な事例として重要であると考えられる。

検出された遺構には建物跡や石垣などがあるが、建物は掘立柱の基礎に礎石や礎板を用いた特殊な工法を用いたものである。これは付近が埋め立て地で脆弱な地盤であることに起因していると思われるが、建築史上からも今後検証していくべき資料であろう。また、朝鮮系の瓦がまとまって出土していることは慶長の役との関連が推測されるが、建物への使用も含め、今後検討していく必要がある。建物については興味深い文献記録がある。『大村家記』巻之七⁽²⁾は、玖島城に関連して「古館在久嶋城■追手堀外 純信幼少ノ時暫ク■ニ居ス今静寿園ト云フ」と記すが、検出された建物がこれに該当する可能もある。また、石垣は築城時の整地面に施工されているが、その後厚い整地層で完全に埋められている。この整地層は、その下の層の遺物の年代からみて1610年代に堆積したと考えられる。『見聞集』巻之二は「御城大手最初ハ山里の方なり慶長十九寅年改築かる■の時本小路口大手と成と云々」と記すが、石垣が検出された地区は本小路口に隣接している。この層は付近一帯に厚く堆積していることから、慶長十九年（1614）の改修及び大手口変更に伴う整地層である可能性が高いと考えられる。

出土した江戸初期の遺物を産地別に概観すると以下のようなになる。輸入品では、中国産の景德鎮系と 州窯系の青花・色絵・華南三彩、朝鮮産の白磁・瓦、ベトナムの長胴壺、そしてヨーロッパ産のアルバレロ壺などがある。国産では、肥前陶磁、瀬戸美濃大窯製品、備前のほか在地系と思われる瓦質土器や土師質土器がみられる。出土傾向としては、絵唐津に代表される茶器のほか良質の中国陶磁などが多数含まれる。このことから領主クラスの所有者層が推測される。特筆すべきは、ヨーロッパ産のアルバレロ壺で、その出土状況から国内では最も早い時期に搬入されたヨーロッパ陶磁のひとつと考えられる。搬入経路としては、南蛮貿易や開始直後のオランダ貿易、あるいは朱印船貿易などが考えられる。

近世のその後成果としては、17世紀後半から18世紀前半の資料は少なく、18世紀後半から19世紀にかけて再び資料が増える。20～24区にかけて検出された石基礎を用いた建物遺構は、この時期のものである。文献によれば、この場所は藩の役所とされるが⁽³⁾、その前は家臣の屋敷であったという⁽⁴⁾。引き続き古記録の探索が必要であろう。遺物としては、長与三彩の出土が注目される。消費地での出土がないことから、藩の中核向けに焼かれていた可能性が高くなったといえるだろう。近世のほかにもいくつかの成果があり、それぞれ貴重な資料と考えられる。詳細については本文を参照していただきたい。

調査を通じて、多方面の方々に御支援をいただいた。最後に深く感謝申し上げたい。

註（1）『大村家記』、『見聞集』、『郷村記』

（2）『大村城（玖島城）』大村市教育委員会1986で本多美穂氏の紹介による。

（3）『郷村記』によれば普請役所に相当するという（『玖島城跡』大村市文化財保護協会2000）。

（4）前掲報告書による。

報 告 書 抄 録

ふりがな	くしまじょうあと							
書名	玖島城跡							
副書名	一般国道34号大村拡幅計画に伴う玖島城跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第167集							
編著者名	福田一志・川口洋平・東 貴之・竹中哲朗・井立 尚・上原 恵							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2番13号 TEL 095-824-1111							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査期間
		市町村	遺跡番号					
くしまじょうあと 玖島城跡	ながさきけん 長崎県 おおむらし 大村市 くしま 玖島 くぼら ・久原	42205	5-132	32° 44' 42"	129° 57' 44"	19990701	1,800	国道拡幅
						20000303		
						20000717	2,500	
						20010309		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
玖島城跡	城跡	縄文 近世	建物跡 石垣	近世陶磁器・瓦類 輸入陶磁器・土師器 縄文土器				

長崎市文化財調査報告書 第167集

玖 島 城 跡

平成14年 3 月31日

発 行 長 崎 県 教 育 委 員 会
長崎市江戸町 2 -13
印 刷 有 限 会 社 東 洋 印 刷 所
長崎市出島町15-15